
女學世界
第八巻
第八號
博文館發行
明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十一年六月一日發行（毎月一回一日發行）

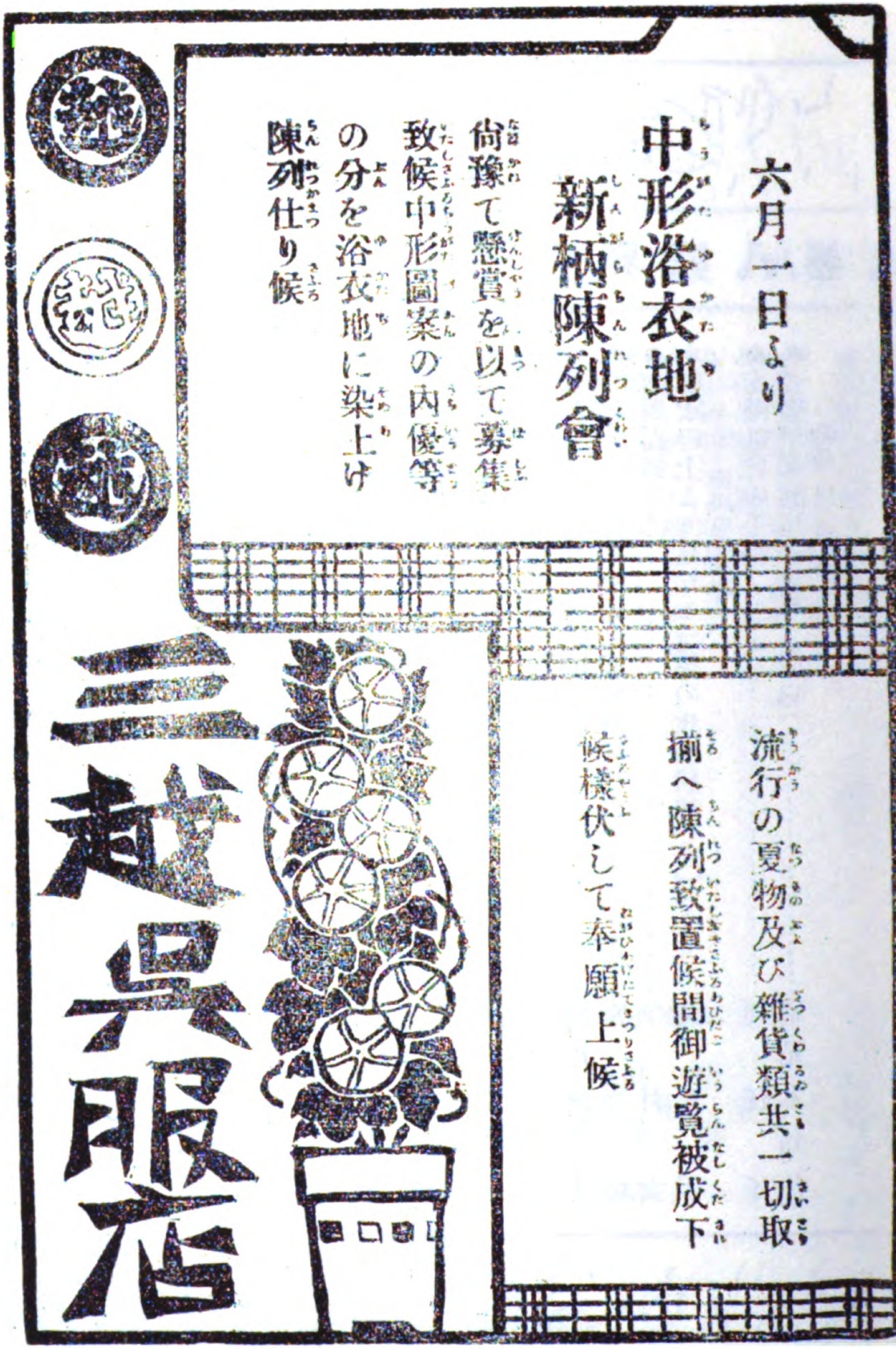
美顔水は天下唯一の美白光艶劑なり

化粧用美顔水は品質最もよろしく方今滿天下の貴婦人令孃佳人爭ふて之を用ゐ賞贊の聲囂すし●色を白くし●きめをこまかに●光艶をだし●うつくしくなる●殊に化粧に用ゆればおしろい意のまゝにのりむらにならず常に用ふれば「花の顔せ雪の肌となり」眞に玉を欺く美しき顔となるべし

一 本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ

▲東京市内は勿論日本全國各地いたる處の有名なる小間物店にて販賣す




六月一日より
中形浴衣地
新柄陳列會
尙豫て懸賞を以て募集致候中形圖案の内優等の分を浴衣地に染上け陳列仕り候
流行の夏物及び雜貨類共一切取揃へ陳列致置候間御遊覧被成下候樣伏して奉願上候
三越呉服店

女學世界第八巻

第八號目次







女（いの二）

曇りなき鏡を見て御覧何れ程クラブ洗粉の爲めに美くしさを添へしか



常にクラブ洗粉を愛用せらるゝ御婦人は去年の春よりも一層素顔の色を美しくせられたり

女(いの四)

愛用者の多き日本第一の化粧品



信用の確かなる實用品の商標(其一)

東京婦人の如く高尚なる素顔の美を貴はるゝ御婦人はます〱クラブ洗粉を愛用せられつゝあり

圓滿



度び重ねてクラブ洗粉を愛用すれば美は益々發輝すべし



曇りなき鏡はクラブ洗粉愛用者の艶顔を寫して確かに其美なるを示せり

女(ろの一)

當今一番よくきく月ざらへは何か

理想的最良藥

改良月ざらへ 女月丸



●諸嬢姉方に急告す●

月經閉止月やく滯りの如何に恐るべきかは今更言ふまでもなし然るに從來の月ざらへは其原理を極ず各々大同小異にて殊効ある良藥なし本劑は其病理病症を各專門大家に習得し實地經驗と最新學理とを蒐集し直接大醫に係るにより普く**特効藥**と同一の効力を有す即ち効能は婦人月經不順月やく閉止月經滯りを子宮も痛めず快よく下す妙藥也二三ヶ月以上の閉止も一二週分三四月以上又は血塊にても特製分服用せば必ず流下す十七八歳に至り月經なき人は二週分毎月月經困難は三日分服用せられよ

藥價	一週分 六十錢	二週分 一圓十錢	特製 四週分 二圓廿錢	六週分 三圓卅錢
送料各四錢宛				

●本劑は其奏効極めて峻烈なれ共身體には少しもさわる事なし眞に有効無害の奇藥也

調劑本舗 東京々橋區東仲通中橋和泉町一番地 小宮愛生堂

大日本發賣元祖

明治四拾壹年新品發賣



●定價 金五拾錢 同貳拾錢 同拾錢 同五錢
▲遠國送料 金貳錢
▲郵券代用にてよし

ちゞれもくせも もはへうけあい

二大奇法

妾の手がけた方で此病にて諸種の買藥して癒らぬ人も悉く治りし故夫れで皆樣の進めにより御披露し升御問合せは往復はがきにて御申込あれ

女髮師 東京麹町區飯田町四ノ十六 安部歌子

印刷は

東京小石川 精美堂

女(ろの二)

（見よ）全快望む病人（見よ）美顔望む婦人（見よ）

●弊店用達部を利用せば何種の品でも安く品質のよき品が買はれ升●

當月中賣薬化粧品に限り手數料貳割引

（一）白色化粧品
（二）わきが薬
（三）毛はえ薬
（四）月やく薬
（五）梅毒薬
（六）皮膚病薬
（七）肺病肋膜薬
（八）胃病の薬
（九）目薬
（十）りよまち薬
（十一）化粧品各種
（十二）其他何病の薬にても

（注文用達營業の特色）

●當店は東京中にある品なれば書籍 機械 衣服裝飾品時計指環に至る迄何品にても安價に買ふて差上げ升

（問）何故に安く買へるか　（答）僅少の手數料丈にて直接製造所に交捗して買て差上げる故で安く買へ升

（問）何故に最大効能ある品を買ひ得るや　（答）例へば賣薬又は化粧品の如き其効能を過大に云ふ事多く其種又多く何れが効能あるや分知し難く廣告等を一見し効驗なき者に金錢を徒費する害を救はん爲責任を以て撰擇し病氣に効能多き賣薬或は化粧品を買て差上げ升

專賣（乳兒用器）特許

おしめイライズ

●統計上乳兒百人生五十七人死する割なるに本器で育てば僅九人の小數のみ



●効能　本器上に寢せば僅少の湯で常に腰足を温め夏は涼隨にて安眠し冷濕に原因する傳染病腸加答兒を防ぎ皮膚病腦膜炎に罹る事無し

定價參圓四十五錢
送料五十五錢

本器を持用せば（おしめ）洗つたり乾かしたりする手數を要せず梅雨季夏季は益々本器の効能大なり

發賣元　丸二商會

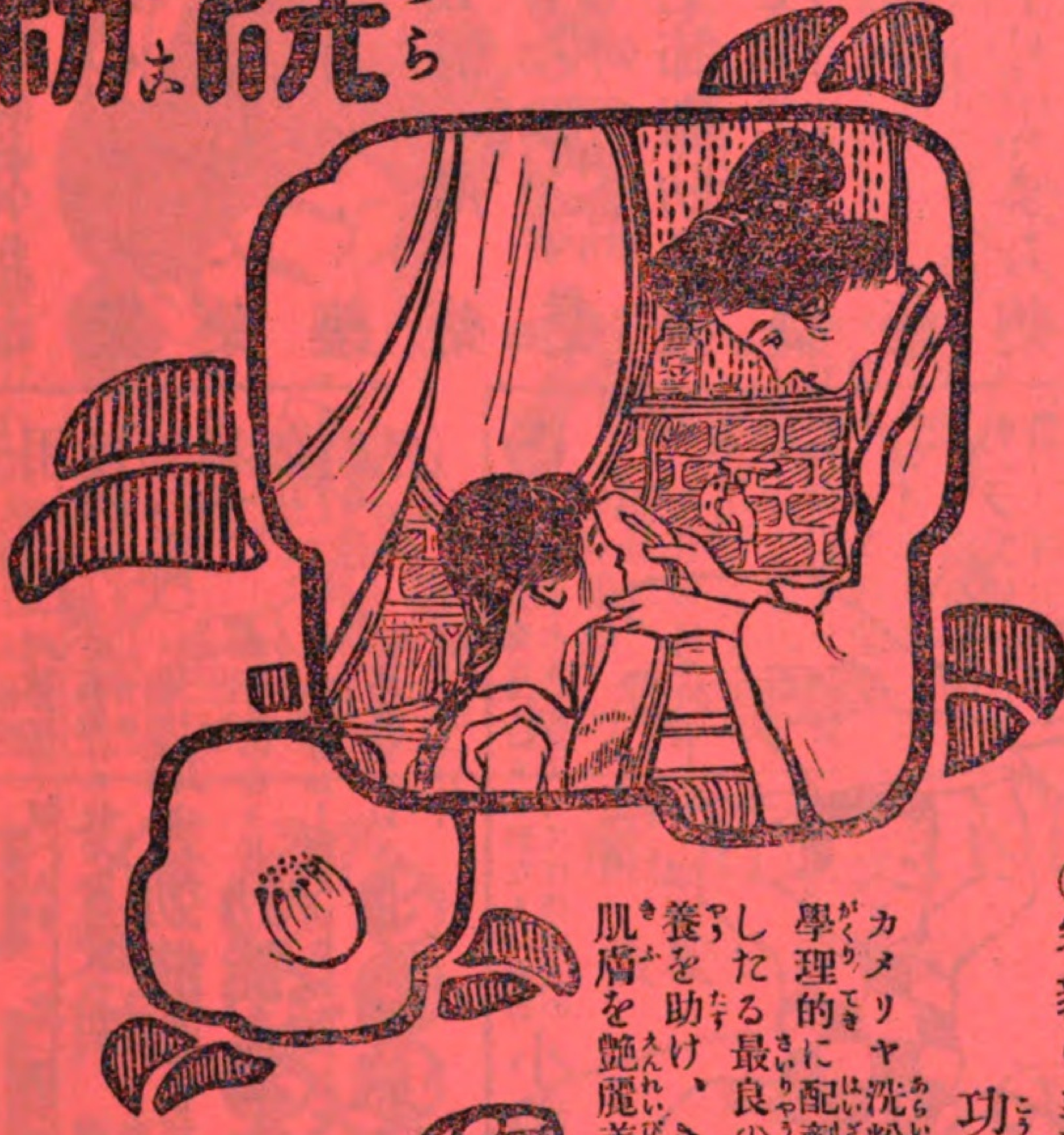
●注文注意●

賣薬申込の節は病氣の模樣發病の年月日年齢等可成委數申込適當薬送る
●照會或は營業案内申込切手參錢入の事
●送費料顧客のふたん
●注文以外の相談は切手六錢封入せざれば返事せず
●送附其他秘密を守り自己の病を他人に知らるゝ事なし
●注文用達手數料拾圓以下六錢貳圓以下價格壹圓に付金八錢
●拾圓以上五錢切手貳割増し

女（ろの三）

東京神田區大工町　丸二商會郵便注文用達部　（振替貯金口座東京壹四參壹九番）

カメリヤ 洗粉



◎容貌の美醜は化粧法の功拙如何にあり

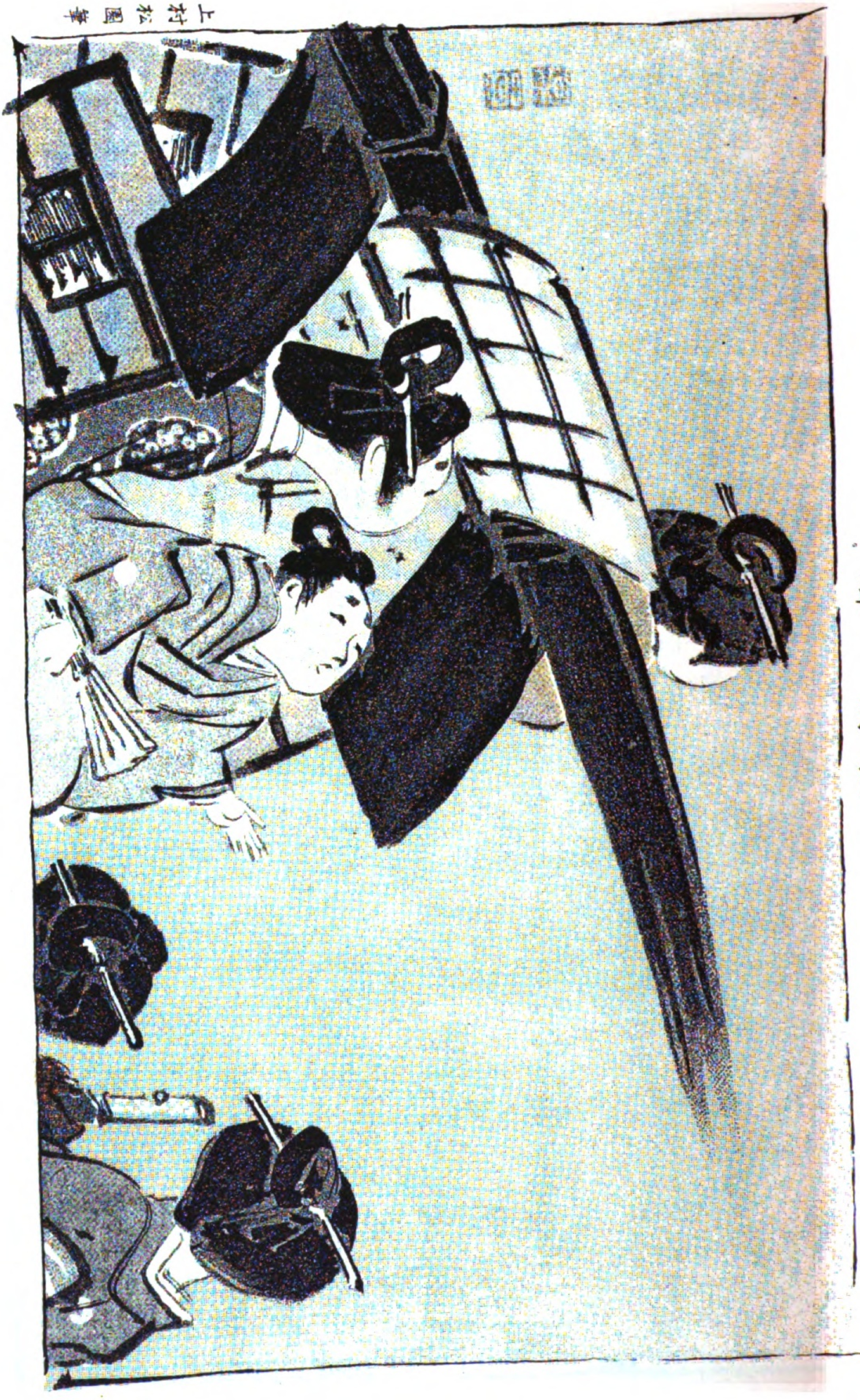
カメリヤ洗粉は最新の化粧法に基き學理的に配劑なせる高等美身術に適したる最良の化粧料なれば皮膚の營養を助け、きめを細かに光澤を増し肌膚を艶麗美白ならしむる特効を有し其香氣の優秀なる永く身邊に薫りて自ら快感を起さしむ

定價

大瓶	壹個	廿五錢
小瓶	同	十五錢
大袋	同	十五錢
小袋	同	三錢
罐入	同	十三錢

發賣元 東京 小林富次郎

(ろの四)



杜鵑一聲

上村松園筆

●婦人の涙（其原因は男子の罪なり）

近來何處の婦人科醫院にも常に澤山の病婦を見るが其最も多き病狀を聞くに下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顏色蒼白にて白澤なく從前の病歷を問へば始め必ず「せうかち」に罹りたりと云ふ凡そ是迄に局部の煩ひに經驗ある婦人は迚も一筋縄の治療で全治せぬ事と心得べきなり其病名か子宮病血の道などに云ふ程でも皆な病毒の爲めなれば現に永引きて治らぬが第一の證據である故に本病毒及梅毒・痳病・僂痲質斯等を根治するには必ず唯一丸に限るなり尚其病理、原因、病狀等を精密に調査し最も親切に調劑したる唯一丸の如きは世上未だ其類例なし而も其主藥は現世唯一の驅毒藥なれば實に面白き程効力あり

●根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（內地遞送無料）

●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上 藥劑師 **中西莊吉** （振替貯金口座千五百番）

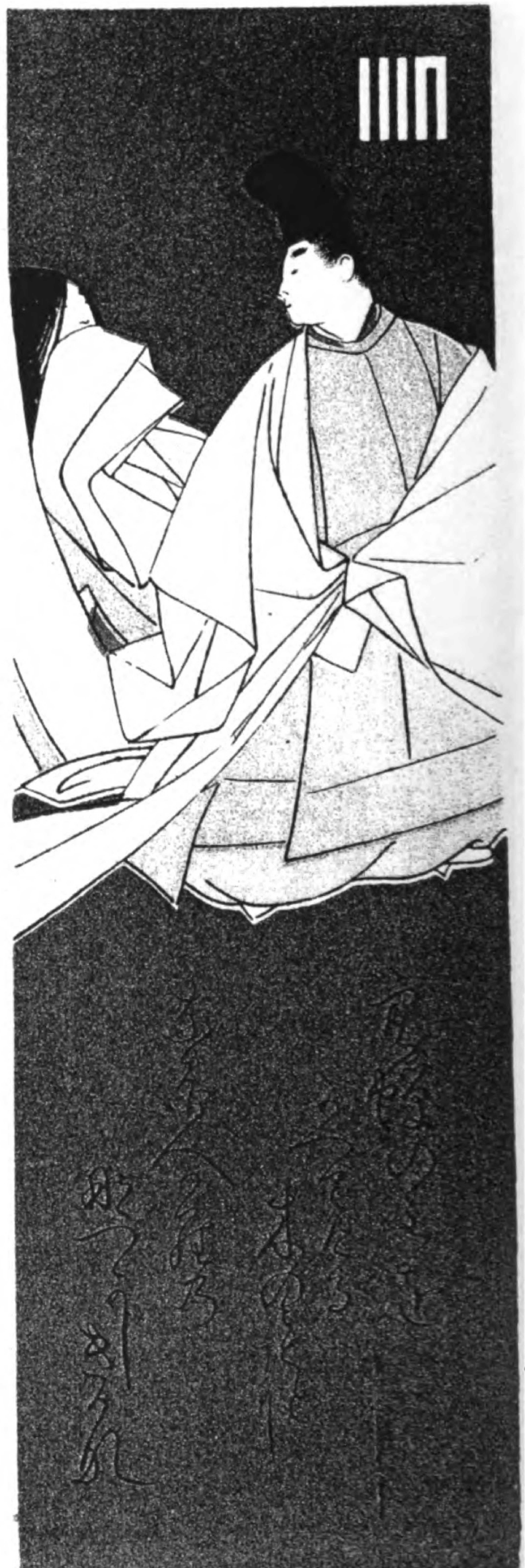
女（はの一）



女（はの二）


衛生家必携懷中良藥
THE GEM
ゼム
夏の「ゼム」
海水浴　濱邊の清き空氣を吸ひ、海に浴し、砂に伏して皮膚を強むる折々に「ゼム」
湯治　翠巒の風に氣を養ひ、溪川の幽韻に心耳を澄す折々に「ゼム」
旅行　汽車汽船の酔に心身疲れ、頭痛眩暈に苦しむ折々に「ゼム」
遊山　人出多き所、劇場夜席諸の會合酒席等に臨む折々に「ゼム」
執務　炎熱の中に諸の事務を取り、倦怠疲勞を覺えし折々に「ゼム」
ゼム定價　二十五粒入十錢　百六十粒入廿錢　四百卅粒入五十錢　九百粒入一圓　容器入ゼム二十錢
日本一手發賣　東京馬喰町二丁目　愛國堂　山崎榮三郎
支舖　大阪高麗橋二丁目　山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

空蟬



夕顔



一條成美畫
三宅花圃書



瓊(けい)姿(し)香油は愛すべきバラ。スミレの芳香があつて束髪散髪に適し誠に時世に應じたい、香油です

東京日本橋區通二丁目

柳屋本舗

電話本局二〇一番

本麝香入

柳清香油は充分の精製と芳香の永く保つ点に付他に其比類がありません



○刺繍用器具並に材料

○袋物器具並に材料

○摘み細工壜細工材料

○刺繍、摘み細工、日本畫用トシテ特製セシ白無地絹張團扇

東京市本郷區弓町二丁目

倉持商店

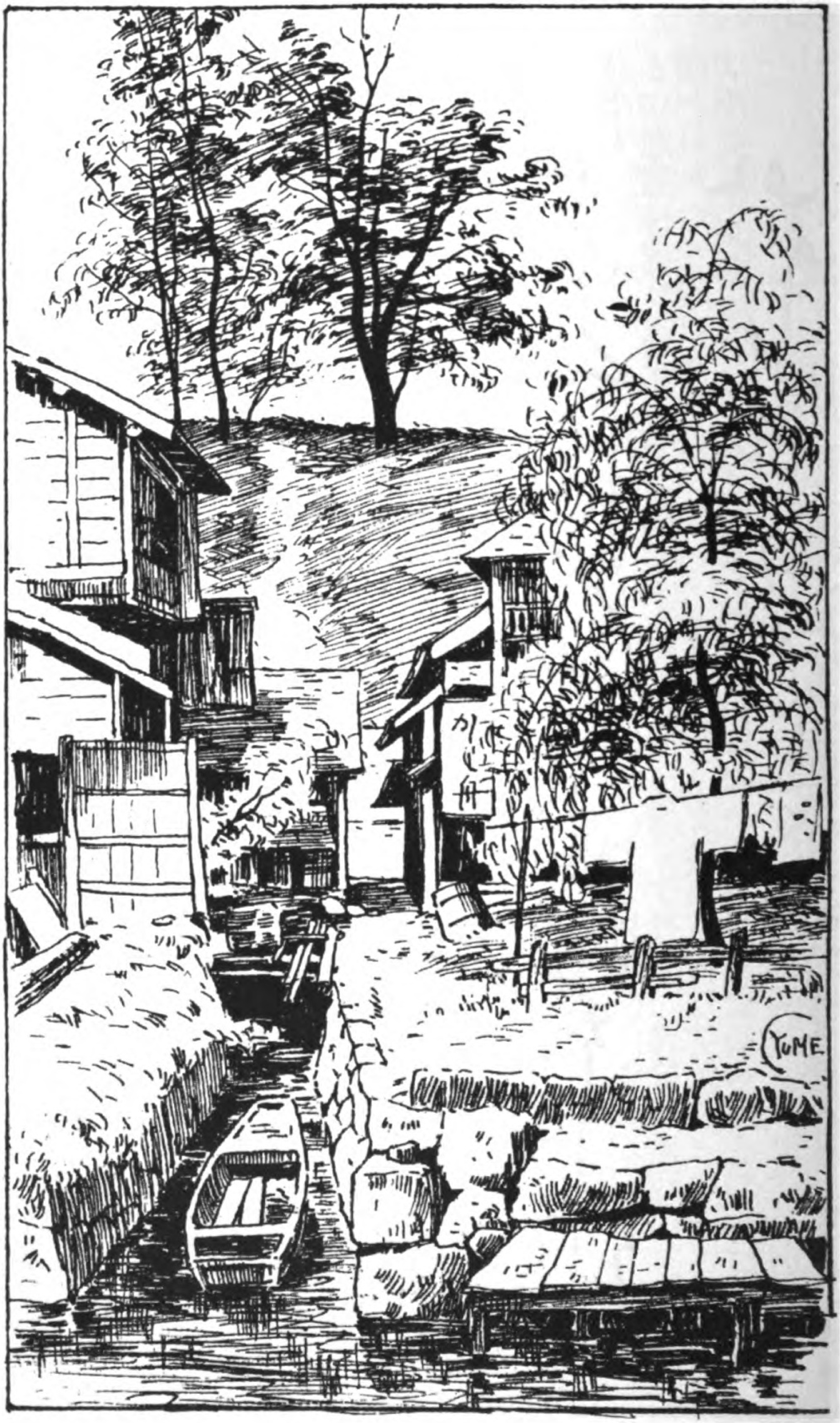
切取線

此切取線を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す(女學世界)

女(にの三)


乳白化粧水
レート
自然に美い容姿は内部から皮膚を美くせねばならぬとは最近の學説で之に基いた化粧品は佐々木醫學博士を始め各專門大家が認めて卓効ありとして其家庭で御常用になる乳白化粧水「レート」のみです殊に皮膚上に變化を來す此頃の時節には男女とも化粧上衞生上ともに使用を怠つてはなりません
東京 平尾贊平 大阪

微風



竹久夢二筆

柿本人麿

ほのぼのとあかしの
うらの朝霧にしま
かくれゆくふねをしぞ
おもふ

小野鵞堂筆

七百圓の懸賞文藝を募集す

弊園製造の『御園白粉』が海内無比の盛運に向へるは品質佳良の故とは申ながら偏へに世の眷顧厚きに因るなり。弊園は聊か文藝に寄與して此厚き眷顧に酬ゐるの微意を表せんとし玆に總額七百圓の賞を懸けて狂歌、狂句、情歌の三種を募集す。

應募規定と條件

一、**内容** 狂歌、狂句、情歌以上三種とも御園白粉及び御園各種化粧品の品名を讀込むか又は暗に其特長効能等をほのめかすも可なり是を第一の條件とす。但し品名特長効能等を明瞭に御承知なき方は白粉其他御園化粧品小箱の中に封入せる能書を一讀されよ。

一、**制限** 投稿用紙は郵便葉書或は葉書同形のものを用ひ最初に作の種類を見易く書し一枚に一首三句までを限りとす、尤も一人にて三種の應募をなすは隨意なれど一枚の用紙に異種のものを記し又は三句以上を認めたるものは總て沒書とす。

一、**投稿宛所** は**東京市芝公園第九號地胡蝶園**懸賞文藝係とすべき事、應募者は住所氏名を必ず明記せらるべし。

一、**選者と賞金** 下記の當選員數は各種を合せる數なり即ち一等三人とあるは狂歌狂句情歌に各一人と云ふ事なり二等是と同じ。

一等賞	金參拾圓	三人
二等賞	金貳拾圓	六人
三等賞	金拾　圓	九人
四等賞	御園香水 代價參圓	七十五人
五等賞	小說 伯爵夫人 一冊	百五人
	田口掬汀先生著代價一圓六十錢（上田屋發賣）	
六等賞	小說 心の影	百五十人
	柳川春葉先生著代價七十五錢（今古堂發行）	

狂歌選者　黑田撫泉氏——伊坂梅雪氏
狂句選者　柳川春葉氏——伊原青々園氏
情歌選者　中内蝶二氏——石橋思案氏

一、**締切と發表** 締切は本年八月廿日限り、發表は本年九月廿日以後、當選作品は時事新報、萬朝報、都新聞、毎日電報、報知新聞、國民新聞、東京朝日、大阪毎日、大阪朝日、新愛知、名古屋新聞、福岡日々、河北新報、北海タイムス等に掲ぐべく賞金及び賞品は掲載同時に贈呈すべし。

女（ほの一）

女（ほの二）

東洋高等女學校長、文學博士 村上專精先生著

女性訓

▲定價四拾錢 郵稅六錢

東京小石川原町六番地（振替貯金一三五三二）
鷄聲堂書店

東京京橋區築地二ノ三十（振替貯金三九六〇番）
山中孝之助

家庭學生良妻賢母之好讀本

本書の内容は天職、中庸、質素、謙讓、節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女性の欠缺を攫み來りて之を訓誡す、その親切實に至れり盡せり、凡そ世の淑女たらむと欲する者は必ず座右を離すべからざる珍書なりとす

▲村上專精氏著 **自信錄** 定價五拾錢 郵稅八錢（六版）

▲村上專精氏著 **誠のしるべ** 定價四拾錢 郵稅六錢（新刊）

どもり

聲惡き人返信郵劵送附あれば余が全治せしハエル博士の吃音必治療法を敎へ升

東京礫川指ヶ谷町 櫻井

懷妊避妊自由自在

全壹册 拾五錢 送料貳錢

子なき人は本書を讀みて懷妊の法を知るべく又子が出來て困る人は避妊の法を知るべく實に本書は懷妊避妊を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵劵代用必一割增

大阪市東區和泉町二丁 泉陽堂

通信教授

産婆學講義錄

☛目下會員募集中

☛初號二號發行 毎月一回 六ケ月修業

規則見本要郵劵二錢

東京四谷區内藤町一番地
東京産婆講習會

本廣告切取り申込者に束修を半減す

女(ほの三)

樂界に於ける最高評の樂器

山葉風琴

◉樂譜用紙、樂譜帖各種◉

金拾八圓以上
金參百五拾圓迄各種

新刊書

文學士 吉丸一昌先生歌章擔
北村季晴先生編纂

中等 **音樂教科書**

（菊判洋裝製綴堅牢）

卷壹既刊定價金四拾錢郵稅金六錢
卷貳既刊定價金四拾錢郵稅金六錢
卷三、卷四…………續刊

音樂界の要求によりて破天荒の教科書は出でたり、此一書によれば音樂上の智識と技術とを併有するを得べく實に樂界多年の渴望は本書を俟て始めて充たす事を得ん

山葉洋琴

金參百參拾圓以上
金千參百圓迄各種

新刊書

東京音樂學校教授 島崎赤太郎先生閲
福井直秋先生著

初等 **和聲學**

（洋裝頗ル美製本）

定價金六拾錢
郵稅金六錢

和聲學に關する邦文の書は多年我が樂界に於て要求し渴望せし所にして今や福井先生の著書出づ其內容體裁等の如何は一度本書を繙き其眞相を知れ

鈴木ヴァイオリン

◉音樂原書輸入品各種◉

金貳圓以上金百廿圓迄
弓金七拾錢以上各種
箱金壹圓五拾錢以上各種

弊店は以上の外舶來洋琴風琴、ヴァイオリン樂隊用吹奏樂器、手風琴、ハーモニカ及其他西洋樂器各種並に和洋の音樂書を販賣し階上階下には各種の樂器を陳列し最も



((ピアノ、オルガン調律修繕應需))

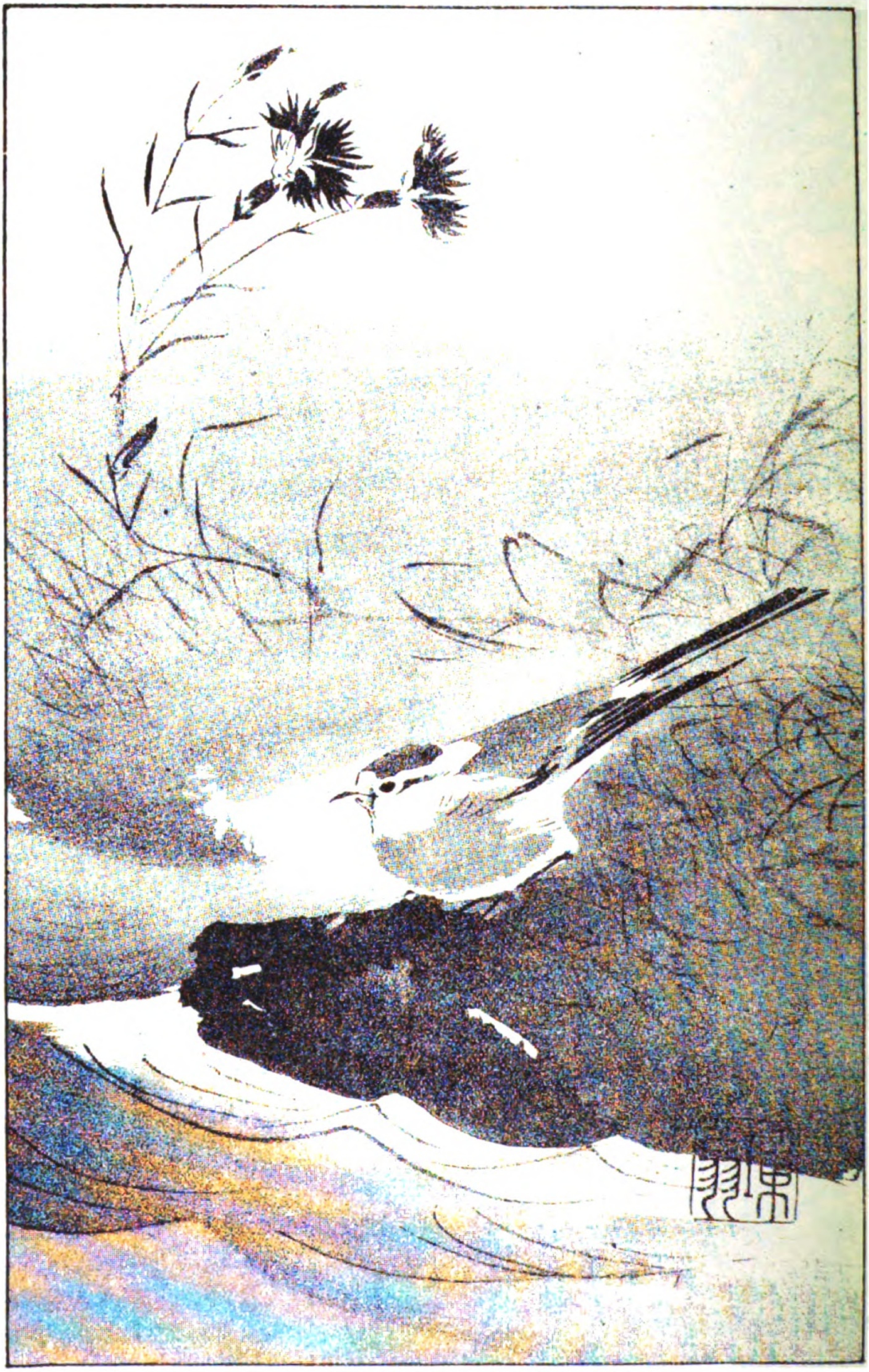
新設電話新橋四八八〇番

叮嚀懇切に各位の御需めに應じ候に付陸續御來店御購入の程希上候猶ほ郵券貳錢御送附あれば詳細なる目錄進呈仕候

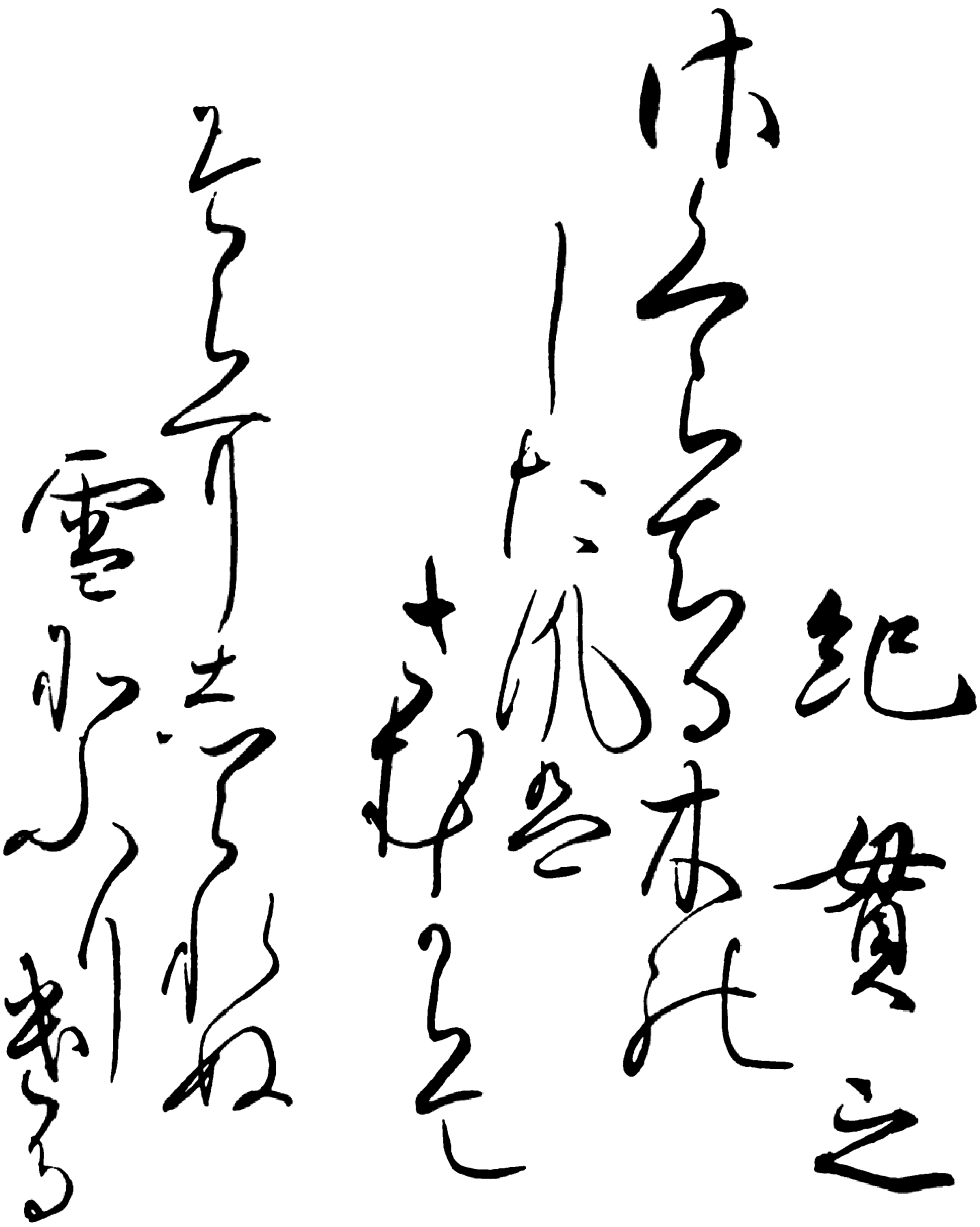
東京市京橋區竹川町十三　合資會社 **共益商社樂器店**　電話新橋五二九番　振替口座壹五八〇

女（ほの四）

鶺鴒と撫子



川端玉章筆



小野鵞堂筆



美術造花材料
發賣御案内
實用新案登録
第七九七八號
モール入シホン
最も嶄新奇抜なるもの一見清涼を
覺へて三伏の暑さも忘るなるべし
天野卯兵衛商店
東京横山町一丁目十六
電話浪花一六四三
振替口座四九七〇
営業案内

勇者は來れ！懦夫は逃げよ！

每月一回五日發行

冒險世界

大判（四六二倍大）紙數百廿八頁

六月五日發行 第一卷第六號 一冊十五錢 郵稅一錢五厘

△本號には坪谷水哉氏の壯快なる西班牙鬪牛奇談を掲載す▽

△冒險小說に讀切の驚くべきもの現はれん！▽

△尙武世界と運動世界を注目せよ！▽

△その他の諸欄何人も快哉を連呼せん▽

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 振替貯金口座第二百四十番 博文館

婦人世界を讀まざる婦人は時代に後るべし

記事有益

婦人世界

體裁優美

六月一日發行　毎月一回　三巻第七號　一冊拾五錢　郵税一錢五厘　六冊分郵税共九十錢　一ヶ年十二冊一圓七十五錢

◎我が家にて日常實行せる室内掃除法……佐治實然

◎正直にして親切なる蜂須賀侯爵夫人……棚橋絢子

◎媒妁口に誤られて結婚せる不幸なる婦人の實例　神戸無名女

▲外國婦人の見たる日本婦人の惡癖　磯村春子

▲胎兒は如何に成育するか……伊庭學士

▲婦人ヒステリーの話　樫田醫學士

▲小說御祖母さん……高須梅溪

◎男女結婚論……村井弦齋

懸賞　文藝◎習字　繪探し◎笑話◎頓智談　俗謠その他

▲弦齋夫人の料理談

▲名歌評釋螢の歌　渡邊白水

▲小兒ジフテリアの話　加藤醫學博士

▲虫齒は如何なる人に多きか……志村ドクトル

◎斯くの如き料理法は必ず失敗す……清風生

◎八十歳の長壽を保てる我が母の日常生活　蘇峯氏夫人　德富靜子

◎如何なる服裝が婦人に似合ふか……東京美術學校長　正木直彦

女(への三)

東京京橋南紺屋町十二　實業之日本社　(郵便振替貯金口座參六番)　(電話新橋八七四番)　全國賣捌書店



女(への四)

英國皇太子殿下の家庭



皇太子ウエールス殿下幷に妃殿下皇孫殿下

貴婦人の集合



毛利公爵邸内に於ける婦人報國會

英語世界

第一號以下數版を重ぬ ▲毎月一回五日發行

年刊十二冊菊判紙數六十四頁
每號寫眞版及密畫數頁挿入

第四號要目

●教室雜觀（マクスオルレ）……深澤兵庫縣姫路中學校教諭●英譯血判取……武信早稻田大學講師●短編小說（コナンドイル）……今井國民英學會講師●筆蹟……神田學習院教授●Syllabication に就て……岸本早稻田大學講師●最近科學奇聞……長井氏晟●英吉利風俗買物の話……平田學習院教授●解釋練習……增田早稻田大學講師●英詩吟誦の研究……酒井勝軍●英語教育上記憶すべき札幌農學校●入學試驗と國文英譯……今井國民英學會講師●指を使はぬ英習字の新法……●英語新遊戲法……●英語の形式……伊藤神奈川縣中學校教諭●飛入勝手英語輪講會……長井氏晟●入學試驗答解（名古屋高工入學英語試驗）……深澤教諭●英作文の心得（關係を表す句）武信早稻田大學講師●英語慣用句の解剖……喜安璉太郎●英作文練習の經驗談……一中學教師●日常會話……T・Y、●受驗談（高校受驗所感）……一合格生●英學大家吹込蓄音器……●時文研究……記者擔當●讀者研究壇……●懸賞英文披露……記者擔當●懸賞新課題……●雜錄（編輯餘錄、新刊紹介、英文通信紹介、英語俱樂部）

第五號要目（五月五日發行）

●ジャパン、タイムス主筆高橋一知氏筆蹟●コナンドイル短編小說講義……今井信之●マクス、オレル譯註……深澤由次郎●句讀法……茨木清次郎●西洋お伽噺譯註……長井氏晟●山口高商入學試驗詳解……深澤由次郎●會話相撲……TY生●和文英譯親友……清水泰次郎●解釋練習……增田藤之助●英譯血判取……武信由太郎●言葉の使ひ分……S、K、生●英語唱歌法……酒井勝軍●英語の形式……伊藤彌門●科學奇聞……長井氏晟●山口高商受驗成績談……カーントレット●英作文心得……武信由太郎●如是鶯ペン……青郊●英文通信●時文研究●研究壇●英文和譯の經驗談●懸賞披露●其他

第六號要目（六月五日發行）

●ブラウニング英詩「勇士」譯註……小日向定二郎●短篇夫婦喧嘩譯註……深澤由三郎●英語子音の發音法……岸本能武太●佐久間信恭氏筆蹟●コナンドイル講義……今井信之●句讀法……茨木清次郎●英國々歌吟誦法……酒井勝軍●讀本々位解譯練習……增田藤之助●山口神商試驗成績談……奈倉次郎●英語の形式……伊藤彌門●最近科學奇聞……長井氏晟●神戸高商試驗詳解……深澤由三郎●神戸高商受驗談……一合格生●英作文法……武信由太郎●略語の複數……喜安璉太郎●和文英譯と入學試驗……今井信之●如是鶯ペン……長井青郊●同志社英語評判記●文法練習の經歷談●時文研究●英文通信●英學大家著音機●讀者研究壇●懸賞披露及新題

第一號以下取揃應高需 ▲正價金拾錢 郵稅壹錢 前金｛十二冊金壹圓拾錢／六冊金五拾六錢外要郵稅

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女（との二）

邦樂研究會編纂

西洋樂譜

古今俗曲全集

美裝大本全二集　●定價各集七拾五錢　●送料各八錢

本書は古今俗曲中の佳作を選み西洋本譜に表はせるものにして小唄・端唄・長唄・箏曲・清元・常磐津・義太夫の佐和理を始め最近の流行唄・地方民謠・踊囃の曲に至るまで趣味の各方面に亘りて最も感興多きものを蒐めたる樂界空前の珍什にして價格亦至廉（坊間在來のものは一曲數十錢に値す）洋樂を解せらるゝ士女は本書に依りて普く國風音樂の妙趣を賞翫し得らるべきなり。

●第一集　採收曲歌　六十六篇　既刊

●第二集　採收曲歌　五十一篇　既刊

發行所　東京市小石川區小日向水道町　開成館出版部

開成館音樂課編纂　●教科適用　進行曲粹　全二集　一、價四十五錢　二、價四十錢　郵稅各六錢

エンケル校　開成館編纂　●ヴァイオリン教科書　全一冊　定價六十錢　郵稅六錢

天谷秀　多梅雅　共著　●オルガン教科書　各一冊　定價五十錢　郵稅六錢

教育音樂講習會編纂　●教育唱歌集　全一冊　價壹圓廿錢　郵稅拾貳錢

販賣所　●日本橋、林平次郎●銀座、十字屋、共益商社
●神田、中西屋、勉強堂●本郷、日本堂、岡崎屋
●大阪、三木樂器店●京都、十字屋●其他各地商店及樂器店

女（その三）

彫塑人物



乳しぼり



種痘

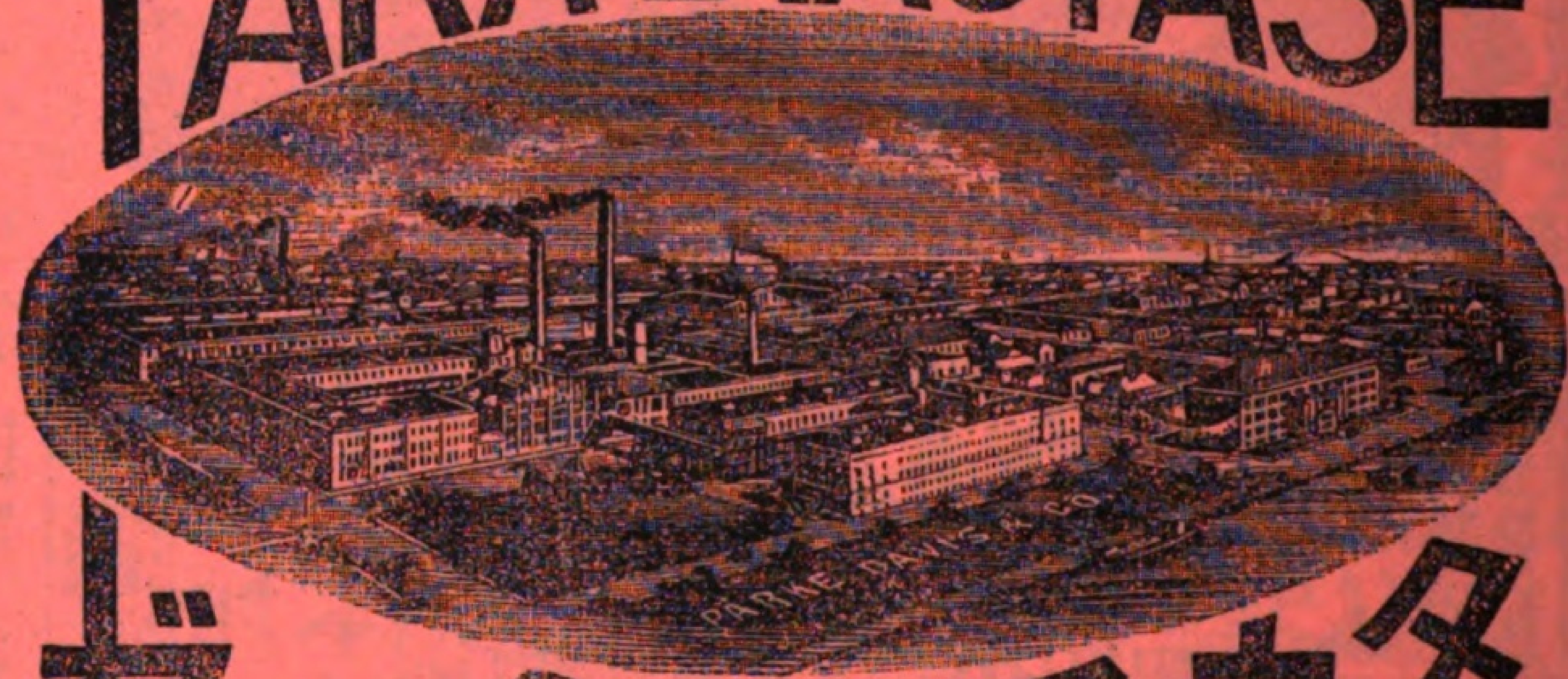


山崎朝雲氏作



巴里コンコルド橋の景

TAKA-DIASTASE



タカヂアスターゼ

世界最大の製薬工場

パークデビス社は完全なる設備を有する世界最大の製薬會社にして、上圖は其デトロイトに於ける本社工場の全景なり。此他同社は加奈陀及英國に同一規模の分工場を有し、世界の醫家が要求せらるゝ總ての醫藥品を製造す。

タカヂアスターゼはパークデビス社の製品なり。完備せる装置の下に熟練なる技術者に依り、製出せらるゝ

高峯氏發見消化新劑

本劑は品質純良、毎瓶強度均一にして、又其効力永久不變なり。

醫師及藥舗諸彦！模造品製造者の誇大なる虚偽的廣告に誤らるゝ勿れ、世上本劑以上の實品なきは歐米及吾多數醫學大家の實驗報告に徴し確認せらるべし、需用者は必らず高峯氏タカヂアスターゼと指定せられよ、本劑は粉末錠劑水劑の三種として發賣せり各地藥舗にて販賣す

代理店　東京南茅場町　三共藥品合資會社

(ちの一)

實業に志す明治少年の大好評繪入雜誌

●毎月一回一日發行
●四六二倍大判紙數七十二頁上等紙刷



正價一册金十錢
郵稅一册金壹錢

第一卷第六號　六月一日發行

各商店會社銀行及び諸製造工場内の少年諸君!!!

▲大懸賞誰もできる格言さがし

▲懸賞電報文 第六回

奮鬪世界

▲五厘の橋錢に困りし森永洋菓王の奮鬪談

▲日本第一の火夫香川氏

▲片意地小僧の成功

修養世界

▲眼目の衞生はどうするか　小玉學士

▲小説小僧大王　小川烟村

▲予の賣藥成功實驗談　尾澤良介

▲青年の好地位を得る秘法　米國大家

娛樂世界

讀者川柳、俳句、考物新題

讀者交詢 活氣萬丈

實業相談欄 新設

口繪（最珍）

▲秘密工業としてあるゴム鞠工場パノラマ

▲東京手形交換所内の實況

▲ボイラ前の香川彌助氏

▲世界最古の汽船

獨習世界

▲商事會社と組合の解説　田尻學士

▲工作と眼力の練習　秋保校長

▲簡易にできる蠶體解剖法　菊地教授

▲手習の手本

▲英語會話 其他

智識世界

▲ゴム器製造工場縱覽の長大篇　石井研堂

▲實業界の最新事實

▲世界の繪葉書店　坪谷水哉

▲三十五億圓の清算　潮風

▲他人年齡必當法

本誌は立身出世を教へる最良の指導者なり!!!

郵便振替貯金口座貳〇番＝東京本町 博文館＝賣捌全國各地書店にあり

女(ちの三)

▶ハンカチーフ用◀▶フランス製◀

本品は全世界を通じて流行品



定價 小瓶廿五錢 大瓶壹圓

輸入元 日本橋橘町 竹間商店

電浪花一六一四番

本品は現今貴婦人方の愛用品

●フランス上流社會は「ケーバー香水」の高尚なる匂を愛せらる●



男女兩用毛髮用煉香油

ビユーテーオイル

大瓶四十五錢 送料十錢

近頃化粧と云ふ事が進歩したのにも拘はらず毛髮油は更に改良が出來ないので舶來の油を用ゆる事が盛んになつたが舶來の香油は西洋人に適當する樣に出來て居るので永く使ふ中には毛が赤くなるとか又は折れる樣になる事が有るので樣々研究して日本人の毛髮に適當なる椿油に含める毛髮の發育と光澤を助くる主成分を採り之れに高尚なる芳香と油の通油性を去るべき藥品とを配合して日本人男女兩用の煉香油を製出し之れをビユーテーオイルと名付けて發賣せり

發賣元

井筒油本舗 井筒屋香油店

東京日本橋區蠣殼町水天宮前

象印齒磨本舗 安藤井筒堂

見本御入用の方は女學世界愛讀者に限り郵券四十五錢を御送附になれば特に送料を要せずして一個御送り可申候

女(ちの四、

理想の子供服



女子共立會立案

醬油釀造界の一大革新

最良醬油



◎資本金 壹千萬圓

釀造元
日本醬油釀造株式會社
東京深川區小名木川通　電話浪花「長」三七七三番 一五九五番

特色
製造清潔
品質佳良
黴を生ぜす
價格低廉
特色

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式釀造方法及機械的裝置により精良無比の醬油を釀造販賣す

特約販賣所
東京日本橋區北新堀町　電話浪花「長」一四六番
合資會社 **日本醬油東京販賣所**

其他 東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

(りの一)

女(りの二)

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を强壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖も皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的醫式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ眞藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進步せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は一劑重症は二劑慢性症は三劑にて根治確證す

（藥價）一劑四十二錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製二劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の白色藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は　並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上二藥專賣元　東京市神田五軒町十九番地　**日新館藥房**

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

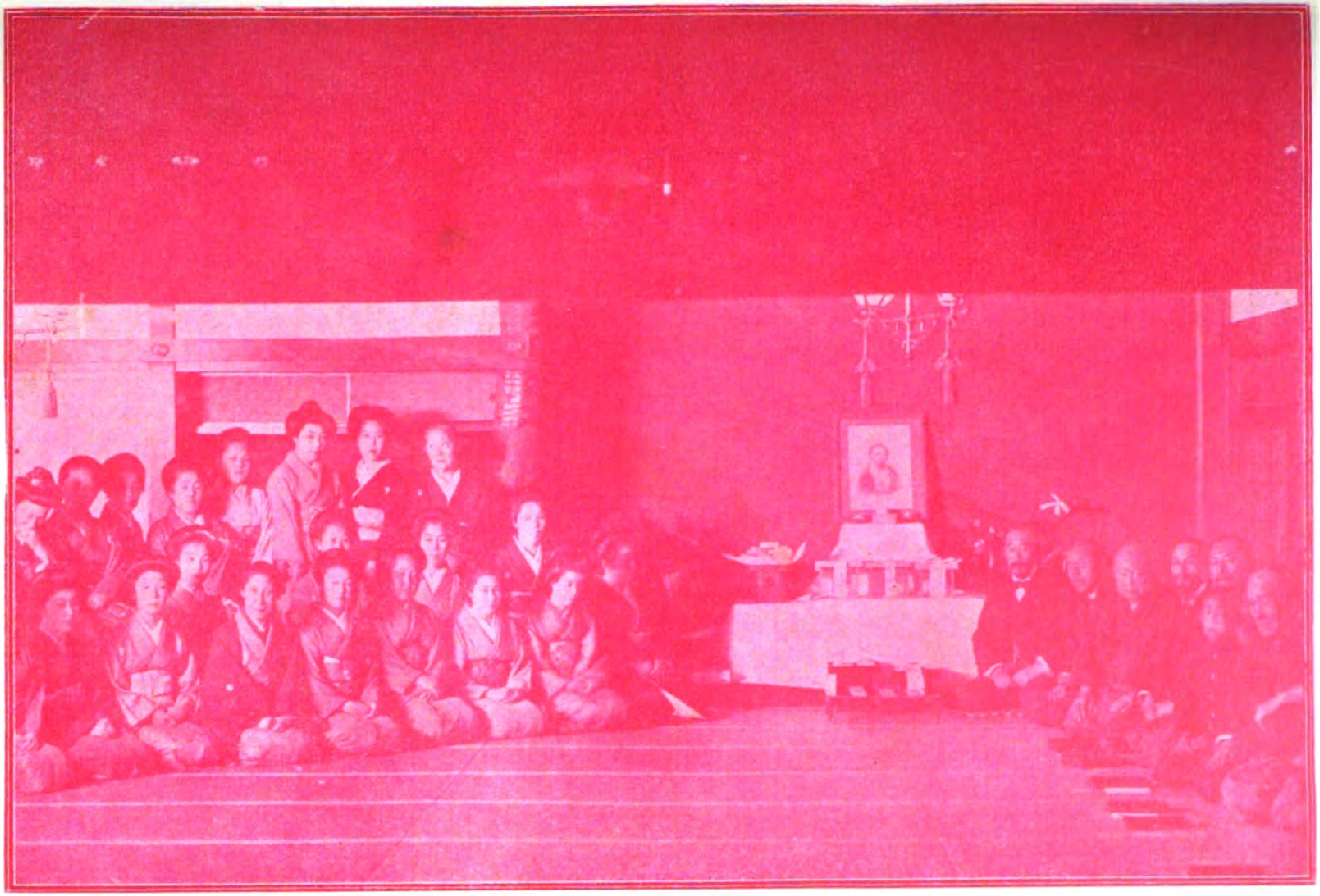
根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

以上貳藥專賣元　東京市神田五軒町十九番地　**日新館藥房**（電話下谷五四六番）

（りの三）

中島歌子刀自追悼會



向島常磐花壇に於て

スケッチの好友

◎三版　◎日本葉書會編輯局選
スケッチ畫集
▲全一册▼
◎定價　金四十五錢
▲郵税　六錢

◎高評　吉田博氏著
あめりか よろつぱ あふりか
寫生旅行
▲全一册▼
◎定價　特製一圓五十錢 並製一圓二十錢
▲郵税　各十二錢

◎高評　三宅克己氏著
旅行とスケッチ
▲全一册▼
◎定價　金五十五錢
▲郵税　六錢

◎再版　三宅克己氏著
水彩畫指南
▲全一册▼
◎定價　金六十五錢
▲郵税　八錢

◎十一版　三宅克己氏著
水彩畫手引
▲全一册▼
◎定價　特製金九十錢 並製金七十五錢
▲郵税　各十錢

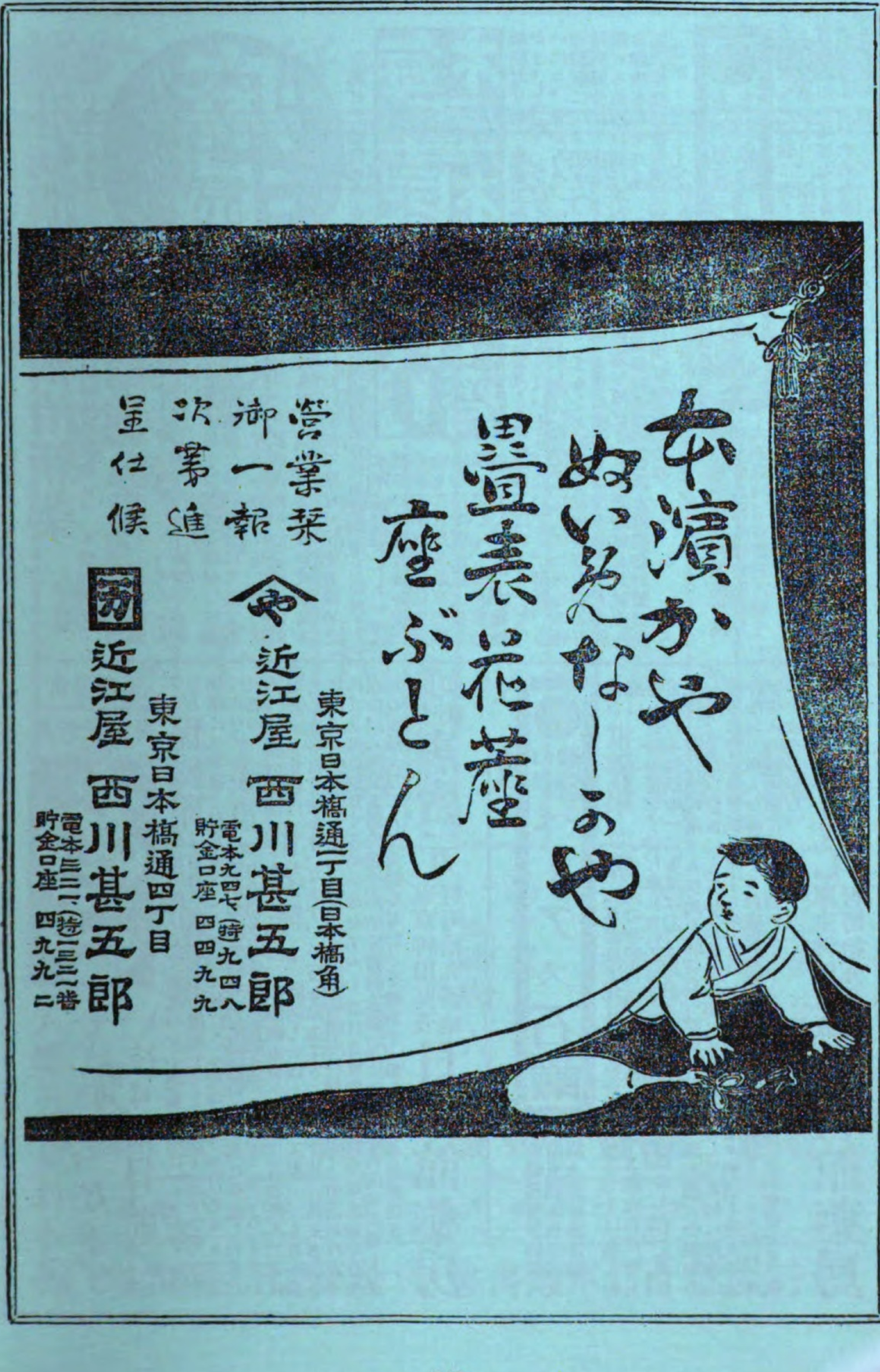
◎三版　三宅克己氏著
水彩畫譜
▲全一册▼
◎定價　金一圓廿錢
▲郵税　八錢

（其の二）

（「エハガキカタロク」御申込次第無代進呈）

發行元　東京小川　日本葉書會　◎　發賣元　東京本町　博文館

〈ぬの三〉


東濱かや
疊表花蓙
座ぶとん
營業栞
御一報
次第進
呈仕候
近江屋 西川甚五郎
東京日本橋通一丁目(日本橋角)
電本九四七(特)九四八
貯金口座 四四九九
近江屋 西川甚五郎
東京日本橋通四丁目
電本三三一、(特)一三二一番
貯金口座 四九九二
(其の四)

女子大學國文科卒業生



（長谷川寫眞店撮影）

女（ろの一）

太陽　第拾四卷第七號　定期增刊

新法令
附 第廿四回帝國議會史

洋裝四六倍判　紙數二百六十頁

定價金三十錢　郵税（本號に限り）八錢

既成發行

内外の指目を受けたる第二十四議會は、曲りなりにも其責を果して無事に閉院の儀式を擧ぐるを得。而して其成果たる法律諸案は、幾と皆裁可を得て公布せられたり。吾人は、之を機として、例に依り「太陽」の臨時増刊として「新法令」を發刊せんとす。昨年「新法令」を發刊して後に公布せられたる重要の法令は、收めて皆此中にあり。增税諸法律を始めとして、刑法施行法、監獄法、陸海軍刑法、公證人法、肥料取締法、水利組合法、感化法中改正法、北海道國有未開地處分法、地方税制限に關する法律、滿洲に於ける領事裁判に關する法律、東洋拓殖株式會社法等、次序整然、校正嚴密、既往一年間に於ける重もなる法令は、卷を開いて直ちに之れを知るを得るなり。殊に卷末附する處の「第廿四帝國議會史」は、主筆、春汀鳥谷部氏の手に成りて文に彩あり筆に力あり。豫算案及增税案の大問題を特に重要なる意義を以て討議せられし當議會の形勢を叙すると密、讀む者をして、身、議場に在りて。親しく其光景を見るの想あらしむ。財政に注意し、法の庇護に頼らんとするの士は坐右一本を缺くべからざるなり。

伊藤銀月君著

旅行者寶鑑

▶三六判總クロース美本◉紙數三百七拾頁◀

正價四十八錢　郵税六錢

旅行の神髓を得たる點に於て現代稀に見るの著者に依り、未だ何人も試みざる旅行者の寶鑑を供せられたるものは本書也著者の人物と其文章とを知れる人には唯だ目次の大要を瞥見したるのみにて其の讀まずして巳むと能はさる古今の珍書要書たるを信じ得らるべし「旅行の種類に就ての心得」「旅人の種類に就ての心得」「同伴の種類に就ての心得」「旅行の方法に就ての心得」「旅行の土地に就ての心得」「旅行の季節に就ての心得」「旅行の都合に就ての心得」「旅行の食物に就ての心得」「旅中の宿泊に就ての心得」「旅中人と交渉する心得」「旅中の病氣に就ての心得」「旅中の變事に就ての心得」此中總計百七十九題を含み、一々緊要にして類別整然たり

女（ろの二）

販賣用電話二六二〇番　東京本町　博文館　振替口座二四〇番

女(ろの四)

女子文藝學校卒業生



か（その一）

女(その二)

ハガキとアルバム

東京小石川
日本葉書會



あかげちゞれげくせ毛を

赤毛縮毛癖直し

獨逸醫學博士發見化學應用赤毛縮毛くせ忽ち直り黑艶美髪となる説明書藥名詳説の雜誌ハガキで申込次第無代進呈

東京市京橋越前堀
樂天堂

●婦人科
●小兒科

專門

午前宅診　午後往診

▲入院を許す▼

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

女醫　鷲山彌生

電話番町七八四番乙

洋画講義錄

洋畫講義錄は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す每號美麗なる挿畫數多あり、每月一回發行、一年卒業、會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯
三宅克己先生
岡田三郎助先生
大下藤次郎先生
中澤弘光先生
外大家十數名

繪画講習錄

東京市麻布飯倉四丁目
大日本繪畫講習會

繪畫講習錄は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ每號美麗なる繪畫數葉を挿す、每月二回發行一年卒業會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯
川端玉章先生
荒木寛畝先生
寺崎廣業先生
梶田半古先生
外大家十數名

癩病

不治の症にあらず最新治療は多數の全治者を出せるを以て事實は之を證明す本病は現今各地に於て弘く發賣せられある治癩藥にて全治すべきものにあらず何故なれば今日まで多數の服用者にして全治せるを見聞せず亦醫學上の解釋して然り本社發行病者の福音は醫學得業士中村鐵太郎先生以上の事實を論評し併せて東京に於ける癩病專門大家の新治療法及全治報告を詳細記述せるもの也乞ふ多年の治療に失望せる病者は本書を一讀して現代醫術の恩澤を享けよ

●定價一部金拾錢……郵稅不要

東京小石川區原町八六
治療通信社

女(その三)



六　月（水無月）

行事――一日更衣、此日より單衣を着る、各商店にては夏物を賣出す。四日神宮月次祭奉幣進遣、十二日入梅、梅の實の熟する頃なれば此名あり。此の期間凡二十日家庭衞生に最も意を用ふるを要す。十五日東都日枝神社の大祭。三十日大祓、諸所の神社にて此儀式あり。半年の終なれば諸々の罪穢を祓ひ淨むるなりとぞ。

季節――「芒種」。「夏至」。此の月は初夏の狀態に入り南風軒端に薫ずるを常とす。天候は一般に陰欝にして霖雨つゞき時に輕雷を聞く。後庭の梅實黄熟するを以て家家にては鹽漬にして一年の蓄へとなす。

家事――入梅の季節となれば、臺所、流し元を清潔にして、食品器物の腐敗せざる樣注意すべし、又家の廻りの掃除肝要なり、下水は泥を浚らひて、孑孑の生かざる樣心を配り、緣の下に塵埃など溜めて傳染病の媒介をせざる樣すべし。又蚊帳夏簾の用意をなす。

食品――いわしの鹽燒、鰺の鹽むし、眞名がつをの付燒、人參の白あへ、蕗の煮付、枝豆、苺、夏蜜柑、枇杷。

遊樂――花は菖蒲、燕子花等を見るべく、又螢狩、水鷄を聞くも興あり。

日曜――七日、十四日、二十一日、二十八日。





天才を作るは母にあり

獨、パウル博士

人間の天才は其教育と修養とに何等の關係もなく又影響もないものである。天才は何處迄も天才であつて彼等は只先天的に偉大の才器を享有し、天才と稱する極印を受けた神の寵兒である。

◎謬見を破す

天才について右樣の見解は吾人の數々耳にする所であるがこれは確かに一大謬見である。見よ、ダイヤモンドも磨かざれば決して燦然たる光輝を放つものではない。干將、莫耶の銘刀も研かざれば決して鐵を斷つべき利刀となるものではない。されば人間の天才も之に教育と修養とを加へざれば其才能は圓滿に發揮し得られぬものである事は確乎たる事實である。彼の佛蘭西の有名な科學者「クービエ」が天才は才氣旺盛のものが勤勉によりて得られる尊稱である。といつたのは確かに此間の消息を漏らしたものであるまいか。

◎原因母にあり

凡そ教育について直接多大の關係のあるものは其人の兩親であるが就中その母親は父親よりも教育上我子に偉大なる効果を與へるものである。彼の英雄「ナポレオン」や畫神「ルーパン」の父が教育上全然價値なき人物で兩人共母親の教育によりて千古に名を轟かした事實もあるではないか。故に吾人は今少し深くこの天才とそれを生める母親とに就て研究しやうと思ふ。

◎其例の一

先づ試に世界の文壇に雷霆のごとき名聲を轟ろかしたゲーテーが如何に其母より敎育感化を受けたかを調べて見やう。之には適當なる彼女の談話がある。

『私は我子の智識を啓發し、想像力を助長せしめるには如何にすればよからうかと絕へず胸を痛めて居ましたが、どうも幼年時代には趣味ある物語が最も其目的に叶ふやうに思はれました。それ故私は彼に美しい姫樣や、可愛らしい少年の物語に自然界の現象を加味して聞かせました、例へば地球とは如何なるものであるか、空氣とは如何なる氣體であるか、火は如何にして燃ゆるものか又如何なる作用のあるものか、又水は如何なる液體で流れて居て、又如何なる勢力のあるものであるかなど丶委しく事物に具體的の意味を付けて說明してやるのであります。然樣すると彼は飽かず倦まず此物語に精神を集中して、或は可愛らしい少年が不慮の災難に温い同情を寄せ或は美しい姫樣の身邊に纏綿する獰猛なる惡魔を罵りなどするのであります。而して次回に聽く物語の成行を想像して、祖母を捕へて自分の感想を述べるのであります。

母子膝を交へて和氣藹々と語りつ聽かせつする一日中の物語は、私共の最も愉快に思ふ時でありまして、恰も天上の樂園に遊ぶの感があります。それ故之を妨げるものは、如何に樂しい夜會でも又如何に睦じい招待會にでも私は決して出席致しませんでした』

是に依て見ると彼女が如何に我子を敎育し、如何に其才能を發揮せしむるかに就て力めしかは想像することが出來やう、洵とに「ゲーテー」が雄大ある思想、濶達なる想像力、英敏なる美感、乃至は又高尙 善良なる其性格、その品性多くは皆その母の感化と敎育とによりて得たものである事が斷定されるではないか。

◎其例の二

次に又ゲーテーと同時代の詩聖シルレルの母は如何なる人であつたかを見やうと思ふ。

彼れの父は常に軍隊の勤務のために不在であつたから、シルレルの敎育は殆んどその母親にのみ委せられて居たのである。シルレルが竹馬の友シャルフエンスタインが彼女を評した言葉に、

『シルレルの母親は容貌に於ても體格に於ても實にシルレルと瓜二つであつた。只美しい其面相が女性的の分子を含有して居るのみである。予は未だ嘗て彼女の如く、善良にして慈愛に富んだ親心を有する婦人を見たとがない。又何處迄も女性的な、而して家庭的な婦人は彼女を措いて他に知らぬのである』

又ストライヘルといふ人は彼女の骨相を描いて斯くいふて居る。

『彼女は細そりとして身長の高い體格のよい婦人である。容貌は一般に慈仁で、溫和で恭謙で且つ多感の相を示し居、その廣い額は伶悧にして且つ思考力に富める婦人たるとをも表はして居るのである』

といつて居る。兩人の批評僅々數行の文字であるけれども確かに彼女の人格と品性とを描き盡して居るではないか。彼女は決して空想や妄念に驅らるゝやうな詩人の母ではなかつた。何れの傳記を涉獵しても其美德は吾人の想像以上である。

此母に此子あり。シルレルが極て常識に富だ詩人として、世界の文壇を風靡したのは決して偶然ではない。

◎其例の三

尙又筆を執つては忠君愛國の歌を作り劍を提げては敵の無道を懲らせし文豪ケルネルを見よ、彼れは決して人々の想像する如く幼年時代より頭角を表はして居たものではなく、矢張り凡庸なる群童と比して甲乙なかつたのである。殊にその體質も極めて虛弱であつて實に風にも堪へぬ有樣であつた。此の嫩弱き萠芽からして未來の大詩人の花が咲かうとは誰しも思ひそめなかつた次第である。然しながら其の花は爛熳として咲き、馥郁として其香を放つたのである、然らば何人が之れに培ふたのであらうか、いふ迄もなく其母である。

◎其例の四

更に又詩人ハイネの母は如何なる人であつたか、彼

は母子の愛を歌ふ時は常に自ら其母の徳を賞揚するのである。試に彼が歌つた一二の意味を擧げてみやう。

『姿勢を眞直にし、頭を仰ぎ氣味にする習慣ある自分は其性質にも同じく多少傲慢不遜の傾きを持つて居た。だから意に適せざれば王樣の前でも拜禮する事を欲しない時がある。然し一び其慈愛深き母の前へ出づれば如何なる時と雖も忽にして溫順なる小羊の如くなるのである。之れ確かに母が自分に及ぼす感化であつて尙他の一面に於て自分の有する意氣衝天の氣慨も確かに亦母の賜物であつた。我れは我が母を想ふて過去の歷史を覆り返へす時、我れの胸に大なる苦痛と悔恨とを與へるものは我れを愛する母の美しい心を傷ましめた我身の行爲である』

其他彼は尙母の愛を歌ふて。

『熱あり情ある愛の懷に入らんとする心の暗に迷はされて自分は一たび母を見捨てゝ其處此處と彷ふた。迷に仄見ゆる愛を幾度か手をさしのべて捉へんとしたが其反響として來るものは冷酷なる他人の嘲笑のみであつた。迷ひは未だ醒めざれど憧れ行きし愛は得られさうにもないから、終に失望と落膽とに頭を惱まして家に歸つた。ア、自分は最後に我家で熱烈火の如き愛を見出したのである。之こそ即ち渴望憧憬して居た愛で、既に以前より母の胸に輝やいて居たものである』

ハイネは終に眞に母の愛を味ふことが出來たのである。彼の母は無上の愛を以て彼を育て、而して其天賦の才能を發達せしめたのである。

天才の發揮について以上の類例は古今を通じて實に枚擧に遑あらざる程である。「ヲフエール」も「ルーパン」も「ナポレオン」も「ニユートン」も乃至又「カント」も如何なる方面の天才と雖も皆敎育によりて其才能を發揮せしめたことは疑のなき次第である。

◎反對の例

稀世の才器を有するものでも邪惡な冷淡な無情な敎育によりては終に悲むべき運命に終るものが多いのである。彼の獨逸のショッパンハウエルや、バイロン等

の天才が大に病的の部分を含有して居るのは正に其例證である。

◎女の使命

母親は天才を發育せしむるに斯の如き絶大の勢力を有するものであるが、熟々古今東西の天才を研究するに、天才の月桂冠を得たものは皆男子であつて、如何なる範圍のものでも卓越したる女流の天才を認めるとは極めて困難である。之を婦人が既に先天的多少の能力を有する音樂界に求むるも、又詩の天地に求むるも決して一流の男子と比して遜色なきものは尠いのである。古來女流の天才で第一と稱せらるゝは彼の「サフオー」であるがこれとても半ば傳說的の人物である。

◎使命を無視するな

此原因は今茲に論ずる必要もないが、兎も角も婦人は婦人自らが天才となるよりも天才となるべきものを敎育すべき高尙偉大の使命を有するものである。此點よりして近代の婦人運動の一部を觀察するに、かの徒に女權擴張などに心醉して子女の敎育の如何を顧る暇なき婦人の如きは正に女性の使命を無視して居るものといはねばならぬ。

力と而して精神の最高絶頂は心理上女性には到底達し得られざるものである。其代り男子即ち父親たるものは其子の天才を助長せしめ、精神の花を咲せ、實を結ばしめるには女子よりも遙かに下つたものである即ちこれを言ひ換へれば若し天才は男子に與へる尊稱とすれば、天才を生み出し且つ之を圓滿に生育せしむる偉業は女子にあると認めねばならぬ。ゲーテーの名が千古に喧傳せらるゝ間は其母の名も亦不朽であることを思はねばならぬ。

高等下女主義を排す

安部磯雄

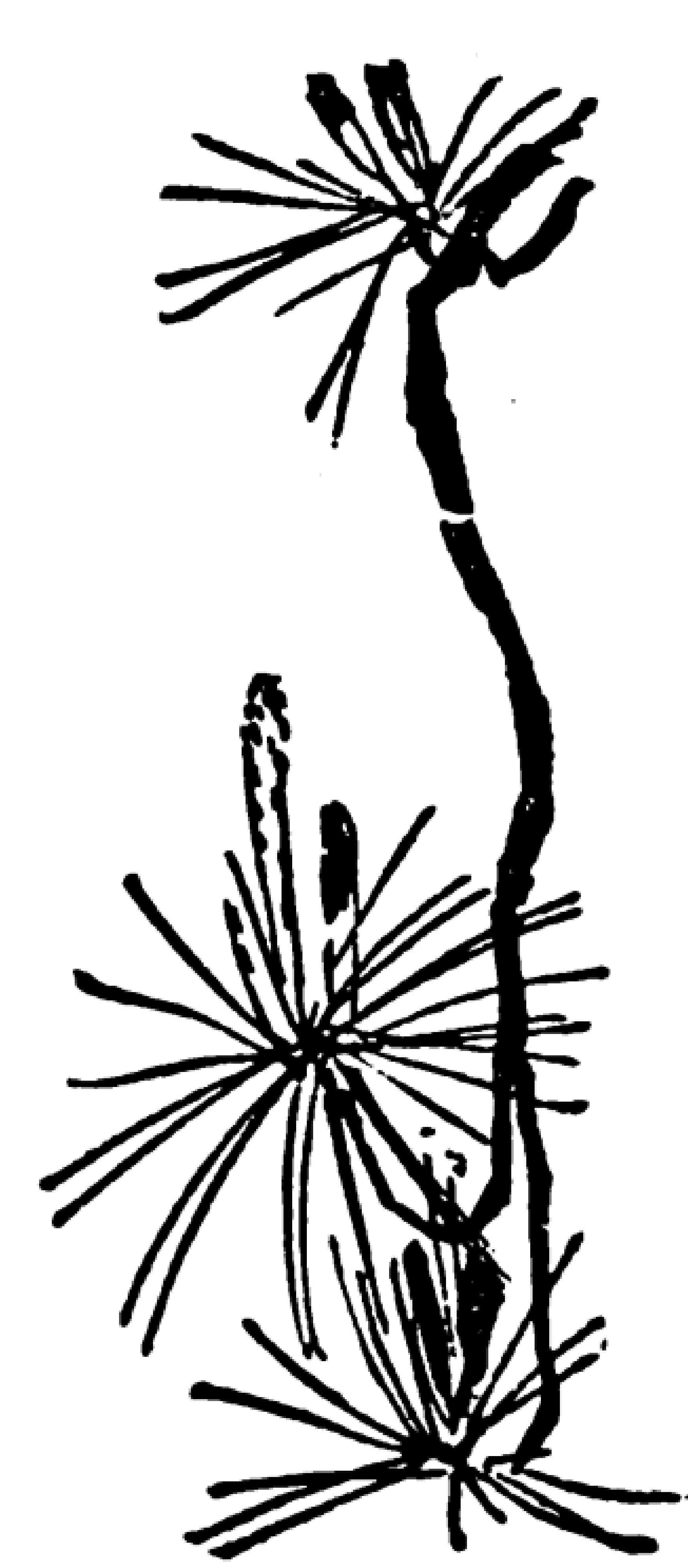
女子の敎育に對する思想も漸次進步して來たが、まだ根本の點に於て私共の贊成し難いものが殘つて居る。其は何であるか、良妻賢母を造ることを敎育の主

眼と心得て居ることである。今日は随分進歩思想を有して居る教育家も少くはないが、世間體を憚りて矢張りこの主義を振り廻はして居る樣である。亦保守的思想を有して居る人は一も二もなく良妻賢母を養成する、にあるものと信じて居るのである。私はこの主義を少しも輕んずる譯ではないが、これを以て女子教育の本旨である樣に考ふることは出來ない。若し男子教育と女子教育とを比較して考へたならば、随分不都合な點が現はれて來はせぬかと思はれる。女子が良妻となり賢母となる必要がある如く、男子も亦善良なる夫となり、賢明なる父となる必要があるではないか。然し男子教育の目的は良夫賢父を造るに在ると言つたならば少しく滑稽に聞えはせぬかと思はれる。勿論良妻賢母も良夫賢父も結構には相違ない。亦これが教育の目的の一部となつて居ることは誰も疑はぬ所であるが、決して目的の全部であるとは言へない。實際男子を教育するに當りては良夫賢父といふことを主眼としては居ない。今日の中學や大學に於て夫として若くは父としての心得を教ゆることは皆無であつて、良夫賢父どころの話じやない。私は男子の方に少しく良夫賢父主義を說く必要を感じて居る位である。然るに女子教育となれば殆んど良妻賢母主義の一點張りである。何故に女子と男子の間に此の如き相違があるのか。子女の教育は父母が等しく其責任を分つて行かねばならぬのに、女子だけに良妻賢母たれと懸命に勸むるのは少し變ではないか。

然し或人は言ふであらう。女子は男子に優りて子供の世話をしなければならぬ、亦妻としては常に夫を助けてゆかねばならぬから、良妻賢母を女子教育の目的とするのは適當ではないかと、これも一應の道理はあるけれども決して感服する譯には行かない。なぜならば女子が家政を治め子女を教育するのは、恰も男子が政治や實業を以て職業とするのと同樣で、一の職業に相違はないが、世には獨身の女子も少くないから、家を治め子女を教育するのが女子の天職であるといふことも出來まい。若し齊家育兒が女子の天職であれば

男子が大工や土方になつて働くのも天職であると言はねばならぬ。此の如く女子が家政を治め子女を敎育することが一の職業であるとすれば、いよ〳〵以て良妻賢母主義が女子敎育の目的でないことが分らう。全體敎育の目的は人を造るに在るので、政治家や實業家を造るのではない。男子が或職業を得る爲に專門敎育を受くるのは全く衣食の爲であつて、人物敎育には關係のないことである男女に拘はらず、私共は人間として敎育を受けねばならぬ。世には衣食の爲に心配する必要のない人々がありますが、此人々は職業敎育を受くるには及ばない。けれども尙ほ人間としての敎育は受くるのである、一國の君主や貴族富豪などの例を見れば分らう。斯く考へれば女子敎育も人間敎育といふことを主眼とせねばならぬ。一生涯妻とならぬ女子も、亦母とならぬ女子も、尙ほ人間としての敎育を受くべき必要があるのである。

良妻賢母主義は男子を本位として考へたことで、男子には誠に都合の宜いことであるが女子の方から見ればさ餘り有り難いことでもない。良妻といへば常に夫を助け唯々諾々彼に服從するといふ樣に解せられ、賢母といへば殆んど子女敎育の全責任を負はせられた樣に考へらるゝのである。言ひ換ゆれば家庭といふ一小天地に閉ぢ籠つて朝から晩まで子供の世話をなし、夫の機嫌を取るといふことに解せられて居る、これでは體の良い奴隷ではないか。若し女子の運命が家政と育兒といふことだけにありとすれば妻たり母たる人の位地は殆んど下女と何の異なる所はないのである、故に私は良妻賢母主義を一名高等下女主義と呼んで居る、女子の運命は決して此の如きものではない。家政と育兒は言ふまでもなく大切なものには相違ないが、女子の活動を此小區域に制限せんとするのは、恰も淸國や韓國の婦人が外出を禁せられて居る樣なもので、決して人間として女子を待遇するの途ではないとおもふ。



交際より得べき利益

山脇房子

△交際は一種の鏡

西洋婦人と會合した後では毎時ながら感心致します。常識に富んでゐて、氣が利いて周旋が巧く、そして話が上手で、ほんとに面白くその席その會衆を樂しませます。歸途に會合の状況を追想して見ますと、何かしらん――例へば看護の心得とか、果物の貯藏法とか、來客の應接方とか――あれは有益な話だつたといふやうな事が必ずありますし、それに伴れては自分も少しは意味ある話もしたと後の心持が宜うございます。日本婦人の會合の後は何うも些と人の噂をしすぎたといふ樣な心持の殘る事が多くて、殆ど裨益を得ません。是に就けても交際は一種の鏡で、自分の眞價は茲で初めて自覺されると思ひます。世間へ出て見なければ何うしても自分の眞價は分りません。日本婦人のまだ〳〵進まねばならぬ事も、自分自身の最つと〳〵進まねばならぬ事も、世間へ出て初めて痛切に感じます。社交は一種の鏡であると共に、それに依つて自から修養を迫られるといふ利益がございます。

△社交は家庭生活を明るくす

社交も畢竟は人と人との交際、家庭生活も矢張人と人との交際に違ひありません。ですから他人と善く交際の出來る人ならば、家庭でも樂しく暮されませう。これは理屈ではなく實際その通りです。固より他人に接すると夫に接するとは、其間に違ひもありますが又通うた處があります。何うも日本婦人は夫を慰める事が下手でいけません。夫は家へ歸つても一向樂しくな

い、勢ひ外へ出て樂みを求める事になります。夫が親友と語り合ふやうな談話を妻が語り合へる夫婦は幾何ございませう。夫は友人との話の方が餘程面白いのです。妻には社會の出來事に對し、又は夫の職務に對する興味も理解もなく、又其他の趣味を解するでもなく夫が他から歸つて來て聽く話は、每時米味噌の話やお會計の足りない話だけでは、慰められぬのも無理はありません。一つは舊習慣で、妻は然うしたものと夫が斷念めてゐて、敢て導かないのも原因ですが、婦人が自から進んで世間をも知り、智識趣味を廣くして、十分夫の話相手にもなれるやうに心懸けぬからです。ですから少し交際して見て、然ういふ修業が出來ましたら、夫との交際も今少し趣味が饒かになつて、家庭が明るくなりませうと存じます。

△社交は家庭を廣くす

恁う家庭が明るく樂しくなるばかりでなく、廣く善い交際のある家は、申さば家庭の範圍が擴げられたやうなもので、賑やかに樂しい事だと存じます。其家の夫人が交際の出來る人であつて、初めてよく家族的交際が出來るのです。時折彼方の御夫婦（お子供）をもお招き申し、此方も夫婦子女まで團欒して、御馳走は茶菓位でも、一夕の歡話に耽るは何麼に樂しい事でせう、又招かれるにも訪問するにも、今晩は一緒に何某をと夫婦打連れて參るのを、主人方も來客方も共によろこぶやうでなければなりませぬ。

△無趣味と無研究

私は「兩極端の日本婦人」と申してよいと存じます。會合の席などで、縮こまつてをらない方といふと、度を外れて喋々とお辯じになりますし、然もないと唯もんぞりとして小さくなつて居る。何うも常識的でございません。女同士では隨分姦ましく饒舌る人でも改まつた席では一言も發することは出來ぬ。

それといふが、烈く申せば無趣味なからうです、音樂、繪畫、編物、活花、——趣味としてそれを嗜んで

居る方は先づ無いと申してもよい位です。それに少しも研究心が有りません。夜になると星は出るもの風は時々吹く。ものと云ふやうにたゞ決めておくだけで、「何故」といふ事を考へません。直接な家政の整理改善にさへ研究も興味も持たないで。何でも面倒な事は總て嫌ひで氣樂な、面白いことがお好ですから慈善演劇などは毎時大盛會ではありませんか。

日本婦人は一體に話し下手ですが、かういふ風に無趣味無研究では話の材料がありませんから、交際―殊に男子との交際となると一向いけないのも無理はありません。



△新婚の夫の失望

新婚男子の失望談をよく聞きますが、ホチームーンの旅に出かけて、話をして見て失望して了ふのです。例へば横濱までの汽車の中で彼是と話しかけて見ても、その短かい間の地理もよくは分らず、昔此處でどういふ事があつたかといふ其の歴史も一向分らず、話

せば「はあ」といふだけ、問ひかければ「存じません、存じません」で持ち切り。薩張話の相手にならず、これが高等學校で地理も歴史も學んだ婦人かと呆れて段段失望して了ふといふ事ですが、成程さうでございませう。私は一般の婦人は、まづ女學校を卒業してから一二年家事の實習と交際法を修める必要があると存じます。學校で學んだ學科を實地に活用する機會を結婚前に充分得なければなりませぬ。私の學校の家事科はこの事に適するやうに組織して居りますそして談話も上手になるやうにと一週一時間づゝ時事談といふ課を置て社會の大勢にも注意させて居ります。

そして、又作法の一端を實習かた〴〵、時々會食も致して居りますが隨分紳士貴女と言はれるお方でも作法を御存じない方がありますが、作法に慣れない結果、西洋人との會合の席などではら〳〵思ふやうのことが折々あります。交際をするには作法を心得ることが大切でございます。

△男女交際の必要

何にもせよ私共は最つと交際慣れねばなりません。男子の會合の席へ直きに賣笑婦が出るのもつまり婦人が最つと趣味ある婦人となりて男子に滿足を與へるやうに、進んで斡旋するやうでなければなりません。或來遊した西洋人が「日本で第一の不滿足はどの會合にも婦人が極めて少數な事だ」と申しました。西洋では男女混合の會でなければ――即ち婦人が心配なく出席出來る會でなければ――上等の會ではないさうです。男女交際に慣れぬ故男女といふと直ぐ妙な關係の付くものゝやうな不潔な考を持つて居る人が往々あるは困つたものです、兄妹のやうな清らかな男女交際に慣れさへすれば、さう過の起るものではなく、又過の起らぬやうに、本然の清潔の交際に慣れ行かねばなりません。西洋では、男女打雜りての交際でなければ交際の眞味を得たものとはせぬさうですが、それで矢張清潔なので、つまり單に「男」といふものが單に「女」といふ

ものと交際するといふ其の趣味を味つてゐるものゝやうですが、日本も恁樣に慣れねばならぬので、それが無い故男子は婦人を解せず、婦人は男子を解せず、從つて社交も拙く夫を慰める事も拙うございます。

けれども又恁ういふ突飛な事を日本人はすると言つて、知合の西洋人が驚いてをります。その人は獨身でしたが、或日本人と家庭的友人となつたので、或時兩親と令嬢とを晩餐に招きました處、令嬢一人來られました



「父も母も折節差支へましたから」といふ口上でした。獨身の男子の處へ嬢を手放しで遣すなどゝいふ事は、西洋に絕えて無い事なので、困つて了ひ——招いて置いて唯返す譯にもならず、それかと言つて二人きり

で會食するのは、令嬢の爲にも自分の爲にも品行名譽に關しますし、殆ど當惑したさうです。ですから選擇極端な事はいけませんが、西洋でも行はれてゐる通り、母親などの相應の保護の下に、淸き男女交際をさせる事は必要と存じます。

△西洋婦人の趣味

申すまでもなく西洋婦人は趣味が廣く、たとへ男子と交際しても困るやうな事はなく、話の題目に富んでゐて、政治、經濟、學術、言はゞ新聞の二面記事に屬する事もよく理解して話します。

そして人每に趣味の中心――俗に言ふ一道樂は皆持つてをります。繪とか音樂とかいふのも無論ありますが、又栽培を趣味にしてゐるお方などがあつて、此の薔薇は大層よく咲いてゐますが、何ういふ方法をお取りになるか。私は何うも蟲がついて困るとか、鳥渡しても直ぐ尋ねる。或は編物とか或は刺繡とか、それぞれの特色を有つてをります。日本婦人にはどうも其れもありません。

つまり研究心のあると無いとで、趣味の廣狹も決れば智識の高下も定まる。家庭に居つての、又社會へ出ての、應對振談話振の上手下手もこれで定まります。固より西洋婦人とても然う一から十まで何にも彼にも亘つて博識な譯ではありませんが、唯この研究心がある故進むのです。例へば海軍士官の會合ならば海軍の事、理學者の集まる會ならば理學の事と、その以前に一通り多少調べて準備しておくと申します。よく西洋婦人と會談したら、日本の海軍の事まで大層詳しく知つてゐた、えらいものだと日本士官が驚かされる事がありますが、なに必ずしも其婦人が世界海軍通でもないのださうです。けれども然ういふ研究心を有つて何事もやりますから、ずん／＼常識と趣味とが增進してゆくのです。日本婦人も社交の必要に迫られた時、かういふ態度に心懸けましたらば、自分の修養にもなり、延いては家庭、社會の幸福を致す事が出來ようと存じます。（芙蓉生筆記）

我家の整理法

金森夫人

二十年來家を有つてをりますが、今以て單に研究中と申すの外はなく、各姉の御工夫を伺つて益を得たいのが山々で、却々お話どころでは御座いません。子供のある以上は、その教育も家事の一つと存じますが、長男が唯今高等學校の二年に居り、其他は猶更の事で、まだ子供を立派に仕上げたとは一つも申せません。

△すべて時間的

何事も皆時間を一定して事を運ぶ定則にしてをりますが、何せよ子供が多勢(九人)あり、六歳四歳二歳といふ幼少のまでありますので、殊にこの二歳四歳などの子供は、動もすれば時間を狂はせていけません。よくお若い御夫婦が、幼少のが一人出來ると、大層規律も時間も無いやうになつてお終ひですが、殊にこの二歳位の時がさうなり易いのです。飲む物は乳だけで、そして穩しく寢てゐる内は樂なものですが、進んで粥でも遣す頃から兎角不規律になり勝ちなもの、それ故殊に時間的に〱と務めてをります。

朝飯は六時から七時の間各自隨意に致します。それは學校の遠近が違ひますからです。食堂の卓上に食器を備へておくだけは女中の役ですが、戴くのは各自手づから致させます。尤もお辨當は私が詰めてやります。七時までには二歳のまで皆濟します。午飯は十一時、晩餐が五時(從來六時の處夜の學校の都合で變更)午前の間食は大概要りませんが、午後は二時に、六歳のと四歳のとへ牛乳を遣しますから、二歳のもお招伴を致します。

さて六時までには二歳のと四歳のとが眠つて了ひ、七時までには六歳のもベッドへ入つて了ひます。これをコンマ以下と稱します。それが眠つて了へば後は靜かになります。前方夜ばかり御訪問になつてゐた或お方が、一度晝御入來になつて「おや這麼小さい子供衆があつたのか?」とお驚きになつた事があります。牛

年越御訪問なすつてゐて、少しもコンマ以下のあるのを御存知なかつたのです。

寢床は皆ベッドです。私の處は總體恁ういふ床（板敷）で、疊の敷いてある處は玄關側の三疊と、二階に一間これは老人の來客の爲に――と是れきりです。ですから總てベッド、食卓、机、椅子といふ組織になつてをります。唯簞笥だけは用ゐてをります。本意ではありませんが、又押入の中へも被服を吊したりして居ります。衣服は平常着一着、外出一着、一枚づゝ着切らし主義で、いろ〳〵豫備を作へる事を絶えて致しません。多勢ゆゑ一人二着宛でも隨分の枚數に上ります。多く作へて置いて出入に一々煩はしかつたり蟲干とか何とか混雜致すのは、第一時間の上から不經濟です。殊に子供でも多いと、何よりも時間が貴いのです。

▲各自の經濟

まだ尋常小學時代の子供には、お小使だけを自身經濟にさせて置きますが、高等小學以上の者には、被服までも各自に豫算を與へておいて、その範圍內で自身經理する事に致させてあります。ですから男の子などは、繼切をあてゝ下さいて、繼切だらけの洋服を平氣で着てをります。どうも餘り烈いから一着新調したらばと申しても、どうして〳〵今月は其れ處ぢやない、必要書を澤山買はなくちやなどゝ申して居ります。よく撥ね付けられますのは、靴下で、他家へ伺つた時に穴の明いたのも如何にもと存じますから、下町への序に取つて來て遣りますと、「いけません。其麼事をされると僥倖心や贅澤心が起つていけません。苦しくても自分の經濟でやつて行く方が餘程愉快です、お斷りです。」とやられるので御座います。

▲品性を標準

此頃まで居つた下婢は十一年勤めましたので、殆ど一切――子供の世話も臺所の事も致して猶日に一二時間は餘裕の時間までありましたのに、其れが代つてからは下婢二人に私までも入つて三人掛りで間に合ひま

せん。人の家と申すものは、子供でも多ければ、家事の整理は下婢一つでそれを、善く教練こと、是一つでまあ運んで参るのです。下婢が善くないと第一子供の世話をさせられず、又留守が頼めません。で私は最う何よりも第一に、唯一に、決して陰日向や裏表や隠立ての無いやうにと申し聞かせます、最うさういふ者は到底も立派な人にはなられぬ。私の處に居る以上は



これだけは最う何うしても守つて貰はねばならぬ。十個毀物をされたよりも、一つ毀したのを隠される方が幾干厭な心地だか分らない。又私の不在に子供等に「いゝわ！其麼事をすればお母様に告口けてやるから」といふ様な事を言はせたり。又私だつてお嬢様の事を告口けるからいゝわ」とか、然ういふ事のないやうにして貰ひたい。第

一子供の品性を害つていけず、又他へ出てゐても、家で何をしてゐるかと心が平靜かず、歸ると直ぐキヨロ〳〵眼で睨め廻すといふ樣では、睨める者も睨まれる者も品性を傷けて其一時のみではなく、一生の損害になります。下婢を疑はねばならぬやうでは、此方の品性に損失を受けるから、何うしても正直で一點の噓僞りがないやうにと、よく〳〵言ひ聞かせて、是非それだけは心から行つてくれるやうにと務めさせます。

　幸に從前はまあ其れ一つで治まつて參りました。不在でも怠けたり子供を粗末にしたりといふ樣な事もなく、順序通り運んでをりますから、出てゐても心配がございません。子供も私が居らないと却つて穩なしくて、急がしさうならば下婢の手助けをしてやるといふ風で、歸つてから「まことに樂でございました」と下婢が申すので御座います。

　下婢を度々代へる事は私は無論大不贊成です。けれども幸に長く居つてくれて善いと思ふと、婚期が來て下つて了ひますから困ります。然しまあ娘が一人殖えたと思へば實に嬉しうございます。滅多に桂庵から雇ふ事はありませんが、有つても其れは決して續きません。信用した以上は打任せる代り、當初は私はそれは〳〵嚴しく致します。その代り又信用した以上は、臺所を見廻つてお砂糖の減り加減を檢分したり、お米を量つて見たりは決して致しません。これも亦品性の損害で、一斤や二斤、一升や二升には代へられませんから、決してさういふ事は致しません。毎日臺所での買物のために一圓づゝを渡しておいて、夜になつて決算報告を致させるだけで、これも一々干渉は致しませんそして這麼事から、一丁字の無い者も自然と算筆の出來る位にはなつて參ります。

　兎も角も蔭日向を決してせぬやうに躾ける事一つで持つて行くのだと存じます。其他の順序方法はこれは教へさへすれば運んでゆくこと、下婢が裏も表もなく正直にして呉れなければ、到底家事の整理は出來ぬ事と信じます。



御妻法

大町桂月

悍馬は、御し難し。然れども、能く走る。駑馬は、御し易し。然れども、大に走る能はず。女の中にも、悍馬あり、駑馬あり。駑馬にては、張合なし。悍馬を御し得て、はじめて、夫の腕前が現はるゝ也。

悍婦を御し得る故に、男子として偉なるものかといふに、否、否、然らず、社會に奮闘するが、男子の生命也。一家の事は、男子にありては、一小事に過ぎず。社會に出でゝ、さつぱり幅の利かぬ男が、餘憤を家庭に洩らし、悍婦を御し得たりとて、たま〱、其器の小なるを見る。英雄豪傑の士、男子としては、無論、偉大なるも、夫としては、往々無能也。悍馬のみならず、駑馬の尻にも敷かるゝ例多し。これ必ずしも、男子の價値には關せず。唯、夫としては、未だ完全なるものと云ふべからざる也。

男子は男子としての仕事あり。されど、夫としては、夫だけの任務あり。夫の任務とは、一家の繁榮を圖ること也、妻をして安心立命せしむること也、子弟をよく教育すること也。これだけの事が出來れば、夫として、申分なし。妻を御すると否とには、關係なきやうなれど、よく妻を御するにあらずんば、これだけの事は出來ざる也。妻のねだるがまゝに、借金までして衣服を買ひ、妻の爲すまゝに子女を甘やかし、妻の我儘に任かせて、世間への義理を缺くやうでは、妻は、一時は、うれしがるべけれど、つけあがりて、ます〱我儘になるべく、主我的、利己的になりて、眞の安心は得ざるべく、子女は愚になるべく、一家は非運に陷るべし。

家貧にして、良妻を想ふと云へり。家貧ならずとも、

普通一般に、妻が賢ならば、よく一家を治めてくれるし、よく子女を教育してくれるし、親族知己の交際もよくしてくれるし、世間への義理も立てゝくれるし、夫たるものは、至極暢氣也。唯垂拱して居りて可也。妻を御するの、何のといふ心配も要らざる也。然れども、千人中に一人あるか無しか也。女から云へば、世に理想の夫は實在せざるべく、男から云へば、世に理想の妻は實在せざるべし。理想は理想、現在は現在とあきらめて、牛は牛づれ、馬は馬づれ、餘り多くを望まずに、よく己れの分を知りて、分相應に十分なる發達をとぐるが、わけの分つたわざと云ふ者也。

何事も、さきに立つは、金也。女の十中七八は、必ず金に安心す。金なき夫は、この點に就いて、一大弱點を有する也。女も年の若きうちは、あまり慾なし。夫婦となつた當座は、手鍋さげても、いとやせぬと、すまして居れど、米櫃は、しば／＼空し、大事の着物は、質屋へおしこめられる、借金の催促は、櫛の齒をひくが如くに來る。これでは、末の見込なし。どうかして、金をとつて下されと夫を責むれど、依然として、貧乏也。隣りの妻君は、をり／＼芝居見にゆく。親戚の妻君は、この間も、三越に買ひ物に行きぬ。我のみは、どうして、このやうに、不仕合であらうと、他を羨むにつれて、わが身がいとしく、我夫が癪にさはりてたまらず。なぐさむれば、益々侮り、威壓すれば、すねて、くやしがりて泣く。こゝに至れば、手のつけやう無し。お金大明神の御來臨を待つの外なし。まことに妻をして安心立命せしめむと思はゞ、こゝに至らぬ前に、御妻法に就いて、一工夫めぐらしておかざるべからざる也。

夫たるものは、妻をして、己れを信せしめざるべからず。夫を信ずれば、夫を難有く思ふなり。夫を難有く思へば、夫の職業にふかく同情を表する也。夫が榮達すれば、我身が榮達したやうに喜び、夫が蹉躓すれば、唯氣の毒とのみ思ひて、夫を慰めむとのみ力め、毫も侮らず、己れの不幸を慨くの餘地なきに至るべし。

さらば、如何にして、妻をして、己れを信せしむべきか。

男子として、世に立つだけの資格なく、若くは力量なき者が、いくら威張つても、怒鳴つても、もしくは巧言でだましても餘程の馬鹿女ならいざ知らず、普通の女は、腹から信ずる能はざるべし。故に妻を娶らむ者は、優に妻子を養ひ得るの金あ



右女學生、左下女、中に傲然たるは金玉づくめの虚飾婦人、世に斯る女を御する夫もあるか（電車内の一瞥）

る事が、物質上の問題也。男子一人前の資格力量あることが、精神上の問題也。金は今日ありても、明日は無きことあり。人生の浮沈、あらかじめ知るべからず。金は女をひきつけ易し。然れども、妻を御する上には、さばかり効力ある者に非ず。金で妻を御することは、何人も出來ることと也。腕にて御するに至りて、

はじめて、夫の夫たる所以の實あるを見る。資格力量が、實に妻を御する根本の問題也。男は女の美を愛し、女は男の勇を愛すとは、言ひふるされたる言なるが、その勇を愛するの勇とは、即ち資格力量の事也。又、女は男の強みに懸れると云へるも、即ちこの資格力量の事也。

さらば、資格力量だにあらば、よく妻を御し得るかと云ふに、それのみにては、不可也。隨分、世間には、一人前の資格力量どころでなく、その從事せる社會にも指折りの名士にして、入つては、妻を御する能はず、從つて、一家を齊ふる能はず、子女を教育する能はざるものも少なからず。夫は、強みの外に、深切なかるべからず。強みと深切、これ女の心を得る所以にして、兼ねて、妻を御するの法也。如何なる悍婦でも、情はあるものなれば、深切には、終にほださるゝもの也。唯親切のみにては、動もすれば、侮らる。故に強みは、どうしても、必要也。

強みありて、深切をつくしさへすれば、妻を御することは、何でも無きこと也。世にはたゞ強みのみを濫用して、唯威壓して、妻を御し得たりと思ふものあり。これ妻の外形を御するを得べし。其心を御することは出來ざる也。なほ進んで、妻をして安心立命せしめ、夫をなつかしがること、恰も神に接せしむるの思あらしむるが、夫の任務にして、兼ねて、眞に妻を御する所以なるが、これ威壓のみにては、到底、不可能の事也。

夫婦喧嘩は、犬も喰はずとやら、貧乏すれば、とかく、夫婦喧嘩が起りがちなもの也。起すは、多く妻の方なれども、起さしむるは、夫も未だ全く妻を御し得たりとは云ふべからず。戰つて勝つは、未だ戰の上乘なるものと云ふべからず。戰はずして勝つが、戰の上乘なるもの也。叱りて、妻を壓するは、これ未だ妻を御するの上乘なるものと云ふべからず、叱らすして、自然に服せしむるが妻を御するの上乘なるもの也。それにつけても、妻を愛すべし、むしろ憐れむべし。狎れさしむべからざる也。一旦狎されしむれば、

威壓もさばかり効なし。心服はなほ更也。叱るは、時に効あれども、腹一杯に、むつと、怒りたる時には、勞して効なし。その靜まるを待ちておだやかに諭せば、成程とはらはら眼より感服の雫がこぼるべし。怒らするは、まだ／＼拙なり。平生よく我主義、趣味、理想、進んで、物の道理、人の道、妻の道を、



腹に入るやうに、さとして置けば、てんで、怒りも、喧嘩も起らざる也。若し萬一怒らざるべからざる事あらば、あくまでも理を貫きて、その怒をして挫折せしむべからず。中途はんぱでぐにやりとなるやうにては、益々侮らしむるなり、怒らざるに如かざる也。



悍婦といふものは、張りのつよき者也、即ち『我』のつよきもの也。悍婦を御せむには、其『我』を利用するを要す。妄りに『我』をくじかむとすれば、怒る、恨む、くやしがる、すねる、ふてくさる。強みを見せて、而かも妄りに加へず、叱るよりも、むしろ、おだてゝ、其長所に同情をよすれば、張りつめし氣もゆるみて、ぐにやりとなるべし。女は概して、己れの功を誇りたきもの也。失策をしかるよりも、よく注意して、何かその功をほむれば、親切な方、氣のつゝ方と、悍婦の張り氣も自然にやわらぐべし。悍婦ならざるものは、なほ更の事也。

終に臨みて、妻たる人に向つて一言す。男は、普通氣力を外に用ゐるものなれば、家にかへれば、安息所を得たる心地になりて、ほつと、ひと息つき、ぐたりとなるが常也。從つて、下らぬことに癇癪をおこすものもあるべく、愚痴をいふものもあるべし。妻たる者、腹を大きくし、氣を長くして、これ力を外に用ゐるの故と、察してやりて、之を慰むべし。その虛に乘じて、之を侮るは、夫に對して、同情の無きもの也。妻をして外患なからしむるが、夫の任務なれば、夫をして內憂なからしむるが妻の任務なり。これよく妻を御する所以也、また夫を御する所以也。

御すと云へば、語弊あるかも知れざるが、余の本意は、妻をして安心立命を得せしむるといふことに在つて存す。而かも、たゞ理想をのぶるのみ、もとより、自から之を能くせりとにはあらざる也。



今の世に殘されたる舊式の奥樣

蒲鞭

▲吹聽的奥樣

「良人もねえ、あなた。今度、お役所を止して、會社の方へ這入る事になりましたの收入も、まあ、倍以上になるんで御座いますて、其かはり下女も書生も置くんださうですから、人を使ふとなると、それが又苦勞でしてねえ」

と、初めは早口に、後には、わざと心配さうに、頻りに良人の出世を世に吹聽する奥樣あり。おのが快心の事を、人に語りて、共に喜ぶは善き事なれど、こは、左にあらずして、卑しき心よりの、一種の誇りなり。

特に、收入云々を語るは心の底見えすきて、如何にも淺墓なり。同じ意味にても、「これから少しは樂になりませう」とでもいへばまだしもなり。斯る言を聞く人もし不遇の境涯にあるものならば、「何んだ當つけがましい」と氣がひがむべく、順境にあるものにても「イヤに吹聽する人だ」と眉を顰むべし。兄弟親子他の人に、自己の利害に關する事のみを喋々するは、人格むげに劣りて見ゆ。

▲出過る夫人

客來りて、主人に向ひ「如何だい。寄席へでも行つて見やうぢやないか」と誘ふ時、良人も快く「よからう」といふに當つて「あなた。お止しなさいよ、もう、晩う御座んすよ」と、格別家に用もなきに、無理に引止める奥樣あり。主人が夜遊びの癖ありとか、又其客が惡友でも無い限りは、かゝる挨拶は無禮なり。此一言によりて、良人が平生の威嚴の程も思ひやられ、客の手持無沙汰此上なし。まこと、卑しき心よりならずし

て、主人の身の爲を思ふて止むるならば、『まあ、あなた。寄席も寄席で御座いますが、宅でも、御ゆるりとなすつて下さいませ。下らぬ御馳走でも差上ますから、私も、そばで、伴食を致します』とでもいはゞ、主人の威もおとさず、客も手持無沙汰ならず、主客融和して、こゝに奥樣の價値も、大に上る、試みに、右の二例について、奥樣の顔色を推測すれば、『あなた、お止しなさいよ』と人の行爲を遮る時には、必らず、眉と眉との間に小皺よりて、唇堅く結び、愛嬌は消え失すべし。この顔色を見たる主客は、たとへ一瞬間にても、同時に、不快なる感にうたる。斯る小事より、大事の破るゝは間々ある事なり。『寄席も寄席で御座いますが云々』の言を吐く時には、決して怒氣の色に出でぬものなり。同じ意味にても、『寄席はいつでも行けるぢや御座いませんか』を胃頭に止たてすれば、婉曲を欠きて、主客の不快此上なかるべし。

▲無口無愛想なる人

俗に、話上手、聞上手といふ事なり。此むッつり奥樣は、其反對に、話下手、聞下手を通り越して、來客に不快の感を起さしめる厄介奥樣なり。來客ありて『今日は、どうも、惡いお天氣で』といへば、『ハイ、左樣で』と語尾消ゆるが如しで、極めて不明確、『御座います』は腹の中で云つて、俯向いて了ふといふ陰氣者なり。言多きは品少しといへば、この奥樣或は品が多いかも知れねど、さりとては餘のむッつりならずや。『もう、青葉の時節となりましたナ』といふに對して、『ハイ』とだけでは、何とやら綿に鞠をぶつけるが如く、其一家は、常に陰鬱の氣に滿たされ居るかの如く思はれて、客足自然と遠くなり。家庭も面白からぬ樣になるべし。今の女學生の或るものゝ如く、油紙に火がついた樣に、ペラ〳〵と喋舌り立つるはもとより、聞き苦しき事なれど、啞と問答するが如く、相手が十言の間に、自分半言といふ體にては、來客の不快此上なかるべし。かゝる女に限つて、嫉深く、下女などには、意地くねわるく當るものなり。話術は交際に欠く

べからざるもの其要は聞上手、話上手にあり向ふの言を熱心に聞くと共に、おのが語る時は、緩急宜しきを得ざるべからず。而して、其話題に就きては、特別の用件の外、彼我互に興味を有すると共に、可成理屈を避くる等多々あれど、他日に讓る。

▲階級的奥様

聊か語を成さぬかは知らねど、かゝる奥樣、役人のそれに多し、此頃は、會社銀行員等のにも、多く見かく。

讀んで字の如く、誰に對しても、階級によつて、其態度を異にする奥様なり。



まづ一人の女客が、階級的奥様のお居間へ通されたとせんか。之が下僚の細君にてもあらばこの奥様、必らず立つて迎へようとはせず。坐つたまゝ、顧眄きて『さ、此方へ』とニコリともせず、一寸默頷く。下僚の細君は、もとより上役の奥様に、お勤めの爲來りしならんも、あまり威張られては、誰れしも善い心持はせざるものなり。それより、『何卒、此方へ』と手近にある座蒲團でも進めなば、

僅の事にても來客の心は、嬉しかるべし。

かゝる奥樣に限りて、つい眼の前に茶器のあるを、わざと下女を呼びよせて、

『お茶をお上け』と指圖するが常なり。何の手間暇も要らざるに、自分が茶を入れて出せば如何に。自から、損する處なくして、來客に快感を與ふるならずや。こんな小事の重りて、良人の人望にかゝはる大事出來す。

さる地方の某高等官の奥樣にて、矢鱈に位階のみを尊び、商人を卑しみ給ふあり。出入の酒屋米屋薪屋に對する言遣ひ、恰も士官が兵卒に臨むが如し、ある日、主人へ來客ありて、奥樣も其座敷へ召されたるに、客といふは一人の老人、奥樣を見るよりいとも叮重に、

『これは奥樣で居らつしやいますか。私は毎度御愛顧にあづかりまする、お出入の酒屋で御座います』

奥樣は、其良人が、何故、酒屋風情を客室へ通されたるを不思議に思ひながらも、日頃の癖とて、

『あゝ、お前さん、酒屋さんですか。毎度、お世話樣あの、昨日貰つたのは、ちといけなくつてねえ』これを聞きたる良人は、顔色變えて、

『コレ、失禮な、此方は』と、何かいはんとする樣子、かの老人は、手早く名刺を出して、

『何卒、お見知りおきを』と奥樣に渡したるを見れば、勳四等、何某とあり。

『オヤ、これは、……し、失禮を』と奥樣、靑くなつて平伏しぬ。

酒屋の主人は、前の衆議院議員にて、政府の總花によつて勳四等を得たるもの、少しも恐れ入るには足らねど、階級奥樣より見れば、其長官が高等官の二等で、漸く勳五等。此處、侮辱したる酒屋の老爺が、俄に光り輝く樣に尊ばれたる、これぞ階級奥樣が演じたる一場のお茶番なりける。

かゝる例、東京にも隨分多く見受けぬ。

▲無神經なる夫人

一名安心奥樣ともいふ、併し眞個の安心奥樣をいふにあらず、安心は立命と續く字にて、男女ともに、眞

實の安心が得られゝば大したものなり。こゝに云ふは、人から見れば、卑しき、下品なる身勝手千萬なる奥樣なれど、本人は極めて、安心して居らるゝ奥樣なり。人間には良心あれば、まことは、人殺ししたり、泥棒したりしては知らぬ顔で、安心して居らるゝものにあらず、たゞ、此處には平常、些末の罪を犯しながら、少しも悟る事なくして、安心して居らるゝといふ一寸見ると幸福なる奥樣を指すなり。



安心奥樣とは、『あなた、女學世界をおとりですか』と人に聞れて、とつて居つても『イ、エ』と云つて隱す奥樣なり。人に貸せば、本が汚くなるといふ心配がある故に、讀んだらすべて簞笥に仕舞つておく奥樣なり。わが子が、乞食に一錢與つた、と云つては怒る奥樣なり。わが子が人にねだつて、無理やりに繪はがきを引つたくつて來ても、少しも叱からぬ奥樣なり。人の仲人をしては大に恩に

着せる奥樣なり。其報酬として、何々の物を與れと、體面もなく、双方へ注文をする奥樣なり。他人が着物を買つたり、外出したりするのが大厭の奥樣なり。故に他人には平氣で留守番させても、自分が留守番するのがこれも大厭の奥樣なり。

　かゝる奥樣に限り、人が死なうが生きやうが、病らはうが、泣かうが、牛の角に蠅がとまつた程にも感せず。たゞわが身が少しの損害でも受ければ、喚き立てて怒る。たゞし其怒るや、如何に無禮な行爲言語をなすも、あとで少しの反省をもすることなし、故に安心なり平氣なり。庭の椿を一輪、近處の小供がむしつたと云つては、四方へ聞こえよがしに怒り罵れど、「あゝ言ひ過ぎた」と心を責むることなし。まことに、晝に妄想なく、夜の夢は圓かに、勤勉にして自利をはかるに汲々たれど家富みさかえて、長命安樂疑ひなし。本人の幸福は此上なし。此奥樣は安心して死ぬるべし。

　家庭の幸福は安心にありといふ。かゝる奥樣を有する家庭は幸福なりや。かゝる家庭の多くを有する國家は安心なりや。

　疾患に自覺性と他覺性とあり。自覺せずして、他覺性にあらはれたる疾患は本人は苦痛を感せざらんも、頗る畏るべき病魔ならずや。

▲干渉的奥樣

　干渉に惡意と、善意とあり。自利の爲に他人に干渉し、其自由を束縛せんとするは、惡意なり。お爲善かれかし、と思ひて、干渉するは善意なり。されど、それの善事と信じたる事、必らずしも眞の善事なりとも限らず。善意を以て、他人に干渉するも、他人は却つて有難迷惑に感ずる事あり。況んや、其結果不成功に終るに於てをや。それも氣の毒に思ひ、彼もわれを恨まれぬまでも、面白く思はれぬなり。所詮要らぬ事なり。

　させる、大事件でなく、これを一家の私事にしても、例之、小兒の病める家庭に行きて、「お醫者樣、何誰？」と聞くに、何誰さんで御座いま

す、といふを引取りて、
「私の兒は、○○さんに診て戴きました、それは眞實に御上手ですよ。あのお方になさいませ」と無理勸めする奥樣あり。これ無論善意より出でたる、親切にはあれど、向ふが信じてかゝつてゐる醫者のあるに、別に賴まれもせぬに他の醫師を勸める必要もなし。又、自身、何等醫學上の智識もなきに、たゞ我が子の治つた治らぬを以て。直ちに醫師の善惡を卜するも烏滸の沙汰なり。もし、先方より醫者の相談させらるれば、意見はその時いふもおそからず。殊に、人命を司る醫師の事などは、賴まれざるにこれを勸めて、飛んだ恨みを受ける事往々あり。もしそれ、先方が、加治祈禱等に依つて、其病を治さんとせるが如き、蠻的行爲あるものに對しては、これは少々憎まれても、極力、先方の爲に、然るべき醫師を推定して、これに診察を乞はしめざるべからず。

これは、干渉に似て干渉にあらず。前者に不知而て人を敎ふるの譏りあり。後者には、衆生を慈念するの惠みあり。

右の外、轉宅をしようとするを、方位が惡いと云つて止めさせ、旅行をしようとするを、日が惡いと云つて止めさせ、結婚しようとするを、相性が惡いと云つて止めさせ、甚しきに至つては、何等の風波も起り居らざるの夫婦仲なるに、其主人に向つて現在の妻を去れ、われよき妻を取持たんと勸むるなど、隨分無い圖でもなき樣なり。干渉もこゝに至れば、よしや其根底を善意としても、一種の罪惡となる。

▲容體ぶる夫人

一名勿體をつける奥樣なり。昔のお友達が來訪しても、まづ下女に客間へ案内させおきて、自分は悠々として、お化粧にとりかゝり、ものゝ、三十分も、種々おめかしをして、しやなり／＼と來客の前へ出づる奥樣なり。女は身だしなみが大切故、髪の亂れを掻き上げる位はよけれど、初めて逢ふ人でもなきに、長くお化粧にとりかゝりて、客を待たすならば不心得の至り

なり、下女が、取次ぎて、其舊友の名を聞くと共に、とつかはと玄關に出迎ひて、

『オヤ、能く入らしつて』といつてこそ、友の親情はあらはるれ。永く客間に待たされる間に、友の心には昔のあたゝかみはさめぬべし。

よしや、その心に親しみはあるとも、

『さう、輕々しくては、何だか重みが無い。』といへる樣な考にて、わざと勿體ぶるが如きは、却つて、虚威張りしてゐる樣に見えて、其奥樣の人格を人に疑はるるものなり。

▲吝嗇奥樣

上述の、安心奥樣にも、此奥樣の分子は澤山ありされど、吝嗇奥樣は、安心奥樣の樣に、罪深からず。彼は倫理上、多くの罪を形造るも、これは、割合に無邪氣にして隨分他人に親切心もあり。たゞ金を惜しむ事、極點に達し、ある時には、命よりも大切に思ふ。まづ、第一に、火種を絶し、客來れば、驚いて、ブー／＼と吹く。容易に起らず。客氣の毒がりて、袂よりマッチを出して、煙草を吸ふなどの不體裁あり。

もし、客に酒でも出す事となれば、此奥樣骨を削らるゝ如き苦痛なり。しぶ／＼酒屋へ走らせれど、一升五十錢位の、アルコホール澤山の酒を買ひ來らしむ。衞生上の利害なんどは、もとより關する處にあらず。

結婚、葬式等の贈物は、なるべく、わざと忘るゝなり。自分の良人の姉妹などが、お嫁に行つた先へ、歳暮、中元、などを贈らぬ事度々あり。先方に、姑樣などありて、苦情起れば、初めて『オヽ、忘れて居りました』と持つて行く。先方が、差向ひにて、腹で思つて居ても、別に問題が持上らぬ、まづは何も彼も、知らぬ顏にて濟ます類なり。

一應は金溜主義の樣なれど、此奥樣、一文惜しみの百知ずなり。地面と家作とで食つて行く樣な、不生産的人物か、それとも、將來、高利貸を目的とする人などの外は、かゝる奥樣を持たば、目前の少利ありて、永遠の大損あり。假に、金錢を以て、人生幸福の目的とせ

んも、かゝる奥樣は、炭の一つかみの爲に、こゝろに不快の感を買ひ、良人の人望を落す事莫大、特に頭腦を使ふ良人などにとりては此守錢奴、否金溜妻君、却つて大の貧乏神なり。

▲愚痴を潘す人

『あの時に、家をお賣りにならなかつたら、今一坪百圓にもなつてゐるんですもの』と過去の事を喋々と良人に攻める奥樣あり。一端手放した家が、又返つて來ようではなし



初めは、『さうだつたねえ』と受流せど、佛の顏も三度になれば、良人もさうさうは體の善い返事も出來ず。芝居がゝりで『くどい』とでも叱り飛ばさねばならぬなり。

『あの人は、どんなに世話してやつたか知れないのに自分が善くなると、ちつとも寄り附かないぢやありませんか』と恩を賣る奥樣あり。これも愚痴の一種にて恩を忘るゝもの、もとより罪あれど、其報酬を求むる

も、また罪あり。忘恩者は、勿論不徳なり。されど恩を負へる者に寄りつかれざる様な良人は、何處かに不徳なる處あるなり。

愚痴は、とかく、家庭を淋しくす。

▲無趣味なる人

よき衣類を着ることゝ、芝居を見ること、うまき物食ふことの外に、何等の趣味を有せざる奥様あり。

良人が謡曲の稽古をすれば、

『何ですね。ブー〱唸つてばかり』と、けなす。良人が俳句をやれば、

『何ですね。三文にも成らない事を！』と罵るなり。良人が、少し失敗すれば、閻魔顔をなし、少し成功すれば、地藏顔をなす。暗中に光明を見、閑寂の中に愉快を感ずるなどの趣味は薬にしたくもなし。

斯の如き奥様に限りて、衣類はピカ〱物を好み、珊瑚より黄金を愛し、真珠よりは、トッパスの方が善しといふ風なり。餘裕なき、慰籍なき家庭は、かゝる奥様によつて造られ、苦き、辛き、刺激を外で受けたる良人の頭腦は、家庭に歸りても、少しも休む暇なかるべし。

（了）

食慾と精神感動

食慾は單に消化機能の要求に、依てのみ起るものにあらずして、知覺神經作用に依つて傳達するものなり、鰻屋の肆を通行して唾液を催ほすが如き吾人經驗する處なり、嘗て一疋の犬を捕へて實驗を行ひ食慾と精神との關係を明かにせり、先づ犬の最も好む處の一片の肉を示めして其の胃液を檢し次に其の肉の臭香を嗅がしめて其の胃液を檢せるに、共に著るしく胃液の分泌せるを認め、又た犬を激怒せしめて食慾を試みたるに著しく食慾の減退せるを認めたり、去ば喜怒哀樂の食慾に影響あるは漠然たる吾人の經驗に存するのみにあらずして、生理的作用に於て其の確たる事實を證明し居るを知るべし、當今食用療法なるもの行はれ來れるが之れと共に患者の精神感動に注意して食物を與ふること亦た必要條件たるべしこれに就ても小供の授乳時、單に食事の塲合に小兒を泣かせながら食事せしむるなどはよろしからざる事なり云々とは消化器病研究會に於ける佐々木醫學士談。

貴婦人と外國語の研究

△語學練習の困難　今更云ふ迄も無いが、近來貴婦人間の趨勢は此困難あるにも拘らず外國語練習が非常に盛になつて行く、是は外交が次第に頻繁になるにつれ交際上の必要に迫られたのと、一は發音の點に於て婦人は男子に勝れた特徴を有し其練習比較的容易な爲であらう。

△英語の流行　高等女學校などでは其外國語は多く英語で、佛語を敎ふる學校は極僅かであるけれども、上流社會では世界の宮廷語と目されたる佛語が盛んで、英語は尠いかと云ふに決して左樣で無い、寧ろ英語の方が遙に流行してゐる、此傾向は學習院女子部に見ても察せられる、同部で三百餘の學生中僅に其一割强が佛語を學ぶ丈で、他は皆英語を學んで居る。

△佛語に堪能なる人　佛語は今の所一條公爵夫人、山内侯爵夫人などが堪能で、各宮妃殿下も御練習の功を積ませられて居る、其他では佛語に通じた人の令孃方が學ばれる位である、然るに英語の方は遙に多數で、皇族には北白川宮武子女王殿下最も深く研究遊ばされ、龜井伯夫人久子、大河内子爵夫人國子、溝口伯世嗣夫人須美子、同伯令孃、大倉夫人久美子、古谷久綱夫人、加藤奉天總領事夫人、關男爵押谷謙太郎氏令孃等は其錚々たるもので、多年外國に在つた下田歌子女史は今尙ゴルドン夫人に就き其研究を續け、毛利五郎男夫人は數人の令孃令息あるにも拘らず津田女史の英學塾と築地に通ひて是も學んで居られる。

△英語の勢力　英語が斯く勢力を得た理由は、其使用が世界に普く、特に對岸の米國が英語國だし、英本國は同盟國だし語學校では第一外國語としてるなども數ふ可きであらうが、又海軍語であり商用語である事も必ず一因であらうと思はれる、處が外國語は基督敎とは兎角結び付き易く、現に中流以上の女子英學者は殆ど其全部が基督敎信者である、是は宗敎女學校が語學を餌する事多く、語學を深く學ばんとするには勢ひ宗敎學校に入るからであらう、然るに貴婦人には此關係が極めて薄い。

△語學と宗敎臭味　學習院女子部に敎鞭を執れるウイストン女史が、同校前に校舍を新築して盛に上流子女を吸收して外國語を敎へ漸次基督敎に引入れる計畫を立て、其落成式に某牧師が此事を明言し、且つ同女史が英京倫敦に日本上流夫人の矯弊を目的とする傳道學校を建てんとする事發表されて、大に貴婦人間の激昂を招いたのは今から三年前である、是で見ても上流の外國語は中流以下の如き宗敎臭味を帶びない事は分るであらう。

離婚せし婦人

（儂の媒妁失敗談）

拔衣紋

甚だ以てお恥もじ様ながら、一昨年は暮れ押し詰まつて、怎うまあ擔ぎ上げられてか、私は生れてより始めて、月下氷人と云ふ役を演つて見ました。と云へば如何にも偉さうに聞こえるけれど、眞實の處、其れは見事失敗に終つたので御座いました。

つい自分の極く懇意にして居る家に、美くしい、

◎妙齢の娘さん

があつたんで、是非相當の處があつたらばと、其の母なる仁の切なる依頼があつた。何が扨て。自分とて未だ獨り身の、人間なればこそ血も通ふ、時には疊の縁搊り度いほどの事もある恥かしい盛りなり、如何に人並外れて無頓着に生れついて居るとは云ひ條、若い男捉まへて、奥様のお世話申しませうかとは何うしても云へませぬ。けれど併し、嫁入り前の女は恰も夏の牡丹餅の如しだと誰れやらが仰つしやつた相だ。成る程此の饐え易い夏の牡丹餅を抱へて居らつしやる阿母さんの身にしたら、其れは隨分と氣の揉める事でもあらうと、一廉の親切顔に一つは持ち前の好奇心も手傳つて、自分の最も親しい友の一人に、萬事此の談しを打ち明けるのであつた。處が、あゝ宜いともと此れも二つ返事の早速、さて間もなく還膝處があるがと云つて寄越した。先づ以て系累と云へば、御當人の妹御一人に、御兩親の未だ健在して居られるのが、

◎聊か難

だが、血統が正しくつて、資産家で學士の肩書迄あつて、而して加之に男風には申し分なくとある。兎に角私共から決してお勸めは致しませぬけれど、萬一去る思召もあつたら、猶更以て能く〳〵御勘考遊ばしての上でと、先方へ其の儘通じると、何の〳〵娘には過

ぎる勿體無い程の良緣だと仰つしやる。談しが一通り進行して、愈々例の見合と云ふ段に迄立ち立つた。

お年齡恰好が大概同じで居らつしやるんだから、乾度お嫁樣ととつ違へられん樣にねと、友は返す〲注意して呉れたので、其處は其れ人間の悲しさ、何うせ似ても似つかぬ夕顏と南瓜の花を、我れからいゝ加減自惚れてかゝつて、止せばよいのにわざと亂れ髮の微塵化粧ひもせで、四邊憚らずしや〲張り出ては、いけ澁々しく構へ込んで居るものだ。後で友が婿樣の方へ天機を伺ひに出たら、彼の紫矢絣の可淑らしいのなら、如何にも〲氣には入つたが、

◎今一人廂髮

の生意氣面には、少々躊躇せざるを得ぬと、其の少少が可笑しくて足まらぬとて、友は一生懸命失笑しても居たけれど、何の馬鹿〲しい飛んだ目に逢つたものだ。女だもの、敢て正直に白狀もするが、餘りいゝ氣持ちはしませんでした。

兎角して婿どの非常に嫁御寮の美貌には參られた御容子で、時此れ金なり好事魔多し、何も廿世紀式の手つ取り早く等と、無暗と〲急かれる程にける程に、明くれば新年戀女房の島田に若し、自分には寧つそうまらぬ這麼喜劇の一幕も、幸多き結婚の好紀念として如何ばかり新夫婦の感謝に預つた事か。

けれど其れも暫の間、男子由來氣が多し水臭し。朝には門迄良人の出勤を送り、夕には笑顏で晩酌のお相手をする從順な妻も、一月二月の程こそ物珍らしさに恐悅がりもすれ可愛がりもすれ、慣れては左のみいゝ顏ばつかりして呉れず、半年にして妻の寢息聊か鼻につき、一年にして、

◎仇し細眉

現に髣髴く。所詮三度や四度の處迄は誰れにも了簡はなれど、更け行く夜半に孤影顧て、惡くや今宵も素給の粹に、身も魂も打ち込んで居らつしやる事かと、寢もせぬ徹宵良人待つ間の悲しさには、如何な悟き嫉ひ

の奥樣でも、額に角の生えるなるべし。其れも衣食事足る程は、妻の權利に積憤の捨て場所、人目忍んでの御愉快筋も隨分ありとは聞けど、此れは況して舅姑小姑に氣兼ね氣苦勞する甲斐なき嫁の身、力と頼む良人獨りに斯う仕向けられては、實際足まつたものでは無からうと思ふ。もう／＼辛抱も我慢もなりませぬ、何うでも離縁をさして下さいと、時々實家へは泣いて行かれる相で、其の都度何うしたもんだらうと相談にも預るけれど、縁あつたればこそ夫婦にもなつて、飽いて飽かれた仲ならば格別、一旦の腹立より餘り輕早な眞似はおさせ申されず、外ながら密つと旦那樣に當つて見れば、

◎妻は貞淑

ですと何の氣もなし。姑樣に向へば、三千世界彼樣優しい嫁はありません、もし貴女、娘なんかは、眞實血を分けた肉身の姉の樣に着懷しがつて居りますよと、此れでは却々離婚の理由立たず、內氣な樣でも女子氣の口惜しさには、去るの退くのと大それた勿體の無い事も、不圖した氣紛れには仰つしやつても見れど、弱き女の心の痛み、此れで悉皆失れると云ふにも非ず、什麼せ離婚れてからが朝夕の思ひ出辛し。寧つそ其の御苦勞が御痛はしくてなりませぬと云つては見たが、兎角兒供の無い中に等と、何うにも附會く一と理屈に何處も同じ親御は甘さ。御本人よりお實家方の御決心が頑固いんで、終々離婚と云ふ事になつて仕舞つた。

もと／＼合せ物なんだもの、其の合せ物が離れたとて別段不思議も無い事だけれど、寂しいながら色白のきりつとした面形良人が妻がで彼れほど私共を恐縮させて居らした御夫婦仲の、何うして一年とも經つか經たぬ中に、離縁をせねばならぬ程其れ程冷くなりなされたものか、一體彼樣、

◎いゝ旦那樣

をお嫌ひ遊ばした理由はと奧樣に聞けば、嫌ふのなんて、ホヽヽ、私に甚麽張りや意地があつて足まるもん

ですかと、幽に笑んで、何事も深うは仰つしやらず。

だつて貴女、お姑さんや御兄弟衆が餘りお立派なんで其ら御覧遊ばせ、貴女が第一お思ひ遣りが無さ過ぎたんですよと、此度は母なる女に喰つて掛かれば何もね然うばかりは云へまいだらうではありませんか、

什麽にも娘がやり切れ無いつて申すんですものと。



情無い事を仰つしやつたものだ。

嘗て私が人に聞いた事がある。何でも矢つ張り夫婦仲の餘り目出度からぬ處から、細君堪まらず緣家を飛び出したんだ相だ。すると其の姑さんが直ぐに仲介者の處へ行つて來て、何のかんのと月日の經つ中には、寧そ後夫婦間の不愉快かつた事を失念れて仕舞つて、寧そ後で恨まれる者は私一人なんだから、什麼でも丸う納まる樣にお骨折りを願ひ度いと、心から涙を流して口說かれた相だ、當時苦勞性の姑さんも世の中にはあればあるものと、心窃に笑つても居たが、自分が現在此の言葉を聞くに及んで、ハヽア成程只今、とは斯うしたものかと、つく〴〵感心したので御座います。

無論惡い女では無い。人品なおつとりとした、女ながらも其れは惚れ〴〵する程好いたらしい方なんだが運ならば其れも是非なし、嘸姑さん方の事を恨んでも居らつしやるんであらう、而して序に、其麼處へお世話申した私の事も惡んで居らつしやるんだらうと、聊か癪に障りもして、月は花に宜し葉櫻に宜し、迚もの事に再婚の旦那が藥罐頭ならば、兎角文句が居らつしやるまいでせうよと、此れも仲人の一役に、餘計な事ながら笑つて上げた。

◎嫁樣氣質





生理衛生上より觀たる標準の娘

糸　左　近

▲娘とは何なものか

廣い意味から言へば、赤ン坊であらうと、お婆さんであらうとに論なく、夫を有たぬ中は、凡て娘であると、定めても差支は無からうけれど、余の今茲に言はうとする娘は、十五六歳から二十歳頃までの島田髷を指すのである、讀者は其の積りで御覽を乞ふ。

▲娘の身長と體重

十五六歳から二十歳頃までの令孃は何程の身長で、何程の體重が、眞の標準であらうか。これに就ては東西の學者が色々研究の上で、其の統計表を作つて居れど、西洋のは外國の事であるから、之を後廻しにし、直接に我が國のを調べて見ると、女の成長は大抵二十歳が止りで、多くは十五六歳までにズン／＼成長し、同年の男よりも大きくなる位だ。さはさりながら十五六歳からは成長しても甚だ僅で、其の間に男は長足の進歩を爲し、女は負けて了ふ。それは兎も有れ、其の成長したる娘の身長は、何程であるかといふに、平均四尺八寸五分餘で、體重は約十一貫四百目だ、之を歐米の婦人に比べると、身長は約五寸も低いし、體重は約四貫目も輕い、實に小さいもんだ、小さい者は何うしても弱いは自然の道理、實に殘念な事だ、丈が高くて重いばかりが能でも無いけれど、せめては身長を平均五尺に延し、體重を平均十三貫目に進めたい、これ身長と體重だけに於て、余が理想とする標準娘だ。斯う申すと如何にお前位が理想したとて、憚りながら人間様は飴細工する様な工合には參りませぬぞと、冷笑

せられるかも知れぬ、所が生理衞生の大道から論ずると、高い人を縮めることは徹頭徹尾出來ぬが、十五六歳から二十歳までの間ならば、丈も延し、體重も殖すことが有望であると言つてゐられる。なんと樂しい話では御座らぬか。然らば何うして延し、何うして殖すかと、直ちに斯う切り込んで來られるに違ひなからうけれど、其處は勿體を附ける譯では無いが、事の順序として殘らず余の理想標準を述べたる上に於て、詳しくその方法を申しませう。

▲娘の身體各部の釣合

我國の婦人は一般に頭（顔も含む）と胴とが比較的長く、腹が割合に大きく、胸廓が割合に小さく、骨盤が大に大きく、四肢は非常に短かい。故に坐つて居れば、西洋の婦人と左程の相違は無いが、立つて竝ばうものなら、恰然大人と子供だ、そして同伴に歩けば、チヨコ〳〵走りをして、西洋婦人の後を追かけねばならぬから、動悸が高ぶつて直に疲れて了ふ。これは一に下肢のコンパスが短いからである。鎖國攘夷の昔ならば、深窓の下に蹲つて居ても可かつたか知らねど、今の世では妙齡の女子とても、大に活動せねばならぬ秋であるから、頭や胴や骨盤に釣り合ふやう、今少し胸廓を大きくし、四肢をズツト長くしたい、さうすると尻の大きいことも目立たぬし、姿も立派に見えて、身體も健かになる、これ身體の釣合上に於ける、余が理想の娘である。そこで、この注文通り改革が出來るかといふに、出來ますとも〳〵。併し例に依て方法は後章に。

▲娘の顔

顏全體の恰好からいふと、日本婦人は西洋婦人より宜い、西洋婦人は一般に頭の幅が廣くて長さが短い、日本婦人はこの反對である。されば西洋婦人にお多福が多くて、日本婦人に瓜實顏が多い。瓜實顏の立派で、お多福の醜いことは申すまでも無からう。されど此にも一長一短あつて、お多福は醜い代りに愛らしい所がある。瓜實は立派な代りに凄い相が備はる。併しこれ

は後に述ぶる表情法に依て、凄味が消えて了ふ。お多福は何うも致し方が無い。故に顔の恰好に於ては改革する必要を認めぬ。次に顔の各部に就て言へば、

▲眼――は從來よりも今少し大きくもがなと思ふ外、左程の注文は無い。西洋婦人と日本婦人とを比較すれば、西洋婦人の眼は大きくて眼尻が下つてる的、日本婦人のは細くて眼尻が引釣つてる的である。引釣つた方が締りがあつて勢はあれど、又一方から言ふと、險相に見えて、圓滿なる美人で無い。



元來日本婦人の眼の小さく見ゆるは、細いからで、細いのは引釣つてるからである。そこで例に依て理想通りを言へば、引釣りを今少し下げて眼裂を眞直にして、パッチリ開け、黑白整然と、而も涼しくせねばならぬ。この方法も不可能の事では無い。後に言ふ。

▲鼻――は高くて鼻翼の餘り廣からず、而して鼻孔の大きい方が美人に見ゆるのみならず健康上にも宜い。低くて平たく、而も鼻孔の小さい所謂獅子鼻は醜くて呼吸苦しく、健康上にも害がある。醫學上の望診法に依ると、鼻孔の大小を見て健不健を察する。即ち鼻孔大なれば空氣を

大きく呼吸するから、心肺の二臟が強い、心肺の二臟が強ければ從つて身體各部も強くなる道理。然るに平たく壓へつけた樣な獅子鼻では、空氣の呼吸がし難く、勢ひ口を開いて呼吸せねばならぬ。話は少し岐路に入るけれど、元來鼻より空氣を呼吸すべきもので、口よりすべき約束のものではない。鼻の孔には毛が生えてゐて、空氣中の塵埃を濾し、且つ方向が迂餘曲折してゐるから空氣が温まつて行く、肺の爲には是非とも鼻呼吸で無くてはならぬのだ。そこで又話は元へ戻るが、我が國の婦人は何うも獅子鼻が多い、其處に行くと西洋婦人は立派だ。此の點に於ては遺憾ながら西洋婦人に及ばぬ。併し鼻は最も改造し易いから、大に低い人の意を強うするに足る。

▲口――は餘り大きからず、さりとてお雛樣の如く眞似事したやうな小さい口でも宜しくない。要は其の中を得て締りがあり、何となく愛くるしい口元が善い。日本の娘は否多くの娘の中には、陰では頤金の外れるやうな欠伸をしてゐながら、人前ばかりオホヽと嘴だけ尖らせて、故意に小さくする者もあれど、餘り賞めたことでも無い、換言すれば自然的に愛くるしい口元で無くてはならぬ。この自然的方法も後章に讓る。

▲齒――の綺麗な點に於ては、これも我が國の婦人は西洋婦人に殘念ながら數歩を讓らざるを得ぬ。即ち我が國の婦人は一般に齒並が惡くて根本が黑く、贅齒が多い。であるから娘時代に醜かつた人が、嫁入して鐵漿を附けたら、汚い齒の色が胡麻化され、爲に一割も二割も美人になつたのを余は屢々見た。されど齒を染めるといふことは衛生上惡いのみならず、不自然極まることで、之を玲瓏たる白齒に比ぶれば、實に醜い野蠻の風習である。されば齒を其の儘綺麗にする所の方法を講ぜねばならぬ。これも後章に。

右にて顏の事は略述べたに依つて序に表情につき余の注文を述べよう。

▲娘の表情

有體に諂らはず言ふと、我が國の娘達の顏は宜い表

情に富んで居らぬ。顔を赤くして羞かんでゐるか、さもなくばツン〳〵として、男には口を利きませぬぞッといふやうな表情の者が多い。抑々娘の時代は言ふまでもなく親がゝりで、氣苦勞は少なく、無邪氣で前途の樂みに充ち滿ちてるのであるから、何處となく活々として、而も温和で、幼い子供の馴れ易いといふ風が宜いのであるのみならず、鬼の如き男子も引きつけられるやうな表情が無くてはならぬ、今一層詳しく余の理想通りを言へば、朝まだきに開ける朝顔のなよ〳〵と優しく、それで一種の威厳があつて醉漢が『オイ姐さん』と、肩を叩かうと思つても不知手を引込ます的でなくてはならぬ。所で表情といふものは、心の作用が筋肉に及び、愉快に感ずれば、第一に環口筋（口の周圍に在る筋肉）を収縮させ、眼を少しく開くし、悲しいと思へば鼻翼は下り、鼻孔を半ば閉ぢ、皺眉筋（眉と眉との間に在る筋肉）を収縮させるし、腹が立てば大に眼を開き、大に皺眉筋を縮めるものなることは誰もよく知る所であらう、其の他口を軽く閉ぢ、眼を軽く覗つめる形をすれば滿足の表情、此の一層強きは自信の表情、尚一層緊張すれば高慢の表情、口を開き頬を下げ遠方を見るが如きは驚きの表情口を軽く閉ぢて、口角を下げ眼を覗詰める形をすれば、人を軽蔑してるのであるなど、一々數ふれば追が無い。何れ他日余は表情の話のみを一度揭げることを約つておく。

▲娘の聲

男程には無いけれど、女でも十五六歳になつて、月經が始めて來潮する頃から聲變りのするもので、聲變りしてから、子供の時よりも惡くなるのもあるし、益益善くなるのもある。乃で例に依り、余の理想標準を言へば、細くて高く而も耳立たず、濁らず邪走らず鼻に掛らず、恰も鈴を轉がすやうな美しい聲を出して欲しい、琴に合せて「春すぎていまぞはじめの夏衣、かろきたもとが浦風に」と歌ふ聲聞きては、通る人も覺えず立留り「噫美しいお孃樣であらうなア」と思はせる聲を出して下さい。聲は先天的とはいひながら又そ

の方法に依て、美しくならぬとも限られぬ。所でその方法は矢張後廻し。

▲娘の皮膚と髪

男でもさうだが、女殊に妙齢の婦人は、皮膚の色の艶々として滑らかに、恰かも羽二重の地に觸るやうなのが余の標準理想である。斯う申すと、諸姉は直に「白くなくてはならぬ」の一語を附け加へられるかも知らねど、我が國の人種は西洋人種とは異り、元來が黄色いのであるから、餘り白いと自ら蒼みを帶び、虚弱の質を呈はし、活々としたる風采を缺き、二十世紀の男子の眼から見ると、却つて醜い、寧ろ淺黒の方が健康相に見えて立派な位である。次に、

髪——は諸姉の望みと同じく、濃くて、黑くて、艶があつて、長くて、硬からず、軟か過ぎず、房々と漆の溢れる樣なのが我が國の婦人に於ける生理上の標準である。所で男は二十歲頃から女は十五六歲頃より皮膚及び毛髮の色に一大變動を來す時であるから、其の時を利用し、大に生理衛生を實行して、その標準に進まねばならぬ。

▲娘の内臓

内臓は眼に觸れぬ所であるから、彼此申した所で了り難いでせうが、一般に我が國の婦人は心臓肺臓が小さくて、胃腸や肝臓などは其の割合に大きい。胃腸や肝臓などの大きいのは甚だ結構なれど、心肺の小さいのは矢張虚弱なるを免れぬ、出來得るだけ之を改造する工夫を研究せねばならぬ。

▲娘の月經

我が國の如き温帶地方に在つては、約十五歲にして始めて月花を開き、それより約四週間目每に規則正しく來潮し、四五日間續いて其の間に約百五十瓦位の量であつて欲しい。然るに我が國の妙齡婦人は、百人集まれば九十人までも此の標準に遵ひ、或はその量少なく、或は來潮期が齟齬し、或は過多に有つて、何う

もトン〳〵拍子に行かぬ。それが爲に頬ばかり赤くなつてる人も有れば、蒼白い顏して活々せぬのもある。此等は皆月經に關する衛生上の知識に乏しいからだ。後章にその衛生法を說く。

▲娘の食物

何うも我が國の娘達は肉食を好まぬ、大根人參乃至は菜蕗の樣な野菜物を主に嗜がつて、而して三度の食事は如何にも少量で、それで三度以外には間食をしたがる。或人の話に、五人の男學生を寄宿させておいたれば、一日の飯の量は二升乃至二升五合を要し、それで肉食の料理を交へぬと直に御馳走が無いとの不平が出たれど、其の揚句に五人の女學生ばかりを置いたれば、飯の量は一升五合位に減り、牛肉の二度も續くと、斯樣な濃厚い物は時偶にして、もつと淡泊とした物にして下さいと注文が出る。然らば其樣に少い食量かといふと、イヤハヤ意地汚いもので餅菓子、お薯は何時も机の抽出に絕ゆること無く、加之にお鮨蕎麥乃至は汁粉も却々召し上るやうだと素破拔いてゐた。それ以來余は熟々探偵して見たれば、啻にお孃さん逹ばかりでなく、奧樣方に至るまで矢張此の風習がある。それは胃嚢に何時も休憩を與へることなくて、取つた食物は消化が惡く、身肉にならぬ。されば三度の食事をウント食べて、而も魚鳥獸の肉を今少し多く交せ、間食を斷物にして頂きたい、斯う申すと或は言はれん、三度の食事をもッと食べようとしても食べられぬし、肉食を多く交へると酸い噯噦が出るを如何せん、又間食をせぬと腹が減るのみならず氣淋しくて堪らぬと、併し或方法を以てすれば、この習慣を破ることは朝飯前の仕事です。これも後に述べる。

▲娘の言語

十七八歲の娘達が四五人集つて話するのを障子の孔から覗きながら聽いてると實に妙だ。甲が何事か言ひ出すと、乙も丙も丁も戊も皆同じ事を同時に語り出して、その早いことゝ言つたら實に雀の囀るが如く、而

て揃ひも揃つて顔を振つてゐる。而して一調子で抑揚も少なければ、感動も與へぬ。何せ斯うであるかと考へて見るに我が國の娘達は物事を熟考するの念に乏しく、其の上性急で他人の言ひ終るのが待遠しいから、已むを得ず途中より切つて出る、切られる者は切られまいと尚々早める。それゆゑ喋々喃々遂に雀の囀りとなるのだ。そこで例に依り余の理想通りを申すと、言語はしとやかで、落着いてゐて、速からず遅からず、明瞭で、抑揚があつて、優しく美しく、他人に感動を與へ、得も言へぬ奥床しい趣が有つて欲しい。退いて考ふるに、言語の下手なのは、啻に娘達ばかりでなく、我が國一般の老若男女比々皆然りだ。余も亦諸姉と共に大に研究したいものである。

▲娘の知力

古今東西を問はず、婦人は一般に知力が早熟で、十五六歳の頃は男子は子供的なれども、女子は既に老成的の趣がある。されどその割合にその知力は進まないで、或種類の物に共通なる性質を括り合せる力に乏しく、從つて想像力も判斷力も推理力も年を經るに從ひ男に負けて了ふ。換言すれば物事を綜合するにも、分解するにも、否定するにも、是認するにも、早合點が多くて熟慮が少ない、故にその思考は明晰を缺き、不完全で、疎漏で、論理上に合はぬことが往々ある。

故に國語や外國語を覺えたり、詩歌や短篇小説を作ることなどは、敢て男に負けぬけれど、理化學や數學などの論理に渉る學問は男子に及ばぬこと甚だ遠い。殊に我が國現今の娘達は古めかしい思想の月雪花を歌うたり、悲哀と戀の文學のみを學問の目的として、大切なる科學の研究に重きを置かぬ傾がある。慨かはしいことだ。故に射利をこれ唯一の目的とせる女の雜誌の多くは、茲に附け込んで、科學的の興味を皷吹すること甚だ少く、唯題目ばかりを奇抜にして女の好奇心を摘發するけれど、讀んで見ると正味は無い。例へば、「如何にして下婢を使ふかと」いふ題であるから、如何なる名法であるかと讀めば「主婦なる者は威厳を備



（美術的營業品目錄は郵劵四錢御送附あらば直に贈呈す）

（わの一）

巖谷小波君著

宮川春汀君
岡野榮君 畫



改訂 袖珍 日本昔噺

袖珍總クロース函入美本●正價八拾錢
紙數四五〇頁挿畫卅四頁▲郵税八錢

日本昔噺の初めて世に出でしは、遠く十有五年の昔にあり、之を今日お伽文學の隆盛時代より見る時は、當年編者の苦心の如き、亦一場の昔噺の觀あり、然るに幸にも滿天下の兒童家庭は、爭つて本書を歡迎せられしに依り、爾來版を重ぬる幾十、原型磨滅して殆ど重版の策なく、爲に讀者の厚顧に背くこと多大なりしが、今回世界お伽噺の完成を機として、編者は更に之が改訂を企て、繁を省き要を加へ、假名遣を改め、且つ携帶の便を主とし、袖珍の美本となし面目一新し、再び讀者に見ゆる事とはなせり、されば學校、家庭の當事者は常に之を座邊に備ふべく、殊に散歩旅行の際にも之を携帶し、機に臨み變に應じて、兒童品性に陶冶美心の涵養上得る所決して尠少ならざるべし、眞個日本家庭の良友、父兄教師の珍寶たり。

發兌元 東京本町 博文館

▲青年諸君へ此の雜誌を推薦す▼

日本唯一青年雜誌

ハガキ文學

▲ハガキ文學は青年の友なり故に生氣躍動し趣味津津青年文藝界に於ける寵兒なり

▲ハガキ文學は毎號大家の作と新進氣鋭の文士の寄稿誌上に溢る故に百花爛漫として常に芳しき香あり

●第五卷第六號六月一日發行●毎月一回一日發行

●定價一冊金十錢送料一錢○七冊前金送料共金七十五錢○郵劵代用は必ず一割増のこと

●毎號懸賞募集 ○短篇小説○普通文○ハガキ文○新體詩○和歌○俳句○新川柳○新俗謠○諸國珍話奇談○如是錄○文藝家近況○漫畫○スケッチ○繪葉書圖案○應募規定は本誌の卷尾に詳なり何人の投稿も大歡迎す

發行所 東京小石川久堅町 日本葉書會 振替口座二八三八番

▲賣捌全國各書林▼

二大お伽叢書發行

巖谷小波君著 世界お伽文庫

（毎編有名畫伯挿畫）

毎月一回發行菊判頗美本紙數百餘頁
挿畫木版二十個入正價一册金拾參錢郵稅貳錢

第一編 **大勇士** 滿谷國四郎君畫

第二編 **魔法鶴** 梶田半古君畫

既成發行

今は昔、アジャトルコの都に、一人の王すみたり、或日旅商人來り訪ひしかば、數々の品物など買とらせてけり、やがて王は商人の魔藥にあたりて、空とぶ鳥に變化しけるが、あはれ此商人こそは、さる山の奥にすめりける魔王のまわしものなりと、後にて思ひ合されしはうたてき、さても王は國々をとび廻つて、囹圄の中に苦しめる木兎のなさけある智惠に、ふたゝび元の身となりける、王は美しき妃の宮を得てけり、國民わ君萬歳とこそほぎしとなん。

續刊目次

第三編 半分物語（五月發行）

第四編 善玉惡玉（六月發行）

第五編 玉取王子（七月發行）

巖谷小波君著 お伽畫帖

毎月二回發行
四六判頗美本
極彩色石版十六頁

正價一册金六錢 郵稅貳錢

第一編 **桃太郎** 春汀君畫

第二編 **牛若丸** 秋香君畫

第三編 **イソップ話** 三郎君畫

既刊

第四編 **猿蟹合戰** 春帆君畫

續刊

第五編 かちゝ山 古峰君畫

第六編 花咲爺 月莊君畫

（わの三）

發兌元 東京日本橋本町三丁目 振替貯金口座第二百四十番 博文館

家庭書庫の珍藏

巖谷小波君著

合本

世界お伽噺

全部拾卷

菊判總布函入美本
一册正價金壹圓
全部金拾圓
小包料各拾貳錢宛

◎七月三十一日迄＝特價壹册金八拾錢　全部拾册金七圓五十錢 送料外要◎

本邦お伽界空前の大作として、夙に中外の認めて以て文學上及教育上の偉業とせし世界お伽噺は編者無限の精力と、幾多少年の贊助とに依り、今春無事豫定の百卷を完成するに至れり、然るに多年愛讀の少年、家庭及び教育當事者よりは、之を合本として永久に珍藏したき旨續々編者の机上に來る、蓋し片々たる小册子は、之れ少年の讀誦には適すべきも、汚斑破損の速かなるが爲に、家庭の保存用に適せず、本館亦疾に憂ふ所とす、即ち此期を利用して書伯和田英作君の意匠を煩し、金模樣燦爛たる函入美本として同好の諸子に頒つべき運となれり、日本幾萬の學校、家庭は正に此美本を得て、獨り室内の裝飾たるに止まらず、兒童教養上無前の效果あるべしと信ず、切に愛讀を祈る

●世界の始 ●五色の石 ●珊瑚島 ●魔法博士 ●無人島大王 ●鬼婆と少女 ●法螺先生 ●一人王子 ●小人島 ●孫悟空 ●驢馬姫 ●大人國 ●豫言者 ●王城乘取 ●續法螺先生

●猿智惠小僧 ●酋長征伐 ●夢の三郎 ●鶯の踊 ●光明姫 ●鶏の使 ●火の車 ●三人片輪 ●白鳥 ●消炭太郎 ●十二王妃 ●狐の裁判(上下) ●奇體の洋燈 ●獵師大臣 ●九重塔 ●虹の橋 ●魔法の卵

●岩の船 ●鐵の王子 ●鐵の猿 ●浮かれ胡弓 ●豆の王 ●三つの難題 ●德利長者 ●梨の殿樣 ●黑足小僧 ●黃金の船 ●幸福の花 ●大洪水 ●刀三本 ●石の行方 ●手無し姫 ●啞の女王 ●骸骨島

●三筋の金髮 ●鬼大名 ●魔法學校 ●鶯王子 ●朝星夕星 ●法螺くらべ ●指輪の魔力 ●双子草紙 ●鬼だまし ●二人半助 ●病魔降伏 ●金馬將軍 ●熊娘 ●龍宮の使者 ●森の乙女 ●日の爵 ●うかれ笛

●活水死水 ●光の劍 ●木兎太郎 ●少年國 ●少人鼻助 ●龜の智惠 ●世は情 ●變身術 ●豆の手蔓 ●薔薇姫 ●地獄廻り ●九番人形 ●金髪王女 ●新塞翁 ●木馬物語 ●馬の首 ●三ツの王冠

●馬の尾裁判 ●甲良武者 ●樽の七郎 ●極樂草 ●犬の王子 ●馬鹿利口 ●人魚の約束 ●乞食の豫言 ●運探し ●奇牛の角 ●九羽鳥 ●三度の願 ●魔法ア、 ●鬼妻 ●正直正吉 ●南犬北犬

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　振替貯金口座二百四十番　博文館

(わの四)

好評・再版・好評

世界お伽噺完成＝紀念出版

お伽花籠

全一冊

文學博士 上田萬年先生序
文學博士 芳賀矢一先生序

（（内容））

●犬の名前 西村渚山作 橋本邦助畫 ●靈の水 沼田笠峰作 鏑木清方畫 ●蝦夷の鍛工 吉岡向陽作 山中古洞畫 ●琴の由來 高野斑山作 田代古崖畫 ●爪助物語 竹貫佳水作 木村光太郎畫 ●錦太郎 武田櫻桃作 宮川春汀畫 ●金馬銀馬 黑田湖山作 岡野榮畫 ●魔法の森 窪田空々作、杉浦非水畫 ●お伽國大王 福田琴月作 桐谷洗鱗畫 ●赤天王 木村小舟作 名和永年畫 ……

洋装四六判總クロース
極彩色模樣頗る美本
紙數三百頁
極彩色美麗畫十頁挿入
正價金七十錢
郵稅八錢

賴襄子成著 久保天隨君訂

重訂日本外史

全一冊

再版出來

四六判總クロース上製
紙數八百餘頁
定價金七十五錢
郵稅八錢

賴氏の外史、一たび世に出づるや、幾んど家ごとに一篇を藏し、刊本亦た數種の多きを算す。然れども、迭に多少の得失あり、終に完本と爲すべきものを見ず、本書は、あらゆる異本を蒐集して、この長處を合せ字體の詭異卑俗に渉るものは盡く其正に從ひ字句の異同は皆之を註し。なほ篇中人物の官位通稱小字を欄外に載せ、校訂嚴密、一字の誤訛なきを期す、庶幾はくは以て外史の定本たるを得む。加ふるに携帶の便又他書の比に非ず。

東京 博文館 本町

（わ、五）

近刊

日本外史字解

全一冊

洋裝四六判
紙數約百八十頁

文學士 久保天隨君解

本書は、外史中より、難字奇句を抽出し、精細なる解釋を著けたるものにして、その用意の周密なる、從來世に出でしものゝ比に非ず。初學者これを津梁とすれば、勞少くして功多く、まことに、机上の良師友たるべし。

東京本町 博文館 發行

香國 土居通豫君編述

作文活法

全一冊

菊半截判洋布特製約六百卅頁
正價 金六拾錢 郵稅 金六錢

古來我國文に於ける諸體の作法を示したる書は、極めて稀なり、本書は、君が時勢に感ずる所あり、獨特の技倆を揮ひ、和漢洋の文法を斟酌湊合し、一斷案を下して、我國の現時に最も適應する所の國文の作法を一定せり、卷中章を分つこと十六、中に就て、篇法、章法、句法、修辭法、の如きは一々古人の文を引き或は圖を揭げて、詳密に其作法を示し、詞法に於ては、國語組織の根元を明にし、而して各體の作例は極て豐富なり、其他國文の作法は網羅して一も漏す所なし、之を一種の文典と稱するも實に誣ひざるなり、地方師に乏しき人は素より中學生諸君及、それ以上の學生諸君に於ても、坐右片時も離すべからざる近世稀有の必用書なり、

東京 本町 博文館

女(わの七)

へてゐて、それでよく慣れんで遣らねばならぬ」といふやうな常識の有る者は誰にでも分る倫理上の事柄を敷衍して述べてるに過ぎぬ。斯くの如く倫理的の事柄は誠に結構ではあれど、如何に遊惰放佚の者も勤勉節儉の美德なること位は知つてゐますからねー。其の次を讀めば戀と悲哀の小說其の次は讀者の月雪花、實用的の科學思想は如何にも皷吹して無い、其處へ行くと、我が「女學世界」は題目は眞面目なれど、多方面に涉つて正味があることを樂屋から賞めておく。偖うつかりと筆は雜誌論に及んだが、兎に角花の蕾の娘達は、今が大切なる時であるから、絕對的に小說や月雪花を



と總括して述べることにする。

お止しなさいとは言はぬが、今少し心を知力の附く科學の方面へ向けて頂きたいものである。

▲娘の感情

唯單に感情といつても、その中には美的感情道德的感情知的感情などゝ分れ、分れた名目の中にも喜怒哀樂の情、滑稽の情、或は同情などゝ細別せねばならぬけれど、斯る事を一々論じてゐては際限が無いから、之を雜總括して述べると我が

國の妙齢婦人は一般に感情が鋭敏過ぎるは蔽ふべからざる事實だ。尤も今日は外國の文明が日々に輸入され、從つて女の仕事も日々に殖え、人の神經を刺戟し、殊に都會の婦人は神經過敏になり易い。これ現今の如き過渡時代には免るべからざる事ではあるが、それが爲に僅な刺戟に感動し、イヤ善事に感動すれば宜いけれど、人世は得意なる事少ないものであるから、從つて厭世悲哀の感情に支配され易く、僅に失意な事があると、直に川や瀧へドブンを極め込むやうになる。斯の如く鋭敏過る感情は縱ひ善事——例へば他人の苦痛に同情を表するにしても徒に金錢器物を與へるやうな小さい世話では左程の價値が無い、もッと氣高い同情を起さねばならぬ。重言すれば俄かに笑はず、俄かに泣かず、俄かに喜ばず、俄に怒らず即ち今少し感情を冷靜にして貰ひたい。これ余が現今の娘方に向つて望む標準理想である。斯うなる方法も身體の衞生法に依て養成出來るものであるから、後章に詳しく申さう。

▲娘の意志

單刀直入的に言へば、予は我が國現今の娘達に向つて大に意志の訓練を要求する。意志の訓練とは如何、平たく言へば實行力を強くすることである。實行力の強い者は忍耐勤勉節儉などの美德を備へ、苦痛と鬪ふの勇氣がある。「なんのその岩をも通す桑の弓」で故鄉を出た蝦茶姬が角帽の後を追うて遂に墮落するが如きは言ふまでもなく意志が薄弱なるからである。意志が薄弱であると、志望を遂げられぬばかりでなく、大切なる女の貞操を破るやうになるのだ。女子は男子よりも意志力が弱いとはいふものゝ、善い感情を利用して之を訓練すると、男子よりも一層強くなつて、如何なる困苦とでも鬪ふの勇氣を出すものである、許嫁したるばかりの良人が討死したる後に、如何なる才子美男を勸めても、斷然再婚を拒絕し、孤燈を守つて一生を過す如きは、外國に比なき事柄である。何者が何と論じても斯の如き操は美德であつて、忠孝と共に千代に八

千代に保存せねばならぬ。けれども、不善なる事に念慮の強きを意志の強いのだと思うてはならぬ。例へば「あの畜生めッこの世で致し方無ければ幽靈になつても祟つて遣らう」と言ふが如きは實に劣等なる心情で却て意志の弱い女に在るのだ。恩を忘れざるは美德なれど、恨を忘るゝは品性を一歩進むるのである。返す返すも間違うてはならぬ。然らば如何にして善き意志を訓練するか、請ふ此も後章に待て。

▲娘の品性



品性とは如何、之を六かしく言へば、色々の議論も有れど、我流に解釋すると斯うだ、品性とは道德を如何樣に實行すれば宜いかを我が心に一定し、我は何時も之に支配せらるるをいふのである繰返せば道德上の憲法を我が心で定め、事々物々これに當箝めて事を爲すのである。然るにその憲法が朦朧してると、事を爲すに當つて判斷選擇を誤つたり依賴心を起したりする。依賴心は品性の劣等なる女に多く、これが爲に「浮草や昨日は東今日は西」といふ工合に墮落するのだ。今其の實例を一つ擧げて話さう。

容貌人に勝れて美しい或る妙齢の婦人が、親から一錢の學資金も貰はずに、艱難辛苦と鬪ふこと六年、遂に醫師の免狀を得たる人を新聞記者が訪問して、その來歷を尋ねたれば、彼の女は大に謙遜したる後、徐に語つて曰く「私が故國を出る際に、天を仰いで三個條の道德憲法を、我が心に定めました。其一は夫に關する觀念は卒業するまで必ず起しませぬ。其二は事々物物良心に鑑みて爲し、良心の許さぬ事はそれが爲に餓死しても鬪ひませぬ。其三に熟く寢て善く動き善く勉めます。この三ヶ條でありましたが、世の中は五月蠅いもので、深切を以て我を陷れんとする靑年も有れば、樸訥勤勉を粧ふて有爲の人物たるを示す上手の惡魔も有る。其の他保證人や親戚の結婚媒妁、甚だしきは先生からの艶文。それで此等を拒めば危害來り拒まねば利益の伴ふが如くなれど、私は我が憲法に從つて處置し、今日まで一點疚しい行を致しませんでした。これが今日小さいながらも成業した所以で御座いませう云々」新聞記者は聽き終つて、自ら襟を正うしたといふことである。何うか年若きお孃樣方は斯樣に品性を高められたいものだ。

▲以上の結論

娘たる者は十五六歲から二十歲までに身長を五尺體重を十三貫目になし、頭胸廓及び胴から四肢に至るまで、釣合善く發達させ、眼をパッチリ涼しくし、鼻を高く恰好宜くし、口元を愛らしく、齒を綺麗に白くし、善い表情法を學び、皮膚の色を美しくし、髮は濃くて黑く、內臟を申分なく發達させ、聲は鈴を轉がすが如く、月經は正しく來潮し、食物は動物性と植物性とを適度に調和して用ひ、間食せずに三度の食事を旨く舌鼓鳴らし、實用科學的の知識を養ひ感情を冷靜にして意志强く、而て品性が高尙で言語擧動が優美であるといふ標準理想である。豈と斯う爲たくはありませぬか。所で其の標準に到達する方法から、妻の卷、姑の卷は如何に長くなつても來月の誌上に完結させます。樂しんでお待ち下さい。



上流家庭の不注意

中村鈴子

私共は新聞紙の記事を悉皆信用する次第ではありませんが、上流の家庭から不良少年の出たやうな記事を見る毎に、其事實が新聞記事の半分でも四分の一でも實に大變な事だと驚かぬ譯に參りません。其上流の家庭が舊華族ならば、數百年來の腐敗が基因だと思ひますから、深く怪みも致しませんが、二三十年以來時めき初めたる新興の名門に不良少年の出る例が幾つもあるのを見ましては、萬事に拔目なき主人主婦も、兒子の敎育に不注意な點があるのかと深く〳〵怪む次第で御座います。

▲名門子弟の墮落

は幾分か先天的のもありませうが、十中の八九は後天的原因と見ねばなりません、兒子を成るべく鷹揚に育てやうとして、小言など云はず、兒子の要求を大抵容れるのも一因でせう。長男は身體の發育が不充分だとか、次男は病身だとか言ひて劬はり過ぎるのも一因でせう。けれども重なる原因は、

▲小遣錢の多いのが大毒

のと其費途の不明瞭なるに在ると存じます。左なきだに少年はハイカラ式な物を買ひたがるに、小學卒業したばかりの頃、毎月三圓五圓の小遣錢を貰へば、鉛筆でもペンでも手帳でも上等の物ばかり買ひ、朋友と會食したり、寄席へ入つたり、遂に母御は『息子も是迄彼家此家から招かれて居ますから、當方でも其返しを致さなくちやなりませぬが、當家の體面を落さぬやうに致すには如何しても四五十圓は掛りませう、平民

の家なら子供上りの學生の八人や十人ぐらゐは二圓か三圓で濟ませる處ですか、當方では其樣參りませんから困ります」と主人に向つて喞たれるやうになるので御座います。可愛い御子さんの爲めに金を使はるゝは惡い事ではありませんが、招待されたり寄席を案内されたりした御禮は三圓五圓の小費錢に十倍するやうになるから驚かざるを得ません。

▲惡友が澤山出來る

小費錢の多いのが第一の毒ならば、朋友の惡いのが第二の毒であります。而して此第一の毒と第二の毒とは必ず聯絡して居ります。小費錢が多いから惡友が出來るので、惡友があるから小費錢が益々多く入用となつて來るので御座います、十五歲の時に三圓の小費錢で足りたものが、十八歲となれば十圓の小費錢で不足を告げると云ふは、漸々惡友に交るからで、惡友さへなけりや、下宿料と同額の小費錢が要る譯は無いと存じます。墮落せる名門子弟の懺悔中に『向ふから一少年が泣面して來るので、善く見ると小學校時代の友達で、二年前から日影町の古着屋の小僧になつて居る者だ、僕がオイ如何したんだと尋ねると、主人の金を五圓持つて使に行く途中で落したのか掏られたのか、先方へ行つて懷中を探ると見えないから家へ歸つて親爺に相談しやうと思つたが、叱られるのが怖くて耐らない、此處で貴君に御目に懸つたのは天の助けです、何卒助けて下さい、と泣き付かれて、自分は懷中に親の金を持つて居たから五圓與へた、其後御禮心だとて牛屋へ連れ込まれ、楊弓店へ案内されたのが、自分の墮落した端緒だ』とあります。自分の金でも親の金でも懷中に持つて居れば、必ず惡友を吸い付けること、金屬が電氣を引くのと同じなので、若い者に金錢を多く持たせるのは毒殺するやうなもので御座います。金錢と惡友とはこれほど密接な關係があつて恐しいものでありますが、

▲惡友よりも恐しき者

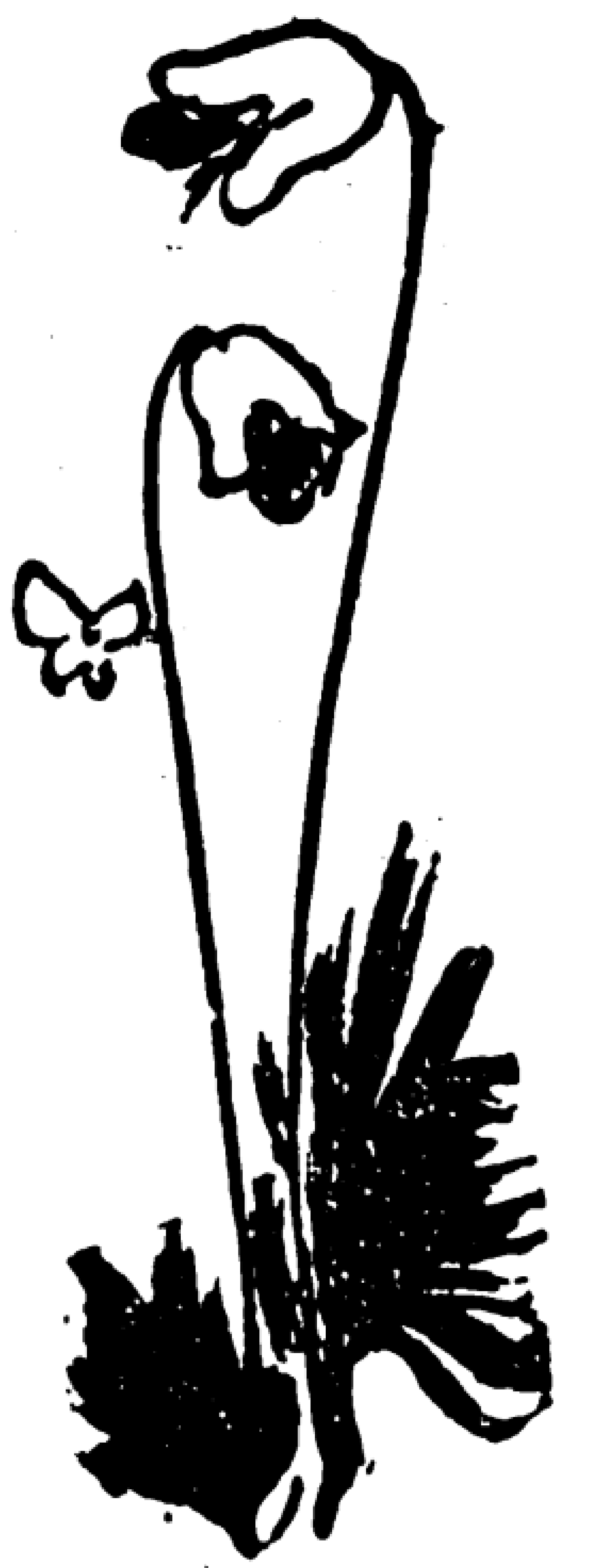
があるのです。それは遠方に居る者でなく、上流家庭の内に住んで居ります。それは雇人とか玄關番とか云ふやうなもので、何れも忠實らしく見えて居りますけれども。他人の子が善くならうが、惡くならうが構はないと云ふ了簡の者が隨分多いので、種々の不謹愼な談話を致したり、不謹愼な擧動を致したり、惡自然主義を上流の家庭内に擴張して、上流家庭を腐敗せしめ滅亡せしむるものは、彼等不良の雇人と玄關番であります。

▲雜駁なる來客

も亦雇人玄關番と同じく、或はより以上に上流家庭にバチルスを蒔き散らすもので、惡友——雇人——來客は、人の家庭を擾亂する三角同盟を作つて居ると申しても宜しいのです。斯く申せばとて、朋友もなく雇人玄關番もなく來客もなく小費錢もない少年が善くなると申すので無く、孤獨寂寥も亦隨分好性情を傷害するものでありますから、聰明なる注意を拂ふて、子弟の朋友を撰び、雇人玄關番を撰び、來客を撰び、小費錢の費途を善く調査する事は、親たる者の第一の責務としてせねばならぬ所で御座います。それを勵行しましたならば、上流家庭の少年が墮落するやうな心配は微塵も無いので御座います。

子供を育てるに就て

子供を育てるに就て　妾は百姓の子供が一番理想的に育てられて居ると考へて居ります。固より滋養に富む食物を食して居る譯ではありませぬけれど、幼い時から親は子供を家に殘して早朝野に出かけ、晌午になつて歸へり又午後も日の暮れるまで野に居るが爲めに自ら授乳も規則正しく行つて居ります、隨つて子供の教育も非常に宜しく都會の子供のやうに病的に精神を過敏になるやうな事はありませぬ、ですから百姓の子供を引き取つて思ふ樣に教育を施こしたならば、必らず立派な人間が出來るであらうと常に考へて居るのであります、昔から片田舍の百姓の中から大人物が出た例が少くないのも之れが爲めで有りますまいか、都會の子供は幼い時には非常に利巧でありますが之れは幼少い時から「叔父さんにお挨拶をなさい」なんかと色んな事を教へ込むからでありますけれども、充分の運動が無い爲めに成年に達してから進歩が止つて了ふやうの事が多いかと思はれます。(某夫人談片)



夏季の小兒病

醫學博士　瀨川昌耆

△消化器病

小兒病と一口に云つても數多くありますが、先づ一年の中で小兒が最も犯され易い病氣は何かといふと、冬なら呼吸器病、夏なら消化器病、即ち胃腸の病と定つてゐるやうなものです。今年などは極めて氣候不順で、櫻の咲き出す時分に大雪が降るといふ狂つた時候であつたから、寒さが例年よりも一層烈しかつたのです。その上四月末から五月の初めにかけても相應に寒かつたものですから、その當時は一般の小兒が多少なり此の呼吸器病に惱まされて居ましたが、併しもうこれからは日一日と陽氣が暑くなつてゆく許りで、季節が梅雨に入りますから、獨り小兒に限らず、多くの人は大抵幾分かは消化器――即ち胃腸を害してゐるのであります。胃腸加答兒と云ひ、疫痢と云ひ、その結果に依つて病名はいろ〳〵にもなりませうが、要するにそれらは皆消化器より起る病なのです。

そこで、その病は重に何が原因になつて起るかといへば、いふまでもなく口から入る飲食物であるから、この飲食物に就ては最も注意しなければなりません。

△食物は撰ぶ必要なし

然れば、夏季に於て小兒の食物には如何なるものを與へたらよいかと、これは一般婦人方の問はるゝ所でせうが、それは何も夏季だからといつて特別に撰ぶ必要はありません。矢張り平生から食べ馴れた處の物、米飯なり、麵なり、牛乳なりを最も吟味して、硬いものとか、固いものとか、或は餘り時間を經ち過ぎたものとかを與へぬやうにすると共に、決してその分量

を過さぬやうに注意することが何より肝腎であります。

小兒の身體は申すまでもなくまだ十分に發達し切らず、内部の機關——胃や腸のやうなものにしても、大人に比べると極く〳〵微弱な不完全なもので、それに夏は胃腸のみならず、身體の機關が總て薄弱になつてゐる。活動がゆるんでゐるところへ今いふ通り一寸でも分量を過して與へたものなら、忽ち食べたものは不消化となり、機關を損ふて、腸加答兒なり胃加答兒なりを惹き起して下痢を催すやうになるのであります。

△果物の注意

又、夏になるといろ〳〵の果物が澤山に出る。それを子供は考へがないから、甘味しいにまかせて一度に多く食べ過す。之が何よりも危險なのであります。夏は冬よりも消化の機關がよわくなつてゐるところへ、一體果物は大人でさへ少し食べ過すと内部に變調を來すのに、小兒の發育し切らぬ身體へ譯もなくつめ込んでは堪つたものではない。必ず胃腸を犯されずにはゐませぬから、食物の良い惡いや滋養の多い少いなどいふ點よりも、先づ第一に分量に注意して適度に與へるやうにしなければならぬ。中にも果物は、いかに子供が好くからと云つても、決して多く與へてはならぬのであります。

併し、中には又餘り注意し過ぎて、果物は子供に害があるからと云つて、絶對に食べさせまいとする親もあるが、之は又よくないことです。元來果物には酸液が多くあつて、適宜に食すれば大いに消化を助けることにもなり、又絶對に排斥すれば子供は却つて親の眼をぬすんでも食べるなぞいふやうな惡い癖にならぬとも限りませんから、こんな事は私が申すまでもなくお心得の事とは思ひますが、なほ充分注意して頂き度い。

△嘔吐、下痢の場合

で、小兒が食ひ過しの爲めに消化器を損じ、それから起る病症は何であるかといふに、それは重に嘔吐及び下痢の二つであります、どちらも輕症でさへあれば

醫師の藥のヿと大騷ぎをしなくても、二三日經過すれば大抵はひとりでに快癒るものですが、中には食べた物の中に含んでゐる或る毒の作用を受けて烈しい苦悶を起したり、又時によるとその毒から腦を刺戟して、隨分烈しい痙攣を起すやうな場合もある。

それよりもなほ一層進んだ劇烈な病症になると、手足が麻痺れて、終ひには心臟の破裂を來して如何しやうにも治療の方法がなくなつてしまふヿがあります。これはつまり大人で云ふと彼の恐るべき虎烈刺病の一種であつて、一般には疫痢と云つてゐますが、危險は無論のヿ、他に傳播する憂ひもありますし、又治療をしても六ヶ敷なるわけですから、少しでも小兒が嘔吐又は下痢など起した場合には、手早く醫師の診察を受けなければならぬ。よく地方の方や、年取つた人などは、なあにこれしきの事をと云つて、賣藥か何かの素人治療で間に合せやうとする者もあるやうですが、これは最も危險な事で、運よく全快すれば可いやうなものゝ、若しも之が爲め治療の手遲れとなつて、幾日經つても快方の見込みがないのに驚いて醫師の處へ驅けつけたところが、其の時はもう遲し。如何とも詮術なく折角可愛い兒を見す〳〵殺して了はねばならぬ場合に立到るのであります。

△乳は飲過ごすな

以上述べた處は、主に三四歲の小兒に就てのことで、夏季は最も此の年頃の小兒が消化器病に犯され易い、世間の御婦人方が憂ふる乳吞兒などは比較的少いやうですが、若しあるとしたなら、其の原因はいふまでもなく乳の飲み過ぎに依るのだから、これも三四歲の小兒に飲食物を與へると等しく、冬期三合の牛乳を與へてゐたものなら、夏期には一合五勺位に減じ、又水と乳とを等分に割つてゐたものなら、水を從來の二倍位にもして與へるやうにし、萬事こんな風に注意するヿが必要であります。尤も以上の割に減少しても未だ飲んだ乳を吐き戻し、又は下痢など起すやうな場合には、一合五勺の牛乳を更に一合位に減少し、二倍の水

を更に三倍位にして與へるがよろしい。

若し、それでもなほ嘔吐、下痢などの止まぬやうな時には、全く牛乳は廢止して、その代りに粥汁なぞの如き極く柔い薄いのを少し宛與へるやうにして御覽なさい。

かうしても未だ、更に効能がなかつた折は、今度は絶對に食を與へずに置くが可い。これは無論大小人を通じての事ですが、かういふ時は大抵一晝夜も斷食させておけば普通の下痢食傷は本復するものです。中には斷食させると身體が弱るといつて醫師の言葉も聞かず。ひそかに食物を與へたりなぞする親もあるが決してそんなものではない、そんな素人考へが却つて病氣を募らすやうなことになりますから、充分注意して欲しいのであります。



乳呑兒を持てる母親へ

子供の健康上に就いては家庭でそれぐ注意して居るやうでありますが、併し直接病氣にかゝらなければ醫者の必要は無い事とおもひ、平素は全く必要のないものだといふ考を抱いて居る向が多いやうです。これは實に間違つた話しである、勿論病氣の治療は是非とも醫者に頼らなければならぬけれども更に病氣を未發に防ぐ爲めの相談相手にする事は最も必要ではあるまいか、歐洲では子供が生れると其食物被服は素より凡ての事に就て醫者に相談するから、隨つて健全な生育を遂げるのであります。

◎醫者の見たる健康兒

健康と不健康とは醫者が見るのと素人が見たのとは大に違ふ、醫者の見たる健康な子供とは强壯で、多血で肥つた活潑なものをいふのでかゝる子供は麻疹にも罹かれば窒扶斯にも罹かゝり、百日咳にも罹りつ矢鱈に患うて藥を飲む、それでも醫者は之れを健康の小兒と見るのである。

◎素人の見たる健康兒

たとへ營養のよい子供であつても、それが常に病氣にかゝり勝ちで藥をのめば素人はそれを目してよわい見だといつて憐しみ寧しろ貧血

で瘦せて、元氣がなく營養の頗る惡い小兒でも藥さへ飮まなければ、「この子はまだ患らつた事もありませぬ」といつて其丈夫さを誇るのが普通である、いづくんぞ知らん醫者から見れば、眞に不健康な子供である。

◎自然と人工との營養の差

近來牛乳營養が大いに行はれるやうになつたが、これは世の中が進歩したるにつれて、一家の主婦も臺所や子供の生活にばかり掛つて居られず、色々交際上外出することが多くなり、隨つて人乳のみで養育することが段々困難になるからで、今に日本も歐洲のやうに自然營養即ち人乳で育てることは次第に減じて人工營養即ち牛乳や羊乳で育てることが一層盛んになつて、同時に牛乳に價値を置くやうになるのであらうが、此に一の大なる誤解の生ずることを注意せねばならぬ。

◎牛乳肥りの害

多數の人は子供を育てるに唯牛乳さへ飮ませて置けば人間に成ると考へから盛んに牛乳を與へて他の副食物を採らせない、これが大なる誤りで、今日我國では中等以上の人でも未だ此の事が分らない、無論、牛乳ばかりで養ふても育つことは育つが、牛乳からの營養は單に脂肪にとゞまるから體は肥つて目方はかゝるが、他の大事な組織が缺乏してしまふ即ち血液も少なければ皮膚も軟弱で骨組は細く筋肉が足らず、豚のやうに目方ばかり殖えて色は蒼さめて來る、醫學上これを過營養と稱して一の疾病に擬つてゐるものとしてあるさうだ。

◎平日の營養が肝要

牛乳を飮ませることを惡くいふのではないか、永く飮ませると其牛乳の爲めに自然と食慾を減ずるから他の食物を取らなくなる、故に間接には牛乳が害を爲す事になるのである、一體兒童の營養學に就ては近來稍く世界の大家が注意し始めて、以前は單に兒童の疾病若しくば、治療法のみの研究であつたのが、今日では平常の營養といふ事に、注目し來り、そこで營養學が大いに發達して來た、併しまだ若い學問であるから、隨つていろ／＼異說も多く素人も又これには迷ふて居るが、此說は最早疑ふべからざる眞理であるから。[illegible]を思ふ親々は大いに注意せねばならぬ。

◎三元素適合の食物

近來嬰兒に副食物を取らせる時期の早くなつたのは、喜ぶべき事で今日では健康な小兒ならば、大抵八九ヶ月目から與へる必要のある事が始めて分つて來た、人の身體を組織するのに、脂肪と、蛋白質と含水炭素の三元素の必要な事は誰も知つてゐる處ろであるが、若し牛乳ばかりだと脂肪のみが多くて、後の二元素が足らないから完全な發育は出來ないのである、蛋白質は獸肉や、鳥獸の肉、鷄卵等から得ら

れ、含水炭素は重に野菜から取るので、この三元素が適當に送られて居れば健康に育つのである。

◎野菜の効能

世間多くの母親は偏頗な考へをもつて、野菜は粗末なもので、これを食はなくとも牛乳や卵子、肉などさい與へて置けばよいとして、最も必要な含水炭素を取らない、そしてこの一元素が足らない爲めに、小兒の發育上種々の害を來す事を知らないのである。試に牛乳と肉類と野菜とを比較するに、野菜には三元素共悉く備はつて居るが、牛乳には蛋白質はあれど含水炭素は殆んどない、ゆゑに肉類、牛乳野菜の中、どれに營養が出來るかといへば野菜だけでは出來るが、外のものでは出來ない、百姓は牛乳も飲まず肉類もあまり食べないで多くは野菜で通して居るが、それにも拘らず壯健であるのは野菜中に三元素悉く含まれてあるからである。ゆゑに牛乳や肉類のみで、育つた子供は骨格もわるければ筋肉も發達しない、只豚のやうに肥つた青ざめたものになつて仕舞ふのである。

◎上流家庭の誤解

故に小供には副食物を與へると同時に野菜を與へなければならぬ、健康な小兒ならば七八ヶ月目たつて粥やおぢやを與へ、二三週間もこれに馴れると今度は小ざかなを始めとし、卵子をやる、半年も經つたらば野菜、殊にじやがいも、かぶ、大根等を柔らかに煮て與へる、斯くすれば三元素平均して行はれるから健全な發育を遂げる、然るに上流の家庭になるほど野菜を擯斥して牛乳や肉類のみを用ゐるのは甚だしき間違である。

◎小兒と下痢

すべて下痢は極寒極暑の節には少なくて初夏や秋の頃に多い、何故なれらば下痢の起りは重に腐敗黴菌の作用で、其の黴菌の發生するに適當なる溫度は大抵七十度位で、九十度以上の酷暑に於てはカビすら生える事が尠い、此の黴菌は最初は嘗めてもわからず色にもあらはれないから、一寸食物の腐敗した位では、鑑定がつかぬのである、故に母親が發見にとて舌で試て見て、何ともなければ前日の食物をもかまわず與ふるなどは危險至極である、且つ秋の頃は果物が多いから、自然食べすぎる、又暑さが減じて人が油斷するなど種々の素因があるので大腸かたるといつて赤痢に似た痢氣を起す事もある、糞便に血液が交るからよく赤痢と誤つて大さわぎをするが、それは赤痢と同じく大腸を損するから、醫師の鑑定に因らねば本當の事はわからない。

薄命に泣ける令孃と幸福の鍵を握る令孃

成女學校學監　宮田修

△薄命に泣く方

婦人は勿論柔順で無ければならぬが、餘りに過ぎるのも可けません。私の教へた、或一人の女學生は、非常に大人しい孃さんでした、多くの女學生の中では、あんな大人しい、良い人はないと、學校中での評判娘で、可なり人望もありました。この位ですから、敎師に從順で、何一つ逆ふことをしない、左を向けと言へば、何時までも左を向いて居るといふ人柄でした。この孃さんだけは、家に居ても學校に居ても、居るか居らぬか判らないといふ風、併し學問の成績は、優等といふ程ではない、先づ普通であつた、舊來の所謂、優美で從順で女らしいといふ點から言へば、實に理想の孃さんでした。私共の方に遊びに來ても、外の人よりは靜かで、しとやかで、大人しいといふので、よく人の眼に止まりました。だから今時の娘に珍しい人だと人も褒めますし、私などもあれがお嫁に行くなら、嘸平和な家庭が出來やう、どうか溫良な善い人に嫁せたいと、陰に思つて居りました。

所が、この孃さんは、普通教育も濟んで、年は二十花ならば滿開といふ時に、軍人の處に緣談が調ひました、先方では、今時の女學生は好ましくない、どうかこの惡風に染まぬ處女をといふ事でしたから、持つて來いといふので、間もなくお嫁に行つたのです。

扨て嫁入つた當時は、思ふに增した大人しい婦人であると云ふので舅姑や夫の氣に叶つて居た樣子でしたで當時私は先方の希望に叶つてゐるといへば、誠に結構なわけだが、已に軍人といふ上は、武斷的の所があらう、剛健を尙ぶであらう、行末が案じられると、心竊に思つたものゝ、別に自分に相談があつたといふのでもないから、傍觀の地位に立つてゐたのです。

結婚後半年程は、何事も起らなかつた。極平和に行

つた。所が、七ケ月、八ケ月と時の經つに從つて、段段お嫁さんの短所が顯れたと見えて、この婦人では、きつぱりした軍人の家庭は勤まらぬ、何事にも齒ごたへがない、役に立たぬといふので、物の一年も經たぬ間に舅姑や夫の中で、離婚の相談が決し、一日このお嫁さんを呼寄せて、とう〳〵暇をとらすることゝなつた初め此の事に就て媒妁人や親元へ夫々通知があつた時に孰れも先方の處置に憤慨して、如何なる理由によるか、離婚は果して正當であるか、十分取糺さうとしたが、肝心な本人は、お人よしの方ですから、左程には思はない。哀しいは哀しいけれども言つた丈で強て先方を取糺さうともしない。假ひ出るにしても、一應言ふべき事を言へば良いのですが、それさへもせずして泣く〳〵里へ復つたのです。

私は此の談を聞いて、實に氣の毒に思ひました、再來この孃さんは、身の薄命を嘆ち、離婚の面目なさに、舊い友人の處にも行かず、私の處にも來ない、どうして居ることやら、さつぱり消息が知れません。

人物からいへば、惡氣のない人である。從來の考へよりいへば、理想的の婦人であるが、併し度に過ぎた從順は、かういふ結果に陷るのです。

△幸福の鍵を握れる方

同じ大人しい婦人でも何處か締りのある者は滅多に右の樣にはなりません。その一例として、或る實業家の令孃のお話があります。

その孃さんは、家は金廻りが良くて何一つ不足はないといふ裕福な家庭であつたが、身の廻りは極質素で白粉などは塗けた事がなく、何時も洗ひ晒しの木綿着で登校して居た。華美でも無いが、又垢染みても居ない、平素は落着き拂つて居て、用がなければ物を言はぬが、言ふ事はきちんとしてゐる。跳ね廻ることは嫌ひであるが、運動すべき時には、活潑に運動する。勉強はする、嫉妬の念はない、人の邪魔はしない人に逆はない、といふ婦人でした。つまり前の孃さんよりは中庸を得た人であつた。

家も富裕ですから、相當の家に縁付く事は出來たのですが、處が此の孃さんは、何ういふ考へか、地方に勤めて居る小官吏の所に嫁した、漸く生活して居るばかりの小官吏で、而も再縁であつた。けれども、當人は毫も之を厭はない、徐に夫たるべき人の性行を看抜いて、喜んで之に嫁したのであつた、嫁するに當つて友達に話した中に恁う云ふ事を言つてゐる。

何も、人間は、金錢があるから、官位が高いからといつて、幸福な譯に參りませぬ。平和な清淨な生活をして、樂しく暮すこそ、此上なきことゝ思ひます伴れ添ふ人に同情心があつて、苦樂相分つといふ精神さへあれば、妻にとつて、この位な幸福はございますまい。若し其れさへ叶ふ見込が立たば、再婚であらうが、小官吏であらうが、毫も意に介すことはありません。要するに立派な名譽あり、資產ある家に嫁したいといふのは、間違つて居ります。單に名譽を好み、財產に憧憬るゝのは、所謂虛僞虛榮に過ぎないのです。

斯う申したさうです。實に立派な言分ではありませんか、で嫁した後の樣子を觀るのに、最早三年も經つけれども、些とも面白くないと云ふ事は起らない、今日の若い婦人が夢想する虛榮の生活を他所に見て、この新夫婦は、田園の間に淸き世渡りをして何一つ不平を洩さない。妻は夫に滿身の愛を濺ぎ、夫も同じく妻を敬愛して、常に感謝と滿足の念に充されてゐます。

この婦人は、實に私の學校の理想の人です。學校に居た時も今日も一貫して何處か確りした所がある。極大人しい中に、淸き節操と、凜々しい意志を具へて居るのであります。



初對面録

あやめ



今度從弟が故郷の女と結婚したから、そのお嫁さんを訪問して近づきになつて呉れ、との夫の依頼に、私は或日その新細君を訪問致しました、私は初對面なのだから何となく氣まりが惡く、先へ行つてどんな話をしようかしら、故郷の事でも聞かうかしらなど〻種々と話の種を考へながら、さうだ故郷の事でも聞かうと話の糸口を途中で腹案して玄關を訪問ますと、丁度、細君が在宅で早速通されました、二十歳ばかりの人で、顔には濃厚と厚化粧、束髪に色のい〻リボンを結んで、良い柄の銘仙の着物を着て居るが、矢張り何となく土臭いのが拔けない、そして東京の女は敏捷に眼を働かせて、何事にもハキ〳〵とした處があるが、田舍の婦人は何處か間が拔けてるほど平穏な茫乎して居るところがある。

『初めまして……此度はお目出度う御座いました』

と私は丁寧なる初對面の挨拶すると、先きでも『これはお初つに御目に懸ります……不束者で御座いますが』といはれる。

二人は火鉢を眞中にして相對して坐つた。

『少しはこちらにお馴れになりまして？』

と私がまづ最初に口を切ると、お嫁さんは恥かし相にホ、、、と微笑んだ。

地方の人は田舍者といはれるのが一番辛らい相だが、馴れたかとのこの言葉は取りも直さず、田舍者に對しての言であるから、お嫁さんの方では私の言を惡く僻んだのではないかしらと、私は其の赤くした顔を見て氣がついて思はず惡かつたと思つた。

『御故里は大變に良い景色ださうですね、東京なんか狹々して居て隨分五月蠅でせう、何と申ましても閑靜な方が宜しう御座いますわね、と私は前の埋合せに御

意に叶ふやうなお世辭をいふと、『左樣で御座いませうかね、ホヽヽ』と細君は曖昧に笑はれる。一體このお嫁さんは大變に內氣な溫順な質で深窓の佳人とでもいふのであらうか、二十歲も越して奧樣と呼ばれながらもまだ歌留多が面白かつたり、大きな聲で唱歌を唱ふやうな、私等と異つて、もし貴郞どう致しませう、などと旦那樣に仰る時なんか蚊の鳴くやうな優しい聲で、三つ指ついて奉仕參らすといふ位だから、初めて會ふ人に無口なのも無理ではないが、恐らく斯う云ふ無口の人を相手にする程難かしいものはない、如何にも座が白けるのでお客樣の私の方が餘程氣が氣でない、何か面白い話、親密になる手段としての對話はないかしらと、色々考へた。

『お故國は大變に名所舊跡の多いところで御座いますから、嘸色々な面白い話が御座いませうね』

と私は成だけ親しく、成るだけお嫁さんに多く、口を利かせるやうにする、然しこの私の問を餘りに難かしく解されたらしく、『否、どんな話が御座いますのか、私などは一向に不調法で存じませんですよ、ホヽヽヽ』と笑て終られるのに私も思はず可笑しくなつてホヽヽヽと笑ふ、斯う云ふ風で兎角取り付く島がない、暫時話が絕える、私は手持無沙汰に自分の羽織の紐を玩弄にして居る、細君は火箸で灰の中へ文字を書いてゐる、是がこの人の癖らしい、仕方がないから、

『旦那樣は何時頃お歸りですか』と聞くと、『四時頃で御座います』と答へる、『每日御出勤ですか』

と聞かなくとも知れ切つて居る事をいふと、『ハイ』と答へる、ポツンポツンと初手の人が琴を彈くやうな話の糸の響である、こんな箸にも棒にもつかぬ問答をして居る內、女中がそこへお鮨を持て來る、お國風かもしれないが、お鮨を私にばかり出して御主人は別にお相手もしないのである、それともこの奧樣は嫌ひなのかもしれない『つまりませんものですが、お食り下さいませ』と此時初めてお愛想を仰つて、冷たくなつたお茶を入れ代へなどされる、『さゝゝ何卒』を幾度か被仰る、初めて參上た家で折角出したものを食べずに

歸るのも失禮だと思つたが、こんな窮屈な人の前で自分獨り大きな口明けて食べるのは、女同士ながらも氣まりが惡い、私は有り難う御座います、と云て貴女は、と聞こうかしらと思たが、それも變であるから忸怩して居ると、また『何卒つまりませんものですが』

と責められる、仕方がなく、それでは御遠慮なく、と云てお箸を取る、獨で見榮もなく食べるのならお箸なんか使用はないで、二口にも三口にもムシヤ〳〵とをいしく食べるのだが、斯うして御主人が整然と前に居て見られながら、食べるのは、恰で食方の試驗場へでも出たやうな思ひである、まづお箸を取つてお皿の上で海苔卷のお鮨を二つに割つたが、中の干瓢はお箸では切れないから、その儘にして置いて、二個に切つた一個を口に入れる、成丈音のしないやうに密と食べるのだから、碌々嚙みもしないで呑み込んで終ふ、甘味のやら不味のやら少しも判らない、何が氣まりが惡いとて、物を食べてる時、人に見られる程厭なものはない、私が動かす口元や、お箸の先につく御飯粒の一粒にも奥樣はぢろ〳〵と見て居られるのではないかしらと思て、奈何も具合が惡い、相變らず默て居られる、何か話をしてこの隙間の多い座を埋め合せをしやうかと思つたが、何分物を食べてるのだから夫れもならず、何でも早く食べて終ふのが一番良いと思て、急いでお鮨を呑み込んで終てお茶を啜る、其時初めて私は眼を上げて見ると、お嫁さんは眼に一パイの涙を堪えて居られる、涙と云ても是は今欠伸が出たのを、袖で隱して無理に呑み込んで終た影響に宿つたものらしい、何て無愛想なお嫁さんよと思たが、私が來てから碌々話もしないで彼是一時間も經つたのである、で私もそこそこに暇乞をして歸つた、まことに不愉快でしたが、何もこの奥樣が惡氣があつての仕打では有ません、極く人馴れない人であつたからです。柔順なのも結構ですが、恁う因循でも亦困ると思ひました。



子供に對する希望

子供の育て方つて、どんな子供が理想かと仰いますのオホヽヽヽどうして貴女私などが、却々育て方のなんのと理屈めいた事が申せるもんで御座いますか、育て方と申まして、些の心づきました事丈けで惡い事は止めさせて出來るだけのんびりと育てゝ（大きな人間）にしたいと考へて育てゝ居ります、それですから随分（おいた）も致しますが、惡戯で無い限り大抵の事は大目に見て、自由にさせてやります、只恐れるのは子供の慢心です、それで成績などいくらよろしくても、決して譽めて計りは置きません、此度はよく出來たが次に此の成績より下る樣ではよい人になれぬだん〳〵によくならなくてはとよく〳〵申きけます、併し小學校時代は宅でやかましく復習は致させませぬ主義で御座います、ですが學校で習つて參りました範圍内で一寸した日々致した事などを書かせましたり、買物などを利用して、算用をいたさせたり、始終應用させて居ります、何分にもまだ九歳の男兒が頭で、經驗が御座いませんから、これでよろしいものやら惡いものやら斯して育てましたらどんな人間が出來上ることやらまことに心配で御座います、理想の子供と申ましても、矢張りどう申上てよろしいか、一概には申上られませず、人樣に依つても違ひませうが、まア利かぬ氣の氣概のある決斷力の强いその中に何處か優しい、殊に女子には此の優しいといふ點がかけてはいけませぬ、そして男女どちらにせよ人に臆せぬ、愛らしい處のある、學術も成績のよろしいのが理想の子供で御座います、自分の子にこう揃つて居りましたら、どんなに嬉しう御座いませう、あまりにおとなし過ぎたり、女々しいのはきつと病身でありませうし、普通人にはなりませうが、大きな人といふ私の望みにはどうありませうかと考へますのです。（兎子）

社會研究

三都の生活狀態

觀風子

▲廣告に依つて知る社會狀態

試みに新橋から汽車に乘つて、東海道五十三次の膝栗毛を文明の利器に委せ、京都より更に十有餘哩の延長、大阪まで行つて御覽なさい。初旅の物珍しく、唯だキヨロ〱してばかりゐては別に面白い觀察も出來ないけれど、少し心を落着けて、兩方の窓へ映りゆく風景に確と注目して御覽なさい。品川の海濱、函根の蒼嶺、富士の朝暾など、未だ東京に近い所は槪して景色が雄大いけれど、名古屋を過ぎ、美濃の高原を通つて近江路に這入ると、俄かに景色が箱庭的になつて來る。而も逢阪山の墜道を潛れば、玆は近江山城の國境木標が一本立つてゐて、俄かに京都の臭ひがするやう之は强ち蟬丸の塞、大石良雄の舊蹟があるばかりではなく、四邊の景色、宛ら水も滴るばかりに翠巒翠峯、此の内に千年の舊都が抱かれてゐるのだナと思ふ故かも知れませぬ。故意と七條の停車場に下りずに、尙う一時間有餘乘車てゐると轟々と淀河の鐵橋へ差かゝる淀の河瀨の水車、どんどと落るは瀑の水、何となく風雅のやうに聞えますが其れは昔の唄。眼をあげて見ると黑色の煤煙、褐色の煤煙、濛々として天を衝き、數百本、數千本の煙突は軍艦の帆柱のやうに林立し、それが倒さに淀河へ映つてる狀態は恐ろしいほど慄然する。最初て大阪へ來た者は大槪この景色を見て、斯かる煙の中にゐて大阪人は能く窒息して死んで了はぬと思ふでせうが、梅田の停車場を下車て市中へ這入つて見れば又格別、却つて氣が寬ぐ位。乃で熟々調べて見まするに、汽車の窓から覗いて見たのは櫻の宮から天滿の間で、云はゞ大阪で最も煙突の多い所。皐月の鯉の吹流しの、毎時も東京人に吹飛ばされてゐる大阪人が、その復讐に淀河の鐵橋の上で一寸東京人の度膽を

一挫ぎ挫ぐところ一寸愉快なことでありませう。それは扨て措き、茲に面白い觀察といふのは、汽車の通る兩側の山なり森なりに、パノラマ然とペンキで塗つた殺風景な廣告です。つまらない事のやうですけれど、注意して見ると能く其の土地の狀態が判ります、先づ同じ麥酒の廣告にしても、東京附近ではサッポロ麥酒惠比壽麥酒、キリン麥酒が盛んでございます、名古屋附近に至ると茲はまたカブト麥酒の勢力範圍、京都大阪まで參りますと專ら朝日麥酒の廣告が盛んです。之は唯だ一例に過ぎませんけれど、大體の上から見れば京都附近の山々には京白粉、都紅の廣告が隨分盛んだし、其の他友禪染の廣告、洋傘の廣告、概して裝飾品の廣告が多い所を以つて見ますると、何といつても京は裝飾家の住む處、着倒れ人種の集つてゐる處といふことが判然と分ります、之が大阪に近くに從つて、何いふ廣告が多くなるかと見て居ると、これは賣藥の廣告濟快丸、ヘブリン丸は云はずもがな、仁丹、ゼム、次亞燐の廣告が凄じいほどあります。之れを以て見れば表面賣藥屋の盛大なことが判ると共に、裏面から窺ふと、如何に大阪が不健康地であるのみならず、又大阪人が如何に不攝生不養生であるかが想像される次第であります。たつた十有餘哩しか離れてゐないのに一つは裝飾家、一は不攝生家、斯うまで違ふとは如何いふ譯かと尋ねまするに、これには根本的研究を三都の地理的、歷史的に持つてゆかねばならぬ次第があります。

▲火の都と水の都

六ヶ敷く云へば、京阪地方と東京とは地質からして根本的に違ひます。京阪地方は四圍の山水皆な是れ明媚なる故、人をして轉た天然の美に抱かるゝの心地が致しますけれど、東京地方では四圍の光景粗放な上に火山脈は東京市中を貫いて北より南へ横つてゐますから、何時何時大地震が搖り出すか判らず、宛ら東京人は地雷火の布いてある上へ枕して、高鼾して寢てゐるやうなもの、不安心なこと此の上もないです。それに京大阪には風がないけれど、東京は四時絕えず空氣

が吹き廻して、屋根瓦を飛ばすやら、垣根を倒すやら加之に若しや火を粗忽にしたら忽ち東京中を黒焦にして了ふ。ですから東京人の胸には何時も「東京は火事早い、物事手ッ取り早くしろ」といふのが絶えず人々の頭腦に通ふて居る從つて子孫の爲め、永久の爲めといふ考へが京阪人に比べて乏しい、これに反して京大阪は實に天賦の土地と云はねばならぬ。從つて永久といふ考へも深ければ、子孫の爲めに金を遺すといふ考へも東京方面より深く、東京の富豪は主に一代身上なるに引換へて、京大阪には祖先から幾代といふ富限者が非常に多いのもこの道理。而して同じ富豪になるにしても、東京人は上方者の金錢に對する意氣さつとは全く兩極端に立つてゐる。例へば東京人の富豪になり度がるのは、金そのものが欲しいのよりも、其の金を有つて何か思ひつきの、人の意表に出るやうなパッとしたことがして見度いため故、從つて儲ける方にも他を呀と云はせることを謀む。彼の紀文大盡が關西人間でありながら、現今に至る迄東京人の耳に新たに響いてるのは、彼の萬死に一生を得た金錢の儲け方と、萬金散し盡した豪快が能く東京人の意氣に投合したからでせう。若し京大阪で斯んなことをしたなら、それこそ彼の人は阿呆やとケナされて了ふこと請合です。京大阪へ行つて金錢を使用ふなら、萬事細く長く、遣はねばなりませぬ。要するに東京は火の都、大阪は水の都である、火の都は急進突飛、萬事やり方か烈しく水の都は漸進で萬事やり方が氣長い、火の都は盛衰興亡の變化が急であるが水の都はそれが甚だ緩漫であるだけ、それだけ人の氣象にも根づよい處がある。

▲着物の着方、髪の振り

啻に東京風、京都風、大阪風といつたところで、それは概括しての話、同じ東京風の中でも山の手と下町とは大した相違、野暮と粋との差別は事に依ると東京と大阪との差別よりも甚だしいかも知れませぬ。それと同じく京都にも上京風、下京風の區別があれば、大阪に至ると尚ほ更甚だしい區別がある。元來東京や大阪の市街は京都のやうに四圍翠峯を以つて圍まれ、

眞中に一條の鴨河美しく流れてるやうな簡單なものでなく、坂の數も多ければ橋の數も隨分多く、坂と川とで全市を十數個に區劃し、その一區劃々々が各々其の特徴を發揮してゐる。殊に大阪の方は東京よりも猶いだけあつて、その特徴は彌が上に發揮されて居る。一寸云つて見るのに、大阪の中心點と云ふべき船場は眞に大阪商人の中心點、心臟である。この隣の島の内は大阪人の遊びどころ、それから高津は藝人の居住地上町は月給取の棲家、堂島は米相場師の住居地、靱は職人の居場所、阿波座は干魚問屋の巣窟である。斯ういふ風に一區劃々々整然と土地の分業が行はれてゐることは京都は勿論、東京でも滅多に見ることが出來ず、彼の神田柳原で古着屋が軒を連らねてゐたり、下谷萬年町で貧民窟が並んでゐるよりも、より一層甚だしいのである。それに此等の土地に棲んでゐる者は、職業が異つてゐるばかりでなく、衣服の着方や、髪の結び方まで異つてゐるので、能く眼の利いてゐる人になると、手拭の冠り方一つでも、または前掛の締め具合一つでも、彼れは船場の者だとか、堂島の者だとかいふことを整然と見判るさうである。斯くの如く同じ大阪人でも、土地に依つてその服裝、物の云ひやう、氣風に至るまで大いに異つてゐるけれど、大體の上から云へば大阪は黃金崇拜の都會、沒趣味、沒道德の土地、京都は優美なる都會、活動力なき都會、言換れば已に木伊乃となつて了つた都會、骨董化して了つた都會である。

▲三都婦人の特色

三都の婦人を標本的に一人宛撰拔いて比較て見ると東京の女は色が淺黒く、面長で、眼付と肩の張り具合に云ふに云はれぬ權威が表はれてゐる。京都の女は唯だ無暗に色が白いといふばかり、否白いのが通り越して蒼白いといふ方が適當である。顏の輪廓は丈の短い瓜核形、黑眸勝の眼はパッチリとして、皮膚の色の白いことゝ、髪の黑いことは恐く天下に冠たるものでせう。併し惜しいことには東京の婦人ほど意氣地に乏しい故か、眼元に力がなく、笑つた時の愛嬌にも眞に人

を蠱惑するほどの表情が籠つてゐませぬ。それで京都女は由來戀の情少く、情死沙汰などは殆んど藥にし度くもない位ですが、それもその筈、表情の無い女に命まで捨てるやうな男も亦た滅多に無いからである。此點になると大阪の女は同じ上方でも一寸趣きを異にしてゐる。色の白さは勿論東京女と比べものにならず、左りとてまた京女ほど蒼白くはなく、櫻色にホンノリとしてゐて、能く不衞生な土地に恁麼奇麗な女が生れたものだと思はれる位。顏の輪廓は京女よりは幾分か面長で、眼元口元の表情も先づ充分、人を魅入する力も可なりあるけれど、物を云ふと言葉が甘つたる過るのと、黄金欲しやの手が咽喉佛の陰から透て見えるので何となく興が醒めて了ふ。併し女學生になると、數こそ少いけれど却々侮られたものでない。先づ女學校の兩大關は堂島、清水谷の二高等女學校に指を屈せずばならず、そのハイカラ的なるは東京の女子大學の壘を摩する位。此の外、梅花女學校といふ基督のも却々のハイカラ的。全體斯ういふハイカラ令孃がどうして前垂を締めた大阪商人に嫁ぐことが出來るだらうかと、陰ながら心配する人もあるさうな。

▲紙幣の薪木、屑籠の落紙

已に前にも申した通り、東京は火事早い處、天災の多い所、何でも物事手つ取り早くして、明日の事なんぞは如何にかなるだらうと、不安心の上に安心を築きあげ、これが習慣となつて物事萬事思ひ切り能く、未練氣に乏しい淡白した性質を養ひ得たれど、京大阪は之に引換へて、何でも物事シンネリ強く遣つてゆき、儲かる事と思つたら、百日かゝつても、千日かゝつても、必ず攻落さなければやまないといつた風に。つまらぬ例のやうですけれど、東京見榮張りは見得張の爲めに十圓紙幣で鼻をかんで見せたり、百圓紙幣を火に爆べて見せたりして、相手の喫驚仰天する顏を眺めながら、快哉を呼ぶ者があるけれど、京大阪では此んな馬鹿な眞似をするものは一人も無いのは勿論、如何な立派な家でも必ず便所の中へ籠を一つ吊して置き、御用の濟んだ落し紙をばズン〳〵其の中へ突込み、一杯

になつた所で一貫目幾錢と紙屑屋に賣つて了ふ。殊に京都と來ると、一から十までケチ〳〵してゐること夥しく、「朝のお粥には黑豆が二粒這入つてゐる」との惡口さへある。この黑豆とは何であるかといふのに、粥があまり薄すぎるので、これを啜る人の兩方の眸が茶碗の底に映り、宛でこれが黑豆の沈んでるやうに見えるからだと聞いては、京都人は最早お粥育ちを通り越して、お粥汁育ちと云はねばならぬ。之に比較ると朝餐の香の物（大阪）や、朝餐の味噌汁（東京）は遙かに贅澤な部類に屬する。モウ一つ京都の往來を通つたら注意して御覽なさい。大八車の代りに、普通の荷車へ五六本ほど長い丸太を差渡し、この丸太のしなふばかりに米俵を澤山積んで通つてゐる。斯麽不便な事をするより大八車を使用ふ方が好いぢやないかと聞いて見ると、税が餘計にかゝるからだとの答へ。女子を經濟的に敎育するには京都が一番適して居る、茲で育つた女ならば、如何に貧窮な家へ嫁いても、恐らく一言の不平だも洩すまい。

▲獨逸語的と佛蘭西語的

東京人は言葉を縮めて壓搾的技能に誇らうとすれば京大阪の者は餘計な音まで入れて悠揚迫らぬ所を自慢にする。東京で「買つて來る」は京大阪で「買うて來る」東京で「云つて聞かす」は京大阪で「云うて聞かす」は固よりの事、東京でもズッと下町邊の醜業婦がる女に云はせると、「左樣だとさ」は「左樣だつさ」、「本當だとさ」は「本當だつさ」とまで促音の範圍を擴張するのに對して、大阪の撥音の盛んなことは、「一月、二月、三月、四月」と云はずに「一ン月、二ン月、三月、四ン月」と云ふ、「相撲取」と云はずに「相撲ン取」と云ふに至つては、東京の「左樣ですか」、京都の「左樣どすか」、大阪の「左樣だすか」以上の差違である。元來東京の言葉は子音が多く、促音が著しく耳立つて獨逸語的に聞えるのであるが、京大阪の言葉は母音が多く、撥音が極めて耳立ち、云はゞ佛蘭西語、伊太利語的に發する。西洋人が日本語を聞いて、如何にも悠揚迫らぬ社交の語と贊辭を呈してゐるさうであるが、

京都人の言葉を聞いたら愈よその流暢なるに驚くでせう。併し大阪言葉に至つては幾分か流暢を通り越して人が大切な話を仕かけても大阪人の輕薄な性質が唇頭の端から「左樣か」の一言となつて迸り出づるに至つては、聞く人少からず不快の感を催す。全體言葉と性質との關係は極めて密接なもので、大阪の師團に勤めて居る某將校の話に、西南戰爭や日清戰爭の時大阪の兵隊が一番弱かつたのも道理、自分が兵卒を操練してる時、何か六ケ敷いことを命ずると、「ホンマにチンと飽きまへん」と答へるとやら。此の言葉からして如何にも悠長です。

▲花嫁、花婿の見立

事理を辨へぬ者の言葉に、「海老茶袴穿いて、五年間も高等女學校へ通つたつて、覺えるものは生嚙りの英語と、生意氣な自然主義ばかり」とある併し、此の五年間の高等女學校時代が、實に却々大切な時代で。英語の生嚙り、自然主義の生意氣なのは固より利益に伴ふ弊害の一端で、實は此の間に在つて一通り學問を覺えるは固よりのこと、友達同士の交際振、異性者に對する呼吸を呑み込んで、他日人の妻になる時に周章て騷がぬ準備は、到底箱入娘の及びもつかぬ所でせう。されぱこそ年々笈を負うて東京へ出て來る女學生その數何千と云ふを知らず、今や優に社會の勢力となつてゐる。その證據には、流行と云へば昔は必ず花柳界から起つたものが、今では却つて女學生の方から起るといふ勢ひ。それに赤門、稻門などの男學生と相俟つて頗る東都の天地を賑はして居るのは誰樣も御承知ですが、之が京都となると、未來は上流社會の一分子、新學問の研究者としての京都大學生に對して、府立女學校や、淑女學校の女學生は餘りにあど氣ない大阪では、土地に似合はず、女子大學の壘を摩せんとする堂島、清水谷の兩高等女學校、それから梅花女學校などはあつても、肝腎な花婿殿が商家の坊子と來てゐるので、不似合なことは駿馬痴漢を乘せて走るよりも尙と甚しい。彼等坊子なるものの小學校を卒業すれば學問は先づ是れで澤山、お嫁はんを貰うて親と別居して商

賣するまでは、別に極つた職業もなく、唯だ惡い事を仕ないやうに、澤山金錢を費はないやうに、ノラリクラリと其日々々を暮してゐれば、親から金鵄勳章が貰へるといふ身分。常に顏を磨いたり、髮を奇麗に分けることにばかりに腐心し、金縁眼鏡、金時計、絹手巾を首に卷いて、用事がなくつても一寸遊びに出て見たり、咳拂ひして見たり。東京人の眼から見ると丁度人形のやうな、俳優のやうな、吹けば飛ぶやうな、齒の浮くやうな何とも會體の知れぬ柄である。斯う云ふ骨のないものには女學生の方から固より相手にせぬ故、坊子は依然醜業婦を相手にしていつまでも舊思想を脫することが出來ないのである。

▲風月列車と花見

大阪は日本の商業都府、故に梅田の停車場は日本第一の驛たることは云ふまでもないが、尙ほ此の外、湊町、難波、汐見橋の小停車場があること、東京で新橋上野兩停車場の他に、飯田町、兩國等の小停車場あるのと等しく、湊町、難波、汐見橋停車場の列車を一名風月列車と云つてゐる。之は大阪人が商業の間隙々々を偸んで名勝見物へ出掛けるのが多いからである。勿論大阪市内には殆んど櫻花の雲もなければ、紅葉の錦も無く、勢ひ風月列車の助を借りて附近の名勝を探らねばならぬ。春風駘蕩たる日、若しくは神氣清爽たる秋の夕暮、試みにこの風月列車に乘つて見ると、乘客の殆んど凡てが、春の花よりも、秋の紅葉よりも顏を眞赤にして、醜業婦の手首を握りながら、甘つたるい大阪辯を遠慮會釋もなく振廻し、醜陋殆んど聞くに堪へざる言葉を發してゐる。これが東京ならば餘程下等の商賣人か、職人かでなければ斯んな卑猥な言葉は發せぬものをと、呆と見詰めると又意外、大島か一樂の隆とした扮裝に金縁の眼鏡、金の指環、金の時計、一人で必ず二三人の醜業婦を側に侍らせてゐる。原始時代には腕力を以て婦人を爭奪し、文明の今日では金錢で婦人を占有するとの事であるが、現に品性も學問も共に零の商人原が醜婦を率ゐて意氣揚々たる所は、片腹痛いやら馬鹿らしいやら。併し、それは東京人の眼

に映つたところなので、同臭味の大阪人の眼には、誠に全盛なことと此の上もなく、斯ういふ甲斐性な人には絶對的に服從せねばならぬと確く信じてゐるらしい。かういふ風に、遊ぶ傍ら自から示威運動をしてゐるのに比較べると、東京人の花見は實に無邪氣なものである。今は警視廳の命令で殆んど跡を絶つて了つたけれど、嘗ては陽春四月の頃、上野、飛鳥、向島に櫻の雲が棚引くと、東京人の心は急に浮立つて、一番今年こそ思ひ切つて人を驚かして遣らうと、一間許りの張子のビール罎を頭からスッポリ冠つて、僅かに兩手だけ突出し、ノツリ〳〵上野山を歩き廻つて、滿都の人を呀つと魂消らせたり、又は丸赤裸の上へ昆布の衣服を着て乞食の風をしたりして、見る人をして呀と驚かせれば我が事成れりと、滿腔の得意を滿面に浮ばせるのが、之れが花見の道化の常であつた。彼の風月列車内の光景と此の無邪氣なる花見の道化とを併せ思へば、一は嘔吐を催すこと三升、一は腹の皮をよつて、四百四病を根治するの思ひあらしめる。此の間にあつて京都の花見は如何といふに、綾羅錦繍の美しさに繪日傘を翳し、手に飯籠や金蒔繪の重箱を携へて出づる所、眞にお姫樣の遊山そのまゝですが、金蒔繪の重箱の蓋を明けたら最後、蒟蒻の煮たのやら里芋の煮ころがし、これでは向うの小母さんお茶あがれともチト云ひ兼ねるやうです。



一週間内主婦の仕事配り

大日本婦人教育會にて述べたる米人（元カリホルニヤ大學教授）ウヰツタソン夫人の主婦一週間内の用務は生活事情を異にする日本に於て直に實行し難しとするも規律的に家政を行はんとする者の參考となるべし。

◎月曜日●●●　此日の午前は貴賤おしなべて洗濯日と定め主婦は殆ど自ら手を下すと同樣の心を以て下婢に命令するを常とす夫は紐育邊に來り下婢に雇はるゝは多く歐洲諸國より流れ渡りの婦人なれば主婦は一々指揮して用途を異にせる白布の分け方、石鹼の用ひ方、藍の分量、汚點の除き方を監督し次に市に赴きて食品其他を購ふなり終日外の務めに勞れて歸る主人の心を慰むるは第一に晩餐の好みにある事故主婦は之に全力を盡し從て此買物には一方ならず心を注ぐなり扨て是等の一切の用務を果したる後午後の餘れる時間は慈善の爲めに用ふる事となり居れり其の方法は一樣ならざれども自分は自分の屬する敎會内の「小さき母の會」に辨當を持參し多くの有志者と相談の上衆力を以て孤兒貧兒を賑恤し居たりき左りながら家庭本位は自分共が不變の主義故如何なる場合にも各自の家庭に迷惑不快の及ばざることを勉め子供が學校より歸る時間前には必ず是等の會合より家に歸り居るなり晩餐は六時又は七時、主人の歸宅を待ちて一家團欒の中に食卓を開き食後は詩歌に謡はれ繪畵に描かるゝ如く我々の最も愉快なる時となせり。

◎火曜日●●●　前日洗濯せるものに火熨斗を施す其監督指揮は洗濯の時と同じ、午後よりは心合へる親友と共に組織したる研究會を輪番に會員の家に開き時々の必要なる事項を研究することゝなせり曾ては一年もかゝりて印度の美術宗教を此會にて研究せしことあり婦人にして若し家庭を造ると共に旣でに我事了れりとして自己の研究を忘れたらんには其智識年と共に退歩して遂には人と對話する事すら覺束なく況んや良人の事業勞力に同情して之を助くるが如きは全く不可能の事となるべし是れ家庭不和の基なれば男子の罪は姑く措きて妻たる婦人も常に修養を怠らざる樣心掛け居るなり。

◎水曜日●●●　秩序は法則の主なるものと言へば日常の事又守るべき秩序なかる可からず訪問接待のこと若し一定の規則なければ家政極めて紊亂し如何に親しき友達の來訪にても時に非常なる迷惑を生ずること往々之ある例なれば自分等は此日を客の受日とし必ず自分も守り人にも守らすべく注意し居れり此日には食器を磨く是れ食器の清淨透明なる

は主婦の誇の一つとなればなり。

◎木曜日　午後には召使の者の外出を許す從つて當日は食物凡ての手數を省くやう心懸け居れり。

◎金曜日　室内の大掃除を行ふ、日本の室は常に整頓して清潔に心地好けれど洋室は多くの物を陳列し且つ窓多く之を一々清掃して整頓せしむるはなか〳〵骨の折るゝ仕事なり自分は米國に歸りて後は室内の裝飾等日本室の單純清潔にして爽かなる風に倣はんものと今より大に心掛け居れり。

◎土曜日　一切の家事を差措き兒女の對手となりて面白く暮すの習ひなれば天氣好き日には郊外の散歩或は兒童劇お伽噺音樂會などに伴ひ專ら兒女を歡ばしむるとに努む。

◎日曜日　此日は安息日として心身を憩はしめ且つ心緒上正しき思想の發達する樣理想の汚れざる樣勉め居れり。

乳呑兒の食物

これは英國流の規律にはまつた育兒の方法なればこれを參考として日本流に當はめなば好かるべし。

◎生後十ケ月間　生れて凡そ百五十日間に幼兒には二時間乃至三時間目毎に牛乳の極めて純眞なるもの一回一合四分の一乃至二分の一宛を與ふるのみにて他に何も與へずして可なり、又定めの時刻に與ふる習慣を養ふべし。

◎一ケ年目　生後十二ケ月に達すれば、幼兒をして外氣に馴れしめ、運動も稍々度を増して可なり、此頃は消化力も大分發達し居る故、食物は牛乳のみに限らず、滋養ある物を消化良き樣に柔かに煮て與ふべし、即ち普通の體質にて午前七時に牛乳と麥粉の煉りたる物少量午前十時に牛乳と鷄卵の半熟午後一時にはスープと粥を交ぜ合せたる物、午後四時には牛乳と饂飩粉の煉り合せたるもの、午後七時午後十時にも同樣に與ふべし。

但し病氣等の場合は例外なり。

◎一ケ年後　十八ケ月に至らばパンに少量のバタを附けたるを與へてよし、果物の煮たるもの又はジャミ類を交ぜて與ふるも可なり。

◎二ケ年後　滿二ケ年後は午前八時に煮たる魚類、十一時に柔かき牛肉を細かに刻みたる物、午後一時牛には野菜類の煮たる物、午後四時には同じくホテトー類、七時にはスープ少量をパンと牛乳とに添て與ふべし。


受付
田眼科醫院



交際社會の手振

龍江

◎禮式の要旨

西洋では、交際社會に於ける婦人の地位が、益々高くなつて來ます。社會が進歩すれば婦人の勢力も、亦た從つて大きくなる。と申すのは抑々男子が婦人を尊敬する度合は、正しく文明の度合に比例するものであると看做すの根本の思想に基くのであります。

西洋禮式の要旨は、即ち此點に在るので、紳士が淑女を尊敬する所の作法の大綱は、此の一事より外にはありません。茲に交際とは、所謂紳士淑女の交際で、英國の流行を土臺として、其の作法の一二を摘つまんで御話申ませう。

◎途上の邂逅

何處か途上で男女が出會ふたとすると、懇意の間柄であれば、誠に雜作はありませんが、互にロク／＼知らない中では婦人の方から、先に會釋をするのが通例であります。男子の方から、知つたやうな顏をしたり或は馴々しく言葉を懸けたりするのは、紳士の作法ではありません。婦人が懇親の意を面に表はして、先づ腰を屈めたら男子は初めて帽子を脫いで輕く頭を下げるのが順序であります。又握手を求めるのは、總べて地位の高いものから、低いものに對つてするを法としてあるから、最初に手を差出すのは、固より婦人であらねばなりません。

◎訣別は婦人の方より

訣別を告げるのにも、亦た同樣で、先に挨拶をするのは婦人であります。男子の方から、先に訣別を告げるのは非禮です。若し談話の最中、婦人が勝手の方向に歩行き出したら、男子は、其跡に跟いて行かねばなりません。けれど婦人の方に、訣別を告げ度いやうな素振が見えたら、男子は速に訣別を告げて、立ち去るのが禮であります。

◎脫帽の禮頓首の禮

お辭儀の仕方は、英國と獨逸とでは、全然相違つて居ます。紳士淑女が途上で出會ふた時に、獨逸では、先づ腰を屈めますが、英國では、第一に帽子を脫るのが、今日の作法であります。英國の禮式としては特別の場合でなければ、頭を下げる必要はありませんが、男子が婦人に出會ふた時は即ち其の特別の場合であるので、淑女は常に紳士から、特別の尊敬を拂はれて居ると云ふ譯なのです。

◎馬車の內

男女が馬車に同乘する場合に、銘々が座を占める位置に、一定の作法があります。即ち男子は、先づ婦人をして馬の方に向つて腰を掛けさせ、自身は、それに相對して座を占めるのが通例です。並んで坐るのは、夫婦間か、さなくば近しい親戚の間でなければ無い事です。從つて馬車に乘る際には、其のやうに向いて、馬車の內に這入る心得が大事であります、馬車の內に這入つてから、グルリと向き變るなどは、大の無作法としてあります。

馬車を降りる場合には、男子の方が先に出て、婦人を手助けせねばなりません。總べて乘降の際には、同乘者の衣類の裾を踏んだり、戶の間に挾んで締め切つたりせぬやう、注意せねばなりません。

◎乘馬の作法

日本では、乘馬の習慣は、稀です。まして婦人は或

る一部の好奇家を除いては殆ど馬に乘るものは無いと言て可い位ですが、西洋では男女の交際上に、乘馬の作法が整然と出來て居る程の有樣です。

婦人と一緒に男子が馬に乘る塲合の禮式としては、先づ婦人が鞍の上に位置を占めて最早安全と見るまでは、男子は自ら馬に乘るとが出來ない。馬に乘るには馬の左側から乘るのが、一般の作法ですが、男子は此際左側の馬の肩の所に立つて婦人と相對つて自ら手を貸して、乘るのを助けて遣らねばなりません。此の役目を、馬丁にさせるのは非禮であります。



紳士が淑女と共に、馬に乘つて歩行いて居る時、紳士自身の友人に出會ふた塲合に、妄に淑女を振り棄てて、其方に向つて行くとは出來ません。又馬上の紳士が徒歩で行く淑女に出會ふた時、若し談話をし度いと思つたら、即座に馬から降りるのであります。鞍の上から淑女に言葉を懸けるのは、それこそ、無鐵砲な紳士の行動としてあります。

◎招待狀と其の返事

人を招待するには、總べて婦人の名を以てするのが禮式であります。男子は唯だ招待狀を受取つて之に否哉の返事をする義務があるばかりです。

返事は、必らず即日、乃至次の日までには出さねばなりません。日本流に、返事を打棄らかしたり、遲延したりするのは許し難き無禮としてあります。但し招待を辭る場合に、其の理由を申し送るとは、今は必要でないが、昔の方は餘程嚴格でありました。

◎好き風姿にあらず

招待されて、人の家に行く。其家の主婦は先づ之を客間に通します。妻君又は姉妹達が男子と同伴して客となつた場合には、その婦人達が、男子よりは先に立つて客間に通るのが法であります。つまり男子は後に立つて婦人達を保護する役目になる。さりとて此際淑女が紳士の腕に倚ゝのは好い風姿とは見られません。婦人達は僅に男子の先になつて進み、そして最初に其家の主婦に挨拶するものとなつて居るのです。

◎ナプキンの仕末

これはあながち男女交際上の作法と限つた譯ではありませんが、瑣々たる事で注意すべきは、人の家で御馳走になつた跡の、「ナプキン」の始末であります。例へば晩餐が果てた後に、一同其席を立つ。此の場合に「ナプキン」は、其儘椅子の上に棄てゝ置くのが可い「ナプキン」を疊むのは、其家に滯在中の客に限つたもので、現に滯在中でない以上は、よしんば此先半年或は一年間、滯在する心で居たとした所で、殊更に「ナプキン」を疊むのは、惡いとしてあります。

◎手袋の作法

序に、手袋の事を申上げますが、從來晩餐の席上では、婦人は手袋を着け、男子は手袋を着けないものときまつて居ました。然るに今は此の差別が無くなりま

した。と云ふのは、數年前、英國の皇太子殿下が、御自身此の作法を破られたに初まつたものです。

男女を問はず、市街を往來する場合には、必らず手袋を穿めて歩行くのが文明社會の法で、別して人の家を訪問する場合には、手袋を用ゐないのは、紳士淑女の禮に缺くるとしてあります。で、手袋は綺麗なのが可いですが、そうかといつて、又あまり綺麗に過ぎるのは可くありません。又大き過ぎるのも可くはないが、さりとて小さ過ぎるのよりは、寧ろ大きい方が可いです。手袋の小さくて、固いのは、見苦しいものです。



◎紹介する者とされる者

紹介されて、初對面の挨拶をする場合には、單に頭を下げるばかりの會釋をして、握手は決して仕ません。但し其の一方が、主婦である場合は例外です、婦人が自分の家で、初對面の人と握手するのは、特に歡迎の意を表する作法としてありますから。

序に、紹介の作法に就いて、一二つ申上げませう。

紳士淑女が知己の家を訪問してその際、其處で或る他の人と互に出會ふたとすると、よしんば知らない同士だからとて、強ち紹介されるとは定まらない、又その必要もないが、紹介されて、双方が愉快を感ずるものならば、屹度紹介されるのであります。

此の場合は、唯だ紳士と淑女とが知己の家で出會ふたと云ふばかりで、別段紹介されないで仕舞つたならば、後日再び他の場所で其の人達が出會ふた時に、殊更に頭を下げて會釋するとか、乃至は知つたやうな顔をするとか云ふのはよくない。

又、友人と一緒に往來を歩行いて居た時、他の知己に出會ふたからとて、別段兩方を紹介する必要はありませんが、此方が男同士で、出會ふた人が婦人であつた時、又はその婦人が立ち停まつて談話を仕懸けたなら、此方は共々立ち停まつて、そして次第によれば、友人と婦人とは紹介されて差支ない。

それから又、出會ふたのが自分の親戚であるとすれば、猶豫なく之を友人に紹介するのが、常習であります。

◎婦人は禮儀の母なり

以上は、英國禮式の一斑でありますが、數限り無く並べ立てるとは、徒らに事を錯雜せしむる恐れがありますから、此位で止めて置きますが、終に臨んで一寸交際社會に於ける婦人の心得、否、其の任務と云ふやうな事に就いて一言致します。

いふまでもなく、婦人は禮儀の母としてあります。抑々禮儀と云ふものは、男女の交際に初まると申して可い位で、男子は、元來無作法である。男同士の寄合には、禮儀は必らずしも必要で無い。併しそこへ女が一人這入つて來ると、初めて禮儀といふものが生れるわけて、世の中の男子をして、紳士の作法を辨へさせるものは、即ちこの淑女であります。殊に婦人は家庭に在つて、妻としては夫に對し又母として子の教育に對し、未來の紳士淑女を養成する職分があるのである

から、此の任務を果す覺悟が無くてはなりません。これが即ち文明國一般の思想であつて、人と人との間に禮儀の缺けて居るのは、野蠻として擯斥せられ、其の社會に齒せられないのである。まづ日本流に分り易くいへば垢ついた衣服を着たり、時の風俗に反した身形をしたり、汚れた襟をしたりして居ては、とても社會の一人として存立する事の出來ないところから、これに就て八釜敷い制裁を置くやうになつたのが禮法で、即ち今日の文明社會てふものゝ表面であります。

音樂と家庭

東京音樂學校教授　富尾木知佳

△從來の家庭と音樂

音樂が家庭の娯樂として必要なることは今更ら申すまでもありません。併し從來日本の家庭には琴だとか、三味線だとかいろ〳〵の樂器もありますが、それは單に婦人や令嬢方の手すさび、氣晴し位に彈くに止つたもので、未だ眞に家庭の娯樂として數へることは出來なかつたのであります。

近頃になつて漸くその必要は認められて來たといふものゝ、それはホンの一部だけで、世間一般の人士にはまだ充分に解せられてゐないやうに思ふ。

成程、一寸遊戯室を覗いて見ると、たまにオルガンなどを備へてある家もあるが、それは只子供が慰みの爲めに用ふる遊戯道具か何ぞのやうに心得て、一家の主婦は見向きもしないといふ風なので、これでは折角金を拂つて買つて置く必要も無かろうかと思ひます。

△眞の娯樂的のものはない

既に家庭の娯樂となつてゐるものでは、生花、茶の湯を初め、歌留多雙六等いろ〳〵ありますが、それ等の中には子供には喜ばれても大人には樂しくないものもあり、又大人には至極面白くても子供には些少とも興味を惹かぬものもあつて、一家中共に團欒して愉快に樂しみを得るといふものは誠に少いのであります。

又藝術的娛樂の方面を見ても、歌を詠むとか、繪を書くとか之れにもいろ〳〵ありませうが、之れはその人が感興をもつばかりで、同趣味の人の會合した場合なら兎も角、一家團欒の娛樂として適當でないとは明かであります。此の他にも家庭的娛樂として歌留多などは多勢で樂しむことも出來、方法も簡易で見たところ優美でもあるが、どうもその目的といふものが、ひとりばかりでなく、玉突にせよ、圍碁將棋にせよ、大抵皆勝負を爭ふものばかりで、終には勝負によつて賭をするといふ事になる。

さうなると、初めの中に餅菓子や蜜柑を目的として樂しんでゐたものが、段々進むにつれ品物位では面白くないといふ風になつて來て、子供達には知らず〳〵の間に投機的精神を鼓吹するといふ弊があつて大いによくない事だと思はれる、しかもそれでは折角一家團欒して互に胸襟を開き、精神の融和するやうにといふ娛樂の目的には段々遠ざかつてゆくばかりでありませう。

苟にも一家の主婦たるものは、よろしく之等の點を考へて、出來得るだけ愉快に、圓滿に、各自隔てなく樂しみ合ふといふ方法を取らねばなりませぬ。

然らば、前に述べた娛樂のやうに、弊害もなく單獨趣味にも陷らず、其の上愉快に樂しみ得るものと云へば何が最も適當であるかといふに、それは云ふまでもなく音樂に越したものはありますまい。

少くも家庭の娛樂といふ以上は、個人々々で樂しみを得るに止まらず、是非共一家團欒して親子、夫婦、兄弟、姉妹その他婢僕に至るまで、共々に樂しむといふものでなければならぬのであるから、單に此の點から考へて見ても、音樂は一般の人に共通の趣味と滿足とを與へ、婦人でも、婢僕でも、年寄でも、子供でも、多勢同時に愉快を得ることが出來、又、遊戲と共に行へば更に興味を覺え、優美の感情とか、各自思想の融和とかを計るのには最も適當であるから、家庭的娛樂として恐らくこれに勝つたものはないでせう。

△音樂の素養なき婦人は

胃活

右は明治二十七八年戰役後我國民の體格に付て余等大に感ずる所あり即ち日本人の普通病なる胃病患者を救濟するの目的を以て學理と實驗とにより共同研究の結果發見したる胃病新藥にして效能確著誠に驚くべし之を廣く天下に弘布し世の胃病患者を救はゞ實に大日本國民の幸福なり

陸軍軍醫監正五位 長瀨時衡 印
陸軍藥劑監從六位 石塚左玄 印
海軍軍醫少監從六位 日向次作 印
海軍大軍醫正七位 横井太郎 印
陸軍大軍醫正七位 門倉梅三郎 印

◉醫藥用胃活錠は有名なる五大軍醫の合議製劑胃活を加減し更に二三の新特効藥を加へた新式の錠劑であつて、完全なる健胃劑として現今の世界に知られたる藥品中其類が無い重に醫藥用として作られしが、今回廣く世上に發賣することとなりぬ

◉胃活錠は携帯に便に飲むに湯水を要せず、飲めは直に溶解し他出の際臨時服用の便有り

◉歐米の民間療法とは、胃活錠にて胃弱症を治するの類なり

理想的健胃劑



（注意）◉胃活は女の如し、胃活錠は男の如く、胃活よりは其力強し
併し胃活の爲する事の出來ぬのは女の爲する事の出來ぬと同じ道理である

胃活と胃活錠効能

◎溜飲◎胃弱◎慢性胃弱◎胃加答兒◎消化不良◎胃痛◎食慾不進◎宿醉◎食傷◎腸滿◎胸痞◎胃痙等一般の胃病に著大の効能ある靈藥なり論より證據二三週間分を試めし玉へ

▲定價▼

胃活	胃活錠
壹圓	壹圓
六拾五錢	五拾錢
四拾五錢	貳拾錢
二拾五錢	

●全國無郵送料●

發賣本舖 東京銀座一丁目廿三番地 大阪南久寶寺町堺筋東 山田安民藥房

（かの一）

巖谷小波君
岡野知十君 序
伊藤松宇君 編

新編

蕪村几董附合集

▲兩翁眞蹟寫眞版數葉挿入▼

今や俳諧の研究は初期の礫發句時代を去りて第二期の連句全盛時代とはなれり此連句研究に最も好適なる蕪村几董の附合集は編者が多年の渉獵と非常の苦心とを以て拾集したる一大模範的參考書にして苟も斯道に遊ぶの士は必ず座右に一本を供へ高雅なる連俳の妙趣を味ふべきなり

全一冊洋裝四六判
紙數百八十六頁
正價金參拾錢
郵税六錢

（その二）

東京高等師範學校長 文學士 嘉納治五郎君序
孔子祭典會委員長
學習院教授兼東京高等師範學校講師 文學士 有馬祐政君編

孔子言行錄

全一冊

近日發行

洋裝袖珍
製本高雅優美
口繪 孔子尊像 子思
顔子、曾子像

時運の推移と社會の情勢とは篤學謹厚なる有馬學士の手を假りて本書を編錄せしめ、恰も第二回孔子祭典會の擧行に際して刊行せらるゝに至れり。文辭簡潔にして意味深長、眞に大聖の音容に接するの想あり、且つ附するに諸弟子及子思の言行錄を以てし、一々詳密なる注解を施して立ろに領悟せしむ、精神の修養に最上の資料たると共に、文字の習熟に最初の指南たるものとす。苟くも此二方面に志ある人は必ず座右に供すべき無比の寶典なり。

東京博文館本町

英語世界編輯部編

好評再版

四十年度入學試驗 英語問題詳解

附 試驗委員之成績講評及受驗合格者之受驗談

洋裝四六判美本紙數約二百頁

執筆者（ABC順）
深澤由次郎
今井信之
上條辰藏
喜安璡太郎
長井氏晸
佐川春水
武信由太郎

講評試驗委員
神田高商教授
高島高商教授
村井高外語教授
平井外語教授
畔柳高校教授

發兌元 東京 博文館

入學試驗中最も學生の難しとするは英語と數學なり。此難關に應ずる最も捷徑の策は果して何ぞや。所謂雑句集を鵜呑にするも一策たらん。所謂受驗科に入學するも一法ならん。而も當の敵たる試驗問題其者を研鑽して問題馴れのコツを得るは更に要訣中の要訣なり。本書は昨年度廿八官立校の入學試驗英語問題に無比の詳解を施し、附するに試驗委員の成績講評と、受驗合格者の受驗談とを以てし、天下幾萬の受驗者が應試準備の信頼すべき參考書たらんとす。世に類書の刊行なきにあらねど其の答解の正確精緻なると叮嚀懇切なるとは窃に編者の誇とする所なり。

正價金四十錢 郵稅六錢

文學博士 井上哲次郎先生序
文學博士 元良勇次郎先生序

西田敬止君編

益軒樂觀

現代教育社會の大好評を博したる益軒十訓の編者なる西田敬止君は今又此の益軒樂觀を編して世に公にせらる抑も近年世の青年男女間に一種厭ふべく忌むべきの思潮滔々として横流し其の弊途に卑猥淫靡に陷り又は悲觀煩悶に苦しむもの日一日より多きは識者の夙に憂慮する所に非ずや此の時に當り益軒先生の如き本邦教育家の泰斗たる先哲が如何に其の身を持し如何に其の心を持し如何に宇宙を觀じ如何に人生を觀じ而して如何に死生の衢に處したるかを彼等に知らしむるは最も緊要事件に非ずや乃ち此の書の公刊ある所以なり蓋し益軒先生の樂觀は單に精神修養の法に於て世道人心を裨補することの莫大なるのみならず又身體保養の術に於て吾人を示導すること實に丁寧親切を極めたり先生の語に「心を養ひ身を養ふの工夫二なし一術なり」とある以て其の歸趣を知るべしされば此の書は獨り青年男女の針砭たるのみならず又以て無病長生を欲する者の藥石たるべし天下の老少男女何人も一讀して此の言の虛ならざるを知れ

全一冊 四六判クロース製美本 正價六十五錢
紙數三百八十頁 郵稅八錢

東京日本橋本町 博文館

女（かの三）

藤村 島崎春樹君序
理學博士 齋田功太郎君閲
農學博士 稻垣乙丙君閲
田中貢一君著



正價……金壹圓五拾錢

小包料十二錢

洋裝菊判總クロース美本紙數約五百頁
著色石版繪十數葉挿圖九十四個

著者は、植物學者にして、當時農科大學に其が專攻の學を修めつゝありと雖も、兼れて文學に對する趣味深く、其造詣の深き、往々世人の意表に出づるものあり。著者は、世の所謂科學者の思想の餘りに乾燥にして、一に組織的事實の歴史家に過ぎざるを慨せられ、花界百般の事項を、一般家庭はいふに及ばず、其道にあらざる諸學生、或は文學者、神學者、哲學者等と雖も、無量の趣味と、絶大の興味とを以て、覺えず卷を解かしめ、自然の美妙、壯嚴を味ひ得しむる樣、特に小説として發表せられたり、本書は、五月に於ける金鳳蝶の講話に始まり、翌四月の春蘭伯の物語を以て終る、書中、愛らしき花子、勝の兄弟と、美はしき此等由花との間に縷々として演出さるゝ光景の、如何に優しく、將た興味深きかをみよ！ 而して之が副たる幾千の由花の如何に書中に活躍たるかを見よ！ 書中の花は、悉くこれ活ける少女活ける紳士なり。 花の聲は、悉くこれ活ける天の聲なり、其内容の豐富、該博にして記事の痛快、切實なる、此種の書類中未だ曾て見ざるところにして、優に、現時の自然科學界に於ける、破天荒の作物として推重するに憚らず世の所謂文學と科學との調和を云々するの士は、先づ一度本書を繙かざるべからず。

（かの四）

津田梅子女史
新渡戸夫人まり子 序文

河井道子女史
辻村靖子女史 合譯



家庭小説 ひとりぼっち

洋裝四六判
總クロース上製美本
紙數三百六十頁
正價金六十五錢
郵稅八錢

本書は千八百九十七年發行エミ、ラフィーバル女史の著にかゝる「水銀のやうに清く獨樂のやうに敏捷な」英國の一少女を主人公として其天眞を枉げず敬虔の念篤き性質を田園生活に於ける短時日の出來事に描寫して紙上に躍如たらしめしもの由來日本の家庭小説中稀に有る所と云ふを躊躇せざるなり頃日女子英學塾教授河井辻村二氏譯述して世に公にす其内容の如きはこゝに喋々するを須ひず江湖の人士乞ふ閲覽して批評の棨を賜へ

販賣用電話 本局二六二〇　發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館　振替貯金口 第二百四十番

謠曲評釋

大和田建樹先生著（毎月一回發行）

第七輯……既刊 次輯續出

全部九册

和裝美本紙數約二千頁
每卷貳百五拾頁
正價一册金參拾五錢
郵稅一册金六錢
全部九册金貳圓八拾錢
外要郵稅

大和田先生の謠曲通解出でゝより茲に十有五年、四方購讀諸君の增加する事、年一年よりも多きは、弊館の特に榮とする處、更に今般先生に請ひて大訂正を加へ總說を增し、曲數を增し註釋を增し評語を加へ、總假名を附し、其他大に體裁面目を一新して、謠曲評釋と名づく、全部を通じて曲名を伊呂波順に並列し、終に語釋の索引を付して讀者諸君に至便ならしむる如きは、其最たるものなるべし、

第一輯

第一卷 （總說）○能の起原○流儀の分れ○謠の作者○謠本○内外二百番○明和の改正○謠の文章（上）○謠の文章（下）○裝詞○謠本の符號○題目の異同

第二卷 ○岩船の大寺○淀潜○一角仙人○生田敦盛○生贄○籠太鼓○祇王○鉢木○花車○花筐○班女○放下僧○放生川○白樂天○羽衣○橋辨慶○半蔀○橋供養○芭蕉○雞龍田

第二輯

第三卷 ○錦戸○錦木○伽原○辨内侍○融○鳥追○東方朔○東北○東岩居士○藤榮○木賊○朝長○知章○巴○竹生島○張良○長兵衛尉○千引○龍虎○呂后○輪蔵○鵺○大蛇○姨捨○女郎花○小鍛○和田酒盛○往生院○和國○蛙○苅萱○通小町○合浦○葛城○葛城天狗○躯平○鐘引○鐵輪

第三輯

第四卷 ○烏羽○邯鄲○咸陽宮○景清○高野物狂○笠卒都婆○杜若○柏崎○加茂○鴨長明○加茂物狂○春日龍神○弱法師○頼政○夜討曾我○芳野○吉野天人○吉野靜○第六天○大瓶猩々○當麻○大佛供養○泰山府君○大會○谷行○高安小町○高砂○忠度○忠信○龍田○立田物狂○湛海○田村○丹後物狂○檀風

第四輯

第五卷 丹後物狂○唐船○道明寺○道成寺○玉葛○玉井○竹雪○卒都婆小町○園田○土車○土蜘蛛○鶴岡○鶴龜○鼓瀧○經政○寢覺○難波○雷電○羅生門○室君○六浦○鱗形○善知鳥○鵜飼○歌占○空蟬○采女○浦島○雲林院○鵜羽○鵜祭○雨月○右近○浮船○梅○梅枝○井筒○野宮○野守

第五輯

第六卷 ○老松○大原御幸○大社○大江山○落葉○翁○隱岐院○黑塚○車僧○皇帝○花月○吳服○鞍馬天狗○熊坂○草薙○九世戸○國栖○養老○楊貴妃○山姥○八島○鞠○松風○松浦鏡○松蟲○松尾○松山鏡○松山天狗○滿仲○枕慈童○卷絹○舞車○源太夫○元服曾我○現在七面○源氏供養○絃上○藤戸○二人靜○船橋○船辨慶○富士太皷○富士山○伏

第六輯

第七卷 木曾我○伏見○碁○木幡○護法○粉川寺○小鍛冶○小督○小袖曾我○項羽○胡蝶○戀重荷○江島○江口○箙○定家○天王寺物狂○天鼓○調伏曾我○淡路○蟬丸○安宅○愛宕空也○熱海○敦盛

第七輯

第八卷 嵐山○鸚鵡小町○藍染川○惡源太○綾鼓○海士○葵上○阿漕○朝顏○蘆刈○飛鳥川○西行櫻○佐保山○逆鉾○實盛○三笑○草子洗小町○櫻川○佐々木○鷺○切兼曾我○礒○祇王○清經○木曾願書○金札○熊野○夕顔○雪○遊行柳○弓八幡○和布刈○通盛○三輪○三山

販賣用電話 本局二千六百廿番

東京本町 博文館

振替貯金口座 第二百四十番

（かの三）

翠堂松村政親君著

實用 作文獨修書

（全一冊）

洋裝四六判並製
紙數約三百頁
正價金二十八錢
郵税六錢

此の書は專ら實用を旨とし先づ作文の階梯として平常口に云ふ語を普通の文語と書翰の文語とに更める事を各品詞に分ちて數千言を擧げ次に書翰文は十五類に別ちて其の作法より認め方等まで說明し尙百數十通の作例を口語と文章と對照せしめ公用文は其語づかひの事より延いて願屆書式の必要なる十數通を擧げ示し次に普通文は記事敍事日記紀行傳記逸話歷史祝辭祭文弔詞ならびに解釋議論辯駁文等逐一其作法作例文範を示し又文體の種類より形容法修飾法等の法を說き例を擧げて示し總て詳密丁寧に口語にて說明したるものなるを以て苟も假名文字を知る以上の者は之を讀みて手紙のやり取り受取書注文書等を始め如何なる家にも必要なる願屆書等をも認むるを得べく又進んでは總て高尙なる書翰は云ふに及ばず公用文記事敍事文議論文等何等の文章も此書に依りて意の如く應用記述せらるべし實に學生といはず實業者といはず丁稚小僧手代番頭三太夫檀那に至るまで上下に通じて適當なる獨習書なり

竹貫登代多君著

再版

算術獨習書

全二冊

菊判洋裝並製
上卷……紙數三百八十八頁
正價四拾五錢　郵税八錢
下卷……紙數二百四十二頁
正價三拾五錢　郵税六錢

出でたり！言文一致にて算術の初步より誰にでも解し得る如く認めたる算術獨習書は出でたり!!! 著者は誰？數學世界主筆竹貫登代多君也。機敏なる學生諸君にして、先生の名を知らざるものありや。方今、算術を分り易く記述すること竹貫君に及ぶものありや！敢て薦む大方の學生諸君に、此書一度自己の所有に歸す以上は、僻邑に獨學せるものと中央都會に良師に就て勉學せるものとの差異は取拂はるべし、何となれば算術獨修書は、良師に超越すること數等なればなり、敢て勸む。書中の順序は決して奇拔なるものにあらず、世間一般學校に就て敎授するものと毫も異なるなし、之れ等しく文部省令に準據しあればなり、只だ此獨習書の特色は說明の親切にして且つ分り易き點のみ、されば獨學者に頗る便利なるは勿論他の一般學生には良好なる復習書なり各學校入學受驗者の福音なり、敢て天下の學生に薦む。

販賣用電話二六二〇番　東京本町 博文館　振替口座番號二百四十番

（かの六）


新荷到着
洋傘
鞭杖
流行新形各種
仙女香
坂本商店
東京市京橋區南傳馬町三丁目
電話本局
一四六
仙女香鞭杖ハ文政年間ニ開業ス


衣服洗淨
一名シヤボンイラズ
玉川
玉屋商店
支店
東京本町


懷中要藥
登録商標
高木
清心丹
清心丹特有の効能は常に食後食後に服用すれば消化を速にし胃腸を健全ならしむるにあり
東京市日本橋區元大坂町八番地
本舗 髙木與兵衛

女(かの八)

勿論その音樂は藝術上の價値を云々する程のものではなく、家庭の娛樂に供しやうとするのであるから、技術は下手でも、六ヶ敷い樂譜は奏せなくとも構はない、唯今後の婦女子は料理や裁縫と並び立つて、最も必要なる技藝として此の家庭娛樂用の音樂を學んで欲しいのであります。

世の中が益々進歩し、生存競爭の烈しくなるにつれて男子が家にある間は少く、社界に立つて隨分劇烈な



活動もしなければなりません、然して活動の烈しければ烈しい丈けそれだけ、溫かい家庭の慰安を以て充分に男子を慰撫することが必要になつて來るのであります。近頃は御婦人の間に料理法の研究などが大分盛んになつて來たやうですが、無論料理だとて甘味しく調理して貰はなければなりませんが、併し何程その料理が甘味しいからとてそれ許りでは到底終日の活動にすつかり疲勞してゐる男子を忘れしむるまで充分に慰籍する事

は出來ますまい。如何に裁縫や家政に長けてゐたからとて、この娯樂といふものゝ力を借りなかつたなら、如何して充分に夫を喜ばせる事が出來ませう。

或は夫の留守中に起つた出來事を語り合ひ、無邪氣な子供を對手に笑ひ興ずるのも誠に愉快ではありますが、しかしそれはいつか話の種も盡きて興のさめる時が來るのです、そんな時には是非共この音樂によつて愉快を得るやうにしなければなりません。

昔から女子の仕事としては裁縫を第一に數へたものでありますが、今後の婦女子には最も必須の手藝として音樂の修養をやつて置かなければなりません。これはあまり極端な言分のやうですが、從來料理や裁縫に就いて心得のない婦人は一家に主婦たる資格がないものだと云はれてゐたと等しく、今後はどうしても、音樂素養のない婦女子は全然人の妻となり、一家の主婦となる資格がないものだと私は斷言するを憚らぬのであります。

△樂器として何が一番適當か

では、家庭音樂として何が一番適當であるかと云ふに、先づ洋樂ではピアノ、ヴアイオリン、オルガンなどで、日本の樂器では琴、三味線などであるが、此の日本の樂器は元來その音調が悲哀に出來てゐて、徒らに涙を催さするものが多く、さびしいとか、悲しいとか、いふ哀感的に感情をのみ惹き起すので、家庭の娯樂として樂しむ點に於ては所詮洋樂の爽快なるには及びません。

中にもオルガンなどは音調も劉麗だし、練習も比較的容易で、それに價も安くて求められますから、普通の家庭にはこれが最も適當の樂器だと思ひます。

△歌詞はどんなものが可いか

樂譜や歌詞などにしても、娯樂といふ趣意に叶つたものを撰ぶべきは勿論、悲哀の感を誘起するものとか、汚い感情を歌つたやうなものは絶對に避けて、成可く温かい、清い、美しい情の含まれたもので、子供にも分り易いものでなければならぬ。よく西洋などでは、極く短いもので一寸した面白い歌がありますけれ

ど、どうも日本には適當な歌がなくて困るのです。小唄や流行唄などいふ類のものが家庭の娛樂としては最も可いやうに思はれますが、これまで在來つた普通のものは、淫猥俗惡極まるものばかりで、所謂子供などの耳に入るべきものではありません。で、私は是非共あの小唄の調子でやさしい情のふくまれた歌詞を選擇して、それを歌ふやうにしたならよからうと思ひます。だが、やさしいと云つたところで、いつまでも花鳥風月ばかり繰り返してゐるといふ事も出來ないから、同じ自然を歌ふにしても成るべく子供に新らしい智識を與へる風なものを心掛けねばならぬ。



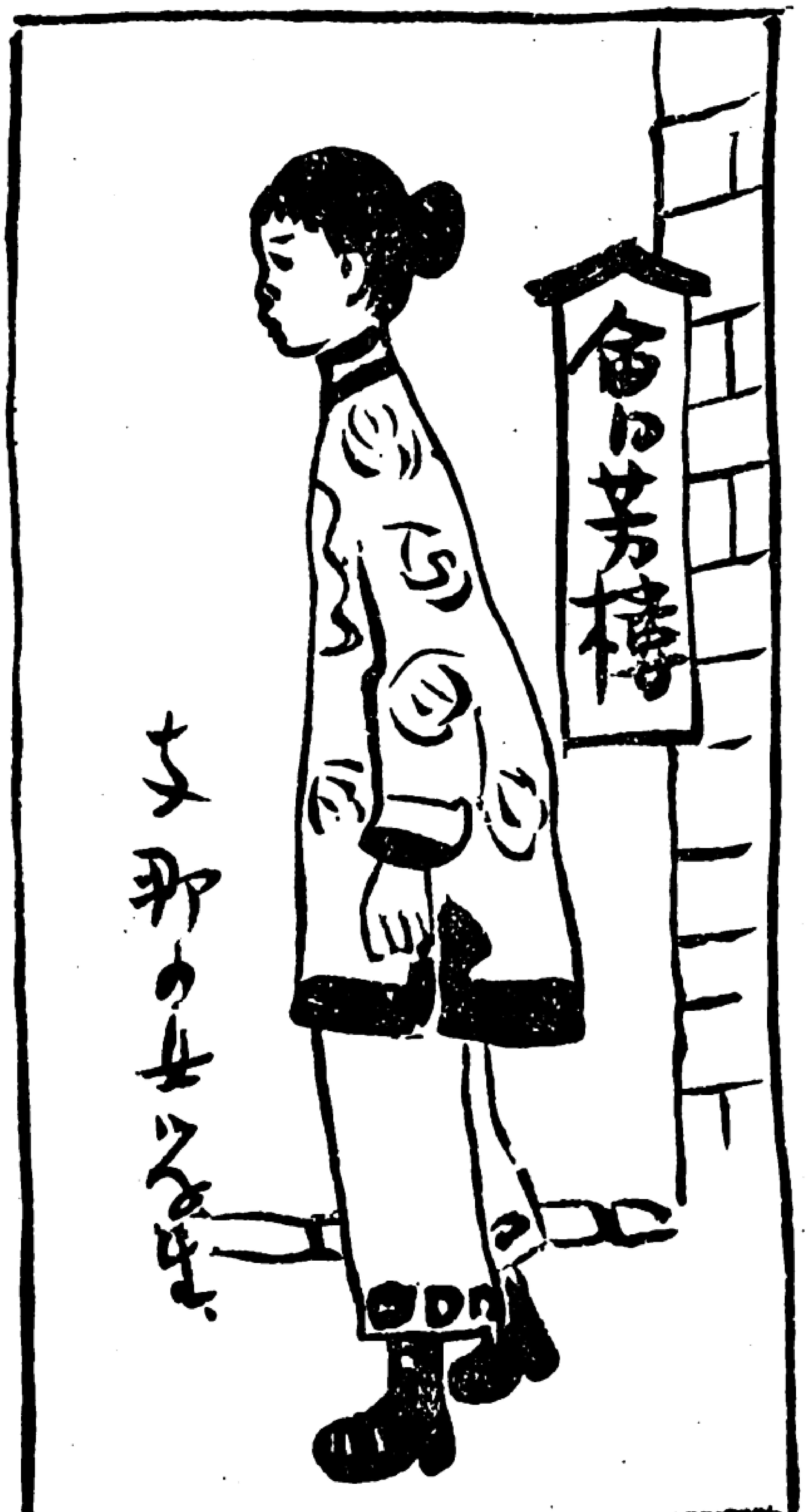
又戀愛を歌ふにしても從來のやうなものでなく、も少し清い、假令ば姉妹の愛とか、朋友の愛とかいふ綺麗な愛情を詠み込んだものならば、兒童の美しい感情を發展させる點に於て最も可い事と思はれます。

△客人待遇上の效果

かくして音樂が家庭に於て重んせらるゝやうになると、單に一家の娛樂とか、清新なる趣味の友とか、美しい感情を養ふなどいふ個人の利益のみに止まらず、進んで社界一般にまで音樂趣味を普及するとが出來るのである。西洋には一日でも音樂會の催されぬといふ

日はないのであるが、どうも日本ではさういふ催しが少いために圖らず不都合の生ずる塲合がある、假令ば外國から客人でも來ると、他に何も見せるものがないといふので、すぐ芝居か寄席へ案內したり、或は如何はしい處へ引き連れてゆくものさへある。それでは此方で折角金を費し、心を盡して歡待した積りでもその客人に取つては何の愉快も趣味もなく一向に有難くないのです。

又、外國人に日本の音樂や淨瑠璃の分る筈はなし、解らぬものゝ面白かろう筈はありませんから、つひ客



人に對しても氣の毒な事が多く、實際不都合を感ずるから、斯かる塲合にしても簡單なる音樂會位は自己の宅でも開かれるやうにし、又世間に於ても絶えずの音樂會が催されるやうになつたら、ひとり外國人を待遇する上ばかりでなく、親戚知己朋友などが集まつた時にも、至極都合が可いのである。

△音樂と男女の墮落

或る一派の人達は、とかくこの音樂會なるものを青年男女の汚い關係を結びつける機關か何ぞのやうに心得て、一概に排斥するものもあるが、全く音樂といふものを惡用すればさういふ

動機を作る場合が無いでもありませんが、併しそれは音樂その物とは全然別問題なのであります。眞に音樂を樂しみ、又何所までもそれが目的で會合するものならば、決して音樂の爲めに身を誤るなぞいふそんな不眞面目な男女のあろう筈はない。

△切に希望する

兎も角、世間一般の人士が音樂趣味を解するやうにするのは最も肝要であつて、一家の平和を維持する上には無論の事、親類同士寄り合つた場合とか、友達などの訪づれた時にも、つまらぬ茶話や世間話に耽るよりも、すでにこの家庭娛樂用の音樂によつて互に趣味を分ち合ふやうにし、各自得意の歌を奏するやうにしたら樂しみの中に多大の利益を得られるのである。

なほ一寸した來客の應對の場合などにしても、すぐ音樂に就いての話を持ち出される位な趣味智識をも養つて頂き度い。さうすれば婦人の品位も自然と高まつて來る事になるのでありますから、切に私は此の家庭音樂の實施を世の婦女子に希望するのであります。

美顔の栞

◎石鹼よりも糠――石鹼は唯だ垢を落とすだけで、顔に艶が出ませぬ。そこで混合砂の入つて居ない純粋の糠を使ひますと皮膚に榮養分を殘しますから大層艶を好くします。

◎髮の洗ひ方――顔を洗ふ時に唯だ力を入れてゴシ〳〵擦つては皮膚が荒れるばかりで却つて害になりますから、成るべく静かに擦するのです。それも顔の毛孔が湯で能くゆるんだのを待つて下から上へと逆に擦するのです。又湯から上り際に冷水を手に掬つて顔の冷えるまで擦すると一層艶が出ます。

◎髮の洗ひ方――西洋人の髮は黄金色を尊びますから常に鑛物性の洗粉を用ひますけれども、日本人には植物性でなければなりませぬ。一番宜いのは椿の實で洗ふと赤くもならず拔毛も少なく艶が大層出ます。度數は月に三回は必要です。

◎髮の結ひ方――日本の婦人に頭の禿げる方の多いのは髮洗ひを怠るからでもありますが、一番の原因は髮を結ふ時の不注意にあるのです。大抵の方は髮結が來るまでは解かずにお出でゝすが、之が爲めに中が蒸れて毛を枯らして了ひます。そこで先づ髮結の來る前に一度解いて空氣を入れチノリン香水を附けて指先で頭に揉み込む樣にせねばなりませぬ。（造顔はつ子女史）


われ等の運命を
係りてこの
のうちにあり

私の行ひつゝある育兒の實驗

高島壽子

夫人は高島平三郎氏の令閨兒童教育の熱心家で其の育兒の方法は俗に流れず、理に偏らず、一般家庭の参考となる節多からんとおもひこゝに掲げぬ。

▲授乳と泣聲鑑別

私の子供を育てますのは大體に於てあまり深く干渉せず、自然の理に人爲を施こし、人爲の理に自然を用ふるといふ方針を取つて居ります、でまづ體育の方から申せば嬰兒期には授乳の時刻を一定することが最も大切で厶います。腸胃病の日本に多いのは全く子供の時に授乳が不規則である爲だと申しますから、誕生後一二ヶ月は約二時間隔に三十分位づゝ飲ませ、三四ヶ月になれば三時間隔といふ割合に漸次に低減して、乳離するまでは、假令泣いても時刻以外に一切飲ませてはなりません。此授乳時間を守りさへすれば、二時間なり三時間なり、暇を利用して家政を整理することも出來ますし、且嬰兒が他日成長したる時分に、規律を守る習慣を養ふ基礎になりますから、細事のやうで影響は大きなものとなるのでございます。

嬰兒が泣くからといつて乳を與りますのは、疾病の原因となりますから注意しなければなりませぬ、嬰兒の泣きますのは當然で、之れは肺臓の働を盛にし、言語の出づる調節となるものですから、泣くからと言つて乳を與るのは大變間違つた事で厶います。尤も子供は乳を求むる外に苦痛の爲にも泣きますから、其れを鑑定しなければなりませぬ。乳を求むる時の泣聲は緩やかですが、蚤蚊に刺されたり、便を催したり、お腹が痛んだりする時には火のつくやうに調子が至つて鋭く聞えますから、泣きさへすれば乳をやるといふことはいけません。

▲神經過敏の鎭靜法

授乳に亞いでは沐浴が大事で、私は子供の誕生後一

年間は一日も缺かさず微温湯で身體を洗ふことにしてゐます。御承知の如く子供は老人と同樣に神經の極めて過敏なもので御座いますから、皮膚の刺戟を避くる爲には沐浴の外、尚肌着は縫目を外にして之を着せますと共に、温度を保つ力が弱くして且寒暖の變化の烈しい絹布類は可成之を避けて、寒いと云つて炬燵に入れたり、暑いからと云つて裸體とするやうな事はしないで、寒暑に處して其の變化に應ずる工夫を致しました、又間食は一切與へませぬと、却つて羨む心を起して果ては卑しくなりますから、時と物とを限つて與へるといふ方針で、宅のみならず出入する家にも賴むで置いたやうな次第です。

▲小兒の特性を認めよ

次に德育の方面では先づ小兒の特性を知らなければ、角を矯めて牛を殺すやうな躾方となる事がございます、例へば小兒は一般に模倣性と反抗性の至つて强いものですから、周圍の人々は注意して良い習慣を養はなければなりませぬ、又其反抗性で親の命令に逆ふ場合には、直ちに之を叱らないで却つて此性を他の方面に善用して往く事が大切です。

尙、子供を叱りますには其の人格を認識するといふ事が肝要です、若し人格を認めず名譽を重んじないで口に任かせて馬鹿呼はりなど致しますと、或は自暴自棄の結果眞の馬鹿者となるかも知れませぬ、又、妄りに束縛を加はへたり壓制を試みなどして、其の人格を傷けてはなりません、可成自由を與へると共に又一面には服從を養はなければなりませぬ、服從といふ事は獨立自尊などの言葉に對して、如何にも卑劣なやうに誤解されてゐますが、子供が他日社會の秩序を保つ基となりますもので、服從の精神を重んずる人にして、始めて獨立自尊の人となるもので御座います。

▲罰と褒美の豫約

即ち父母の命令に服從して往く習慣を養ふ事に心掛けて、其の命令に從はない强情の場合には、餘儀無く

罰を加はへなければなりませぬ、私共が罰を加はへまするのは、只暗い處に入れて悔ひ改めさせますので、荒々しい手段を取ることは一切致しませぬ、最終の罰が先づ押入に閉籠めますので、悔ひ改むる樣子さへ見へますれば、直ぐに出して其改めたことを賞むるやうに致して居ります、放慢に失せず慘酷に流がれず、自由を養ふと共に謹愼を養ふことは、子供の躾の上にも至つて大切な事と思ひます。



罰の反對で褒美を子供に與るが善いか惡いか、この考は二つに分かれてゐますが、其の方法如何によつては與へても善いと思つてゐます、褒美の目的は一つは過去の功に酬ゆる爲と一は將來の勤勉を勸むる爲めですが、子供に褒美をやる精神は親心の只嬉しいとか可愛いとかいふ外に、子供自身の行爲に對する、善惡の判別がつき兼ぬるものですから、之を知らす爲に善事を褒むることは、將來の

勤勉を勸むることになりますので良い勵みとなりますが、單に褒美の貰ひたさに善事をするといふことは既に二義に落ちますから、褒美の豫約を避けねばなりませぬ、即ち今度の試驗に一番となれば何品を買つてやるといふやうな豫約は、動もすれば他日報酬と褒美との區別を沒却して、金を貰ひ品を貰はなければ仕事をしないといふ傾に流がれて、賞與を目的としない精神上の働きに對して尠からぬ影響を與へますから、注意しなければなりませぬ、畢竟褒美は思ひかけぬ時に貰ふから嬉しいので御座います。

褒美の方法には玩具、學校の日用品、或は精神的の賞與といふ風に、相手の年齡と思想との相違によつて違ひますが、結局は良心の修養といふことで、換言すれば子供が良い事をすれば自分の心持が良いといふやうにならなければなりませぬ、要するに褒美を與へて良心の修養を助けますのは、恰も植物の生長を助くる爲に木を立て竹を當てゝ曲らないやうにするのと同じ事で、植物の成長さへ出來れば竹や木がなくとも善いやうに、子供の良心を成長させるまでに助くる手段に過ぎないのであります。

▲自重の心の養ひ方

小事なれども子供に自から帶を結ばせ足袋をはかすことは、其の獨立心を養ふ寄處となりますから、縱令其の結び方や穿き方の體裁が拙くつても、笑はないで之を勵ますことが大切です、又家に犬や鷄を飼つて子供に飼養の責任を持たせることは、庭に樹木を培養させるのと同じく、其の發達の有樣と變化の狀態とに注意して、朧ながらも生活の觀念と慈悲の心を起こさせるのみならず、自重心を養ふ基となります、何故かと申せば子供といふものは始終人々に支配されてゐますもので、内にゐる時は父母、外に出でゝは學校の教師といふ風に、絶えず干涉せられてゐますから、犬なり鷄なりを飼養して、一旦其の飼養の法を聞いた後は、自分の心に依つて思ふまゝに之を世話して、結果の良否は全く自分の責任といふ觀念から、引いて自重心を

起こすもので御座います、論より證據、子供に弟妹が出來ると急に大人しくなつて、其の平生が一變するのも全く此理であります。

▲自動的の教へ方

次に智育の方面では子供の智識の進むに從つて、其の思想感情の進むでゆくことを考がへて、其の思想感情の發達する順序に相應した教育の方法を取るといふことが肝要であらうと思ひます。

家庭に於て早くから子供に種々の事を教へて、來客や又は他人の前で其の教へたことを言はせて、巧く答ふれば喜び出來なければ叱ると申すやうなことは、子供を玩弄にする仕打で善くない事と信じて居ますから、私共は言語の誤り假令ばヅとズ、ヒとシといふやうなことは時を見て之を直し、又物を與へる時拾ふ時などを利用して數へ方を教ゆることはありますが、大體に於て特殊の場合を除くの外は、總て他働的に注ぎ込むといふことは一切廢して、玩具でも繪本でも子供の好奇



心に觸れて色々と質問致すのを待つて、始めて一々之に答へますといふ風に自動的の方法を取つて居ります、子供は五六歳になりますと、見るもの聞くものにつけて根掘り葉掘り聞きたがるものですから、其時の答をなすものは確實で了解し易くしなければなりませぬ、曖昧の答をしたり胡魔化したりなどすることは宜しくありません。

繪畫玩具等は子供の記憶力、想像力、同情心等を養ひ、殊に繪畫は美感を養ふものですが、斟酌無しに過度に之を供給することは、却つて注意力を傷つけ且自然の發育を抑へて、遂には倦厭の心を起しますから、能く發育の順序に應じて最初は天然の模擬品、次は變化の極めて簡單な舟馬鳥といふやうな玩具繪畫を與へ、複雜なる歴史畫又は機械的の構造物等は、其の觀念界の進むに伴れて與へるといふことにして居ります、此簡より繁に粗より細に入るといふ方法は最も大切だらうと思ひます。

▲日常の行事を定むること

尙、如上の智德體の秩序ある發育をさせますには、子供が四五歳になりました頃から、日々の行事を定めて一旦之を會得させた上は十分に守らさなければなりませぬ、例へば其の所有の繪畫や玩具等を子供自身に保存もし監督もさせて、其の使ひ方は自由に任かせて特別の塲合の外は干渉しない方針をとつて、子供の日常生活に規律の習慣を養ふ爲に、私は今年十四歳になる長男文雄と、九歳になる百合子と、六歳になる菫との爲に左の行事をさせて居ります。

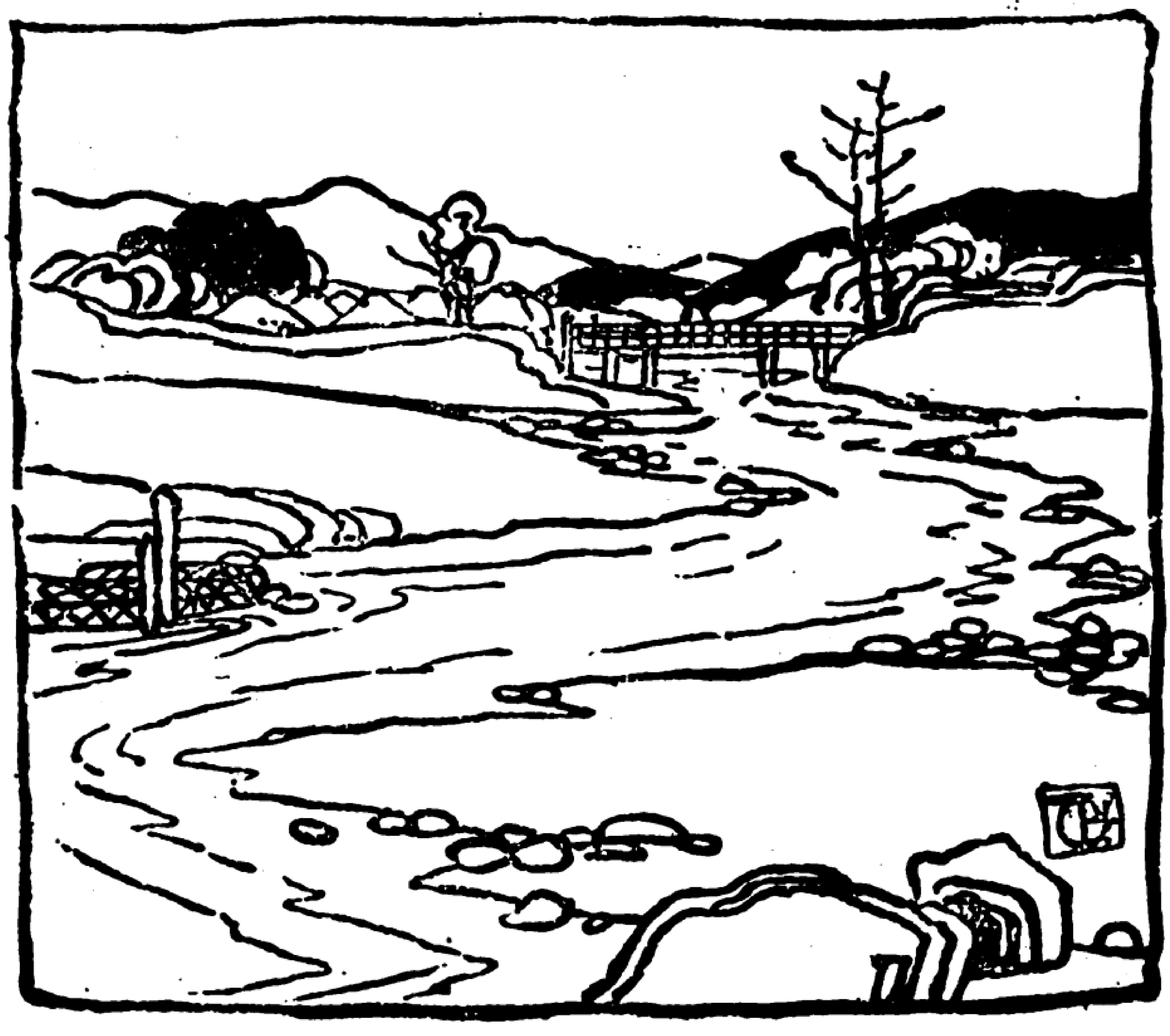
文雄の行事は毎朝六時に起きて蒲團を正しくたゝみ押入に入れること、雞を塒より出して雞小屋を清潔に掃除すること、顔を洗ひ口を漱ぎ齒を丁寧に磨くこと、座敷の庭を掃除すること、食事の際は食物に就いて小言を言はぬこと、午後歸宅後晩餐までは隨意の運動遊戯使歩き、出づる時は父母の許を經ること、日暮に雞を塒に入るゝこと、洋燈をつけて座敷の戸を鎖ざすこ

と、七時より九時まで復習、九時半に就寝といふ事に躾けてゐます。

百合子の行事は朝蒲團をたゝみ、雞に餌と水とをやり、顏を洗ひ齒を磨き、六疊の前のお庭を掃き、行儀よくお飯をいたゞき、八時から學校行き、歸へつて晩餐まで運動遊戲かつは菫さんと武雄さんのお守り、日暮にまた雞に餌をやり、夜分に一寸おさらへといふ簡易な行事。

菫の方は朝泣かずに起きて、獨りで着物きて蒲團をたゝみ、武雄をあやし、お顏を洗つて揚子を使ひ、御飯をこぼさず、優しく遊むで十時にお菓子をいたゞいて、お晝飯の後に新聞を借りに行き、三時にも亦何かを頂いて、七時から七時半までの間にお寢みする。

かやうに子供の年齢に相應した日々の行事をさせて居りますが、別に子供は窮屈と思はないで、樂しく其の行事をやつてゐますので、私共は小さな事ながら日日子供の秩序あり規律ある習慣の、後日に影響することが大きからうと信じて、深く之を勵まして居ます。



泣く子に對する母の注意

▲子供の身體に必らずしも別狀が有るでも無く、只何か氣に喰ぬ事の爲めに拗れて泣き出し、如何に賺しても泣き止まぬとが御座います、家の末子なども、急に大きな聲で泣き出すから、何をしたのかと思つて行つて見ますと、其れほどの事でも何でも無い、只女中の言つた事が氣に入らぬ位の事に過ぎませんのですから、其儘關はず放任つて置きますと、直に止つて了ひます、子供の泣くのは親を呼び寄せて愬へる爲めである事が多いのでありますから、餘まり賺したり騙したり致しまするゝと却つて甚く泣き出すので御座います、泣き度くも無いのに強て泣いて居るのを母親が持て餘して困つて居るのを克く見受けるとで御座いますが、其時は却つてそつくり關はずに置きますと子供の方でも張合が拔けて早く止ります、此頃も幼稚園(明治幼稚園)で或る外國人の子供が、鳥渡した事で拗れて泣き出し、如何しても止らぬので子守が弱つて居ましたから、妾が「今少しお泣きなさい、泣く方が宜いんですよ」と申しましたら、直に穩しく止りました。

▲子供の性質に依つて色々賺す手段を變へなければなりません、中には嚇かして漸く止るやうなのもあります、矢張り此間の事で御座います、幼稚園で之れは日本人のお兒さんで御座いましたが、拗れて泣き出したのが、餘んまり甚く泣いた爲めに、咽喉の具合で如何しても止らないので、左樣に甚く泣いて居つては身體の爲めにも善くないと思ひまして、仕方が御座いませんから、「餘り泣くと咽喉から血が出ますよ」と申しましたら其の血と云ふのが怖くなつたものと見えて、今度は自分でも頻りに止めるやうにして居ました、又小供に依つては此方へ來てオルガンを奏いて御覽などと騙して徐に賺すやうの塲合も御座います、尤も拗れて居る時は然んな事では却々止りません。

▲先般或る幼稚園を參觀致しましたが、寔に皆行儀宜く、一切先生の指示に從つて靜肅に遊んで居りました、尤もこれは舊式の西洋風の幼稚園であるからでもありませうが、妾共はお行儀などを喧ましく干渉して精神の自由を妨げるやうな行り方は餘り善く無からうかと思ひます、畫を描いて居るのを見ましても、綺麗に下繪が出來て居る所へ只繪具を塗らせるだけでありますが、之れでは、子供の知識の程度を識り別けるとも出來ない譯であります、妾は矢張り同じ畫を描せるにも、下繪に繪具を塗せる位の事でなく、初から目下ならば土筆のやうなものを實際に寫生させるやうにした方が子供の知識を啓發するにも好い方法であるまいかと思ひます、少し横途へ入りましたけれども序だから一寸申しました。(明治幼稚園主事高崎母登子女史)

神經質の婦人に見るいろ〱の變徴

醫學博士　呉　秀三

△神經病と神經質との相違

男子でも婦人でも神經には中樞といふものがある。又末梢といふものがある。中樞とは其神經の働きを支配する所の本であつて、其の重要なるものは頭の中に入つてゐる腦、それに續いて脊骨の中に柱の如くに立つてゐる所の脊髓などである。末梢といふのはそれから出る所の神經であつて、今の腦脊髓から挑發する働きを外に傳へ、又外から來た所の刺戟を中樞に與へるもので、之が詰り人間の神經になるのであります。それが場合によつて病氣になることがある。その病氣が本統に著しいものならば神經病といひ、その中には精神病といふやうな精神の變調まで來すものもある。

又それ迄に至らぬ——中間に立つ所の、病氣か病氣でないか分らぬといふ位の曖昧なものがある。それが所謂神經質であります。

△感受性の強きもの

で茲に婦人の神經質に就て述べて見ると、第一、神經が外から來る刺戟に對して異樣なる反應を呈することがある。即ち外から刺戟がある時に、之に反應することが尋常でなくして大變に劇しく感ずる。光りがさし、音がし、物の觸れるなど云ふ時に、普通の人ならホンの僅かしか感じが起らないのに神經質の女になると大變に甚く感ずる。又之を精神上から云へば、一寸した話で普通の人は殆んど何とも感せぬ場合でも、神經質の婦人は非常に喜んだり、又は顏色を變へて驚いたりする。かくの如き狀態をば神經の感受性が高まつてゐると申ます。

△感受性の鈍きもの

之と反對に又、其感受性が減つて大變に感じが鈍くなることがある。其酷い時には物が茫として見えなかつたり、耳が遠くなつたり、又は物が—、たとひ小刀

などが當つても何とも感じないことがある。又人に依つては一方の感じが強くて、一方は甚だ鈍いとがある たとへば、ある事柄に就いては大したことでもないのにアッと驚いたり、甚く悲しんだりするかと思ふと、他の事柄に對して、極めて冷淡でいかなる慘酷の場合にも更に知らないといふ風に、一向平氣で居ることがあります。

△姙娠時に見る感覺の倒錯

又外から來た刺戟に對する反應が互違になつて、通常の人が甘味しいといふものをマヅイと云つて吐き出しさうにしたり、普通の人が嫌がるものを喜んで食べたりする。蠅や炭の破片を食べると大變甘味しいといふ者もある　之は敢て神經質と限らず、姙娠した婦人などにはよくかういふことがあるのです。通常の人が嗅いで堪えられぬ惡臭のものを好んで嗅いで見たり、人の嫌ふものを好き、人の好くものを大變に嫌ふといふ間違つた感情の者がある、こんなのを感覺の倒錯と申します。

△仕事に飽きつぽきもの

それから少しく類は異ふが、見たところ大變神經が鋭敏で總ての五官に來る刺戟を早く受け、それに對して一々應接し又處置をして一寸敏捷活潑であるが、それは一時間か二時間、乃至は十數分間に止り、それが過ぎ去ると、大變に勞れ果てゝもう何も出來ず、何事があつても、何物が來ても、言葉でも仕事でも之に應ずることが出來なくなるのである。業務に就いても初め少しの間はよく人に勝つて働くけれども、一時間も經たぬ中にぐたりとして何も出來なくなる。之れはいろいろの疾病に伴ふて起りますが、其の多くはヒステリー或は神經衰弱からであります。

△月經時に起る變調

又、奇麗好き即ち潔癖といふものがあつて、手拭が汚いと思つて洗ふ、一度洗へば可いものを二度も三度も洗ふ、汚れてもゐないものを幾度洗濯してもまだ穢いと思つて氣になつて仕樣がないといふ樣に、一つの考へが起るとそれを幾度でも繰り返さなければ止まぬ

それを自分の癖だとは思ひながら、どうしても止められなくて、遂に其考へが凝りつくといふやうなのがある。或は往來を歩いてゐてもふと立ち止つたり、又行き過ぎる、又戻つて來る。そして一つの店の先をどうしても行く事が出來ぬといふやうなものもあるが、これは月經時に折々起ることがあります。

△身體の變質に因るもの

それから身體の狀態が晨と夕、今日と明日といふやうに、始終變るのがある。大變心持がよかつたり、又惡かつたりする。身體が肥えてゆくかと思ふと痩せ衰へたり、或は顏色が眞赤になつて元氣のよい事があるかと思ふと、今度會つた時は眞靑になつてシホ〳〵として、いかにも元氣のない事がある。かくの如く身體の有樣が原因なくして變化するといふ婦人には、身體の何處かに變質を備へてゐます。即ち或は頭の形、或は顏の形、齒の具合、或は手足の具合、胸や腹の工合や、身の內に於て、尋常の形、或は尋常の配合、又は尋常の狀態を離れた所がある。甚しいのは婦人たる所の體格を備へて居らぬ場合があります。例へば女にして男と同じ體格を備へて、髯が生へたり、骨組がゴツゴツして來たりする者がある。かういふのを身體の變質と稱へます。

△幻覺と痙攣

又、實際聞えもせぬ聲や音が耳に響いたり、有りもしない物の形が眼の前にちらつくとがある、之を幻覺と申します。何處か淋しい處を通ると、何でもないものが幽靈などに見え、家に居つても雨戸がガタ〳〵すると緣側に立つてゐる家の者を泥棒と間違へたりして甚だしいのは氣絕して飛んでもないさわぎを引き起すこともある。

又身體に痙攣の起るとがある。「ヒステリー」に盛んな痙攣の起るとは人も知つて居りますが、さうではなくして不意に悲しいとに接し、驚いた事に接した場合に、身體がふるへて癲癇が起つたやうに痙攣を始め、身體が引張つて吊るやうになる。攣縮と稱へて手足眼瞼などが細くヒヨイ〳〵とふるへたり、疲れた晩に寢

やうとすれば足が突張つたり、筋が突張つたりして、身體がおつぼり出されるやうな感じがするのも同じ類ひのもので之を西洋語では「チック」、日本語では「かん」と云ひます。或は一寸見ては癖のやうに口を片方にヒョイ〳〵釣つたり、鼻を妙な具合に動かしたり、又爪を無暗に嚙むなども神經病質の人にあります。男子でも故尾崎紅葉などは其類で、殊に小說を書く時には指を嚙む、それ故紅葉が小說を書いてゐるといふことは指先の高くなつてゐるのを見て分るのである。

其他一寸した事にはげしく怒つたり、さ程でもない事を耻かしく思つて眞赤になつたり、些細なヿに卒倒したりする者がある。之は腦に貧血が起るからです。或は又熱を起す場合もあれば、實際は熱が昇つてもゐないものをあるやうに感じて、熱が起つたから早く藥を下さいと騷ぐなど、まだいろ〳〵あります。

△我儘、虛榮、迷信

が要するに神經質の婦人は多くは我儘なので、譯もなく人を騷がし、人に迷惑をかけ、客に對して不快の念を與へるのであります。

神經質の婦人は又別して感情が烈しく虛榮心の强いもので、何でも自分が人の上に立つて萬目を自分の上にのみ集めやうとし、人がそれに注意しないとか、自分の思ふやうになつてくれぬとかいつて腹を立てる。こんな風の人は、自分が病氣であるといふヿをよく知つてゐるので、惡いから改めやうと思ひ乍らも、それが出來ないのです。又神經質の婦人は迷信に陷り易い。その爲めに精神が恍惚となり、又は全く人事不省となり、或は又自分が二つあるやうに思ふヿがある。甲と云ふ者が病氣になつて乙に代つしてまふ。よく田舍にある狐付はこれで、狐になつた時は自分自身の事情は知らず、我に返つた時は狐付の時何んな事をしたか全然忘れてゐるものである。

△病的噓つき及び妄想

又噓を吐く神經がある。これは「病的噓吐き」といつて、故意に噓を吐くのではなく記憶の惡い爲めである。●妄想とて事實に無い事を有りと信念して、わが身

に罪があると妄信したり、わが體に重病があると信じたりして、爲めに死なねばならぬといふて自殺を謀るやうなことがある。又宗敎心や道德心の非常に强い者が多いけれども、其の中には宗敎や道德が如何なるものであるかを知らず夢中になりてお經を讀むだり何かして騷ぐ病的の者があります。

△時々機嫌が變るもの

そして又神經病質の婦人は非常に感情が變つたり愛情が變つたりする。甲の云ふことばかり用ひて乙の云ふことやする事も聞かず、信用もしないといふ風になり、或は疎んじてゐた人を近づけ、又信用してゐた人を今度は疎んずるといふ風に時々變遷する。召使ひやその他に對しても、機嫌が丁度秋の空のやうに刻々に變つてゆくのであります。

△愛する者を苦しめて喜ぶもの

又、悲しむべきことを見て喜び、樂しむべき事を聞いて悲しむといふ風に感情が間違つてゐるものがある。夫に向つても着物を買つてくれとか、帶を買つてくれとか、いろ〱な難題を仕掛けて夫の困つてゐる樣を見て面白いと思ふ、それでは夫を憎いと思ふのかと云へば決してさうでない。つまり愛する者を苦しめて一種の快感を得るものであつて、例の禪學令孃とか云つて大分世間から兎角の評を受けた某女史なぞも、多分此種に屬する神經病質を有するものではあるまいかと思はれる。

△自分で極めてゐるもの

又手が利かぬとか足が利かぬとか、實際歩かうとしても見なくて、床から出ては歩けない、床から出ては坐られない、と自分一人で極めてしまつて、家の者さへ持て餘す事がある。處へ病人の日頃信仰する醫者が來て、その氣に逆はぬやうに、成程痛いだらう、此の藥を使へば明朝の十時までには治るといつて水でもつけてやると、普通の神經病質の者ならば大抵明朝の時間が來ると治つてしまふけれど、中には自家の暗示性が强くて、醫師の云つた言葉が眞實かどうかを考へ、少しでも腑に落ちぬ所があると、もうすぐに、今度の

は非常に重病でどんな名醫が來ても治らぬと極めてしまふのがあるが、如何なる醫師も之れは何うにも手のつけやうが無くて困る。之はヒステリーの女によくある事です。

尙ほ神經病質の治療法、及び斯かる狀態に陷らぬ豫防法如何と云ふ事については更に機を得て述べる事に致しませう。（美智子筆記）

韓海の蜑女

昨今韓國釜山市中には髮の毛赭く燒けて色飽く迄黑き顏を新らしき手拭にて頰冠り細帶に手織縞の前垂を掛けた跣足の珍客に雜まれてゐる、此珍客こそは有名なる伊勢の蜑女にて恰も期節となりたれば例年の通り朝鮮海の鮑、天草を採收のため二十人、三十人と團體をなして船便每に渡韓しつゝある、其身姿言葉こそ可笑しけれ彼等の心は潔く神聖なる勞働に依りて金儲けを爲し父母眷族を養ふのである、彼の紅粉を裝ひ美服を飾りて得々たる賣春婦とは素より同日の話にあらず。

彼等は每年四五月頃より親方に引率されて渡韓し釜山に於て總ての準備を調へ舟を艤して出漁する、出漁の區域は釜山を中心として北は蔚山近海迄南は巨濟島附近に限られ其漁場近くに納屋を拵へて根據を定め、十月末迄に再び釜山に引上げて解散歸國する のである、往復の旅費は素より雇期間の食費醫藥料迄一切雇主の負擔にて蜑女は自分が働いた丈は國に持て歸る夫が一人前五六十圓より百二三十圓に及ぶさうである。

彼等一日の作業時間は午前九時頃より同十一時半頃迄と午後一時頃より四時頃に至る二回で平均一日五六時間は海上が時化ぬ限りは每日海中を泳いで潛り步くのである、一寸考へると却々勞れさうに思はれるが馴れたもので一向平氣だ、尤も一つ宛桶を浮して之に取付いて泳ぎ廻り獲物は桶の中へ入れる。

習慣は恐しいもので、少さい時分から海に馴れた結果一日でも海に這入らぬと氣持が惡いと言ふ、普通作業海面の水深は二三尋より四五尋位の場所で隨つて陸岸より十町も沖に離れることはない、殊に朝鮮の沿岸は一帶に深い故海岸より二三町が稼ぎ場所である、潛水時間は比較的短い即ち浮沈が繁い、是は獲物を競うからで、一日海の中で働いて陸へ上つた時は定めし勞れて居やうと想像されるが實際は少しも勞れた樣子なく獲物一杯に充した桶を朝鮮式に頭上に載せて納屋に運ぶ、陸に居るよりは餘つ程樂ですとは彼等が口癖の樣に言ふ所である。（大阪每日）

衛生顧問

▲偏頭痛の療法

問　昨年の五月頃の左に疼痛を覚え段々強く相成り京都府立病院に入院し十二週間目に退院しましたが、其後は入院當時程の劇痛はなけれど常に午後より同じく半分だけ痛み困り入り候。去りとて家計貧なれば再び入院して思ふ通りに治療も出來ず、何卒その素人療法を御教示下され度偏にお願ひ申します。（京都の紫濱女）

答　察するに「偏頭痛症」であらう。果して然らばその原因を探求して治療を施さればならぬ。原因は遺傳精神の過勞、貧血、月經異常、便秘、重病後などである。貴女の原因は何であるか了られば眞の療法は申し離けれど、兎に角精神を安靜にし、一日に二三回、溫湯に芥子を入れ、それにて兩脚を溫めること一回十分時乃至十五分時間爲し、頭部には酢を注いで繃帶し、御地の醫師と相談の上、左の如き藥を用ひて御覽なさい。

歇那設珍　二、五　臭剝　三、〇
乳糖　適宜

右三包に分け一日三回食後一包づゝ。

▲小兒の咳嗽の療法

問　三歳の女子時々感冒に罹り、咳嗽出で候が、其の節先生の御著素人藥物學に御示しの撒涅瓦に安實或は安母尼亞茴香精を用ひて差支なきものに候や、小兒のことなれば若し藥の分量などを過りてはと恐れ候が、何卒その服用法等を御教示に預りたし。（三重縣藥物心配女）

答　小兒の咳嗽は却々輕々に看過すことの出來ぬものである。併し單純な感冒で、而も無熱の方であつたらば右の藥を用ひても構ひませぬ。三歳の小兒には左の如き分量に依て

撒涅瓦　一、〇

を溫湯三〇、〇中に入れ、これに稀鹽酸三滴を落して煎ずること十分時間、然る後安實〇、二を混ぜ、白糖を適宜に入れ、溫湯の煮え減つた丈水を加へて全量を三〇、〇とし、之を一日三回に分服するので、小兒には穩和な藥である。

▲鼠の爲めに催眠術をかけられる

問　私事本年二十歳になりますが、二三年前より夜半になると上から何かに押し付けられるやうな感をいたし、暫くは聲を出すことも出來ず、その苦みは何に譬へんやうもなし。昔の人は鼠に催眠術をかけられるのだなど申しますが、豈夫鼠の所爲とも思はれず、一體如何なる病の爲にかくなるのでせう、併せてその療法をも知らせ下さいまし。（本町の花野蝶子）

答　夜具衣服などの爲に鼻孔喉頭或は胸廓を壓迫され、十分に呼吸が出來ぬとか、又は室內に酸素の缺乏を來す時などに窒息的の苦痛を起す

のである。されば窮屈ならぬ寛衣輕暖なる夜具を着て室内に十分空氣の通ふやうにし、洋燈や火鉢の瓦斯の籠らぬやう注意し、而もその室内は可成廣きを選めば必ず之を防がれるものである。

▲トラホームの素人療法

問 幼き頃よりトラホームに罹り、家事の都合上醫師に就き十分の療養も致し兼れ心配いたし居り候、就てはその素人療法を御教へ下さいまし。（香川縣眼病女）

答 某醫の實驗談を聞くに曰く、唐辛を淸潔に洗つて細かく碎き蒸餾水に浸すこと約一日、夫より之を絹漉にし、其を眼瞼結膜に塗布すること一日に二三回づゝ數日續けば如何なる難症も全治するとのことだ。而してその塗布する仕方は眼瞼を飜轉して、右の液を眼球に少しにても附かざるやう手際よく塗られねばならぬ、眼球に入ると、それこそ大變、眼球が飛び出さうに痛んでその害や計られず、又眼瞼結膜に塗布しただけでも、その刺戟が强くて却々堪へられぬものだが、其處は一生懸命に我慢してゐること約五分間、然る後ドン〳〵蒸餾水を以て洗ひ拭ふのだ、が之れに用ふる綿はいふまでもなく消毒綿でなくてはならぬ云々。此の外に藥はあれど何れも劇藥で素人療法には用ひられぬ。又右唐辛水にしても果して貴女は眼球に入れざるやう手際よく塗布出來るや否や危しく危し。

▲生後滿一ケ年の小兒の食物

問 滿一ケ年の小兒、母乳不足のため豆腐卵鯛などの食物を與へて居りますが、如何でせうか、その外如何なる食物を與へて宜しきか御聞かせ下され。（韓國の子思ふ女）

答 豆腐、卵、鯛は差支なけれども、豆腐は甚だ少量を與へ、卵は生又は半熟の黄味のみに限り、鯛は可成刺身を可とす。其の他䱐汁、牛乳、水飴、淡泊した魚の刺身、ビスケット、カステラの少量など差支なし。

▲牛乳と鷄卵の比較

問 鷄卵一個は牛乳の何程と滋養の功を同じうするものに候や御教示を乞ふ。（伯耆待遠女）

答 鷄卵にも依り、牛乳にも依るが、何れも其中を取つて比較すれば鷄卵の一個は牛乳の九勺九才七に當るものである。されど牛乳には牛乳の特色あり、故に小兒に牛乳三合飮ます所を、鷄卵三個餘を用ひたとて育つ譯のものに非ず、滋養物とは色々混ぜて食するのが宜いのだ。

▲油手油足の療法

問 私事油手にて裁縫の時などは甚だ困ります、その療法を。（羅風綾濱子）

問 油足にて困難致ますが良き療法を女學世界にて御教へ下され。（大阪市山本利郎）

答 泰寧酸二、〇をアルコール一〇〇、〇に溶し、之を手或は足に塗り

給ふべし半年も續けられなば大抵治るでせう。

淋疾――にも應用して妙なり。

▲血の道の療法

問　私は四十三歳になりますが、若き時より血の道にて肩が凝り、午前から身體が寒くなり、頭が痛んで胸が苦しく、嘔吐を催して嘔吐せず、死ぬやうな思ひをいたします。何卒良き療法を御教示を。（滋賀のやみたくない女）

答　原因を追究するが肝要である。原因が若し生殖器病より反射的に來てるのだとすると、その生殖器病を治さぬ中は到底本病も治らぬ。併し一般に精神の刺戟を避ければならぬ。之れに就ては家族の人に賴み可成我が心を慰めるやうにして貰はねばならぬ。又自分も浮世三文といふやうな心になり、何事もクヨ／＼心配せぬ工夫をするが肝要だ。次に運動法を實行せねばならぬ。運動法には種々あるが、庭園の掃除植木の手入、登山、乘馬の稽古、自轉車の稽古、水汲（例へば風呂桶に水を滿ぐなど）洗濯など兎に角外に出で、日光に觸れながらの運動が宜い。次に冷水を身體に注ぎながら手拭を以て摩擦することや、河水浴海水浴などの冷水療法も肝要である。次に溫浴は朝夕二度實行して下さい。之を爲すについては、人手を借らず、自分にて風呂桶に水を注ぐことから火を焚き沸すべし、運動の爲に妙である。溫浴の効は血の道には百藥の長である。次には食物を色々に料理し、種々異なつた珍らしい滋養物を食するやうに工夫せられたし。服藥としては左の如きものが宜い。

白葡萄酒　二〇、〇　含糖百布聖　三、〇　水　一〇〇、〇

右一日三回食前に分服

纈草二、〇を沸湯一〇〇、〇に五分時間蒸し、煎じ詰つたただけ水を加へ之に臭剝三、〇と單舍一〇、〇とを入れ、これも一日三回に分服。

▲子宮脫出について

問　本年は二十五歳ですが、十九歳の時分娩して以來膣內に球形の物を感じましたが、身體を屈めますと、その球が膣外に半分位出ます、別に苦痛も感じませぬが、何となく氣持惡うございます、打捨ておきて可なるや、治療法あらば御教へを。（臺灣の臺灣女）

答　子宮脫出でせう。子宮脫出に、全脫と半脫とある。貴女のは半脫であらう。婦人科專門の醫師につき、整復術を乞へば、必ず治るものである。打捨ておいては甚だ宜しくない。若し手術を乞はれぬ事情あらば「マイエル氏軟護謨環」といふ器械を挿み、勞働せぬやうに愼んでゐると、輕きはそれで全治し、重きは生涯之を挿んで居らねばならぬ。而してこの器械は幾個も求めておいて、二三週間每に取換へ、大に洗ひ清めねばならぬ。さうせぬと臭氣が伴うて終に膣炎といふ惱病を發するものである。

▲子宮內膜炎の療法

問　無職業の二十三歳の女子三年前より子宮内膜炎に罹り、治療も受けましたが、度々再發し、今に惱み居り候、何卒素人療法を御教へ下され度。（千葉縣利根川ちどり）

答　原因に依て治法を異にするけれど、一般に毎日鹽湯に浴することが大必要である。鹽湯は水一石に鹽一キロ瓦の割が宜い。之を面倒臭がつて、毎日怠るやうでは駄目です、外用藥は三百倍の石炭酸水を少し温めてイルリガートルといふ器械を以て洗ひ、然る後、

鞣酸　二、〇　グリスリン五〇、〇

中に綿を浸し、この綿を挿入しておくのである。さりながら、可成は素人療治せずに醫師の治療を受けられよ。

（三重縣なす子）（大和奈良邊の處女）（神奈川縣田舍女）に答ふ――前答を試みられよ。

注意――美顔法に關する事、身長を延す事、痩せる法、肥ゆる法等は來月の標準娘に述べますから、夫を御覧下さい。

▲質問心得

一衛生に關係なき事は答へず。

一漠然なる問、面白半分の問、專ら手術を要すべき外科的の問、男子生殖器に關する問には答へず。

一返書を如何に切に乞はるゝも應ぜず。

一葉書に一人一問たるべき事。

一繪葉書、黒く塗つて朱書したるもの、ペン或は鉛筆にて書きたるものは不明瞭なれば後廻しとなる事。

一從來餘り屢々答へたる問は他日に讓る事。

一毎月五日までに着したる分は翌月の誌上に、五日以後の分はその次の月に廻ると概略心得られたし。

一匿名は異樣なるを可とす　愛讀女、困難女、懸願女の如き類は餘り多くて紛はしいから。

一字體は楷書で縣名年齡を記入せられたし。

一葉書の表面に「女衛」の二字を書かれたし。

一質問書は左記の表へ送らるべし。

東京市本郷區森川町一番地
表北裏乙ヵ十四號　糸　左　近

一日曜日ならば診察の御依頼に應じませう。





積善の家

岡田榮子刀自の事

刀自は敎育界、法曹界に聲名ある岡田良平、一木喜德郎の母堂なり、夙に報德敎によりて身を修め行を勵み、良人を助けて子を敎育しつゝ博愛を竭し又能く父祖の志を成したる賢女なり。

報德敎とは相模足柄山下の偉人、二宮尊德翁の遺したる實踐道德の敎旨也、其敎の主とするところは、天地人三才の大德に報ゆるに、人間の小德(勤儉讓)を以てせんとするにあり、いはゆる德に報ゆるに德を以てす、報德の名之に原く。

天に日月かゝり、地に山川湧く人類は此世に生まれ相助け相頼り、生を營みやがて骸を殘し去る、三才の大德徐ろに考へ來れば、うたゝ我が生の徒事ならざるを知るべし、二宮先生嘗て敎へていはく。

▲子孫の相續は夫婦の丹精にあり
▲身體の根元は父母の生育にあり
▲父母の根元は天地の命令にあり

＊　＊　＊　＊

▲父母の富貴は祖先の勤功にあり
▲吾が身の富貴は父母の積善にあり
▲子孫の富貴は自己の勤勞にあり

＊　＊　＊　＊

▲身命長養は衣食住の三にあり
▲衣食住の三は田畠山林にあり
▲田畠山林は人民の勤耕にあり

＊　＊　＊　＊

▲今年の衣食は昨年の產業にあり
▲來年の衣食は今年の艱難にあり
▲年々歲々報德を忘る可からず

と、要は人の世に處するには誠心を以て本となし、勤勞を主となし、分度を立つるを體となし、推讓を用となすにあり、先生の餘澤流がれて四方を霑し、今日に至るまで地方自治の上に尠からざる功果を顯せり、榮子刀自の如き即ち報德敎の感化を受けたる一人也。

◎刀自の父母

遠江國佐野の郡に倉眞と稱する村ありて、東南北の三面は山を繞らし西方僅に開らけ、人家數百此處彼處に立ち並び、淡ヶ嶽の北連山の溪間より落つる松葉が瀧の流れに沿ひ、雞犬の聲相應じて平和の氣に充てる壺中の別天地あり、近き頃村に岡田佐平治と云へる活學者ありき、年未だ廿に滿たざりしころ、家道いたく衰へけるを、健氣にも一木の力に能く之を支へんと志し行を愼み業を勵みけるが、二宮翁に就いて其敎を聞くに及び報德の志いよ／＼堅く、克己精勵して能く家を起したるのみならず、其德漸く地方を風化し、鄕村を治むの時、人に語つて云ひけらく、心を治めんには神に誓へば我心固し、我が心固ければ言語信あり容貌誠あり、終始一の如く民始めて信ずと、區々數十語の間に其面目を見るべし、其妻貞子年纔に十五にして嫁ぎぬ生家は質素の家風にして農を勵みければ、貞子の指手龜傷多かりけるが、これを見て、艱苦を共にすべしとて娶りきとなん、此佐平治翁こそ終身至誠息む無く、無息軒翁とたゝへられ布衣の一農民を以て、明治六年畏くも九重雲深き邊より恩賜品を拜受して、家門に一段の精彩を發揮したる人物なれ。

◎良人は如何なる人ぞ

無息軒翁の長子は現遠江報德社長岡田良一郎氏にして、實に榮子刀自の夫君なり、刀自の岡田家に嫁ぎし時は、隙もる北風稍々收まりて一陽茲に廻り來て、家運やうやく萌え出でむとするの時にてありき、創業は固より難し、されど守成は更らに難し、良妻を思ふは家貧しき日のみならむや、人事は廻りて暫くも止まず、富貧元より一定せず仆れたるを起すの發動力と、仆れざらむやうにと支ふる潜勢力も、其エナルギーを費すの量は同じ。

刀自は此覺悟を以て家事を營み、良人を助けて舅姑に事へ又能く子を養ふ、良一郎氏の少年時代はあまりに文讀む事に耽りしかば無息軒翁はその結果、動もすれば文弱に流れむとするを恐れて、十六歳の時相馬藩の池田氏に托し、尋いで二宮翁の門に入らしめたり。

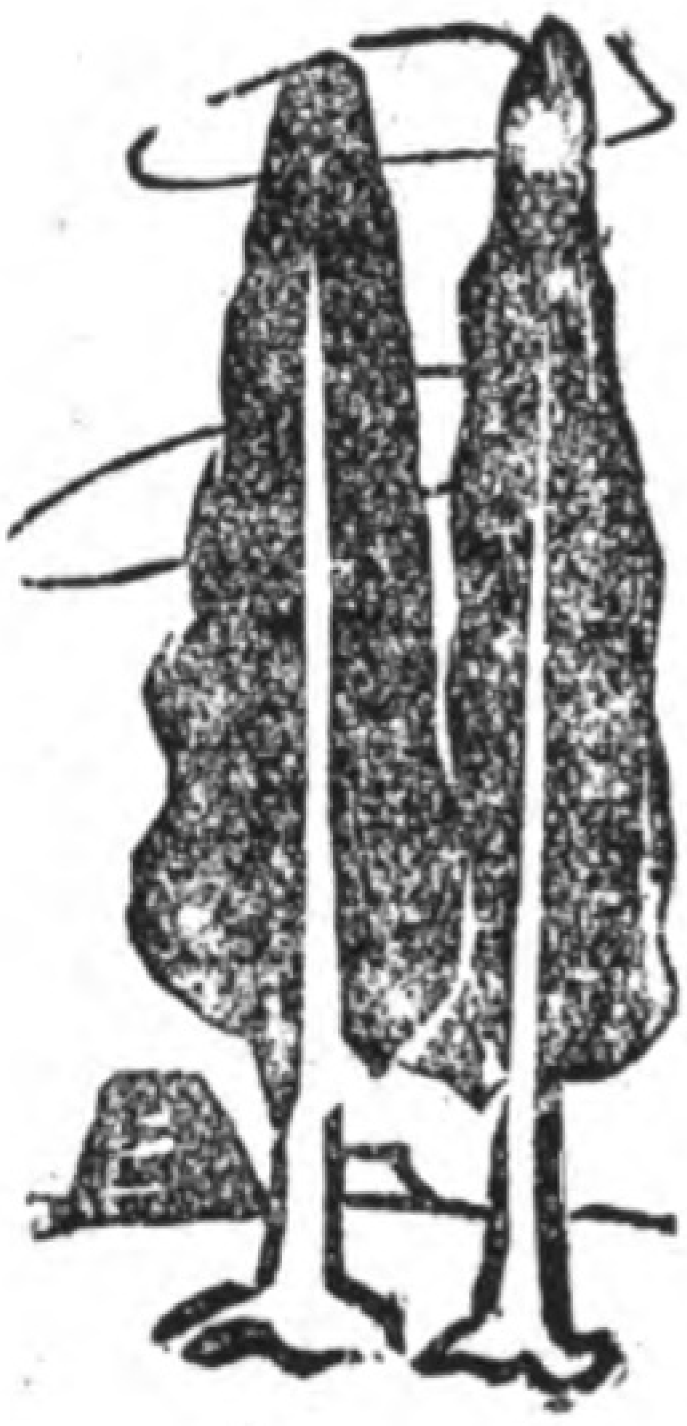
◎刀自の家庭敎育

家に財あり資ある、一般の家庭ならば、只管其愛に溺れ、風雨を厭ひ寒暑をきらひ、數多の婢僕を傅つけ、寒むければ爐に踞み暑ければ涼を貪る習なるに、女史は柔弱なる溺愛を避けて、嚴そかに之を育てたりしかど、刀自の心の奥に迸れる泉の如き清冽の愛に感じては、爛熳花の如き幼兒もよく其心を守り身を鍛たへ百錬の鐵、倦む時は、兄弟さながら影の形に從ふが如く、相携へて山に登り川に漁りして、歸れば父祖の膝下に侍して、机を同うして書を讀み字を習ふ、終れば刀自が針をはこばす膝下にありて、兄弟交々山川の遊を語る、秋霜の威、春風の溫、相並むで、一家洋々、平和の氣に滿ち春の花秋の紅葉を一時に眺むるに似たり。

明治十年の交、岡田氏が耕牧の餘暇、其邸に冀北學舍を設けて青年を敎育するや、遠近風を望んで來たり學ぶもの多く、良平喜德郎の二君、亦家塾にありて飲食起臥衆と同じく、食は二宮翁傳來の單菜單汁、綿服を着けて嚴冬足袋を穿かす、紫雲棚引く雞鳴に起き出でて室の内外を掃除し、雜草を刈りて道路をつくらふ、行事終れば業に就いて書を讀み文を習ふ、英漢數の敎授をつかさどるの士も亦當時一流の才、咿唔の聲は松籟と相應じて、人をして崇高の感を起さしめき、然かも此幾十の學生の爲めに、食事、會計、監督の任に當たり、我が子人の子の隔てなく、滿身の愛を獻げて育英の業を助けたる刀自が内助の功一樣ならざりし。

庭訓空しからず、星霜三十餘年、三兒能く父祖の志を繼いで、良平は文敎の上に至大なる效果を致して今や京都大學に總長となり、喜德郎は出でゝ親戚一木氏を繼ぎ他年法制界に貢獻多し、純平亦竹山氏を冒かし多望の前途を有する法學士となれり。

山の都に住む人
塵の都に暮す女



秋雨女

十五代三百年、花の盛りを德川の流れに映せし頃ほひは、「東男に京女」とて天晴れ立てられし言草なりしを、うつりゆく世の人心さてもあさましや、今はさる譬喩もあてにならずなりぬ。腸の殘つてゐるのはあの連中さとせめてたのみし魚河岸にさへも、男の中の男といはるゝ人は、不漁の夕の小鯛位よりしかなしといふ賴りなさ、たま〳〵少し骨があるかと見れば、下らぬ人の筆の端にのこされて、妙な男、の、かはりものよ、との上げ下ろし、とんと他愛もなきありさまの世なり。

　さりとて、「東女に京男」！　文字だけ代ふるにさしつかへなけれど、東女はともかくも京の男と來ては鼻もちがならず、詮かたなさの擧句のはてが、解題めきたる氣質くらべ、下にいふところ、あたれるか、それたるか、あたつたら御免下され、もしやそれたらそれまでの話し、かゝる時には都合よき自然主義の名分をかりて心にうかびしありのまゝを。

地と人

抑も山水は性情をあらはす、性情はまた山水をあらはす、どちらにしても地と人とは離れられぬ因緣のものと見ゆ。

　京の山水、一體が繪なり、繪もどちらかと云へば土佐派に屬す。悠然懲頭々々從容迫らず、風物すべて東山式なり、從つてこれに配合せられたる人物も、あまり見ぐるしきはすくなき樣なり。一寸見て所謂美くし

き人の群れゐる國やと感ず。さはれもとこれ畫中の人、其の活動はしれたものなり、もとより土地もせまき碁盤の如き所、本願寺の火の子が二條のお城の側迄散り來る程なれば、めざましからぬがまことなるらめど、日本藝術の歷史國を、もすこし發達せしめ樣との氣慨位はあつてもよさ相なものなり。即ち京の人はあまりに地にのまれたり、山水の美に心醉せり、二六時おほかた「四疊半より東山」といふ格なり。中には少しく眼の覺めて、これではならぬ他國へ一つ出掛けて生存競爭して見ねば、とか何とか謀叛氣をふるひ起す人もなきにはあらねど、これ等は風にすねたる梢の花など、何時氣がむきかはるやら知れたものにあらず。要するに山紫水明なる平安京のしづけさになれて表情の筋肉が全體にゆるみ居れり、飴にて作りし人形のごとくおとなしけれど生氣がなし。

然るに鐵路三百哩を隔てゝ東都の地、山は見たくも雲の峯を夏見る位、何處をながめても屋根また烟突、空はれたる日に漸やく富嶽千秋の姿、くもりたる日に筑波杳靄たる樣を望み得るほど、名にし負ふ夕立も全部に露を置きかねし武藏野十里あり、さればこゝを天地の蒼生は伸びたきまゝの勝手三昧、腕一本をうき世漕ぐ唯一の楫とせり。土地廣きだけに其人の氣も額も廣し、人の喧嘩を買つて呑む腹はあり、されど宵越しの金は持たぬといひし昔しに比ぶれば此の俠氣漸々にうすらぎゆく樣なり、五月の鯉の吹き流しも口が小さくなりたる心地すれど、豆をつまむに袖口が切れるとて氣にする小膽ものにくらぶれば雲と泥ほどの差ひぞかし。とは云ふものゝ京の人には東の人がまねの出來ぬ堪忍な所がありて存すいきなり柱に打つかるにあらず、初めは障子に次は襖、最後に柱に打つかると云ふ寸法、されば商賣にしても何にしてもわがものにするまでは念に念を入れ、其の代り一旦手にせしものは容易に手放さぬ所は、夕べに巨萬の富を手にして旦は紺暖簾をくゞらねばならぬ運命の渦卷に往來する東人の夢寐にも知らぬ所なる可し。

以上ならべて何れをよしとも、わろしとも、いふに

あらねど、暫らくはなれて第三者の眼にうつりたる女氣質を比べて見むか。

◎奥様氣質

髷は三日にかならず一度、お風呂は必ず一日一度、四時の時計が三つ鳴れば、ビフテキかオムレツを誂らへさせて御自分はそのまゝ御入湯、鏡とにらめつくらをして三介にかたをもまして奇麗さつぱりと五時半に歸宅を常なる主の君をまちたまふ一時はやりし束髪も追々すたれてまた髷が多くなれり、日曜ごとに御外出今日は三越來週は歌舞伎、そのまた次は何々會たまたまゐます日にはバイオリンの御練習、一年なか〳〵にみぢかしとや床柱にかけし「日々のつとめ」も一週前のが其のまゝなり。玄關に立てかけ置きし千代田草履何時のまにか狐鼠にやられても「いゝさまた買ふよ」其の氣前の大きさには下女あきるゝとぞ、されどいたましや月末の通帳には丸き御目も三角と變じ蛾眉は妙義の高峯と變ずるこそおそろしけれ、これは東女の色にすれば、オリーブはまぬがれぬ所なる可し。引きかへて京の奥様。

「今日はたまの日曜やさかい」と一寸の光陰をもあだにはすぐしたまはず、ぬるき湯お釜に一ぱいわかせてお自ら戸棚や臺所の拭掃除、その上お湯がなほ殘り居れば手柄の洗だく三つ二つさなくば簞笥の艶ぶきんに急がはしきことなり。さりとて常々も樂器かゝえてあるき散らすとは異なり、お針仕事の糸屑をお祝ひの松魚節のあき袋にためおきて下女が夜なべのよりわけ役、しかもおしごとの間々には高雄の里の母が許にとてちり緬の小切れ幾百かぬひ合せて「お長襦袢の胴になと」とのやさしさ、それで居て芝居ひとつねだるではなし、たまに本家より草餅重箱につめてよこすを此上なき樂しみ、運よくて二十五日北野の天神様まゐりが關の山なり。あだかも近松にあらはれしおさんの様型はけだしこゝより出だすを得可きか、色ならば梅鼠といふ所ならむ。お子ある人は何もおせわし相なりといふの外なし。

◎舅氣質

東西おしなべて奥様の腕次第にて如何にでもなる舅かたぎ結果は近戚に嫁のわる口かさらずば門跡さまに後生願ひの虎の子なげうつか何れそこらがどん詰りなるがごとし、中には男まさりのお人もおはせど。色ならば無色灰なり。

◎子守かたぎ

おくれ毛を手拭にて前びたひにおさへくゝられ、背負ひし子には風引かせじと親が情けのかくれ簑に似たる外套羽織らせたるが建仁寺のとある緣に腰うちかけてあみものしつゝ、唱ふをきけば

昨宵ゆめ見た地獄のゆめに
鬼が餅つきや閻魔がちぎる
地藏菩薩がまるこめる
まるこめる

こわらし氣なれどすこぶる樂觀なる守うた也、因果を脫して賑やかなり。江戸の守り子は、しづ心なく花ちる夕、牛乳屋の前にうろつきながら、或は繪草紙屋の店にあくびしつゝ

あゝ、ねんねのお守りは何處へ往た
山を越えて里へ往た
里の土產になにもろた
でんでん太鼓に笙の笛
起上り小法師に犬張子

いかにも媚し相なうたなれどわれはこれを耳にするごとに言ひしれぬ悲哀を覺ゆ。

京の子守りは無邪氣にして俗物なり、江戸の守り子は意地わるくして詩的なり。

◎粹人氣質

夜櫻や春は祇園の花小町、雪解にしめる障子のうちは心の意氣を爪彈きの糸のみだれのくるしさにとうたひをさむる頃、

風をもてなす河柳の柳橋あたり、俠氣に充ちし何奴とかいふ大姐さんが、五番組の頭が火事場のはなしに耳かたむけて、

「私しも來世は男にうまれて甚九郎親分位になつて見せる」と

かゝる道の女氣質はあまりにふかく知らねば記さず、されど胸にのこれる響をきけば竹と、紅梅ほどの差を有す。

◎子どもかたぎ

かれ等をとりまく自然の大御手は山のごとく、水のごとく、親のごとき人となす。

さるにても可愛らしきは京の子なるかな。

何時見ても抱いてやり度くなきは東の子なるかな。

◎娘氣質

西東この世からなる花園は
どれが梅やらさくらやら

やがて來む霜のあした、寺の所化が庭はく箒に、はきよせらるゝともしらずたはむる蝶の舞袖さながらなり、虛榮に充ちし羽を擴げて榮の花路をわれは顏に、濶歩する面憎さ、殊に東の小娘はこい紫の執こさなり。心はぴんとすねたる淺澤の杜若にはなか〳〵修業を要するものなるを。

赤や紺、オリーブ水色とりませて七色、太陽に照せばもとの白色なり、白といふ色美くしけれど他の色には犯され易し、しからば女氣質は白か否か。但し東西の京のおほかたをしめたる學生の氣質、これには世の人一目を擱く家庭にありてはともかくも出でゝは、寒からず、暑からず、さつき日和の青葉の校庭に未來を描く純良の子女があつまりなれば世界がすこしくことなり居れり、たゞ趣味の點よりうかゞへばセル地の單衣とせばの袷、尺八の袖と五寸の改良服程の差か。



平塚明子と語る

彼女の態度彼女の口吻

翠子

時代思潮の風が吹き荒んで、自然主義の火の手盛に、狂熱戀愛情死、焔々と燃えあがる此頃、明子々々とけたたましい警鐘の亂打には、流石、螢の尻が光る位よとも打捨て置かれず。

昔ならば不義はお家の御法度とか何とかで、どんな理屈が有ろうとも一喝のもとにお手討でせうが、世の中が進んで參ると有り難いものでございます、中には隨分酷評もありましたが、何だか明子は普通以上の女のやうに見立られ、思想界、精神界の發達した反影であるとの恩典の言もあり、善かれ惡かれ名聲上り、よつてもつて自然主義は甚麽に相場を上げましたらう。兎も角も音に高い明子樣とは甚麽な方でせうと、誰しも好奇心を起さずには居られません。男欺しなどゝ云はるゝ程なれば、また如何ばかり美しく在はすらんよし垣間見なりともたゞ一目をと、女ながらも焦がるる思ひでございましたが、私は幸い今日面會の榮を得ましたのでございます。

駒込は曙町、生垣ゆひ園らした屋敷町の、とある冠木門、平塚何某との陶器の表札の懸かつたところ、門を這入て内玄關から案内を乞ふと、丸髷の若い婦人が出て來られました、刺を通じますと軈てその婦人が斯樣に取次ぎました。

「如何いふ御用で御出になりましたのか存じませんが實は今回の事件に關係致した事なら御面會を御斷り致します。何れその事に就いては當人自身發表を致しませうから、それまでは斷片的にくだ〳〵と申上げると自然色々な間違ひが世間に出まして却つて迷惑致しますから、その事に就いてならば……」

御斷りとの事。私は勿論今度の事件に就て女史の精神を亂し度いと思ふのでございますから、かう斷はら

れては大きに失望いたしましたが、然し寳の山に入りながら空しく歸るも殘念、それでは只一目なりとも、女史の風采だけを覗はんと思ひ直して、それでは只御面會だけと、今一度取次いでもらひました。

それではとの御挨拶で通されましたのは四疊半の室女史のお部屋らしい。前には靑葉の庭が見える。部屋の隅には机と書棚があつて、書棚には洋書が入れられて、棚の上段には十六七の令孃の寫眞が立てられ、壁には海の景色を撮つた寫眞の額が懸けてありました。女史は今まで書見して居たらしく、机の上には洋書が繙かれたまゝでした。黃八丈の座布團を勸めて、挨拶された女史を見ると銘仙絣の袷にお袴でした。お宅に被居る間も袴を召して居られるのでせうか。袴と云ふても色のではなく、男の穿くやうな萬筋の縞の袴です。頭はマガレットでもなく、束髮でもなく、前髮は出して居られるが廂髮でもなく、根元は三つくねに編んでリボンの色も見えぬ御髮。毛は割合に尠ないやう。紅い物一つもつけ給はぬ、粧いのこの縞袴に、この色なき御髮、おまけに机の上には紫の烟を立てゝ線香が一本、縷々として立ちのぼる風情。

成程禪學令孃とやら。この四疊半に座禪の行を濟まして、三諦即是の月の光を郭公鳴く空に眺め給ふか。黑染ならぬ地味なる御身繕ひは、岩間に咲きたる幽蘭の高き香か。とはいへど然りとて昔の尼さんのやうに世を果敢なんでの遁世的ならず。

一度匂ひの唇分たれて、紅心の言葉打出づる口元の艶やかさ、匂い零るゝ丹花の唇、蕋とも見るや金蘂齒のちらくと、御息も香るばかり……。鼻筋通りて眼涼しく、稍々面長の強いて難をいへば、色の淺黑きと癖ある御髮なるべし。丈夫らしい硬肥り、二重顎の可愛らしさ、謹愼で拵らへた人形のやうむつちりとしたる肉付の、それさへ、たしかに異性を引き付ける資格あるべし。さて件の話は聞かれずとあれば何を話の糸口にと思ひ。

「嘸、今度は御迷惑で御座いましたらうね。」

「否、私のやうな者を、あんなに世間で大騷ぎして

下さるのは、有り難い事です、随分私の知らなかつた事なども澤山出て居ますし、私もお蔭で大分修養が出來ました。」と心の中はいざ知らず、御樣子では一向世間の噂なんかに傷心された樣も見えません。

「然し新聞やなんかでは、随分貴女の御心中を誤解して書いたものなども御座いましたでせうね。」

「ハー、夫れは随分御座いますが、私は別に何とも思つては居りません、云ふだけ云はして置きまして辯解致しません私も今の處大に考へて居りますので、何れ今度の事件には何とか結末をつけて發表する積で御座いますから……。矢張り病的なんでせう……」とわざとらしく微笑まれた。



「自分の事は自分が一番よく知つて居るので御座いますからね。」

「それで何ですか此節は何處へも御出かけになりませんか……」

「ハー、一體私は引込思案で御座いまして、もう讀書ばかりして居ります、少しお話の合ふ方となら随分よく饒舌りますが、そうでなければあまり口を利かない方ですから母などでも、私の心は分らないので御座います、そんなに引込思案ですから、却て世間で皆さんがお引立下さつた

のでせう。』
と何處までも取澄ました態度。
『でも今度の事に就いて御兩親はさぞ御心配遊ばしたでせうね。』
『ハー、只そればかりが氣の毒です、多分壽命を縮めたでせう、私と姉とたつた二人の姉妹ですから母は非常に可愛がつて呉れまして、未だにはあ坊〳〵て呼んで小兒扱ひにして居りますのですよ。』
と女史は無邪氣に微笑みつゝ机に凭れかゝるやうにして、手持無沙汰に線香の束を弄んで居る。
『一體奈何して禪學などをなさるのですか。』
『どうも思想が迷ふて仕方がありませんから、最初は海老名さんのお説を聞いて聖書を研究して見ましたがどうも滿足が出來ないので、禪學に這入つたですが、私は隨分凝り性ですからね……、禪の方では餘り口を利くのは卑しむのですが、私なんかも口を利くのが下手な爲か、それとも私の云ふ言が世間の人に變に聞えるのか、兎も角ゝ私が變な事を申すものですから、世間ではあれも禪學が言はせるのだ、是も禪學のためだなどゝ禪學の方ではいゝ迷惑です、然し今度の事件なんかは禪學から出たものだなどゝ云はれては困りますが……。』
『音樂はなさいませんか？』と聞く。
『ハイ二年ばかり、バイオリンを致しましたが、すると直ぐに厭になる性分で、只今はもうちつとも致しません。』
『それで當分お獨身で被居るのですか。』
『ハイ、それは初めからその積でしたので、私はそんな事に就いては何も考へては居りません。』
貴女のやうになつては、どの男も〳〵みんな馬鹿に見えて仕方がないでせうね。』と私も他の心中を穿つた積で遠慮なく云ひますと女史は只笑つて無言。
『今月の誌上で、泊子といふ人が貴女にあげた手紙が御座いましたが、あの方とは御同窓ですか？』
『否、私は奈何な方だか存じませんが、何だかあれで拜見しますと女子大學の方ではないやうに思はれまし

た、誰か外の方があんな惡戲をされたのだらうと思て居りましたが、へー女子大學の方ですかね、如何も大學の校風とは取り違つて居るやうに拜見しましたが……。』

『さうですかね、それでもあの人は女に似合はず筆が立つので評判ですよ。』と私が少々肩を持ちますと。

『さうですか、私は大變にお粗末に拜見致して居りました。』と却々言ひ方が上手でございます。

『貴女は女子大學の寮に御出になりましたか。』

『ハイ、少しばかり居りましたが、つまりませんからよしました。』

『それでも彼處の寮は樂しさうではありませんか。』

『それは外の學校のから見ると完備して居るのですが私なんかの變り者には合はないのですね、矢張り病的なんでせう……。』



黒塗りの經机とは異なれど、西洋模様の更紗に掩はれた机の上の線香が燃え盡した。折角の書見のお邪魔しては、と思ひまして私もお暇をいたさうとすると、

『折角のお出でしたのに、何にも要領のあるお話を致しませんで失禮致しました何れ今回の事件につきましては結末をつけて發表する時機があらうと思ひますから。』と言はれますから、何卒お立派に、と御挨拶して引き退がりま

した。

△その態度――對面したのは、僅か二三十分に過ぎませんでしたが、それでも私だけには女史の性格の一斑が覗ひ知られたのでございます。もとより僅の時間ですから、心理の奧までも解剖する事は出來ません、勿論外觀的なものでせうが、私が今日會ふて見て感じた事を申せば、明子といふ人は兎も角も平凡の女ではない、悧巧過ぎると云ふのでせうか、女には覇氣があり過ぎると云ふのか知らないが、その應對振りや、その執り成しが如何して僅か二十三四の處女の態度であろうかと思はるゝ位です。歳から云へば私の方が下かそれとも同じ位かも知れませんのに、私は明子樣を五つも六つも十も上の姉樣と見上げたのでございます。

△その口吻――重々しい口の利き方、漢語澤山混じえてハキ〳〵とした言葉、何處までも愼重の態度をとつて輕卒のない事、實に健氣なものです。さうして今の世の中を輕蔑つてるやうに見たのは僻目か、『私なんか病的なんでせう、私の云ふ事が世間には變に聞えるのでせう』なんて被仰る具合は、奈何しても或る一種の誇を自認してゐる處が見えます。たしかに自尊心の高い女とも思ひました。

露に優しき女郎花といふよりも、高峯に咲いた櫻の花か。靈が死んで居やうが生きて居やうが、そんな難かしい小理屈なんかには無頓着で、唯甘味しいものを食て、良い衣服を着て、いつまでも生きて居たいと思つてゐる物質的一天張りの私のやうな女から見れば、實に豪いと仰ぎました。さればこそ一擧一動にも隨喜の涙をこぼして渇仰がる殿方もありと聞く。森田樣なども其一人ではありませんかしら。兎も角も優にやさしき女性といふより、男まさりの御氣性とも申すべきか第一今樣に似合はぬ縞のお袴なんか召して、香を焚いてる風采なんか、朝な夕なに紅白粉に憂身を窶す普通の女とはたしかに變て居て、こんな方にも色だの戀だの、媚ぶるの恥らふのといふ事があるのかしらと、妙に思はれて、矛盾を感ずるのでございました。猶驚きましたのは、

私が嘗て矢張り新聞で何の彼のといはれた事がありました、私のは明子様のに較ぶれば雲泥の相異ではんの僅かの噂が載つたのですが、それでも處女心の弱弱と一方ならず煩悶して、もう世間に顔合せが出來ないやうに不面目に思つて死んで終ひ度いほどに泣いた事もありますから、明子様だつてこんなに仰山にされて、さぞお困りだつたらうと私が察してその事をお話いたすと『ホヽ、泣く中が花なんでせう。私なんか涙も出ません』と被仰たには驚きました。何處までも度胸の据はつた新社會の婦人であろうと凄いほどに思ふたのでございます。實に豪いものだその位の度胸があればこそ、あゝいふ素晴らしい物騒な事も出來たのだらうと感心する。然しあんまり人間が怜悧になると煩悶が絶えないさうで物騒ですから、私は蛆蟲とも放屁蟲ともいはれても構ひません、馬鹿で居たい、と茲に負け惜しみを云ておきます。

半襟に就ての意匠

歐米各國の貴婦人令孃は、時正に宴會季節に入り、其の服裝の華美を競ひつゝあるも、未だ格別賞するに足るべき新流行を見るに至らず、然れども寶石を衣服に飾るの流行は、年毎に盛大となり、本年の如きは一着の上衣に數十萬法(一法は四十錢)の寶石を飾るもの珍らしからず、而して此の流行は早晩我國にも輸入することゝならんか、是に先ち予は我國流行界の爲め一の提議をなして一般紳士淑女の贊同を乞ひたきものあり、幵は我婦人服の模樣に寶石を利用せんとすることにて、其方法たる假令ば、梅花なれば蘂を眞珠とし、蕾をルビーとするが如き、又露芝なれば露を眞珠又はダイヤモンドにするが如き、其極めて優美高尙なるに係らず、其價餘り高からざる物となるべし、特に我國婦人の上下を通じて用ゆる襦袢の半襟は、衣服及び帶と頭髮及び顔との調和を保つ上に極めて大事のものなるに、未だ是れに對して格別の工風なきは不可思議千萬なり、故に予は半襟に對しても亦衣服と同じ方法にて寶石を飾るもの﹅流行を希望するものなり、想ふに歐米の婦人服は半襟の如きものなき爲め、自然頸飾り又はブローチに大金を投じて上胸部を飾る必要あれども、我國の婦人服には幸ひ是れあるが爲めに甚だしき不經濟なしされば日本も歐米の流行に遲れず日出國の美人をして一層の美を加へしめんことを望むなり、云々とは、此程巴里の栗野大使が美術工藝品會社の吉井伯に寄せたる書信の一節なり。


おもひあまりて



燕に就ての種々の研究

鶴枝子

◎燕の性質と其の習性

燕は、燕雀類に属する、普通の候鳥で、嘴は短くて鋭く、口は甚だ廣く、飛び翔けながら、空中の昆蟲を啄むに適してゐます。翼も尾も、體不相應に長く、且つ端が尖つてゐるから、空中を切つて迅速に飛ぶには最も適してゐます。そうして他の鳥と異なるのは、尾羽が二岐に分れて、八の字を爲してゐます。地上に居ることは、少いから、足は短くて弱い。尤も樹の枝などに止つて居るには、差支へないが、地上を歩くのは極めて拙劣であります。體の表面は、咽喉部が、栗茶色で、腹部が白く、其他は、頭の上から尾の端にいたるまで、悉く純黒色で、紫の光澤があります。

燕は年々四月の初めに飛び來り、人家を尋ねて、巣を造ります、巣は、何人もよく知つてる如く、泥土と枯草や細き根、或は羽や毛を混じたもので、之を落成せしむるには、十餘日間を費し、いよ／＼巣が出來ると、鷄の羽などを敷いて、卵を産みます、卵は概ね五六個で、雌と雄は、晝夜となく、交々之を温め、殊に雌が巣に居るときは、雄は傍に在つて、頻りに唱歌を謡つて、雌の精神を慰めて居ります。卵は二週間もたつと、孵化しますが、産まれた雛は、初めのうちはモヤ／＼と汚き産毛を生やし、甚だ醜き態ですが、親鳥は、熱心に之を保護し、數羽の雛は不公平なく餌を與へ、若し雛が巣の中へ糞をすると、親鳥は、之を口にくはへて、巣の外に投げ捨てます、若し雀などが來て邪魔をすると、非常な勇氣を出して、之を追撃し、倘ほ力の及ばない時は、多くの同類を集め來て、あくま

で之を撃退するのです。燕の巣は、中凹であるから、雛は籠の中に、居ると同様落ちる憂がない、けれどもやゝ生長すると、巣の縁に出て、戯れるから、往々落ちることがあります。和漢三才圖會に、燕の親鳥は、雛の足に髪の毛を繋いであるから、雛は落ちさうにして落ちない、で飛立つ時、其毛を切つてやると書いてありますが、これは信じ難い説です。又或る所に燕の雛を呑みに來た蛇が、不意に落下したので、よく視たら、巣の縁に一本の針が逆に立て居たので、蛇はその爲め腹を裂かれて、落下したのであつたといふこともあります。之も疑はしいですが、小鳥の巣には、往々之に似た話があります。燕の雛は、孵化してから十七八日にして飛び立ちますが、二三日の間は、尙ほ巣家の近傍に遊んで居ります。さうして期節が早ければ、親鳥は再び産卵して二番兒を育てます。

日本に來る燕は、年々十月頃南方に飛去りますが、出發前には、數百羽の同類が海岸に集り、旅行の相談でもなす如く、ペチヤ、クチヤ、〳〵、〳〵と囀り合ひ、それから時機を見計つて出發するのです。何でも一日に數十哩を飛ぶ割合であるさうですから、島から島へと飛移るのは、餘り困難でないでしよう。けれども弱いものは、途中で疲勞してしまつて、船舶の上に休んだり、或は海中に落ちて、溺死してしまふのですで滿足に飛び得るものは、支那内地を通過して、印度地方に移り、冬の寒さを知らずに、愉快なる生活を營むのであります。

◎燕の種類

燕の種類は、世界中では、八十種もあるといふことですが、日本に見ゆる燕は、僅か五種類しかないのです。普通の燕の外、

△德利燕といふのは、普通の燕に似てゐるけれども、腰が栗色であるので、一に腰赤燕といひ、德利形の巣を造ります、此燕も春來て秋去り、冬は馬來群島の方面に飛去りて居ります。

△岩燕は普通の燕に似て、腰白く、足には趾にいたる

まで、羽が生えてゐます。我邦にては日光華厳の瀧に多くて絶壁の上に巣を造り冬はボルネヲ島方面に飛去つて居ります。

△琉球燕は、普通の燕より、やゝ小さく、琉球諸島にのみ居つて、内地には見えないのです。

△ショウドウ燕は、日本に來る燕中、最も小さく、海濱や河の邊の砂を掘つて、卵を産むから、一にスナムグリ燕といひ、廣く歐米の各地に棲んでゐるさうですが、日本には、餘り見えないのです。此他雨燕一名内裏燕、小燕、海燕などの小鳥が、棲んでゐますが、これ等は燕の種類でなく、たゞ形態が燕に似てるので、ツバメといふ名稱が附いてゐるだけです。

燕は、またツバクロ、ツバクラメ或はツバビラコなどと呼び、其名の起りに種々の説があります。ツバクロは、艶黒の意であるといひ。ツバクラメは、光澤黒女の轉訛なりといひ。或はツバクラは、ツバクラ〳〵と囀づる故、名けられたといひ、或はツチハム即ち土をはむの略語なりと言ひ、いづれが本統ですか分りません。漢名には、乙鳥、玄鳥、鷙鳥、游波、天女、社君、烏衣客、元鳥などの名稱があります。本草綱目に乙鳥は其鳴聲により名けられしといひ、又乙禽、野乙風乙などの異名もあります。玄鳥の玄は、黒色のことにして、鷙鳥とは、鷙鶵の類が、此鳥を捕食すると、則ち死するから、海東の青鶻を制すといふ意味から鷙鳥と稱へられ、游波とは、よく波を興じて、雨を祈るといふ所から、天女とは、若し白燕を見るときは、將來貴女を生むといふ所から、各名けられたといひますそれから烏衣客とは、烏の羽の如く、黒い所から名けられたのです。

◎燕に關する迷信

支那人は、迷信多く、またよく附會説をたてますが殊に不思議なるは、燕の肉には、毒があるから、食べると、害を受ける、けれども龍は非常に燕の肉を好んで食べる、人若し燕の肉を食べたら、水に入つてはいかん、何となれば、龍は燕を好むから、燕の肉を食べ

た人が來ると、喜んで呑んでしまふからである。で魔術者が龍を呼び起すには、必ず燕を用ゐるといふことです。

支那の書には、また燕が水に入ると蜃蛤に變化すといひ、年々秋になると、春生育された家に、自分の子燕を連れ來て、宿主に挨拶をして別れる、夫故之を禮燕と稱へてあるさうです。日本でも燕が海に入ると、飛魚に變化する、故に飛魚のことを燕魚とも稱へてあるといふことです。

古來燕は、春の社日に來て、秋の社日に飛び去るものとしてあるが、年々來る家でも、病人や火災のある家には來ないとしてあるから、燕が來て巣を造ると、大に喜び、若し燕が來ないと、不思議があるとて、非常に氣を揉む人があります。

◎燕に關する傳說

迷信の多き動物は、隨つて小說的傳說の多きものであります。昔支那唐の時代に、王樹といふ人があつた或る時船に乘つて、海を渡つてゐたところが、暴風に遇つて、船が覆つてしまつた。所が王樹は、一枚の板片に取附いて、海に漂ひ、幸に或る國に到着した。そこで上陸して國王に謁見すると、國王は、其女を以て王樹の妻となしてくれたのです。けれども王樹は其後故郷に歸つてしまつた。すると、一對の燕が來て、王樹の家の梁の上に止つて居つた。王樹の到着した國が即ち燕子國であつたといふ話です。

我邦のお伽噺に、むかし或る小鳥の親が大病であつた、其時雀は、簑笠で田を耕して居つたが、急報に接したので、其まゝ駈けつけた故、親の死目に遇ふことが出來た。然るに燕は、急報に接しながら、お齒黑をつけたり、口紅を塗つたりしてゐたので、時間を費やし、親の死目に遇ふことが出來なかつた。雀は親孝行の爲め、一生米や粟を喰べるのに、燕は親不孝の爲め米や粟を喰べることが出來ず、一生虫けらなんかを喰べてゐるのですと。

◎人生と燕

人生に最も必要なのは、田畑の作物、庭園の花卉、果樹、山林の樹木などです。これ等の植物の盛衰は、實に人世に大關係あるのです。ところが諸々の昆蟲があつて、晝夜の區別なく、これ等の植物を食ひ荒らして、農業上、園藝上、山林業上に少からぬ損害を與へてゐます。けれども幸ひに、蟲類を餌としてる少數の動物があつて、日々之を驅除しつゝあります。若し一朝食蟲動物をして、此世に無からしめば、諸種の害蟲は、忽ち蕃殖して田畑や山野にある一切の青物を食ひ盡してしまふかも知れないのです。食蟲動物中燕の如きは、最も著しきものであります。或る學者が、實驗した所によると、一番の燕が一日に六千四百匹の蟲を捕食したといふことです。私も嘗て、燕の雛について、實驗したことがありますが、七羽の雛に、蟲を運ぶこと、初めの程は、一時間二三十回であつたが、やゝ生長してからは、四十八九回から六十回の多きに及び、平均五十三回でありました、一日を十時間とすれば、五千三百回であります、それに一回に二三匹の蟲を捕へて來ることがありますから、なか〳〵少からぬ數量です、今少數にみて、假りに一巣で、一日五千匹の蟲を驅除すると定め、一萬の巣では、一日に五千萬匹、十萬の巣では一日五億匹、百萬の巣では一日五十億匹の蟲を驅除する割合であります、併かもそれが一日どころか、四ヶ月間以上にも亘るのであるから、それは實に驚くべき大數であります。燕は斯の如く害蟲驅除の大功力あるので、文明國人は、之を有益鳥と認め、大に保護を加へてあります。我邦人が、迷信上燕の來るを喜び、且つ之を獵殺するを忌みましたのは自然に益鳥保護の目的にかなひ、殖産業上喜ぶべきことであります。

◎燕と文學

燕は、其態度優美で、人里を尋ね、人家に巣ふを以て、普く人に知られ。一定の期節によつて去來すると

及び迷信上種々の傳説あるにより、詩人、歌人、俳人などに詠まれ。且つ繪畫、彫刻其他の美術にも應用されてあります。

月令に仲春の月玄鳥來り、仲秋の月玄鳥歸るとあり雁鴨とは、全く反對に往來するのです。

二月のなかばになると知り顔に
はやくも來けるつばくらめ哉　為家

燕來る時になりぬと雁金は
故郷思ひつゝ雲がくれなく　家持

めづらしく燕軒ばにきなるれば
霞がくれに雁歸るなり　野宮左大臣

雁の飛去るを歸雁といひ、燕の飛去るを歸燕と稱へてあります。

宿なと野原を歸るつばくらめ
秋の千草を思ひすつらん　為實

春をこふる心に如何つばくらめ
歸へる野なかの秋の夕暮　後京極攝政

荒れ果てゝ春の色なきふる里に
うらやむ鳥ぞつばさならぶる　定家

年をへてなれけん宮のつばくらめ
うらやみたえて後もいく春　同人

燕は年々同じ巣に歸るものといひ傳へ、若し其足に糸を結びつけて置くと、翌年其燕が飛び來ることが、知れるといふことです。

此春も古巣たづねて山賤の
やどな忘れずつばくらめ哉　不知

あはれ身の後の春まで殘りけり
燕の足につけし糸すぢ　爲相

支那の零陵山に石燕といふものがあつて、平常は石塊であるけれども、雨が降ると、生ける燕の如く、飛び翔けるといふ傳説があります。

降ればよぶ降られればもとの石となる
雨や燕の命なるらん　詠人不知

燕を詠んだ歌は、比較的少いが、俳諧によんだ句は少くないのです。

來た日からもう忙しき燕かな　也有
空に飛ぶ鳥を土に住む燕かな　蘭人
田樂の味噌つかみ行く燕かな　吞溟
乙鳥や鰍の小魚つかみ行く　几董
燕や入船の家はまだ起ず　桐芳
鑪鞴へはこりてはいらぬ燕かな　也有
山の雨燕のたのむ家ありや　太祇
ためす子に白根見せたか行燕　道彦

新學說——美と繁殖

佛國の學者、美とは營養の超過したるもの繁殖とは營養の超過に過ぎずといへり。試に下等動物を見よ、其體を養ふに足るの營養既に足るや、更に新たなる分子を生じ來り、其有機體中に存在し得る間は、其體内に宿るも、一度其度を超ゆる時は、こゝに繁殖を生じ、一の體は分れて二となる、されど高等の動物にありては、斯くの如きものにあらず、動物の少しく高等となるや、雌雄兩性間に愛情を生ずること人類に同じ、而して其戀愛觀念に於ては尚大いに人類に優るものあり、雲雀の雌鳥にして大膽にして激烈なるものは一の雄鳥も之と昵せんとせず、然して雄鳥は之に反して、其大膽と勇猛とによつて雌鳥の愛着を得んと欲す、鳥類の中には甚だしく美を愛し、配合を愛し、華麗を愛するものあり、而して皆枯草、貝殻、花若しくは草實を以て美麗なる巣を造り、其愛する雌鳥と共に棲まんことを欲す。

又動物中には多妻主義のものあり、此の種のものにありては、雌獸は皆貞操を守り、其雄獸の爲めに死をだも辭せず、彼の駱馬と稱する米國の馬屬は即ち之なり、獵夫雄性の駱馬を斃すや、雌性の駱馬は走つて百方これを回護せんとし、毫も危難の身に迫るを恐れず、然かも雄性の駱馬は雌性と共にあるも、難に遇ふや直ちにこれを捨てゝ走り、且つこれを敵ふことを爲さゞるなり。

多妻主義の動物は多く群居して、雌性の數雄性よりも多數なる時に起るものなりとす、鳥類中には多く一夫一妻主義行はる、彼の鷲、鳩のごとき、其重なるものなり、鸚鵡のごときは最も一夫一妻の情厚きものにして、若しこれを離れしむるや、雌性は多く死亡するを免かれず、繁殖の度に於ては動物は其下等なるに從て其兒を愛するの情又薄し、人類の如きは其高尚なる點よりして實に之が反對の現象を呈するものなりとす、動物は概して親子の情を有せず、されど人類に於ても親子の情は殆んど修養の結果にして天然の情のみといふべからず。

動物の中雄性のものが其兒を養育するは極めて稀なりといへども、鳥類にありては其例少なからず、唯餌食を與ふるのみならず、尚飛揚游泳するの方法を傳授するものあり、動物には斯のごとく親子の情なし、孝養の情に至つては毫も之を發見すること能はざるは當然なり。

新らしきバケッと水

海軍大藥劑士　小林増作

手桶が廢れてバケッ全盛の世の中となり、今は臺所に無くてならぬものゝ一つとなつた、バケッといふ名は英語の Bucket を其儘日本訛したもので、水桶とも云ふ可きのを世間一般バケッと云ひ慣はし遂に通り名となつたのである、多くは鍍亞鉛鐵板（がるはに鐵又はなまこ板とも云ふ）で造られ、携帶に便利な上に、手桶に比べたら價が安く、箍を入れ替へる世話もなければ、面壁九年尻腐りの恐れもないので、大抵な家庭に一つや二つ備へて居らぬ所は無い、ところが此バケッの新らしい間、內面の黑ずんで來ない內に背越しの水を此バケッから飮食用に使ふのは禁物である、なぜかと云ふに元來此バケッの金物は鐵の上に亞鉛の鍍金がしてあるので、其亞鉛鍍金は至つて剝げ易い、水に觸れてさへ漸々表面の亞鉛は酸化されて亞鉛の酸化物が出來、鐵板から離れて水の中で器の底に沈むので、若し新しいバケッに酌み置きの水を直ぐ飮食用に使へば、其亞鉛の酸化物は水に混つて飮食物の中に這入り體の內に大害を及ぼすことがあるから、何んでも新らしいバケッの水は汲みたてのを使ふに限る、拙者の實驗に依ると十二時間新らしいバケッ（底の徑曲尺九寸）に貯へた五升の水の中には第一日に一、八ミリグラム（一匁の二千分一弱に當る）の沈澱物があつた、第二日には更に新らしく水を入れて十二時間の後一、二ミリグラム、第三日には同じ方法で一ミリグラムといふ割合で、一週間目になつても〇、七ミリグラムの沈澱物があつた、此沈澱物は亞鉛鍍金が水の爲めに分解されて、酸化亞鉛が出來るので、此酸化亞鉛は種々外用の藥に使ふけれど、內服用としては使用されない、もし之を內服する時は、長い間に微量づゝでも屹度中毒する、中毒の點から云つたら通常藥として扱ひ兼ねる位であるが、とにかくバケッの汲み置きの水を其儘柄杓で汲み出して、飯焚きの水に使つたり、吸物を作つ

たりすれば、眼にこそ見えないが酸化亜鉛を毎日飲んで居るのと同じである、酸化亜鉛の出來る量は水の性質と其量とバケツの大さとに關係して常に一定はしないが、普通上水が前に述べた程の量が出來る、もし雨水や蒸餾水であつたら尚多く出來る筈である、斯う云ふ次第であるから、とにかく使ひ古した内面の黒ずんだバケツからはこんな現象は多く起らないが、新らしい内暫くは驚くほど白い粉のやうな酸化亜鉛が出來る拙者の實驗も多數のバケツを種々の水に依て統計を立てれば、甚だ面白い成績を得られるのであるけれども閑暇が無いのでたつた一つのバケツに上水を使つて其現象を見た計りであるが、バケツは水に長く觸れると其内面を侵されるといふ事は爭はれぬ事實である、尚一層容易く此金屬が水に侵されるのを見やうと思へばなまこ板の樋の新らしい時、一雨降つた跡で其樋が乾いた時に見ると、白い粉のやうなものが斑らに着いて居る、是と同じ理屈であるから、つまらぬ事のやうであるけれども、臺所衞生の八ケましい此頃、飲物に有害なといふ事は出て居るが、扨そんならどの位の割合に此有害物が出來るかと云ふのは未だ實驗の報告を得ないから、あまり人の注意せぬ事ではあるが、等閑に出來ぬ事であるから、茲に要點を掲げる事にした。

日本服に寶石

歐米に於ける寶石の應用は、流行界の魁となつて頭の先端から足の爪迄も利用されて居る、ボンチツトに鏤められたダイヤモンド、裳に刺繍されたルビー、サフイヤ是等寶石を衣裳に應用せぬものは、流行後れと言はれる樣になつた、此流行は日本に迄も侵掃して、寶石入の半襟と云ふ斬新の意匠は栗野大使の忠告から目下上流社會の大流行となつて居る、地色や刺繍の模樣に配合して、或は金剛石、又は眞珠、ルビー等が鏤入した工合は得もいはれない、例へば烏帽子縮緬の地に光琳の梅を縫ふて、花の蘂に眞珠を鏤めたり、夏向ならば波模樣に水玉をダイヤモンドであしらつたりするのは殊に目に立つ、而も日本衣服に對する寶石の利用は三枚襲の裾模樣に鏤めたり、女向きの羽織の紋の眞中、例へば花模樣の紋であると其匂ひに入れたり、袋物の刺繍に鏤入したり、卓子掛の處々に輝かせたりするのが流行るといふ事である。



魚類に就ての研究

天然生

段々と暑氣に向ふにつれて魚類が保てなくなるから生魚を買ふには十分に注意をしなくてはならぬ、で通例炎暑の候になると近海で漁れた魚類は何れも大樽に入れ其間に氷の塊をつめて腐敗を防ぐ装置をなし大急ぎで東京の市場へ輸送する、併し其途中で氷は遠慮なく解けるから結局水浸の魚となつて仕舞ふ、其上に魚問屋も小賣店も氷塊を直接に魚の體に接せしめ、或は魚を氷水浸として置くから、魚肉に含まれてゐる滋養分はどしどし融解して體外に逸出する、味は惡くなる、肉の組織は壞れるといふ始末、つまり東京の人は甘い魚をわざと不味くして食はされて居るわけである殊に氷づめにして來た魚は氷を離れると敗み方が早いから少し時間が經つと直ぐに味が變るのである。

これに就て中國邊の或る山家では夏の魚は腸を開けて風通しのよい處へ吊して置く、こうすれば、肉の水分が除れて敗み方が遲いのみならず、味も又異味を保つ事が出來るけれども、何分澤山の魚類を取扱ふ都會の市場では、そういふ風に出來ない十里二十里と海を離れた交通不便な山家に居て、隨分味の變らぬ身の締つた魚が食へるのに、交通の便利な都會の地に居ながら却つて水ぽい魚を食せられるのは聊か殘念であるが、何分澤山な魚類を取扱ふ都會の市場ではさういふ風に一々腸を開いて涼風の通る處ろへ吊して置くといふ樣勝手な事が出來兼るから據なく氷詰めや水浸の方法を採るより外仕方がないのである。東京へ魚類を輸送する方法は汽車便と汽船便の二途ある、房州や伊豆で漁れたのは汽船積にするのであるが、常陸、銚子、相州、靜岡地方からは汽車で送るのである、併しいづれ

も夏は皆氷詰、水漬にして送るのである。

さて今いろ〳〵の魚類について、味の善悪、脂肪の有無、消化の良否、季節と異味、保のよしあしに就て少しばかり申して見やう。

◎白肉と赤肉

鮪、鰹魚、鮭、鱒などは赤肉の部類で、目ばる、鱈、鼠頭魚などは白肉の標本であるが、赤肉と白肉とはどちらが脂肪があるかといふと、無論赤肉の方が多い、就中鮭などは肉の中に脂肪が縦横に漲つて居て恰も牛豚肉のやうな組織になつてゐる、それと丁度反對に白肉の標本たる鱈に至つては肉の中に脂肪といふものは殆んどない、あるのは唯肝臓の一部に貯蓄されてゐる脂肪だけである、(これは肝油に製して虚弱者の薬用に供される)目ばるや、きすなども鱈と同じ様に脂肪のない魚であるが同じ白肉の中でも鯛と比目魚とは赤肉魚に近くて割合に脂肪がある、殊に產卵季節になると鯛の脂肪は著るしく殖へて來るのである。

△產卵前と魚類の味

料理の方で魚の旬といふのがある、旬といふのは其食用に供すべき最好季節であるが、其の季節は魚の味の最も美味なる時をいふのである、何故に魚に味の美と不味との季節があるかといふのに、これは主として肉に脂肪の含てゐる時と居ない時との關係である、すべて魚鳥に限らず何でも肉に味のあるといふのは肉中に含まれた脂肪が働らいてゐるからである、鯛がうまい、鮪がうまい、又鰻がうまい、牛肉のロースがうまいといふのはすべて肉中に含まれた細かい脂の作用である、下品な魚でも鰯や秋刀魚の味のよいのは脂が潤澤であるからである、そして何魚に限らず產卵前に於ては肉に脂肪が澤山に含まれてゐるから、產卵の前は即ち魚の食用にされるべき好い季節である。

◎脂肪魚と虚弱者

何故に病人には鮪や鰯のごとき青魚を忌むか、それ

は青魚の大部分は脂肪濃いのみならず其分子が粗雜であるからである、つまり脂肪の肌理が細かくないから病後の人など消化力の弱い者には不適當である、たとへば同じ脂肪でも牛肉の脂肪は細かく豚肉の脂肪は粗雜であるから健全な者が食ふて差支のない豚肉も不健全者には適當しないやうなもので、つまり消化力の衰へた者は粗雜な脂肪分は好くないといふのである、それ故に昔しから病人の食ふてよい魚として鰈、鯛、きす、すゞき、鮎などが選ばれたのも矢張りこの道理で脂肪が少くて分子が細密であるからである。

◎脂肪と蛋白

魚を食へば精がつくといふ、この精がつくといふのは身體の組織になつて活力の原動力となるからであるが、其の組織になり活力となるものは魚肉中の脂肪でなくて蛋白質の部分である、又魚を食ふて肥へたといふ人がある、これは組織にもなり保温にもなつたであらうが、其の肥へる原因の多くは魚肉中の脂肪が體内へ輸入された結果である、即ち身に脂肪が澤山に出來たのである、故に鯉や、鰻や鰯のやうな脂濃い魚を食へば肥るのが當り前である、縱令肥へずとも身體の活力を養ふ爲めには魚肉を食はねばならぬ。そこで今どんな魚に蛋白質が多くて、どんな魚に脂肪が多いかといふ成分の比較を出して見やう、分量は生魚を標準として見たものである。

	蛋白	脂肪	水
鮭	十六	五	七十七
鰻	十	十三	七十五
鮪	十六	十一	七十七
鯖	二十一	六	七十二
鰯	二十一	六	七十六
鯉	十九	七	七十六
鰱	十八	六	七十四

以上は脂肪の多いもの

	蛋白	脂肪	水
鯛	十七	四	七十八
鰈	十九	三	七十九
鰹	二十五	一	七十四
鱚	二十四	一	七十六
鯵	二十一	一	七十六
鮎	十九	二	七十六

[illegible]	十九	〇	七十四
めばる	十九	〇	七十六

◎荒海の魚と内海の魚

魚の味の美と不味とは脂肪の作用であることは前述の通りであるが、更に内海の魚と外海の魚とはどちらが美味であるかといふのに、それは無論外海である、何故なれば、外海は水が深くて潮流が急激であるから肉が締つてゐる、肉が締つてゐるから、捕獲して少々時を経ても容易に萎らないからである、これに反して内海の魚は水が浅く、潮流が緩漫であるから肉が締まらない爲めに捕獲してから直ぐに萎る、それ故味が劣るのである、俗に荒海の魚の味のよいといふのはこの爲めである、又淡水魚即ち湖水や河水に住む魚に就て比較するに鮎や、はえのやうな水の透明な瀬の早い流れ川に住む魚は肉が淡泊で、且つしまつてゐるが、濁り水、泥水の中に住つてゐる鯉や、鰻に至つては肉が脆弱で且つ濃厚である。

◎腐敗し易い魚

魚肉は鳥獸の肉に比して概して腐敗し易いのは外氣に對する抵抗力が弱いからであるが、その魚肉中でも鹹水產は比較的長く保つけれども、淡水產は保ちが惡い、又魚の大小によつて比較すると、鮪や、鰤のやうな大魚は割合に腐らないが、鰯や、鰈のやうな小魚は腐り易い、それから鯛や比目魚のやうな扁平い魚は、海鰻や、いはしのやうな長魚よりも保ちがよいのである。

◎魚の貯藏法

魚を貯藏するは鹽漬と、乾燥と煎乾と、燻して罐詰との四種類あるが、いづれも多少鮮魚の消化性と風味とを減じるのであるから、消化不良の人や快復期の病人などにはよろしくない、併し今日鹽漬と乾燥法とは一般に魚の貯藏法として行はれて、山間僻邑の交通不便な土地では鹽魚によるの外はないのであるが、將來

燻製や罐詰法が盛んになれば僻地の人でも鮮魚を食ふと同様の利益を得るであらう。

◎鰹節の成分

魚の貯藏法としてやゝ完全なものは鰹節の製法であらう。尤も鰹節は肉を其儘食ふのでなくて専ら其の煎じ汁を利用するのであるから鮮魚の風味と成分とは大いに失はれてゐるわけである、東京で盛んに用ふる蕎麥屋の鰹節の煎汁に就て調べて見ると水一升に鰹節凡そ二十五匁の割合で十五分間煎じ出して、其エキス分を量つて見ると凡そ四匁ほどのものが得られる、此のエキス分は西洋で行はれる牛肉エキスと類似した滋養分で、且つ香氣も鰹節固有のものと同じく百匁の鰹節から十五匁の精肉を得たのと同じい事である。

◎魚類の鑑定法

小さい魚ならば直ちに眼の玉を見る、透明であれば無論新鮮である、眼の玉が白くなつたり、又は赤味を帶びてゐるものは古い證據である、又鱗を見てもわかる、鱗の密着してゐるものは鮮しい證據で、脱落するものは古い、それから鰓である、鮮紅色を呈するものは新鮮で紫色又は暗赤色を呈して臭味あり粘り氣のあるものは古い證據である、又大魚で全身を見る事の出來ないものは肉色によつて鑑定する、鮮明で光澤のあるものは良肉、光澤失せ水分の浮びたものは腐敗に近い證據である。

◎魚肉のソップ

世間では鷄肉や牛肉のソップを大層賞用してゐるけれどもまだ魚のソップを用ふるものは少いやうであるが、効用は必らずしも牛鳥に劣るものではない、料理店で小鯛や、さよりの茶碗盛をこしらへて客に出すのは一種魚肉のソップであるが、あれは水分が多過ぎてソップほどの効用はない、まづこれを製するには成べく新鮮な脂肪の少い小魚を細かに刻んで暫時水に浸した後、凡そ一時間位煎沸して布で漉せばよろしい、其

分量は凡そ肉五十匁に水三合ほどの割合でよからう。虚弱者で鳥獸肉のソップを嫌ふ人に用ひしめてよい。

◎不消化性魚肉の利用

蛤蜊、はまぐりなどの貝類、海老、蟹、しやこなどの甲殼類はいづれも不消化性の肉であるから消化不良の人にはよろしくないが、滋養の効は魚肉に劣らないものであるから、うまく利用したらば虚弱者の食用に供する事も出來る、それは矢張ソップの仕方である、これを製するにはまづ新鮮な貝なり蟹なりを細かに刻み若しくはほぐして水から煎出せばよい、水加減は普通のソップをつくる分量でよし、それには貝の柱などが最もよいのである、西洋では蟹や海老のスープは鳥獸肉以上に滋養ありとして又高貴なる食用品として賞味されつゝあるのである。



◎柔魚類の食用法

章魚、スルメ、又は甲烏賊など所謂柔魚は是れ又不消化性のものであるから虚弱者には全然よろしくないが、それも食用法をよくすれば魚類と同じく滋養の効がある、それは酒を用ゐて氣長く煮るといふのが第一である、少々位硬い肉でも酒で煮れば柔軟になるものであるが、章魚や烏賊を煮るのは其前に一旦灰汁を入れて茹でゝそれからよく灰汁を洗ひ、後酒を入れて三四時間も煮れば大概は柔かになつて歯のない老人にも食べられる樣になるものである。

此花會

みどり

丈の高いのを後に、順次に低いのを前にして、二人ばかり竝び立つた海老茶袴、前列の人の袴が短かいので袴の下から裾が見える、足袋に隱れない足首のところの肌も見える、是等は皆一年生である。

眉の美しいのや、色の黑いのや、白いのが、一緒に唇を動かして、樂しき我家を唱ひ出す。

　薪のせくる細道、鳳鳥にしみて夕日かくれぬたのしき我家は木の間に見えたり

其がプログラムの第一番であつた。

次は英語の話方、朝鮮の話である。

話す人は峯尾美代子といつて、小紋の着物に海老茶の袴である、袴の紐に時計の鎖が見える、顏の面長な、白粉つけた眼の細い人である、英語を喋るほどのハイカラに似合はない、髮は舊式の鬢髱澤山な日本髮である、通譯する方の織戸りき子の方は、束髮で、黑木綿の紋付着物で、眼の涼しい眉の美しい顏である。朝鮮の學校の話や、兒童の事など亡國の變風俗を却々英語でうまく喋る、時々淀んでは原稿をのぞくのも亦愛嬌である、通譯する人もよく馴れて居る、絕えず唇の間に笑を湛えて通譯したのは却々是も愛嬌者であつた。

外にも英語對話・唱歌、お伽噺・ヴアイオリン、歌劇等があつたが、何が一番抱腹絕倒させたかといへば、其れは今日雇はれたる小役者？東洋幼稚園の生徒が演じた「お醫者ごつこ」である。

舞臺には二人の少女と一人の少年が椅子によつて居る、テーブルが一臺据えられて白布で掩はれた其の上には病人の積りの人形が少さき蒲團の上に寢かしてある、其れを一人の醫者が來て診察するのである。

もとより子供の事だから表情などのある筈がないが、間が拔けてる程活動しないのが却て滑稽であつた。

英語狂言　インク、サーマン

是は昔から我國の能狂言として人に知られて居る墨塗狂言だから新たに說明するまでもないが、たゞ英語で言つただけ變つて居ました、大名と太郞に扮した女學生は束髮そのまゝで上下を着て、長袴の裾をばさ／＼捌く顏を束

裝にして居ながら服裝が男なのだから變ではあるが、然しちよん髷の積で見れば、敢て束髮も苦にならないのである、この上下を着けた人が英語を喋舌るのだからちと配合が奇妙であつた、却々それでも上手でありました。

此頃女學校の流行唱歌となつてる、あの離れ小島、の唱歌があつた。

はなれ小島の荒磯に、つきせぬ恨をとゞめて、白波のみや咽ぶらん……

喨々たるピヤノの音に優しい肉聲が伴はつて、或は深よく、或は悲しく、意を空うして孤島に悲慘な最後を遂げる戰士の至情をよく唱ひ盡くすのであつた。

オルガンの音ピアノの音ヴアイオリンの音もいゝが、是等樂器と離れて、自然の音で美しいのは鳥の囀り、蟲の音であるが、その中でも女性のやさしい肉聲、女の細い聲帶の膜を震はして發する聲がまたどれほど美しいものだらうと私は思ふ。

朗吟、森の逍遥は四人の女生徒が、何等機械の音の添え物がなくて、單に自分の咽喉をかりて唱ふたのである、歌は藤村作の新體詩である。

　檜は荒し杉直し、五葉は黒し椎の木の、枝をまじゆる白樫や、欅は萃をよこたえて、枝と枝とにもゆる火の、なかにやさしき若楓、

是はほんの歌の一節であるが、あまりにだら〳〵長いのと歌の文句が充分に聞きとれなかつたのは感興を削がれました。

然し乍らその叢にも增して朗らかなる聲は、著しく濁つた室内の空氣に悠々と流れて、幾番かの餘興に稍倦怠を覺えた聽衆の耳を洗ふのであつた。

佛蘭西の勞働者は、英吉利や獨逸の可成りな商店の主人が食ふよりも、又亞米利加の田舍町の宿屋で出す御馳走よりも、餘旨い御馳走を晩餐に食て居る、英吉利の勞働者は、路傍の塀に背を凭せて、晝餐に麵麭と漬物か、さもなければ犬の食ふやうな輪切れの薄肉を食て、氣拔けの麥酒を飮んで居るが、佛蘭西の勞働者なら、こんな晝餐は、見向きも爲まい。

佛蘭西の細君は、怜悧な事も、機敏な事も世渡りの事も萬事の扱ひも、御亭主よりは非常の上手で、常識があつて、經濟の事に明るくて、生れついての整理好きで、美術的の性質が發達して居て觀察力が鋭敏で、如才なくて、料理の心得があるから、御亭主たる者はほんの僅かな收入で、外國の富豪すらも羨やましがる樣な贅澤な生活を爲る事が出來る。

物を柔らかに煮る法

此節は西洋料理が流行して參つた爲に、日本の料理を爲さる方でも曹達を入れて煮るとか、又は其の外の種々の薬等も用ゐる方がありますが、何も薬品等を用ゐないでも煮方に依つては充分軟くする事が出來ます。野菜等は長くさへ煮て居れば屹度軟かくなるもので、別段方法等はありません、只水と火の加減を程宜くして置く位の注意です。煮て硬くなるものと申せば先づ海藻類とか魚類では章魚、烏賊、鮑及び獸肉の類でせう。

◎章魚の煮方　章魚は元來こわいものですが、煮方に依つては決して軟くならぬ理はありません、尤も章魚に限らず其の原料に注意することは改めて申すまでの事もありますまい、水戸の章魚は大きい代りに身が硬く、三崎章魚は小さいが軟かくて味も勝れて居るやうです、そこで先づ三崎章魚を一杯買つて來たとすれば、最初八本の脚を切り離して丁寧に疣の砂を洗ひ落として、味噌擂棒のやうなもので搗いて、軟くして適宜に切り、水一合に砂糖五十匁位の割で先づ烈火に懸けて煮ます、火が通つた頃引笊で章魚を一旦引上げて更に又落蓋をして一時間程火を弱くして汁が三分の一位になるまで煮詰めます、汁が減つてもう下す時になつて醤油を五六勺入れてザツト煮立つたならば葛を少し攪いて下ろします、斯んな風にして煮れば口に入れて直ぐに溶ける程ではなくとも、隨分軟く煮ることが出來ます、又蒸で蒸す法もありますが、之れは時間が長く要ります。只烈火に懸けない丈けの事で別に大した違ひもありません。

◎烏賊の煮方＝＝烏賊十杯位を煮るとすれば、先づ之れを克く洗つて布目に切て置きそして二三合位の水に味醂一合半醤油三勺位にして汁を拵へ、前に切つて有る烏賊を網杓子で入れて攪き廻して半熟に煮上つた頃目籠で烏賊を抄ひ上げて、殘りの汁が二勺位に煮詰つた時に又目籠の烏賊を入れて極くザツト煮て後で盛る時に汁を懸けます、然うして煮ればうま煮の上に載せても決して硬い樣な事はありませぬ。

◎鮑のふくら煮＝＝鮑も煮ると硬くなり易いものですが、軟く煮るには決して鹽を入れてはなりません、五杯の鮑とすれば克く洗つてから程宜く一つ〻〻搗いて（章魚のやうに強く打つては碎けます）五合位の水に入れて強くない火で汁が一合位になるまで煮詰めてから、味醂一合砂糖三四十匁位を入れて焦げないやうに杓子で攪き廻はしながら煮上げれは軟かくて美味しいふくら煮が出來上ります。

◎魚の丸煮＝＝食べる樣に煮るには初めに一度燒いてから煮なければなりませぬ、併し火を強くしないで成る可く遠火で燒くやうにします。魚を煮る時丈けは如何しても入れなければならぬものがあります、其れは山査子の實であります、沙魚五十位を煮るとすれば、先づ二錢位の山査子を四合ほどの水で煮出し中の實を取り去つてから、其の後で燒いて有る引笊の沙魚を入れ更に砂糖五十匁程入れて落蓋でトツクリと煮て下ろす時、醤油一合位を加へます。凡て軟く煮ようとするには醤油は（先きに入れては身が緊つて硬くなる氣味が有りますから）煮上つた頃に入れる方が宜いです。



百合子孃の眼に映じたる日本

みどり子

左の一編は三歳にして米國に伴はれ、十八歳にして日本に歸り、越えて翌年無情の風に誘はれて草葉の露と消えたる親友小野百合子孃の遺稿なり。佳人幸うすく、才子怨み多き浮世の果敢なさを悲む。

▲夢か？　戀しき日本よ！

夢か？　夢にあらず、幻か？　幻にあらず、あはれ私は不可思議なる幻術師の手に弄ばれて、魔術の國を旅して居るのではあるまいか？　嗚呼戀しき日本！

懐しき故郷！　十五年間絶えず汝に憧憬れたる可憐の少女を何故にかくも苦痛みに陥らしむるや。

愛する日本よ、私は山櫻のやうな、大和魂を持つ日本人を父母として東京に生れ、水道の水で初湯を遣つた純粋なる日本人である。我全身には日本人特有の美しい血潮が巡り、我胸には義を見て勇む祖先の熱情が燃えて居る。されば愛する日本よ我戀人よ、汝を慕ふて萬里の波濤を越え來し乙女の切なる戀を受けて、直に嬉しき接吻を其心に與へぬか。

私の生れた家は九段坂に近く、門の前には高い銅像が聳え立つて、櫻の花が雲かとばかり咲き亂るゝ處であつたさうである。私はお池の鯉と、兵營の喇叭と、祖母さんにおんぶするのが好きだつたと聞て居る。されど祖母は既に死んだ。おんぶやおつぱいを誰も與へて呉れない。只見るもの聞くもの事々物々皆不可思議なるものばかり、嗚呼夢ではないか。

▲日本贔負の父と母

私の兩親特に父は非常なる日本の讃美者です。もし

假初にも日本に對して同情なき言語を發する人があると忽ち火の如うに怒る。父は常に米國人を冷笑して、

「日本は天然の公園だ。富士山。琵琶湖。吉野山。川が奇麗で、海が善い。其上女は愛らしくて、溫柔で、男は怜悧で才氣がある。頑固で、貪慾で、不器用な米國人が大な體を動してのそ〳〵匍ひ廻つて居るひまに日本人は一足御免とずッと先へ進むで行く。山椒は小粒でもヒリッとして居るは。」

と一人得意氣に言つて居ました。

母は先年世を去りましたが、父は今オハイオ州で大きな農園の主人です。兄は屢々米國と日本とを往來して父の事業を助けて居ます。父は常に私に談つて言ふ。

「俺ア外國へ來て働ひて居るのは、日本の富を作るためだ。」と父は本統に昔氣質の愛國者です。故に私は美の國、理想の鄕、樂しきパラダイスとして絕えず日本を慕ふて居りました。

▲富士が見える！

私が初めて、――否、再び日本の地を踏んだのは恰度五月の始めです。舟が布哇を離れて再び天か海かの境に入つてからは一層切に日本に憧憬れて居ました。或日の夕、私は甲板の上に立つて西の空を眺め、たとへ樣なき思ひに沈むで居た時、突然後の方で、

「富士！　富士！……、富士が見えてる！」

と叫ぶ男の聲を聞きました。私は嬉しさに胸が迫つて直に其人の許に走り、望遠鏡取る手も遲しと指さゝる方を眺めると、雲か、山か、遙に日の入る地平線上に浮び出でた一つの影がありました。

長の海路に疲れ果てた船内は、急に春風が吹き初めたやうに見えました。今迄ベッドの中に半死半生であつた病人も、俄に食堂に出で卓に向ひました。寡言の人がはしやぎ出せば、恐し氣なお爺さんは笑ひました衣服を着換へる。髮を結ぶ。行李を整理する。中には嬉しさに泣く人もありました。乘船者の心は皆日本といふ一の精力に吸ひ寄せられて居たのです。特に私には猶他に大なる引力がありました。

或る朝船は繪の如き海岸を右に見て、次第に進行を

緩めました。遙か彼方に浮び出でた蜃氣樓、——横濱を見ました時には、私は思はず甲板の上に躍りました。嚮て日本漫遊のためとて私を同伴せられたりし夫人は兩手に私を抱き上げて、此美麗なる樂土に生れし私の幸福を祝されました。

▲我同胞は西印度人か？

船は全く進行を止めて碇泊しました。私は早く上陸をと待つて居ると、夥多の小舟は此方を指して近附いて來た。舟子は皆一樣に茶の衣服を着て居りました。初めて我生國に我同胞を見る嬉しさに、胸を轟かせながら彼等を凝視して居た。併し、嗚呼！　嗚呼！　嗚呼！　私は日本と僞はられて恐ろしい野蠻國の捕虜となるのではないか。彼等は皆西印度の土人の如うに裸體です。空を仰げば無數の水雷艇の如きものが浮むで居る。

▲戀しき精さんと叔母

嚮て約せし如く精さんと叔母さんとは波止場に私を待つて居ました。私は寫眞で二人を知つて居ます。特に精さんは私の理想の男子です。餘りの嬉しさに走つて其胸にすがりました。併し精さんは冷に私の手を拂ひ除けて顧ません。私は燃ゆる思を叔母の口に觸れて、甘き接吻を受けたいと望むだ。されど叔母は私の同胞なる日本人ではありますまい。彼女は恐らくペルシヤ人でせう。石炭の如くに黒い齒が赤き唇の間に氣味惡く見えて居る。私は眉なき不思議な顔貌と、可笑しき頭髮とを眺めて、茫然と立ちすくみました。私は漸く無愛想な無言の精さんの後について夢の如うに歩みました。何故精さんは疲れた私を助けて呉れないのでせう？　精さんは屢々私に手紙を送つて私の來るを待つと申ました。私を愛すると告げました。併し今見る精さんの眼には一片の愛のきらめきもなく、言葉に何の情をも含むで居りません。ア、我戀人は私を愚弄するのではあるまいか。と思ひつゝ。

▲生國の寂寞

街に人道車道の別もなく、往來に左右の分ちも出來て居らぬ。行く人來る人、馬車や俥、恰も蟻軍の道を

見るやうである。かくて車は悠と、人は馬車と衝突することが無いのであらうか。而己ならず並木も芝もない凸凹道で、塵は煙の如うに立ち上つて目も眩むばかり。かゝる道路を平然として往來する人は誠に妖魔ではないかと思ひました。空には數多の魚——水雷艇と思はれるものが泳ひで居る。女も男もおなじ着物をつけて木切の上に乘り、背に荷物や赤子を着け、或は大な帽子に物を入れて頭に被りながら大聲に叫むで行く野獸の如き男は熊のやうな脚を顯し、大きな奇妙な帽子を被つて荐りに人を呼むで居る。十二三歳の一人の小兒はベンチ形の木片を兩足に着けて自轉車と競爭しながら走つて行く。何たる不思議な光景でせう。私は天路歷程の迷の巷を思はずには居られませんでした。

リー夫人は横濱にある二人の友人に迎へられ、馬車を驅つて樂し氣に去りました。夫人の美しき髮は其友の肩に懸り、林檎の如き頰は其友の頰と觸れて、相擁しつゝ行く後姿を見た時、私は思はずも生國の寂寞と情人の心もとなさとを悲しく感じました。

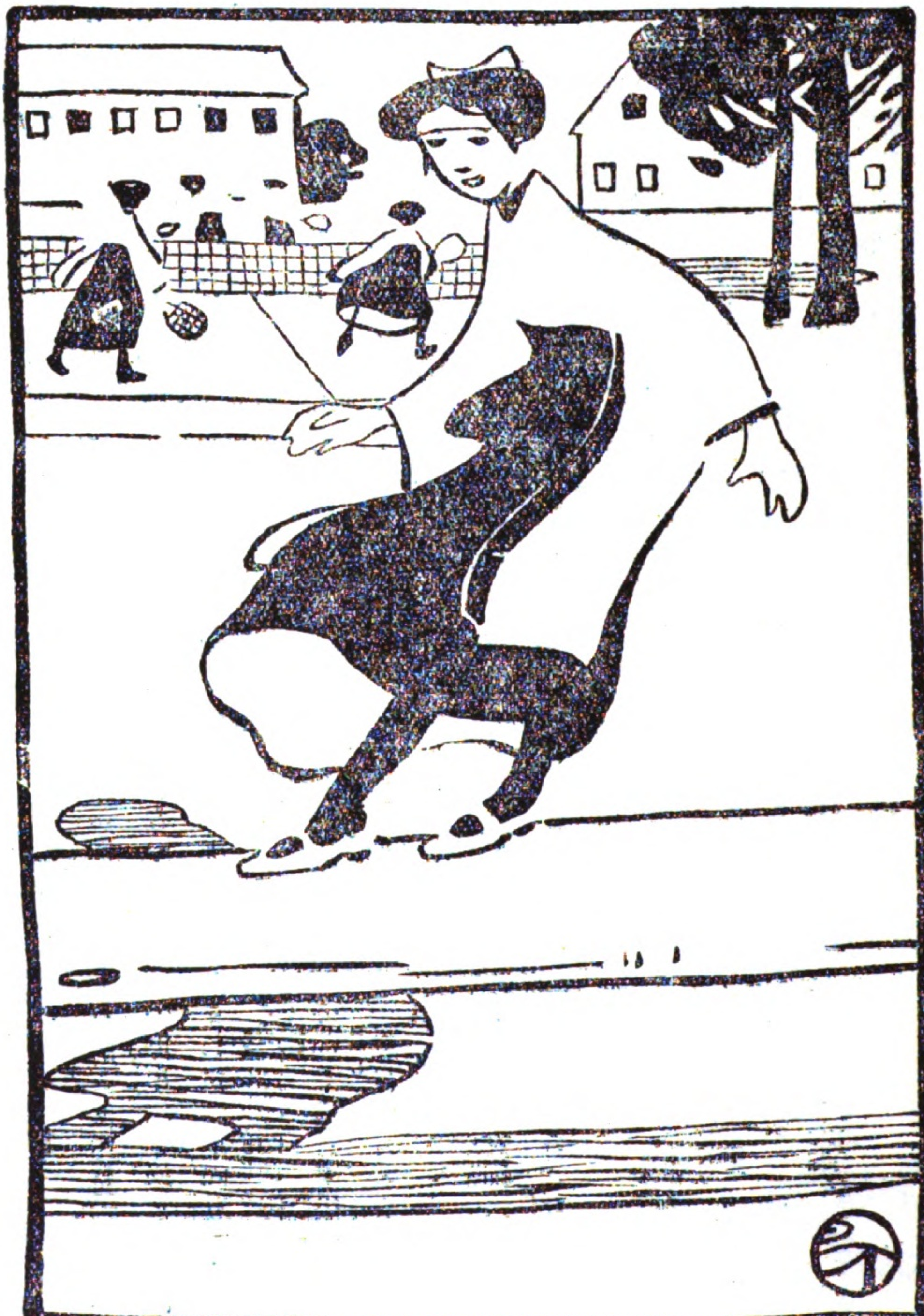
▲醜き妖魔は俥屋さん

私がまだ米國に居る時から、日本の俥さんのことを聞て居ました。人が人に曳かせて行く。何たる慘事でせう！ 侮蔑でせう！ 私は決して俥やさんを辱めまいと思つて居ました。併し精さんは强て私を俥に乘せた。私は心密かに俥さんを氣の毒に思ひ、彼等の不快と不滿に同情しました。されど事は意外、彼等は皆嬉し氣に笑みを湛えて驅けて行つた。毛に掩はれた茶褐色の身體、馬の如く走る健なる兩脚、私は彼等を普通の人間と思ふことが出來なかつた。美しい天の使は夢地に人を誘ふて、高き山、低き谷、東に西に自由に導き伴ふ如う。醜き妖魔は俥さんと化して、雜鬧なる迷の巷を自由に飛び廻るので無いかと思ひました。

▲百鬼晝行！

低き家、薄暗き停車場、紙の扉、玩具の如く小さき汽車、皆悉く奇怪です。日本の風俗ほど不可思議なものはありません。何れが、眞の日本人でせうか。

私が汽車に乗ると前の方に一人の美しい婦人が居りました髪をマダム専有の形に結び藍色の上衣を着て居る。初め其淵



容なのに見惚て居たが暫くして其婦人が窓の方を振向くのを見ると、實に驚かざるを得ませんでした。婦人の脊は駱駝の如うに隆起して、肩は寂し氣にこけて居

る。彼女は蛇靑で御座いませうか。
蛇靑婦人の側に一人の少女が居りました。美しい花模樣の着物を着て、髮を薔薇の花の如うに麗しく結んで居た。私はかゝる美しき乙女を見たことがありません。されど花の如き此少女は、板樣の赤い荷物を背負ふて、苦し氣に坐つて居るのです、此可憐の少女に誰が恁んなものを負はするのでせう？。
室の片隅には魔女の如き大きい恐ろし氣な女が居ました。豚の如うに肥つた巨大な身體、鐵の如き其の顏色、到底婦人と信ずることは出來ない。私は往昔のゴライヤを思ひ出した。併し彼は正しく婦人でした。黑い髮を美しく結むで、大きい縞に赤褁の着物を着けて居ました。彼女は傍若無人に胸を開き、脛を露はし、荐りに葉卷をくゆらして居た。
叔母の側に居る人は頭に毛なく、私の側に居る男は裳の如きものを穿ち、精さんは黑の詰襟の上衣に同じ色のズボンを着け、菱形の帽子を被つて居りました
百鬼夜行といふ古諺は豫て聞て居たが、我戀しき日本國は百鬼晝行の恐ろしき所で御座います。

▲大なる鷲は人である

汽車が橫濱を發する前より搔き曇りし空は、いつしか雨となつて、二三の停車場を過ぎし頃に、糸の如き濶が荐りと窓に懸りました。不圖私は眼を上げて外を眺めると、靑々として麥畑の間に怪しい大きな鳥が居る。其羽色は恰も鷲の如くにして褐色を帶び、頭のみを白色を呈して居る。私はかゝる大きな鳥を見た事がありません。密に駝鳥を思ひつゝ、絶えず外部を注意して居ました。汽車が適々果實畑の中を過ぎた時、其間にもまた怪鳥が蹲て見える。私は窓を開けて、思はずフヱロー！と呼びました。
「オー、オー、オー、鳥は人間の顏を持つて居ます」。
精さんは愕いたやうに私を顧て。
「何？、何？」と尋ねました。
「奇怪！、奇鳥！」と私が其方を指すと、精さんは急に笑ひ出し、
「人です。——雨衣を着た人ですよ」と云ひました。

さても不思議な着物！　私は人を食ふ亞弗利加土人に、かゝる衣服のあることを聞いて居るが、我が愛する日本に於て之を見やうとは、思ひ設けぬところでした。

▲眞の故鄕と、理想の戀人

私は此上多くを記するの勇氣がありません。私は夜の八時頃、新橋より面白きランプを携へた俥さんに送られて、此家——精さんの家へ參りました。驚きと恐怖と、不安の爲めに心は麻の如く亂れて居ります。嗚呼我が慕ひし日本は恁んな奇怪な國でせうか？。我戀せし精さんは戀知らずの無情漢でせうか？。

嗚呼夢か？、幻か？、夢ならば何故早く醒めないのでせう。

私は一日も早く眞に美しき日本に至り、我が理想なる精さんの口より甘き接吻を受けたいのです。



荒川の一日

輝子

いとこの武夫が一日どこか近郊に詩腦を養ひに往かんかと云たので、二三日經て左の歌を遣した。

　諸共に大森の里行きて見ん
　　言葉の玉藻あつめかてらに

荒川の長きひねもす春の日を
　花かりくらし歌よみてこん

どちらでもと書いて遣ると、恰度明日が日曜なればよからんとて、

　礒櫻波に花散るといざよひて
　　彌生曇りや春の瀬ながる

と書いてよこしたので、大森かと思つたら荒川の方

が宜からうと云ふので私しも、

　櫻貝吹よす風も荒川の
　　梢の花はちらんとすらん

と惜みつゝ愈荒川の八重櫻見に出掛ける事にした。二人にては物淋しきに同じ催すなら五六人をと思つて、其夕、

　道あらは深山の茂樹ふみわけて
　　をちふす虎のねむりさませよ

と又葉書を遣つておいた。夕方頃は空が曇つてゐたので、又となるかと心配してゐたら、夜に成て星のあざやかに出てゐたのに安心した。

不幸にして文子も茂樹も行かなかつた。文子は太く喜んでゐたと聞くに、よんどころなき差支に、われも人も皆殘念に思つた。

途中鯉幟の空高く風をはらんでいきほひよきを見て、

　こひのほり昇りつくして久方の
　　雲の上にも浮ふけふ哉

口ずさみつゝ武の君と共に本郷より淺草行の電車に乘る。服薬した爲に餘程電車には醉はぬ樣に成つたつもりでゐたに、小半月乘らぬと、早や又胸に催し氣味がある。

吾妻橋の袂に待てゐると二三十分して虎が來た。虎の君は淺草は兩國附近の是れも同じ從兄の家に、高等學校の試驗を受けんとて、つい此頃上京して來てゐる。武もおなじく高等學校志願にて、一つは工科に一つは醫科志願である。

同じいとこの兼子を伴ひ來なかつたのをおのれいたく殘念がりて虎をうらむ。

徑ちに汽船に乘る。ポートレースがある樣子で書生が澤山先の汽船で出た。

大橋迄の景色はいつも變りはなけれど、塵千丈の目移しを養ふには充分である。一番に彼の洪水の時の有樣が胸に浮ぶ。

虎武の兩人には千住の町は始めてである。虎は千住の町を江戸八百八町の野菜源とは知らず。馬場の同居


いづれが宿命
の寵児なりや

して道家ばかり並んだ村と思つて、麵包、菓子、罐詰など腰に着けて來てゐた。妾しも有合せのビスケットを少々、武は何にも携へなかつた。

千住の町を左に曲つて、千住病院を左に、葉櫻の緑い隧道を妾しが茲の八重は、東京一番であると、父と去年見たまゝを自斷で二人に語つて、長い土堤を幾度か早い男の足を制しつゝ、三人は進んでも進んでも花は無いので、さてはと今更に進み來た長い土堤の振返へらるゝに、二人は事とも思はぬ樣子である。

漸くにして一本見付けて、其土堤下に陣取り菓子を出して喰ふ。

虎のあるじ顔に能く喰ふに拘はらず。武の君は催ほしの心に反かじとてや詩に只耽りに耽る。妾しが蒲英花に蝶の止まつてゐるのを何心なく、

春風に吹かれ〳〵て花の上に
何を胡蝶のむつがたりする

と云ふと、虎も劣けじと、

春の野邊すみれの床に眠る蝶の
心やいかにのとけからまし

と手帳の端にかいつけて出した。作歌は始めてだと云てゐる。

暫くして又進む。

餘りに考へ過ぎて、出來ぬ〳〵と笑はれてゐた武が、突然出たと言つて、

櫻咲く隣りの家は空家なり

と聲高く言つて、滿足げに是れは考へずだと言つたのに、遽かに興が來て、花さへ色めき返るやう。恐らく是れが今日の獲物であらう。

だん〳〵進む程花も多くなつて來る。八重は流石に褪せながらも賑やかだ。

突然率先に進んでゐた虎が道の傍なる葭簀茶屋に飛込んだ。何うしたのかと云ふと疲れたから休まうと言ふ。武も妾しも續いて入いる。此所で菓子鮨など呼んで晝飯くふ。

武は夢中で詠み、虎は能く喰ふ。

春の田に水車のあるをあれをと云へど、武は例の耽

り込んで、

　春の水流れ〳〵て水車
　　　さきぬちりぬと姿うつして

一時間計りして其所を出で、又五六丁進んだ後、限りなければとて、引返して歸路に就く。

道の半ばごろに四十餘りの穢なげなる女、箱根の竹なりとて、細やかなるステッキを三錢づゝにて買へと二人に勸める。

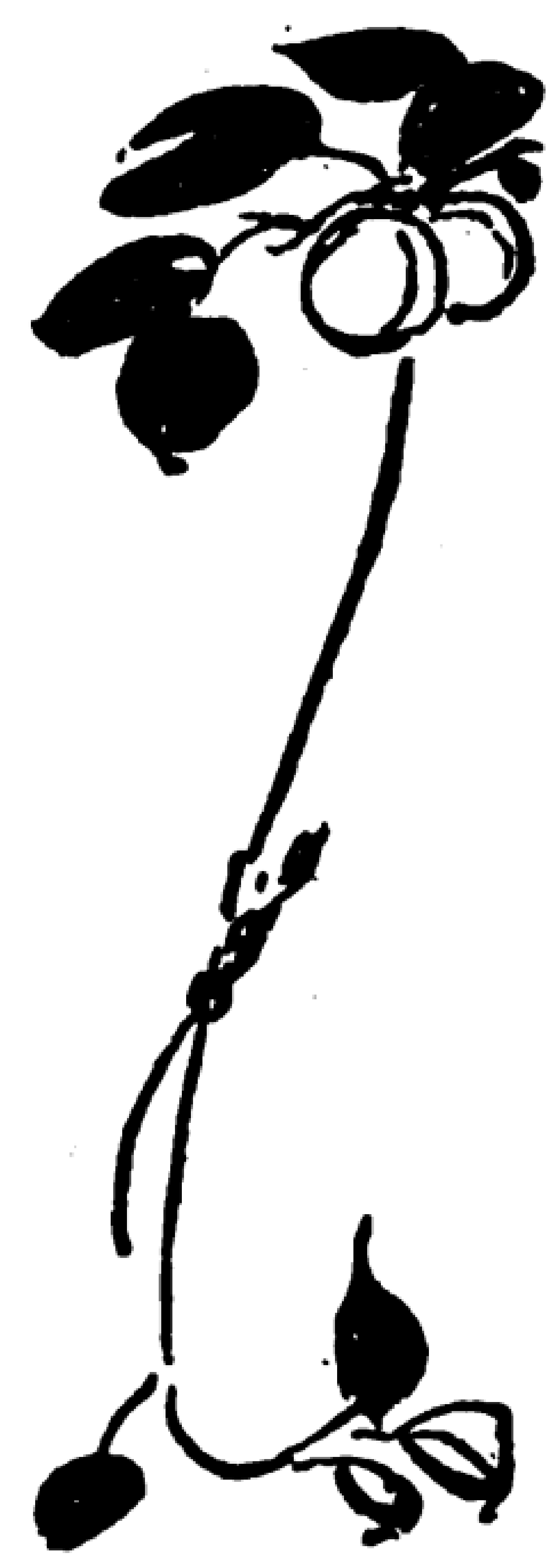
眞僞は知らねど、箱根には煙管竹は澤山あると妾しが言ふと、違ひない、虚言と思ふなら折つて御らうじなと、口より出まかせを云ふにくし。

一本づゝ買求める。

　ふり杖の長きよふりて變らぬは
　　たけと虎との契りなりけり

と例の見苦しきものを口ずさむ。

歸路に隅田川は慶應のボートレースで、赤青白の旗で滿船飾をなし、陸も水も非常な殷はしさで在た。



精神病院の一瞥

兒玉花外

晩春の一日午後の空はどんよりとして、生温い南風が頰に當り、男でも女でも神經質の者は、這んな時に乾度發狂を爲さうな日だ。

私は、某精神病院に知る某醫學士に用事があつて、今し方此處へ訪ねて來て、患者控室に學士を待て居るのである。——渠は丁度今ま手が離されぬさうで、夫れは平常猛烈な男狂者が、十六度の痙攣を起して死んだからで。

此の病院の門を這入ると、梅が烈しく匂うて胸を衝く。春の白日に白梅の花が狂ふて咲くのを觀たが、現在待合室には、一種の怪しい沈んだ空氣が充されてゐ

る。物事に感じ易い私の頭腦は、早やクヨ〳〵して血が動搖し、髪は魔物に壓付けられる心地。不思議！木造の黒色の長椅子に在る男女は、悉く皆精神病者で無からうかと想はれた。イヤ實際は見舞客で然うでなかつたのだが。

　私は只手を拱いて、院の内部深く狂亂する、世にも哀れな人々の運命を考ふる瞬間、先刻から前の椅子に細腰を卸して居つた少女、花の麗しい姿が動いたかと思ふと、『ウフン〳〵〳〵』と、紅い唇から怪しい言葉を洩した。異樣に光を帶ぶ眼からは、熱い淨い露がハラ〳〵零れ落ちる。何か物が恐ろしい樣に、立つて母らしい婦人に縋つたが、親木に纏はる姫蔦か？　松樹に啼く秋の蟬よりも悲しい聲を振絞る。

　突然前に起つた出來事に、私は頗る驚かされた。附添の婦人は叱るやうに宥める。娘の美しい光る視線と、私の驚愕の視線と觸合ふたが、私は恐むでも、新月のやうな曇つた少女の顏を、正面に視るとは能きなかつた。不意に垂れた頭髪の上に、涙の時雨を浴せられても。

　打見たる所、良家の娘とは思はれぬが、芳紀は十五六であらう。着物は絹入りの綺麗なのに、赤のかつた花模樣の帶が、纖細りした身體にキチンと適合ふて、内に狂氣を包むでゐるとは信じられぬ。見事に結はれた露の滴れさうな黒髪の下には、稍黝ずんだ狂血が纏まるとは想はれぬ。春の花か、青空のやうな美しい顏に、俄に陰翳を萌し、稻妻が閃めかうとは誰か考へやうぞ。

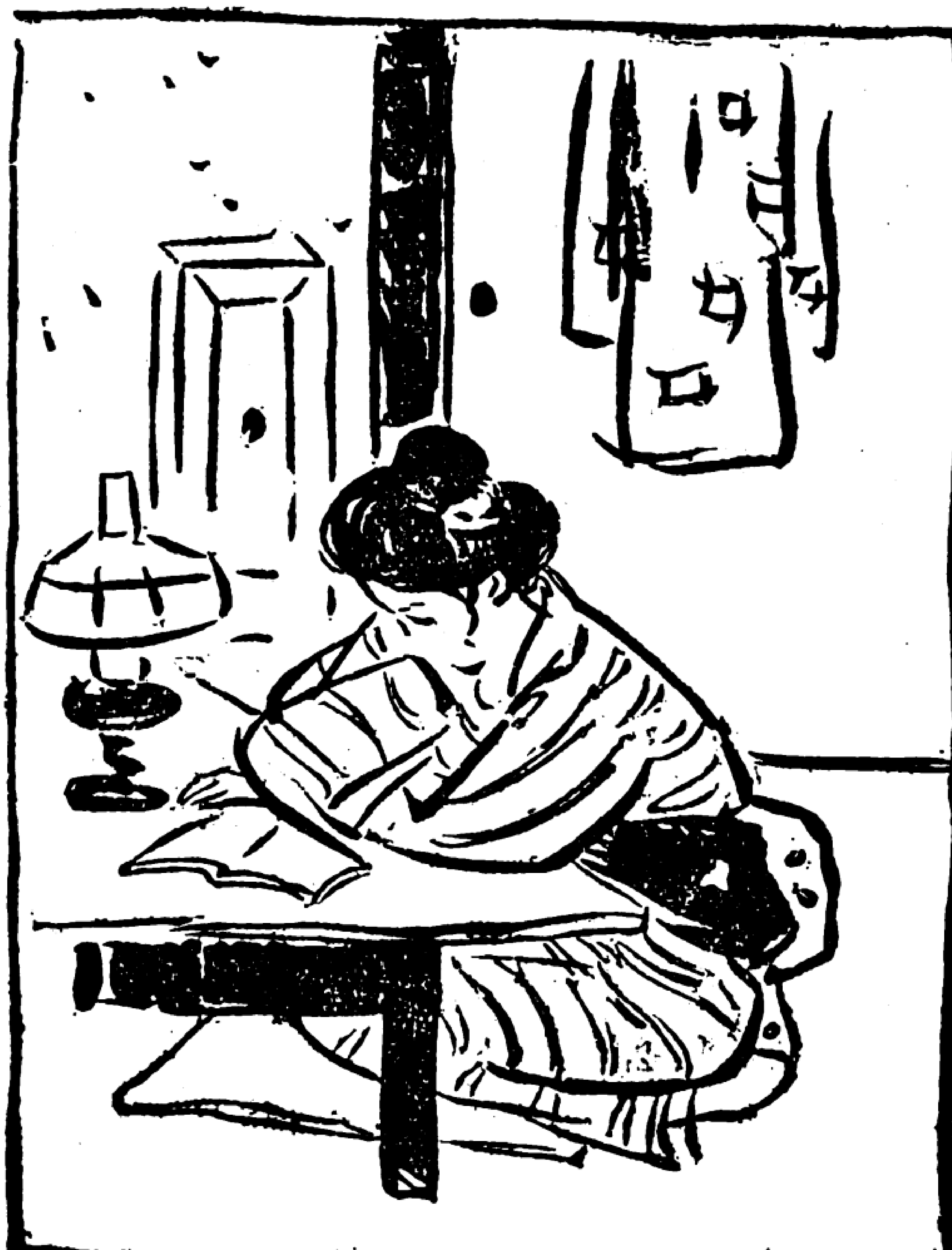
　けれども、此の娘の狂的になるのは、只瞬間の發作で、時偶々起るものと見える。身體を立て震はせて泣たも凡そ五分位、其の『ウフン〳〵』の聲と、涙の收まつたとなると、以前の謹愼かな態度に復つて、目は夢から醒めたやう。小さな膝上に重ねた兩の袂に、眞白い雪の双手を置いてゐる可愛さ。

　頭髪の少し亂れて頬に懸つた、例の服裝の看護婦が横手の部屋から出て『炭火はございますか！』『はい、澤山に起つてございます』彼の少女は優しく答へて、

涙の未だ乾きゝらぬ潤んだ目を膝に落した。最早狂氣は鎮まつたものさうな。

で、母親らしい婦人が、受附で藥を受取り、何か言聞かせると、娘は點頭いて紫色の服紗で藥瓶を包むで、いそ〳〵と二人は、病院の玄關を出て往つた。赤い帯の花模樣が浮いて消えるやうな後影！　私は硝子窓から望見つゝ、暗然と涙を垂れたのであつた。

其後、例の醫學士に彼女の家庭を聞いたが、果して悲慘な因縁、暗澹の惡運命を有して居るのであつた。



私は黒汁でなく血を筆に濺いで以下を綴る。

彼女の父親は、富有な商人であつたが、遊蕩と酒とは性來の大好物。母親は又柔優しい鳩の如うな婦人で、家庭の聖母の姿であつた。が、父は度々の女狂ひ、其上尋常ならぬ大酒、夫れが手の着けやうもない激烈な酒亂なので、母親の身體に生疵と、目に涙の絶えた事はなかつた位。赤い惡鬼を欺く手で、丈なす黒髪は握られ、座敷の疊上を身體も心も、毛も亂れた母親の艱難苦勞此世に酒が無かつたらばと、水と壺をながむるに就て

も、胸の狹い女氣の思案の種、春夏秋冬、母親に樂しい日とてはなかつたのであつた。

で、彼女は、父の常に酒氣に赤い面と、母の愁ひに蒼褪めた窶れた顏との間に生育つた、家庭の絶えぬ惑亂風波の中に、花よ蝶よの時代は空しく過されて、二八の娘盛りと成つた時は、父も母も最早現世の人でなかつた、父親は散々道樂を爲た揚句、惡遺傳の血を娘の玉の肌に殘して、發狂して藻掻き死んで了ひ、母親は、嵐の後を追うて、秋の木葉の如うに慘く逝て仕舞つた、すると一家親族の狼共は、財寶の山へ乘込んで來て、夫等が去つた跡には、身の薄命に哭く一人娘！天にも地にも淋しい秋花の影。

其れから、資產は細うも、情けの厚い一人の伯母の許へ引取られた、先に、彼女に附添の婦人とは即ち其の伯母なので、生の母親が墓から出て來た程善う似た顏、同じ柔しい手で、何くれとなく彼女は世話をされたが茲に半歲目。

兎角神經的な彼女、夢に現に、恐ろしい父の面、悲しげの母の顏は、彼女の眼に每に浮ぶので、物事の衝動は、必ず其處へ過敏な心緒を引着ける。不安は斷えず老婆の姿で彼女を襲ひ、父から受けた混つた惡血を狂はすのである。嗟、慈愛の伯母の手で結はれた美しい黑髮も、糸の如うな淸い心も、時々に亂れ初め、狂ひ甫めて、仰いでは天日をも呪咀はしき美眸の輝き、俯しては自身の衣裳、縞柄をも辨へぬ目の曇り。今日は伯母に手を曳かれての病院通ひ、麗しい狂女の名を得たのである。

〇〇町の今川燒の泣狂女と稱へば、其の界隈では誰れも知つて居る。一生嫁入能ぬ不治の病者であり。且つ伯母の家は貧しい手助けといふので、一日中、小さな店で、彼女は今川燒を燒いて居る姿を見る。が、反つて事情を知る人々が買ふので、舖は却々の繁昌。

其れに、奇妙なのは、此店の前には、御詠歌に鐘を鳴らす西國順禮、編笠の赤紐を顋に括つた法界節の女虛無僧や、亦た乞食の連中が佇立むのは珍らしうは無い。といふのは、彼女が習癖の淚脆い心情から、貰上

けの中から少々恵むからなので、伯母は強いて叱りも爲ないのであるとか。

私は、蓮歩精神病院の道、涙の途を踏ましめず、彼の醫學士の全智全術の力に依頼して、渠女の平癒を祈るのであるが、先天的の惡遺傳は、恐らく人間の力で如何とも爲し難いかも測られぬ。

嗚呼、花の少女は、生涯に一人の子を產まずとも、終生純潔の處女として、貧しい人、憐れな者に、善を施し情けを與へるであらう。然り、幸榮は塵世に非ず天國に生れるのである。



貞操は婦人の生命

（大澤醫學博士）

古來からの風習として、女子は結婚前の處女時代に於いては清淨無垢たる可く、一旦結婚したる以上は其の良人の生存死後共に生涯貞操を守らなければならないと定まつてある、云ふ迄もなく貞操は婦人の靈的生命であるから、肉體の生命を屠つてもこの靈的生命を擁護するが婦道の第一義である、然らば吾れ〳〵男子の操行はどうかと云ふのに、野蠻時代に女を他種族から奪ひ合つたり、若くは物品で以て女房を買つた惡風の遺傳が容易に絶え切らぬものと見え、婦人を尊敬する理由の備つて來た今日尙ほ操行が充分に修つて居らない、之れは決して婦人を侮蔑する精神からの亂行でなく、云はゞ習慣上其れとはなしに發する處の不謹愼には相違ないが、何れにした處が無論申譯のないことで、之のみは如何に婦人に憤慨されても攻撃されても致方ない次第である。裁判上の離婚に妻は姦通と共に直ちに離婚の條件生ずるに夫は姦淫罪に問はれて處刑の身となつて始めて離婚の條件生ずるといふのは不釣合である、之は民法創定の當時日本の男子は操行が不充分であるから若し之を婦と同樣に取扱つたら離婚の數は非常に多くなつて國家の基礎なる家が破れると見た爲である、然るに斯る規定を見るのは幾分か女を落した嫌ひがある。

併し男子の不品行は人文の進歩發達と共に漸々改つて行くのであるから、女子は女子たる古來の美風に則りまして其の生涯の貞操を堅實にしなければならぬ、男も不品行するから女も不品行を働いてよろしいなど丶、例の動物時代野蠻時代の自由戀愛主義を行ふことになつては、數千年代に涉る貞女節婦烈女の心血を濺いで鍛へあげた美風が滅茶滅茶に打ち毀はれるのみならず折角こゝ迄進化した婦人は復た往古に返つて男子の獸慾の玩弄物となつて仕舞ふことである、男子の自覺は婦人の貞操に俟てます〳〵其程度が強くなるのであるから、婦人は婦人の立場に於いていよ〳〵其品性を高尙にする必要がある云々。

境遇と人格

（宮川壽美子女史）

此世に處し行く婦人の中には、境遇に支配さるゝ者と、支配されざるものと及び境遇を支配する者との三種の婦人あり、第一種の婦人は元より敎育も信念も有たざる人とて、もしも順境に立ちて得意の地位にあらんか、必らずや傲慢不遜にして、先輩に敬意をも表せず、後輩を侮蔑し、剩さへあらゆる惡德を行ひて更に顧ざるべし。又は此種の婦女にして逆境に陥るあらんか、樨なき舟の海上に漂ふ如く彼方此方に浮沈し彷徨し而も他の誘惑に逢へば、忽ち迷の淵に沈みて、由なき悲運を見るに至るや必せり。是即ち境遇に支配せらるゝの人格なり。

次に第二種の婦人は、さる篤志篤行の輩にあらずして、相應の教育の下に自己の理想を蓄へ、處世の道を辿らんとする婦女にして其身順境にありては能く謙讓の美德を備へ、不幸逆境に陷るあるも、ある點までは辛苦と闘ひ、之に打勝たんとして不屈不撓の念を抱き世の小人輩が罵倒の言の如きも度外視して敢て顧せず、已だに正しき淑女の道を踏まば、足れりとなす。即ち是自己の心意行動、一もゆめ境遇の爲に支配されざるの人なり。

さて尙一歩進みたる第三種の婦女にありては、己まづ其境遇に支配されざるのみにあらず、順にあれ逆にあれ巧に其境遇を利用して、益々己の行爲を向上させん事を謀るの人なり。是實に淑女の標本とも謂ひ得べく、はた上乘の人格と謂ひ得べし。此種の人は假し逆境に陷りても、克く忍耐し能く、節儉し、而かも業務其他に勤勉して更に倦まず。かくて順境にあつては、隣人に德行を施すは言はずもあれ虛飾を厭ひ、虛榮を避け、貧者病者に對しては惻隱の志篤く、同情の念彌々深くして、富あらば之を公共事業或は慈善事業に充て、他の喜びを以て己れの喜びとなす、蓋し淑女の美德是より貴きはあらざるべし。

あはれ家の主婦たらんとする人、宜しく其境遇の順逆に拘らず賢なる第三種の婦女の行爲を執りて、世に處するあらんには、其の家庭の平和は勿論、國家の趣味自から具りて、幸福是が爲に來り、軈ては一國の文明を導くの良妻賢母たることを得ん。

八丈島の婦人

昔から女護の島と呼れて名高い八丈島はまた美人島と言つてもよい位美人揃ひの島である、同じ緯度にある琉球には美人は極めて少ないが實際八丈には目に立つ女が澤山居る、たゞ顏の色澤は赤味が乏しく蒼白いが、それは多分常食が甘藷に限つて居るからであらう、そして其蒼白い顏の輪廓が内地の面長、丸ぽちやといふ樣に際立た隔がなく揃ひも揃つて丸からず長からず一樣に整つて居るのが不思議である、此は同族結婚の結果かも知れぬが、兎に角同じ樣な容貌が島の村々を歩くと堪えず見られる、所謂他人の空似が非常に多いのだが身には粗末な木綿の垢染みた筒袖を着て居ながら、くつきりと肌膚の肌理の細かさは襤褸に包んだ玉同樣、これをや誠に天の成せる麗質といふのであらう。その癖島の女は偶々湯に入つても烏の行水同樣ぽちや〳〵とやつて上るだけで隠しどころも何もいゝ加減にして置く、無論石鹸、糠などは用ゐぬ、そしてまたお化粧といふとも島の女は更に知らぬ、適々天長節のやうな島第一の紋日に内地の婦人が化粧するのを眞似てお化粧をするハイカラも偶にはあるが、出來上つたその顏を内地の人が見ると殆んどお化の樣で二目とは見られぬさうだ、これ等は自然の美を化粧で打壊すので、島の女の美はその素顏にある、投島田のひつぱり姿にある、丈に餘る髮をばちりと解いた姿にある。

ICE-CREAM.

3 cups milk.
½ cup sugar.
3 eggs.
1 pinch salt.
1 tablespoonful butter.
2 teaspoonfuls lemon.

Scald the milk, beat the eggs till thick and creamy, add the sugar and salt and beat again. Pour the hot milk over them, and when well mixed turn into the saucepan and put it into another and larger pan partly filled with boiling water, pleased over the fire. Then add the butter and cook until thick. Strain at once, and when cool flavor to taste and freeze.

アイスクリーム

牛乳　三杯(一合入茶碗)
砂糖　半杯
玉子　三個
鹽　一摘み
バタ　大匙一杯
レモン　小匙二杯

乳を温め、殆んど沸騰せんとする頃下して、次に玉子をよく攪き交ぜて後、砂糖と鹽を加へ、又能く攪き交ぜ、其上に前記の熱き牛乳をつぎ込み、よく混化したる後、鍋に入れ、バタを加へ、どろ〳〵する迄煎湯で煮、煮えたちたる後直に漉して、少しく冷えたる時に、レモンを加へ、アイスクリーム器械に入れて凍らせるのです。

(注意)アイスクリーム器に氷を入れる前に、氷を袋に入れるか、又は布片に包みて、細かに砕き、氷三と鹽一の割合によく混ぜ合せて後、用ゆれば早く凍ります。

STRAWBERRY SHORTCAKE.

One pint of flour, two teaspoonfuls baking powder, one teaspoonful salt, butter size of an egg, one tablespoonful sugar. Mix with milk or water (soft), roll out in three pie tins; bake them, butter them, put in berries, mixed with sugar, place layer upon layer and nice, large berries on top.

苺の菓子

砂糖　大匙一杯
粉　三杯(一合入コップ)
燒粉　茶匙二杯
鹽　茶匙一杯
バタ　大匙一杯

粉、燒粉、鹽、砂糖を一緒に篩ひて後バタを入れ手にてよく揉み交ぜ乳又は水にて解き軟き團子位にして二三分の厚さに延べ丸るき菓子燒皿に入れ同じ大さのものを二枚或は三枚燒き、燒けたる時バタを引きて其間に苺と砂糖とを交ぜ漬したるものを一分位の厚さに引き又其上にも苺をかけ其儘切りて食するのです。

(注意)苺に砂糖を入れる前に蔕を取り澤山の水の中に入れ輕く洗ひ手にて掬ひ取りザルに入れ水を切るのです、苺と砂糖の量は適宜にしてよろし。

簡易西洋料理

英語專門櫻井女塾長　櫻井ちか子

Poached Eggs on Buttered Toast.

Nearly fill a clean frying-pan with water boiling-hot; and add a tablespoonful of vinegar to the water with a little salt. Slip your eggs from the saucer upon the top of the water (first taking the pan from the fire). Boil three minutes and a half, drain, and lay on buttered toast in a hot dish. Turn the water from the pan and pour in one cupful of milk. Thicken with a very little corn-starch. Let it heat to a boil, stirring to prevent burning, and add a great spoonful of butter, some pepper and salt. Boil up once, and pour over the eggs.

ポーチドエッグ
（燒パンに添へる落し玉子）

フライパン或は五六合位入るセト引の平鍋に、煮湯殆んど一ぱいを入れて、其中に酢を大匙に一杯と少しの鹽を加へ、沸騰したる後一寸火より下して、小皿に玉子を割り込み、一ツづゝ其湯の中に入れたる後、又火にかけて三分間半、煮て後、其玉子を網杓子にて掬ひ、よく水を切り、別の皿に用意してあるバタを引きたる燒パンの上に、一ツ宛のせ、其鍋の湯をあけて乳一合を入れ、少しのコンスターチ（水に解きたるもの）を入れ、よく攪き交ぜ、焦げぬ樣に注意しながらバター匙と胡椒、鹽少しを加へ、一旦煮立せて後、玉子にかけるのです。

（注意：燒パンの可成熱き内にかければ味が悪るくなりますから、上手にパンを燒きて燒けたる時片面にバタを塗り、熱き皿にとりて冷めぬ樣にして置かねばいけませぬ一合の乳なれば、六つ位の玉子の上にかけられますから、三つの玉子を用ゆる時は、五勺の牛乳で澤山です。燒パンにするパンは少しく、固くなつた方が、却てよし。其厚さは三分位に切ります。

Perfection Soft-boiled Eggs.

Put them in a covered saucepan, in boiling water, and let them stand off the range for twenty minutes.

完全なる半熟玉子

鍋に水を入れ沸騰したる後火より下し直に玉子を（匙にて破さぬ樣注意して）入れて鍋の蓋を被ひ廿分間其儘置けば丁度好い半熟玉子になります。

庖廚

此月のお總菜は

△新牛蒡のあちやら

薄刀の峯で牛蒡の澁皮を剝き長さ一寸位づゝに切り、之をたてに薄く白髪大根のやうに刻み、水に晒してアクを拔きざつと湯出こぼし暫らく鹽酢に浸けたのち砂糖をかけ蕃椒をふつて食べますこれは辨當のお菜にも結構です。

△姫百合の含め煮

百合の根を一つ〳〵に離してよく洗ひ沸つた湯でざつとうでこぼして煮返し砂糖をかけ、それに美濃紙を被せて其上から鹽をふりかけ、極く弱い火で煮上るので之は燒肴や煮魚の附合せにも致します。

△新蓮の辛子和へ

蓮根の皮を剝き一分位の輪切にし、ざつと茹こぼして水をきり置き、鍋に油を引きトロ火にかけて蓮根を煎め、次に溶いた葛粉を入れて十分間ばかり焦げつかぬ樣に攪きませて鍋を下し、冷めてから醬油で溶いた粉唐辛子をかけて喰べます。

△慈姑と油煎蓮根

慈姑を二つ切にして湯煮あげ、鰹節と砂糖を入れて煮初めます、次に蓮根は皮をむき、木口から薄く切り、沸へ湯でうでこぼしたる後水に移し、鍋に油を引いて蓮根を煎め慈姑を煮てゐる鍋にうつし、醬油を入れて一緒に煮詰めるのです。

△春菊の胡麻和へ

春菊は根元の方が硬いから其處を一寸位切り棄てゝ熱湯でゆでゝ水に晒し絞つて煮出汁の中へ二十分ほど浸した後五六分づゝに刻んで胡麻拌にするのですが、野菜類は凡て一度煮出汁に浸けないと水つぽいから湯煮つ放しでは可けません。

△菜豆の靑煮

菜豆の後先を摘み斜に薄く切つて鹽をふり、暫くしてからそれを洗い落してざつと茹でこぼし、煮返し砂糖に鹽を加へて再び煮るので、之は燒魚の附合にしま

す。

△莢豌豆と油揚

莢豌豆は後先を摘み去り、油揚は縦に一つ渡し之を木口から二三分に切り、どちらも別々に煤でたる後に水で洗ひ、汁加減をして沸立つた頃まづ油揚を入れ次に莢豌豆を入れるのですが、永く煮ると豆が赤くなるから氣をつけねばなりません。

△蠶豆の金團

十分實のいつた蠶豆の莢を去り皮を剝き、鹽をふつて粗とうで之を網杓子で掬ひ上げ、全量の四分の一ほどを裏漉にかけ、殘りの豆は砂糖と味醂と鹽とで弱い火で煮るのです、其割合は蠶豆一升につき砂糖一斤、味醂一合、鹽は大匙に半杯位にして甘味が豆に染みたら裏漉にかけた豆を入れ、靜に攪混せつゝ煮るのです。

△胡瓜の大和あへ

之は胡瓜と小鯵とを芥子味噌で和へるのですが、先づ胡瓜は皮を剝いて二つに切り中核を去つて木口から薄く刻み、一寸鹽揉みにして酢をかけおき、次に小鯵を三枚におろし鹽をふり酢に浸け三十分位して後あげて小さく切り、さて芥子と味噌と砂糖とを擂鉢でよく擂りませ、前の胡瓜と魚を一緒に入れて和へるのです。

△伽羅蕗

蕗の皮を剝いて六七分の長さに切り、底の廣い笊に入れて一時間ばかり日光に曬し、さて鍋に少量の醬油を入れ蕗を煮てアクを拔き此煮汁を棄て、別の鍋に又醬油を煮立て鰹節を入れて之を漉したのち、右の蕗を入れ、蕃椒粉をふつて煮詰めるのですが、辨當のお菜には調法です。

△骨董煮

これは一種の薩摩汁のやうなもので厨室に殘つてゐる野菜や、スープに使つた肉穀などを集めて拵へるので謂はゞ殘り物の利用法です、それ故大根、里芋、人參、牛蒡、蓮根何でも成べくいろ／＼な物を入れた方が美味しい、右の野菜を適宜に切つて一緒に鍋に入れ水から茹で、其水のまゝでもよろしいけれど味を輕くしやうとするならば一度うでこぼし、新らしく水と鰹節と

砂糖を入れて煮出汁で煮ます、又スープ殻の肉は薄く切つて一緒にし、そこへ油揚を刻みこみ、沸立つた頃醤油を入れ汁が充分染みてから葛粉を溶いてかけるのです、之は存外お旨いものですけれどお總菜になるだけで、無論お客には出せません。

△鰹の擂流し

鰹の盛りは六月から七月へかけてゝすが餘り暑くなつては肉が軟くなりますから、一番お旨いのは先づ今頃に限ります、これにはいろ／＼の料理法のある中に最も好いのは刺身で、それに次でこの擂流しですが、之に使ふ肉は必ずしも良い所ばかりでなくとも骨附のアラでも宜しいので、先づ肉だけ切取り熱湯でざつと茹て笊に揚げ、水氣をきつて擂鉢の中で輕く擂り之を一番汁で適宜に延ばして煮るのですが、汁種には賽の目豆腐、玉葱などを入れ吸口には卸し大根をあしらいます。

△鰆の黄金燒

鰆を片身おろしとなし、三十分程生醤油に浸したる後金串を打つて火にかけ、更に砂糖醤油をかけて略ば燒けた頃、卵の黄味を溶いたのを刷毛で塗つてまた炙るのです。

△鰆の卸しあへ

鰆を小さく賽の目に切り玉葱を細かく切りこれを酢揉みにして卸し大根に混ぜ、醤油と砂糖とを加減して右の鰆と拌へるのです。

手輕に出來る　小供の洋服

女子共立會　松井美佐子

嬰兒の上着

嬰兒の上着としては、丸ヨーク、角ヨーク、ビショップドレス等の種類を用ひます。其内、角ヨークドレスが仕立の致しよい上に、飾りの付け方によつて、色々に變化する事が出來ますから、こゝには先づ此形を記す事に致します。

上着の地質は、前號の下着と同樣夏冬共、洗濯に堪え得るものを撰び、色は總て白色を用ひます。そして冬着でも裏は付けぬやうに致し、

又間着はフランネルで拵へて置きます。此間着は、上着と同じ裁方で宜しいので御座います。

尙序ながら申して置きますが、嬰兒服の一揃へとしては、普通下の五種を要します。即ち、シャツ、下着、間着、上着、ラッパーの五つで御座いますが、此の中、夏は、下着、間着、上着の三つだけを用ひます。尙右の外に冬の外出着としてロングコートを用ゐる事もあります。尙右のシャツは、極細の毛糸で編んだもの、或はメリヤス製のものなどが、



嬰兒服出來上り

體の自由が利いて宜しう御座います。偖此上着の用布は、二尺巾五尺五寸を要します。此他に附屬品としては、胸の所へ用ゐる、巾一寸五分位の手瀞きレース（或はエンブレート）を一ヤール七分（即ち鯨尺四尺位）と袖口及衿廻りに用ゐる、巾五六分の手瀞きレース（若し胸の飾りがエンブレードならば、此れも同樣になす）を一ヤール三分程要します。

◎形紙の拵へ方

此嬰兒服の上着を拵へるには、先づ左の通りの寸法で、正しき四角の紙を五枚拵え、次に、それ〳〵寸法通りに裁ちます。

夫より右形紙の内で、ヨークには左の通り飾りをつける印をつけて、置きます。但し此れは出來上り圖を御覽になつて、第一、二、三何れでもお好みの通りに付けて置きます。

次に、圖の各所にある印は、悉く落ちのないやうに形紙に穴をあけて置きます。即ち左の通りの印で御座います。

●　●　●　總て、斯やうに遠く三つの印のあるのが地の目たての印。

●●●　次に、近く三つあるのは、ワナで裁つと云ふ印であります。夫故此印のある所は、決して裁切つてはなりません。

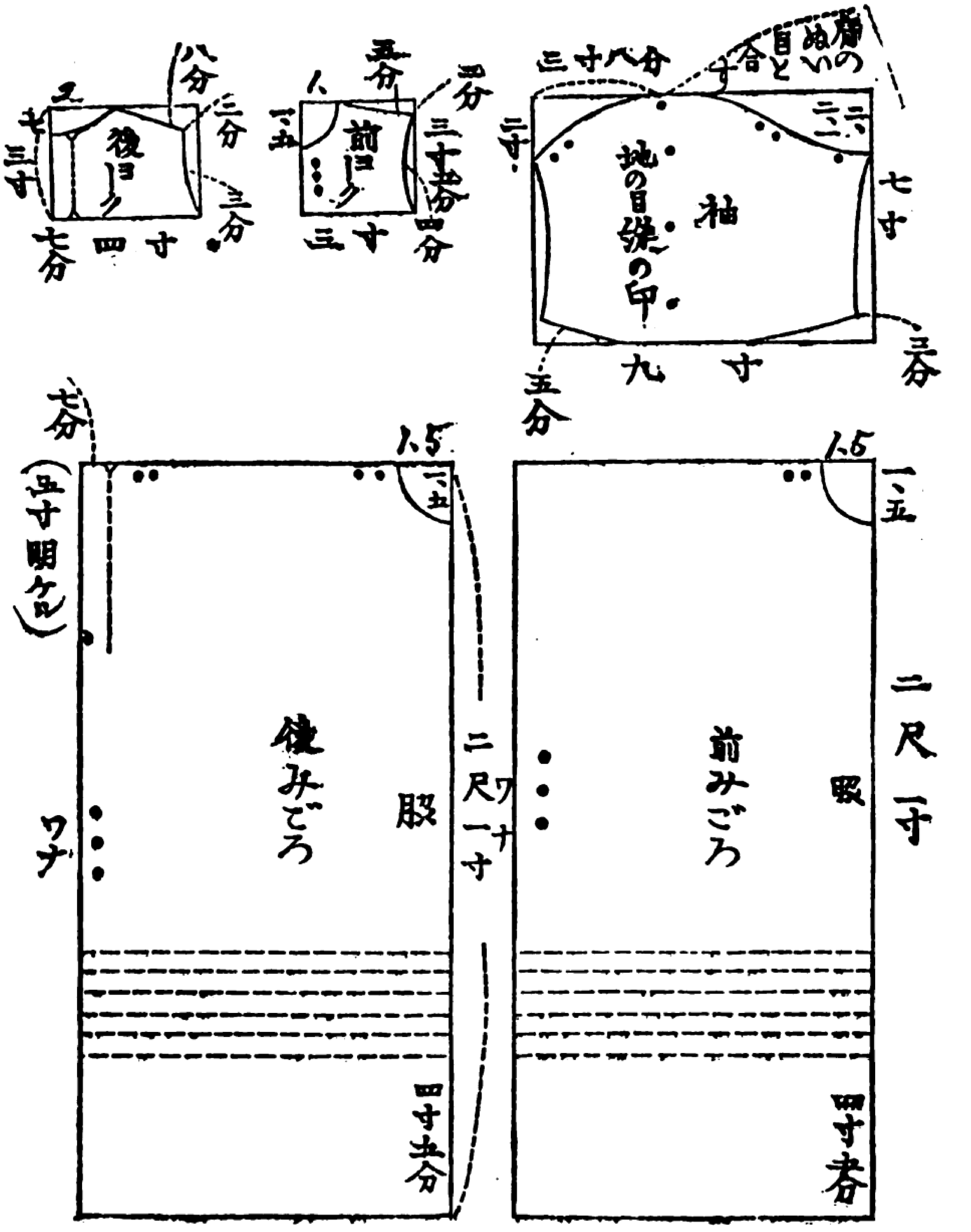
●●　此の二つの印はギャザを取る印で御座います。

▼　尙切込みの印は、諸處の合印其他に使ひます。即ち、此嬰兒用上着に就いて申せば、第一に袖にある切込みは、身頃の脇の縫目と合す印、次に後ヨーク及び後身頃の上部にあるのは、此印から裏へ、見返しとして折る印、又後身頃のワナの印の上にあるのは、此印から上は切り明けるといふ印で御座います。

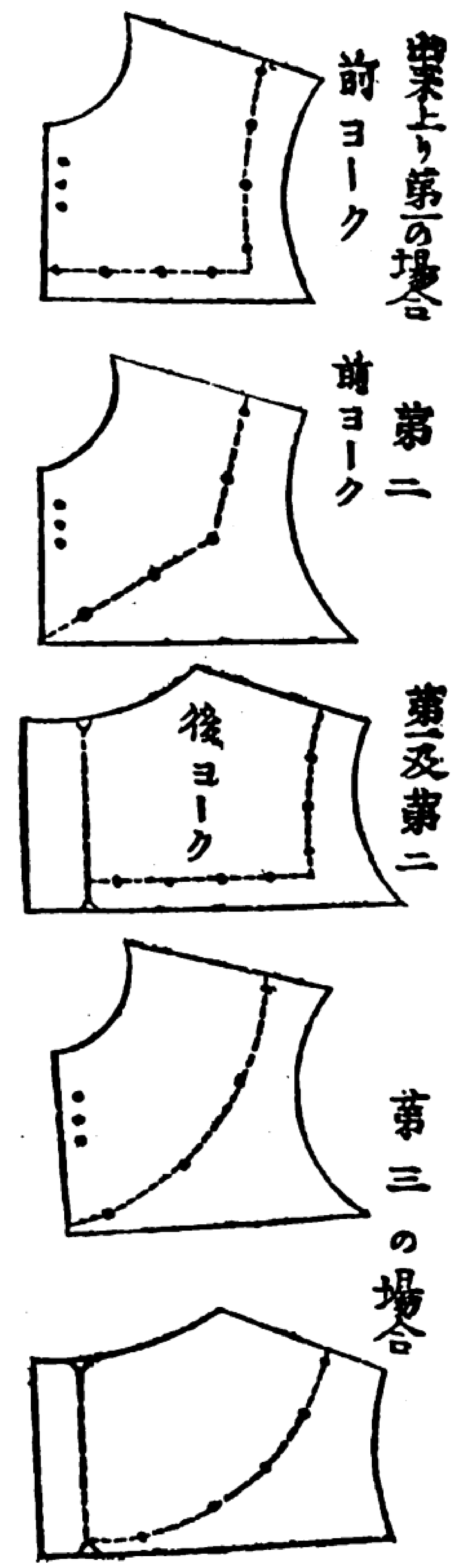
◎切地に形紙を宛てゝ裁つ心得

斯やうに形紙が出來ましたなら、左の通り、巾を二つ折りにして、其

ワナの所へ、前後身頃の、ワナの印のある所を宛て、正しく針をうつて裁ちます。但し此時、左圖の通り、ヨークの形は、別につけて置き。

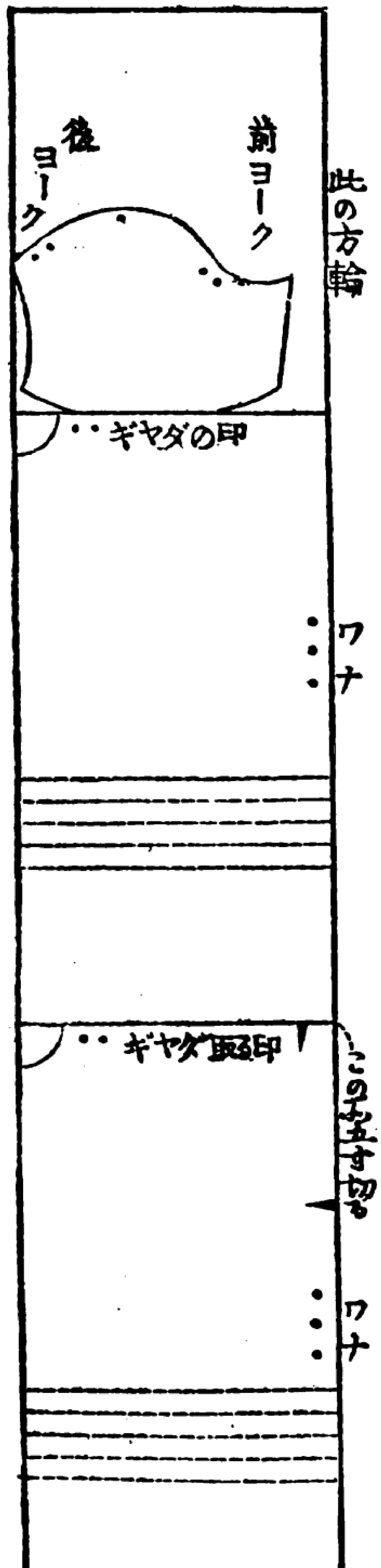


續いて袖を裁ち終ります。夫れより、殘り切れでヨークを拵えます。是れは間着ならば形紙通り



に裁つだけで宜しいのですが、上着は先づヒダを取つてから、裁ちます此ヒダの取り方は、若し一分づゝのヒダを取らうと思へば、先づ後ヨークの爲めに形紙よりも、二寸だけ廣いものを二枚用意し、次に前ヨークの爲めに、形紙の倍即ち六寸に四寸以上加へたものを一枚用意致します夫より何れも端から八分の所を山にして、一分のヒダを一本取り次に、其山から四分或は五分の所を山にして、何れも内向のヒダを取ります斯やうにして前ヨークは端まで、後ヨークは、一寸二分位の所までヒダを取つて形紙を宛て、左の通り裁ちます。

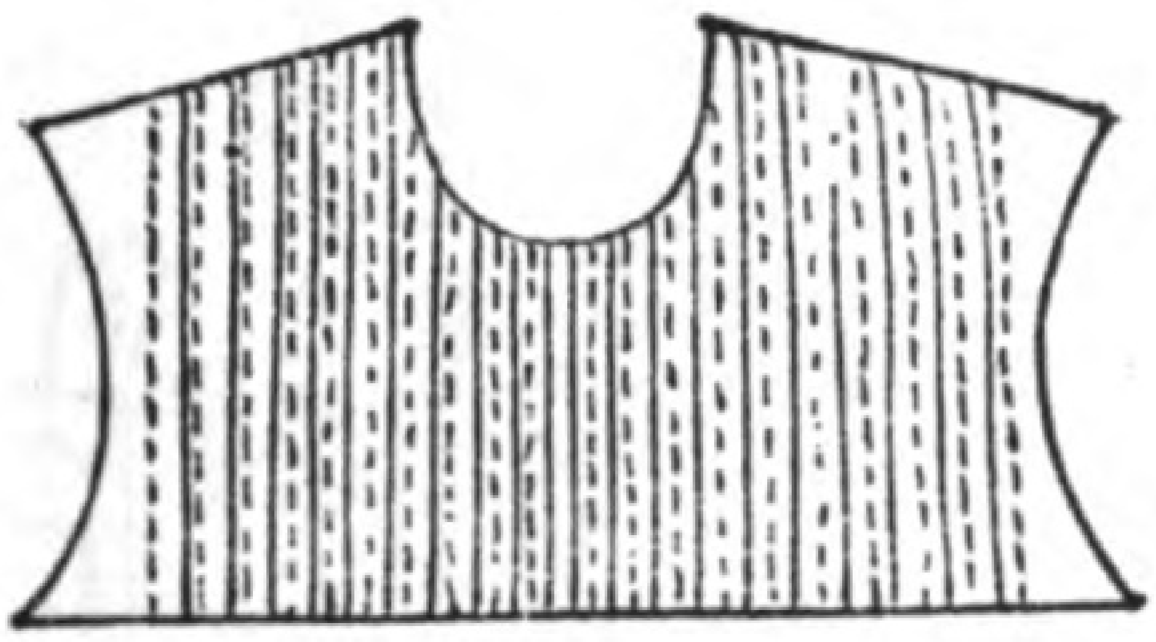
尚此ヨークを一層奇麗にするには、ヒダとヒダの間へ、兩耳のレースで、すかしを入れゝば上等になります。斯やうにして、前後身頃、袖、及前後のヨークを裁つたら、形紙にある印を、何れも落ちのないやうに切れに寫して置きます。但し、ワナの印及地の目締の印は、裁方に就い

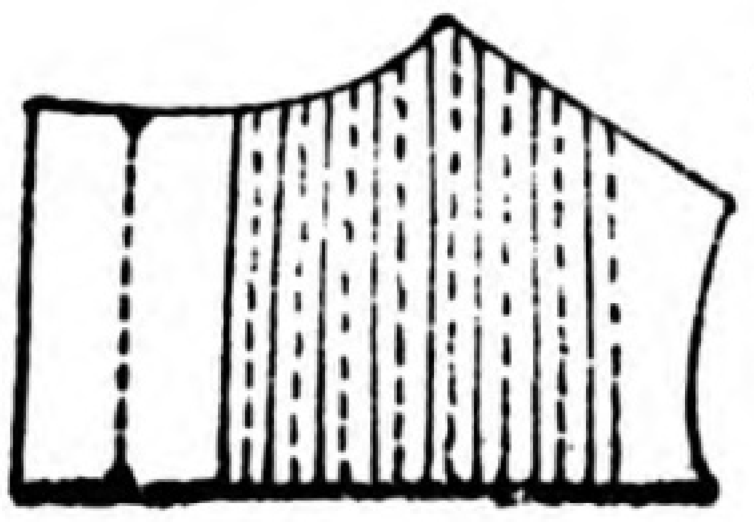


ての印ですから、切れ地には付けずとも宜しう御座います。

◎縫方の順序

先づ第一に袖を縫ひます。此れは、先づ細いレース或はエンブレードを袖の口先きに合して切り次に、袖の口先を二分だけ表へ折つて、其上へ此レースの耳をのせ、ミシンをかけたる後、此所へギヤヽダ縫ひを致します。そして、此ギヤヽダ糸は四寸八分位に縮め、其縫目を飾りテツプで押へます。次に袖下を袋縫ひに致します。次に身頃に掛ります。此は先づ、裾の印を山に、何れも一分五厘のヒダを下向きに取り、次に後身頃の身返しを折つてミシンを掛け、此の終りの所は正しく重れて止めミシンをかけます。次に前後身頃の上部に印から印までギヤヽダ縫ひをなし、





後の上前

ヨークの下部に合して縮め、前後共、此と縫合して飾ミシンを掛け、次に後ヨークの見返しを折ります。夫れから、此肩を縫合します。次に袖口と同様のレースにギヤヽメを取つて衿廻りへ縫ひつけ、縫代は出來るだけ細く包みます。

夫より飾りを付け、脇を袋縫ひになし、裾を二寸二三分折てミシンをかけます。夫より袖を付ける事。此は、先づ袖に印から印までギヤヽダ縫ひをなし身頃の袖付けのあきに合してちゞめ、袖の切込と身頃の脇の縫目とを合し、袖下の縫目は脇の縫目より、一寸程前へずらして付けます。最後に仕上げを致します。此は先づ衿を包んだ所にホツク或はボタンを一つ、其れから五分下つて一つ、又二寸下つて一つ都合三つ付け、上前にボタンの穴をあけてかゝります。

◎注　意

前號記載の書物に對するお答

種類は一月以來本誌口繪に記載のものを合して、三十餘種御座います。そして、此等は何誰にでもお解りになるやう、縫方の始めから終りまで一々圖解を入れて御座います。例へば、袖にギヤヽメを寄せた所とか、身頃にヨークを縫ひ付ける所とか、其他、飾りの付け方、ヒダの取り方等が委しく示して御座います。尚製圖から割り出す方法及び形紙を伸縮する方法なども記して御座います。

瓦斯は何故に經濟になるか

東京瓦斯會社　福島甲子三

▲時間の經濟

瓦斯を臺所に使用するに就て主として述て見たいのは經濟の點であります。先づ時間の經濟より申しますと、一升の水が六分間にて沸騰しますから、一合位の牛乳ならば、涼爐にかけたかと思ふと直ぐに沸騰します。斯樣に沸く事が早いから俄に來客がありましても、客を獨りぼつちに座敷へ殘して置く樣な不都合もなく、御話をしながら、直ぐ湯を沸かして御茶を出す事が出來て、至極調法であります。若しそれが薪であると、夏の熱い時でも、汗水を流して火を發さなければならぬ上に、御茶を一つ出すのも容易の事でありません。更に調法な事は、

▲夫婦共稼ぎの家庭

御夫婦で朝早く勤め先へ出て、夕方御歸りになつた時などに、火の氣のないといふものは、隨分つらひものですが、さういふ時に瓦斯があると、燐寸一本すつて瓦斯器に火を點け、其上に炭を載せさへすれば、直ぐ火が發り、夕飯の御仕度は忽ち出來ます。

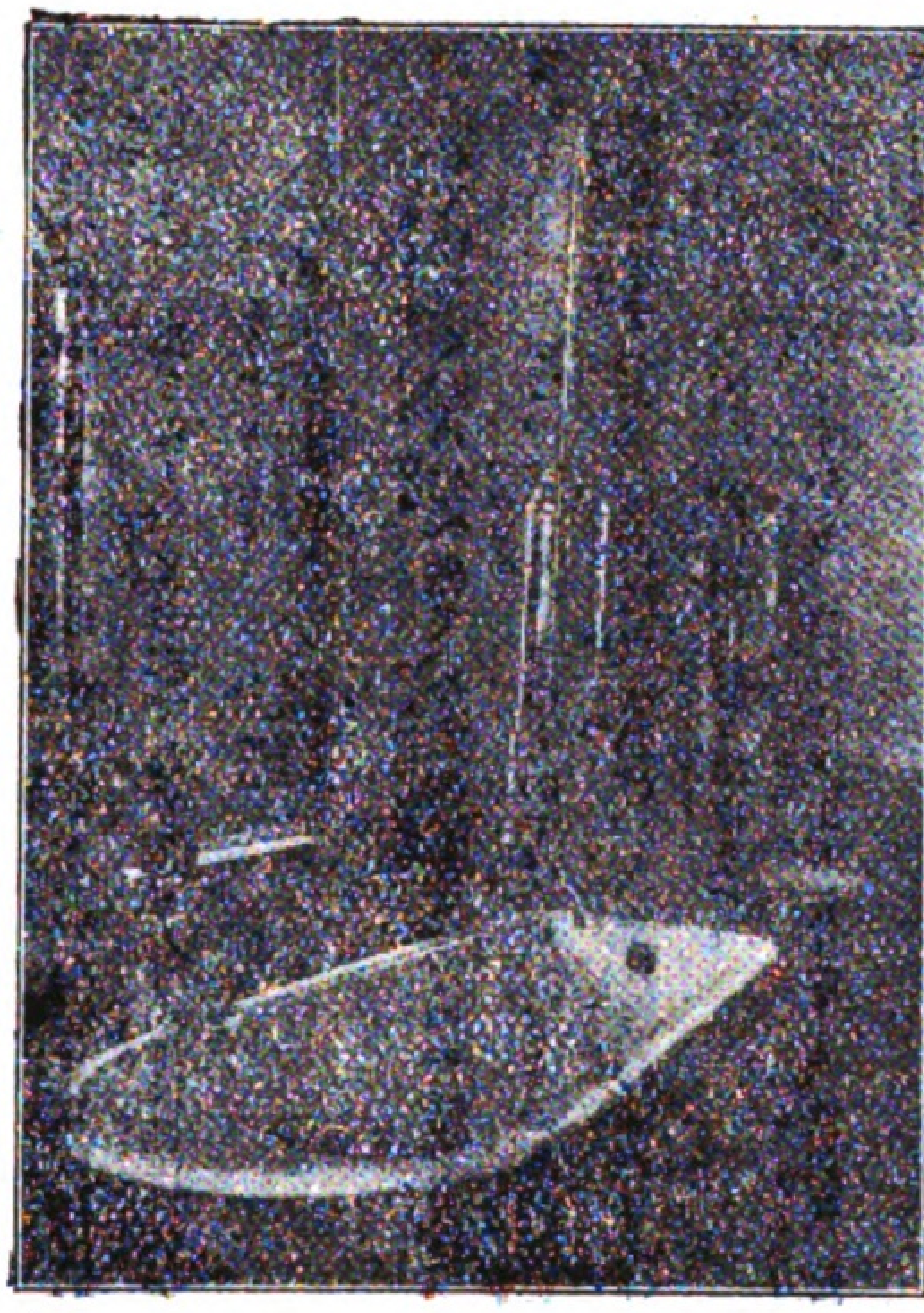
先づかういふ風ですから、時間の上より見ますと、此れ位經濟のものはありません。

▲費用の經濟

薪炭に比べて高うはなからうと思ひます。瓦斯で一升の御飯を炊く費用は約八九厘で、一錢とはかゝりません。其れが二升を炊くにしても大した相違はありません。が若し一升の御飯を炭で炊くとしたならば、到底七八厘では出來ません。此れから推して考へても、何を煮燒しても損ではない事が分るでせう。只動もすると、瓦斯で炊いた御飯は臭いとか肉を煮ても美味しくないなどゝいふ人がありますが、それは神經からで決してそんな事はありません。其人の見ない處で瓦斯と炭とで炊いだ御飯を勸めて見ると少しも解らないのです。彼の大隈さんや、三井さん



瓦斯炊事



瓦斯風呂

などは瓦斯專用ですか、まださういふ事を言はれた事を聞きません。

▲衛生上の利益

瓦斯は炭や薪の樣に塵が立たぬから、非常に清潔で、呼吸病の原因を爲す樣な事斷じてありません。物を燒て見ましても實に奇麗で、炭や薪の火で炊いたものとは較べものになりません。

▲最良の料理器

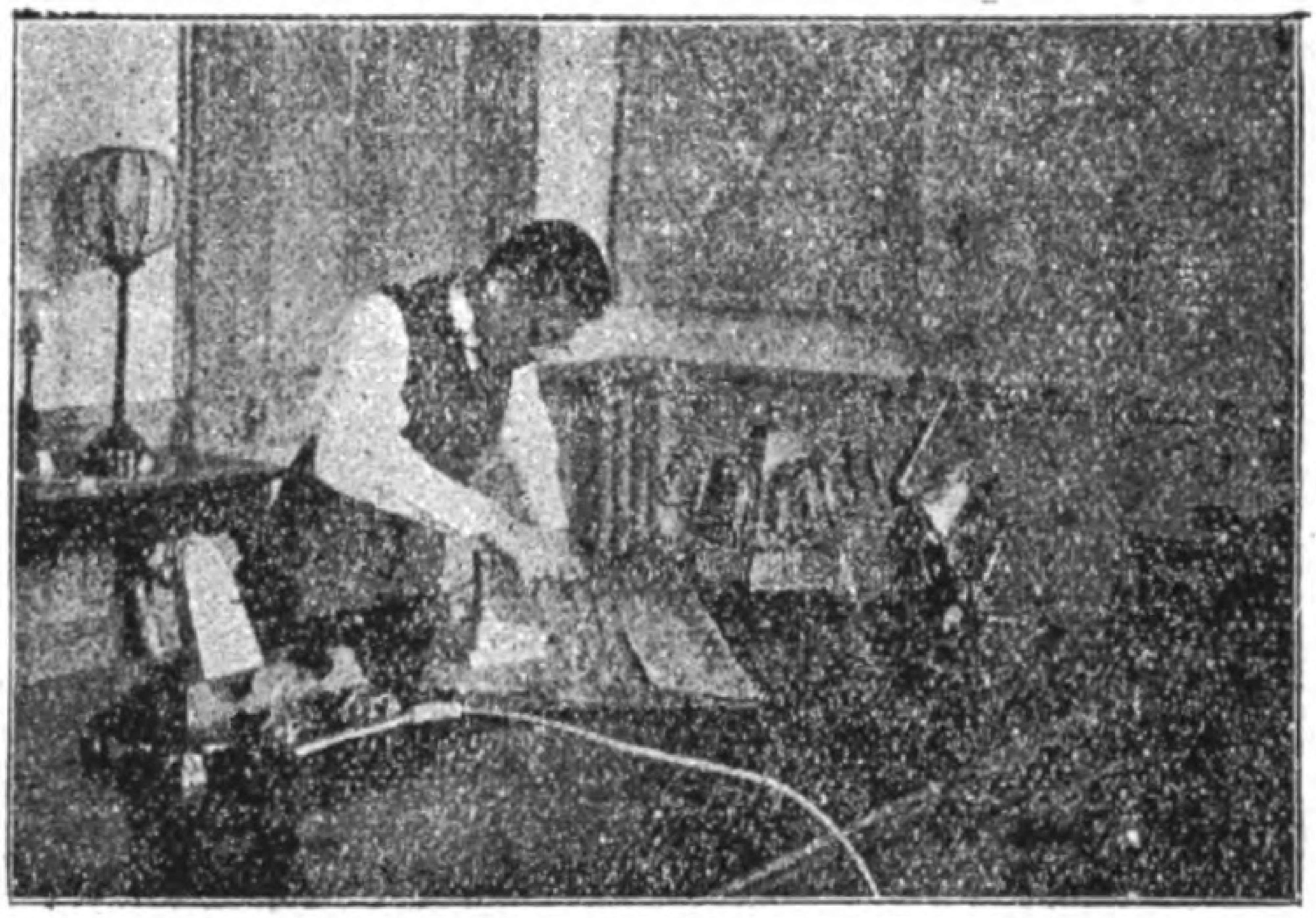
料理器ではリツチモンドの料理器といふのが、一番よろしいが、其れは矢張り瓦斯を應用したものであります。器械は三段になつて居ますが、上部は「渡し」になつて居るから、そこには鍋、鐵瓶、湯沸等を自由に載せる事が出來、中部は幾段にも岐れて居て、肉でも魚でも、或はパン、カステラなどを自在に燒く事も煮る事も出來ると云ふ樣に、いろいろの機械がちやんと備はつて居ます。特に魚を燒く所などは、瓦斯の火が上より下へ向いて發火する仕かけとなつて居るから非常に便利であります。此の機械を大隈さんの理想的臺所を始めとして、三井三郎助さん、女子大學、女子美術學校、高等女子師範學校、日本女子美術學校などに備へ付けてありますが、たゞ代價の高いのが欠點です。けれ共普通の家ならば是れ程のものを備へるにも及ばぬわけで、ジヨンライ會社の瓦斯竈とイナメル引の七輪位あれば、充分かと思ひます。七輪



瓦斯湯わかし

の上で魚も焼ければ、湯も沸される、勿論御汁や其他のものゝ煮物は自由に出來ますから、決して不便は感じません。のみならず臺所は今迄の樣に大きなものも要らず、且つ始終清潔になつて居ますから、一度用ゐては、實に止める事が出來ません。

▲瓦斯の價格は何程



瓦斯熨斗

であるかと申しますと、千立方呎が二圓四十錢ですが、炊事用は一割引にして居ますから、つまり二圓二十六錢であります。此の千立方呎の瓦斯があれば、三升の御飯は九十回炊けます。假に御汁や其他のものを煮焼きしても、五人位の御家内なれば、約二ヶ月半位は優に使用されるので、薪炭の費用よりは餘程安いものかと思ひます。瓦斯は贅澤だといふ人があるけれども、決して贅澤ではないので、贅澤といふのは實際未だ瓦斯の應用を知らん人のいふ事であります。

▲瓦斯使用に就ての心得

は「燐寸を多く使へよ」といふ事です。手數を惜します、燐寸を屢々使ふ樣にして居れば瓦斯は必ず安いものになります。瓦斯に火をつけたら氣をゆるめるといふ事が大禁物で、水を汲む間や、七輪を洗ふ位の間でも、無用の時は消さなければなりません。勿論僅少の時間ではあるが、其の間にも忽ち何メートルといふものが燃えて仕舞ふので、其れが積れば、大層なものになります。又瓦斯の便利なるに任せて、少しでも寒いと直く湯を沸かして使ひたくなり、毎朝水で顔を洗つたものでも、瓦斯か出來てから湯で洗ふといふ樣に贅澤根性が出ますから、それが積ると自然高くなりますが、其れは瓦斯の無い以前の樣な心持を失はずに又瓦斯は貴いものだといふ考を忘れずに使へば、瓦斯は決して贅澤品でもなければ、又高いものでもなく、經濟上寧ろ非常な益あるものであります。



和歌

三宅花圃女史選

（天）故郷夏　靜岡　河合象子

まれにきて夏はむすはむ故郷の
　あるじとすめる庭のまし水

評、老練なる口つきなり。

（地）つみ草　遠江　石野豊子

安らかに眠る小蝶をさまさしと
　すみれ一本つみ殘しけり

評、情ある歌なり。

（地）杜鵑　廣島　加藤しすい

產神の杜のみともし影きえて
　月入る方になくほとゝきす

評、寂寞たる森のけしきこの歌を以ていよゝましためり。

（人）夕花　名古屋　土屋たま枝

思はすも遊ひくらしぬ夕月を
　山のたか根の花に見るまて

評、ある趣向なれどこはかたひざま無理なきがうれし。

（人）廢宅　岩代　木口よし子

淺茅生と荒れたる庭の古を
　知らでや子等はつばなぬくらむ

評、むかしのあるじの心こそしのばるれ。

（人）　牛込　杉本さき

病む君をたすけ起してさみたれに
　咲くおもたかの池を見るかな

評、ありさまみゆるやうなり。

佳調

蝶　河内　櫻井貞子

まゝ事に遊ひあきけん子はいれぬ夢の行方を蝶にまかせて

花岡蝶　羽前　大沼龜子

散花の二ひら三ひらもとの枝に歸ると見しは胡蝶なりけり

郭公　埼玉　大塚明壽子

明けぬるか雨ひの森に月おちて山郭公なきわたりゆく

水邊山吹　筑前　南しな子

よしの川きしの山吹はなちりてとまらぬ水の影そながるゝ

初夏の夕　姫路　鈴木ふじ子
湯上りを爪剪り給ふ竹縁や蚯蚓なくなり紫陽花のもと

藤の花　丹後　旭のりゑ
若き尼ひとりすみます山寺の池のやなぎににほふ藤なみ

卯花　横濱　鈴木まつ子
卯の花の咲けるばかりもしつけきを柴のいほりをとふ人もなし

夏月涼　近江　龜吉富美
なつの夜の涼しき月にさそはれておもはず來つる岡の松ばら

蛙　上毛　花岡滿子
花影も朧に見えて夕月のかすむ小川に蛙鳴くなり

竹　陸奥　あや子
なよ竹は風になり／＼たわめどもそのおきふしはたゞしかりけり

暮春　下谷　澤田小鳳子
さくら花あとなくちりてゆく春に棒はちいさき實を結ひけり

折りにふれて　美作　性全千惠子
すてかれし手箱にあまる文からも昔を偲ぶ形のあとかな

失題　兵庫　性全擧代
あだし世のつれとは言へどうつろひし人の心のうらめしきかな

逝く春　大阪　松木安子
遠山のかすみもいつしかうすらぎて暮れ逝く春の惜まるゝかな

晩　北品川　六車堂香
家つどになりてやいなん初わらびすみれの花もともにたばれて

雲雀　信濃　清水作子
雲雀鳴く聲なほ空に霞むなり麥生に月の影は落ちても

折にふれて　長野　荻原吉子
思ひきや雪とし散れる花ならで花にふりつむ雪をみんとは

病床にて　上總　安西琴子
はげまして藥すゝむる父君の心思へば死なれざりけり

柳　越後　中野舒
ふく風のみだれてなびく青柳の糸によりくるつばくらめかな

閑居柳　名古屋　山村榮
折々は柳に風のおとづれて我かくれ家のかどたゝくなり

妹のこたび女子をうみたるをよろこびてよめる　下谷　たしろ糸子
たつの住むよしきか島の姫子松かはらぬ色に千代もさかえむ

失題　廣島　兒玉こゆき
君まさでことしは庭の小櫻もさびしう咲きてさびしう散りぬ

山家時鳥　牛込　まさ子
夕月夜くさの庵にかけさしてほのかに名乘る山ほとゝぎす

失題　攝津　淺井きく子
閉されて人なき庵の花園をつがひの蝶の花守やする

歸雁　肥前　江口れい
なか／＼に秋にもましてかなしきは花に別るゝかりがねの聲

夕蛙　伊勢　荒木麗子
手ひきて家路にかへる夕まぐれ田面涼しく蛙なくなり

失題　相模　きみ子
なつかしきわが故郷のいさゝ川夜毎の夢に音ぞかよへる

窓前棟　伊豆　古谷靜江子
むらさきの雲とみえけり窓ちかく一木の棟はな咲きしより

折にふれて　肥前　藤野金子

夢にのみゑがきしことの今日はれて現となれる我が世嬉しき

折にふれて　河内　田中八須子

屑拾ふ幼な子供に母とへは重き病と袖ぬらしつゝ

月を見て別れし友の君へ　大阪　波奈子

思ひづる過ぎにし夏の月の夜に君と語りし濱寺の磯

失題　名古屋　梅村麗子

徒然に琴ひきなれば庭もせの隅隅に細く雨けふる見ゆ

失題　牛込　鳥谷たけ

卯の花のやどゝしるして春雨にわび居の君は文箱をこしぬ

痛手負ひて病院にます夫を看護せるなり　大阪　田中千枝子

きづの痛みしばし忘れてねむる宵の夢にもいたきゆめ見ますらむ

初夏　群馬　飯塚ちすゑ子

白藤のこぼれて浮ぶ池の面に鯉もをどりて夏は來にけり

月を見て　大阪　日野のぶ

さちうすき身の行末を思ひてはきよき月にもかなしさはます

他郷に出養生せる身の春雨の降りければ　淡路　井口はつせ

さらぬたに淋しきものをひとり居の旅の古屋に春雨の降る

小島に出養生せる妹を思ひて　大阪　財前千歳

さらぬたに旅の枕はかなしきを心して吹け島の夜嵐

折にふれて　豊前　賀來文子

春をのみ泣く鶯こそ幸はあれわれはひとゝせなかぬ日もなし

郭公　本郷　西岡古代子

かまりきし錦を見せん母はなくてさみだるゝ空に啼く郭公

櫻　信濃　中村まてみ

春の庭テニスの球のつとそれて櫻ちるなり三ひら二ひら

霞中月　香川　森君江

夜もすから花は匂へとあはれさは霞の中の月にそありける

梅雨の頃に　府下　島田あい子

つれ〴〵にふりし小琴をとりいでゝおぼつかなくもしらべてぞ見る

椿　府下　奈良八重子

山寺の春おとなへばきざはしに椿の花のほろ〳〵と散る

異域の春　北米　池田靜子

ばらさきてすみれもにほふのべ見れば母住むさとの春ぞこひしき

土筆　千葉　吉松龜子

つぼ菫匂ふあたりのつくづくし誰かわすれし繪筆とぞ見し

折にふれて　大阪　後関八重子

たれこめて十日を雨に花の頃こぞの恨みを又くりかへす

失題　三河　藤香

古寺の晝靜かなりひな僧の阿伽くむ水に櫻散りつゝ

連日の雨天を憂て　下谷　花客とみ子

窓の戸をあけて朝毎まもりけり花見る頃の春雨の空

失題　長崎　あや子

松を吹く風の絶え間にきこゆなり月にすなどる海士のふな歌

折にふれて　神奈川　飯田榮子

花むしろしきて待たなむ君かため思ひ出多きはるの一と夜を

涙　愛知　花雪

いくそたびとゞめみつれとつきせぬはさらぬわかれの涙なるらん

浦霞　　肥後　藤野緑

もしほたく煙の末と思ひしは春立つ浦のかすみなりけり

折にふれて　　茨城　朝子

吹くとしも見えぬ春風帆にうけてのどかに下る那珂の川舟

折にふれて　　京都　西辻清子

亡君に似たる聲よとなつかしくふり返りみるかさのうちかな

汀鶴　　大阪　富永かほる

わが庭の汀に生ひし老松のねはふ岩ふに遊ぶ鶴哉

なりにふれて　　伊勢　水谷靜子

夕月夜池の清水に魚をとるおとこゝちよき夏は來にけり

若葉　　京都　三宅幹子

溪川の若葉にひゞく水車里は茶摘のうた長閑なり

春風　　下野　染谷絲子

若菜摘む少女一むれ行き過ぎて野邊の細道春風の吹く

蚕　　名古屋　中島とみへ

吾子はいま熟睡なしけり其のひまに衣縫はなむ吾背子のため

述懐　　越後　坂野とら子

何事かなさばなりけん世のわざをなさですこしゝ者ぞくやしき

藤　　同　坂野くら子

いかばかりよる年波を重ねけん松よりあまる藤の花房

藤　　紀伊　保田綱子

ゆく春の名残りをとめて紫の色なつかしき藤の花かな

春の歌の中に　　千葉　石原とし

黄金色ににほふすゞなのはたつゝきゆふ日はきゆく胡蝶舞ふなり

野菜賣の蓋溝兒童に感じて讀める

をさな兒が學びのひまに菜を賣りて励むや御代のしるしなるらん　　臺北　宮崎孝子

失題　　四谷　伊丹はる子

花鳥の色音よりまづしらみつゝ山の端くらき春の曙

失題　　群馬　原田安那吉

目のとゞくかぎり青葉のしげりけり遠き野山も近き軒端も

失題　　神戸　千鶴子

岸十里靜かに暮れて鴨綠の森たゞ黒し六月の雨

失題　　大阪　青山なか子

今しばしいましばしとて花のかげ歸るころには月おぼろなり

蚊遣火　　埼玉　宮倉歌子

夕けたく煙りの末をさながらに蚊遣とたのむ我庵かな

失題　　牛込　平塚白百合

ほとゝぎす青葉の森をなきいでぬ月しのゝめの小笹路にして

夏月　　埼玉　宮倉倫子

賣りあふ窓の若竹ふく風にもるゝも涼し夏の夜の月

春の歌のうちに　　越後　伊倉田鶴子

孫の子の孫も忘れて老のみの老もわすれて花にうかれけり

雨　　神戸　井口その子

伐り出す斧の響きも絶え果てゝ雨靜かなりアリナレの森

筑前國千代の松原にあそびて　　山口　末田貞子

静風のふくをはしらてわたなみのよせてくたけし千代の松原

ゆく春　　奈良　紅葉

鐘の瀞重れるこの夕花ちりそめて春ほくれゆく

撫子　大連　上野かく子

朝な／＼諂へる露を乳房にておほしたてつる撫子の花

給はりしうつしえを返せと友の言葉に　小石川　大庭文子

これなくば慰むべくもあらぬ身をみなさけなきは君がみこゝろ

失題　長崎　松尾れき

あて人の宴する夜を舞姫の扇の風に散る櫻哉

胡蝶　山梨　古谷喜代子

花すみれつみにし妹をしたひ行く蝶の心の愛らしきかな

折にふれて　相州　岡部あい子

よもすがらみとりする子の枕べのともし火きえぬ蝶のまひ來て

初産せし姉を思いて　長野　牛山菊枝子

姉もゝ咲く靜けき里にわが姉は乳兒よれむれと歌うたふらん

里の子　山口　倉光ふよう

いちご賣る野の川づたひ牛追ひて草笛きよくかへる里の子

神功皇后の御いさをしを思ひて　遠州　市川敏子

よろづ代にかゝれとてしも軍船こまもろこしにつけし君かも

春惜　信濃　松尾節子

べに椿おつる音してひとり居の夕くれさひし行春のやと

摘草　長門　三隅光子

そのむかしすみれつみにし野邊とへは麥畑遠くひはりなくなり

夏の月　麹町　高木きん子

はしゐしてながむる庭の池水に涼しくやどる夏の夜の月

雨中鶯　近江　龜吉富美

かすみたつ野邊のなか道すき行けば我か來しかたにうくひすのなく

門べを引かれめく罪人を見そゞろあはれをもよふし
法律外に人心をいため世を、そこなふ、つみの幾倍
立まさるあるなど思ひめぐらして　周防　小鶴龜代子

神はいかにみそなはすらんうつせみの人のさだめし罪のあはれさ

筑後　熊谷蘭

思ひでのなり／＼とひし石南花長雨十日の露にあせぬる

花菖蒲　神奈川　小川ふさ子

曇もりか朝な夕なのなさけをはいろにいたしてさくあやめかな

水際の山吹　攝津　山路倭文子

池の面にこがれの涙のたゞよふとみしは水ぎはの山吹の花

題しらず　美作　政近藤子

いとゞまたやるせなき身にひた泣きぬ母みまかりし行く春のくれ

早蕨　河内　竹内敏子

見過してあすこむ人に讓らましあまり短し野路の早蕨

山里の偶居にて折にふれて　松本　池田和代子

さして行く身をいかにせん思川入るべき海は波荒くして

逃題　宮城　山形さち子

ちいさなる望にいきて小さなる望もとげでうせぬべき身か

春を惜む　尾張　氷室けい子

物思ふ身にしあられと何となくうつろふ花にしつこゝろなき

海邊松　神戸　葉刈伊久子

うす霞はほの／＼晴れて西須磨は松原つゞき淡路島みゆ

撫子　佐賀　江口シヅ

なか／＼にあはれは深し山里の賤が垣根ににほふとこなつ

短文

甲賞

失策

近江 塚脇禮子

今日も肴屋が來た、態々來たからといつて無理に買ふには及ばないと夫が常々言はれるが、でも折角あの坂路を、しかも野の中に只一軒の我家を目あてにしてヨッチ〳〵上つて來たものをと思つて、少しばかり取つておいた、夫が不在であつた母上は、あんまり珍らしかつたからといつて、寄麗な小鮎を一籠買つて來られた、「まあそうですか」と口ではいつたが、さあしまつた、又御小言だ、と思つて氣が氣でない、いつそ今日は默つておいて、明日買つた體にしやう、それにしては炊いておかればと、香が奥へするのを氣にしながらやつとの事で炊き終つたが、さて置場に困つて戸棚の隅へおいてみたり、釣棚へ伏せてみたり、一鉢の肴を持つてあつちへうろ〳〵、こつちへうろ〳〵。

甲賞

野邊のけぶり

牛込 平塚白百合

董はもえて、蝶はよみがへつた、庭の櫻はもう一ひらみひら散りそめた、今日は別段の暖かさ、袷せでもよささう、水色の洋傘を手にして背戸へ出た、菜の花が一面に咲て東禅寺の屋根がかすんで見える、廣々とした景色である。千代田草履の足もかろく小川をこえると、堤の上に牛がゆつたりと歩いてゐる、くわえぎせるの牛おひは、紫のけぶりをあとにのこして、櫻のかげから柳のかげへとうつてゆく。

乙賞

故郷

福井つる子

六年ぶりで國に歸つて見れば、父上は新聞よむに眼鏡を離し給はず、母上は頭に黑き物つけ給ふ樣子、學校にてテニスのチャンとほこりし妹は、肩上げとつて背長うバイオリンなど達者に彈く、向ひの小僧さんは、髮をフランスがりにして、自轉車にのり、卷煙草くゆらす、横丁の評判娘は三人子持ちの世話女房となつて、もう昔の面影はない、其妹の孝行者も亦何處かへ嫁したとやら、只かはらぬは作男の老爺が吸ひがら手のひらにのせつゝ呑氣に煙草をのむさまであつた。

乙賞

蕨採り

但馬　繁子

晝の御飯をすましてから、新宅の靜子さんをつれて裏の山へ蕨とりに行つた、水車の音は眠さう鼓影には鶯が鳴つてをる、木立の間を一二丁許過ぎると、上の方に灌木が疎に燒け殘つて、此處彼處に早蕨が見える、靜子さんと二人で手提げに一杯程採つたが、其時ははや頂上に來てをつた、彼方參田の傍に實家が見える、張物をしてをる白手拭は母に違ひない、戰爭遊びをしてをる子供の群には慥に弟の鏡吾も居る、なつかしさのあまりにとう〳〵山道を辿つて母を訪れ澁茶を啜つて暫く四方山の話に耽つた、今朝拵へたと云ふ草餅を土產に貰ひ、山貓の道を急いで宅に歸つたのは日暮であつた、靜子さんも母から好物の串柿を貰つてたいそう嬉しげに見えた。

乙賞

おぼろ夜

大阪　紅　花　子

薄衣で包んだ樣な十六夜の月は、ぼんやりと櫻の枝にかゝつて居る、折々花の香を含んだやはらかい風がそよ〳〵と吹いて、橋を渡ると、落花二三片月の光をのせながら、ヒラ〳〵と薄暗い木陰に白點をゑがく、町は靜かである、時時思ひ出した樣に、遙か離れた處でピユーピユーと云ふ笛の音がする、これをきくと、おぼろの月を背にあびて、古けた着物をきて、片手を袖に入れ、片手に大切な杖をついて、口に笛をくはへながら、見えぬ目を見はつて、ヨボ〳〵と地に其の影を殘して行く哀れな按摩が目の先にちらつく、笛の音はだん〳〵遠ざかつてかすかに空氣にたゞよふて居る。

丙賞

不幸の兒

奈良　野原かほる

時は七月下旬、こゝ大阪は天神祭で大賑ひ、朝早くより近き家の子等は、美くしい着物に大きなリボン、新らしい下駄をカラコロと、さもうれしさうである、妾も嬉しければ、かく兄の寓居を訪づれたのである、隣の家は支那人の家、何だかむつかしいよめないやうな字が門口にかいてある此家にはどんな子が居るのかしらと思つて居ると、出て來たのは六つ位の男の子、頭は辮髮の短かいのにして、小さな古い夏帽幷と穢らしい股引をはいたまゝである、色は焦げにこげた澁紙のやう不思議に思つて居るとつゞいて小さい三つ位な友禪の着物を着た女の子が出て來る、をかしいと思つて姉にきくと、此子供の御父樣は支那人の商人で、叔母さんは(男の子)日本の貧民窟から買つた奴隷だとの事そして花ちやん(女の子)はこゝの御姿さんの子で、それは

大事にして居るとやら、そして蔡瓶さんはいつも食を賜られ、その上年中裸ぐらし同様。うちへいつも遊びに來ては何かやらないとかへらないで大變哀れな子である、ときかされた時は何だか可愛さうでならなかつた、まだ六歳といへば母のふところなつかしい時代であるに、醜なる母と強慾なる父とに朝夕つかはれて居る、貧ゆゑとはいへ子を賣る母も又人らしからぬ人であると思つて居ると、向ひの家の格子の中から、何かなぶつて居る子がある、口さびしさに堪へぬ蔡瓶さんは、命によつてクル〳〵と三度廻つてワンといつて、終にほり與へられたのはわづかにそら豆三粒すぐ拾つて口にした。

両賞

遺愛の笛

尾張　櫻井峯子

あゝ此笛！いつか衣ヶ浦灣に月澄める一夜、瀏喨たる音に得意の殘月を御吹きなすつたもの、今は御形見となつて此窓に殘つて居る、あの凛々しい面影あの雄々しい御姿はもうみる事はできない。

両賞

梅雨

[illegible]月　奈良八重子

低い灰色の雲が、一面に空を覆うて、今日も五月雨がしめじめと降る、樹々の枝は滴に垂れ、葉と葉は重さうに下を向いて、古檜の幹も餘す所なく濡らされた、豚小屋の前に濡れた羽をすぼめて、鷄が四羽、片足をあげ、時々首を左右に傾けながら、草叢の中や、水溜を飛んでなる大きな蟇を珍らしさうに見てゐる、物置納屋の藁うつ音がぱつたり止むで、丑叢の白い頭が戸の間から出ると、豚が急に鳴き出した。

両賞

雨夜の感

羽前　谷山たに子

蝶よ花よと浮き立ちしも束の間、今宵雨にたれこめて、燈火の下に新刊の女學世界を繙くに、浮き名を流しけん明子さんとやらの批評は、讀むからに只いと憎う、轟手に羅られけん、絢子さんとやらの最後はひたすら傷しう思ひ侍りぬさても平和なる田舍に、平凡なる生活を繰り返へして斯かる出來事を餘所に聞くわらはの幸多さよ。

両賞

苦學の一夜

下野　宮川しづ子

須美さん淋しかつたでせう、人が込んで居たのでつい遅くなつて…、手に持もつた薬瓶を枕許に置き、夜具に手をかけてソツとのぞくと、「いゝえ少つとも」とは言つたがしかも淋し相な面をあげて、なつかしさうに見守つてゐる、室の内はもう夕闇に包まれて、月の光ほの白う、蛙の聲がかすかに聞える、「郷里の母様は今頃何をしていらつしやるでせう」と云ふと、「……妾も其様思つて……」と答へる、燈火をつけるのも忘れてしばらくは無言でした。

湖水を渡る

京都　三宅幹子

杜宇子鳴く青葉若葉の叡山から、だら〳〵下りに、坂本に着いた、見れば頭にリボンが無い今頃は何處の草を飾つてゐるやら、舟に乗る、湖面鏡の如く、南風暖し棹は漣々花を描き、水鳥の足、霞を抹す、清快、何とも言へず、唐崎を右にして舟は滑る様である、京へは歸りたくなし。

病める姉

千葉　山口秋子

逝く春を惜しみてか、雨はしと〳〵と降つて居る、姉は今宵はお熱も出で給はず、すや〳〵と寢んで居られる、枕べに坐して額にふりかゝつてゐる髪を拂ひ乍ら見れば、久さいし間、病に苦しまれた爲め、頬はそげて青白く、物すごい程色艶がない、そして痩せ細つた兩の手をださるにう床の上に長く延ばされてゐるのが如何にもいた〳〵しい、嗚呼此からだで此さき病に勝たれやうか、青春は姉の爲には夢であらうか、と思つてゐると、風無きに燈火はゆれて自分の影が震える。

水邊の花

駿河　鈴木さだ子

よく晴れた日である。

庭下駄はいて芝生傳ひに泉水の邊りへ行つてみると、水は奇麗に澄んで青い空が映つてゐる。

周圍には一面菖蒲が咲き揃つて、眼のさめるやうに美しい風もないのに蕊の房はおの〳〵ゆれて一片二片落ちては浮ぶ、やがて緋鯉が一疋パツクと口を開けたので、靜かな水面へ石でも投げたやうに波紋が起つて岸に映つた菖蒲の影をゆるがせた。

五月雨

愛知　榊原愛子

「郵便」と云ふ聲がする、玄關へ行て見ると實家からの手紙であつた「一時快方に向はれた母上又々重患に相成こゝ五六日もむつかしからん云々」とある驚いて母様（姑）に申上げて御暇をいたゞき直様車を里へと飛した、五月雨の降る中を忙がしさうに何處でも田植をして居る、いつもなれ

ば歌の一首も出やうに、今日はたゞもう胸がさわぐばかり母様は如何であらう、さぞお待かれであらう、と自分がいくら氣をもんでも、道が悪いから車は進まない漸く吾家へ着いた直ぐ母様のお寢間へ行つて見る、兄さんも春ちやんも居る私が來たと兄が告げる母様はくぼんだ目を開らかれ、苦しさうな息をつきながら「房子よく來てくれた、私はもう今度はたすからないよ」と後は苦しいいきをつかれるばかり、私は胸が一ぱいになつて思はず泣いた。

妾と奴凧

上州 渡邊松子

去年は初めての事で、色の配合も、丈けの長短も分らず、無暗に植込だ爲め、折角造つた花園も、思つた程見ばえのないものとなつたから、今年は出來るだけ位置よく配合よき花園を作らうと思ふて、昨日から鍬を手にして下女相手に畑の下ごしらへをして居ると、何處からのがれて來たか、奴凧がふはりと傍の海棠の梢に舞ひ下りた、そして自分等のいそしむ鍬の手振を見て、可笑相に、又面白相に、中間入りでもして見た相な樣子で、風のまに〳〵袖と袴をひらひら動かしてゐる。

生活

越中 栗山勢能子

たう〳〵流るゝ小矢部川に、年の頃十三四とも思はるゝ童らが、北風の寒いのに、袷半纏一枚身にかけて、股引もはかず、足を海老の様に赤くして、あちこちと流れ木を拾ふて居たが、生糸場の十二時の汽笛が鳴ると、拾ひ集めし小さき二束を背負つて、堤坊づたひに町の方へと行つた、あれで御飯を炊くのであらうか、思へば可愛さうである、自分達は、充分着物を身に纏ひ、足袋もはけば、手袋もつけあの様な冷い思ひもせずに、澤山の薪も焚れる、生活も實に様々なものである。

いたづら

眞岡 岡部ゆう子

金絲鳥の囀と點滴の音とを、温かな床の中に夢心地できいてゐると正也が、廊下傳にバタ〳〵と、可愛らしい足音で私の室へやつて來る。無音で見ていると、鐵潜へ小さな手がかゝつて障子がぶきやうにあく。又例の惡戯かと元の通り斜向に狸寢入をする、「姉ちやん起なつて母ちやん云ふの」と大聲で二三度繰返したが、身動きへせず佚然空寢のまゝでいると持て餘して何にか手の物を食べてるらしい、聽ての事に寢返りするや、柔かなヒャッとするものが頰を掠める堪らなくなつて甲を脱ぎ正體を現はす、みると餡のついてた皿を懷中に入れ大き餡餅を掴み、私の方をみながら頰張つている。

五月八日

美濃 桂川たか子

靈が出ると休めない、今日は幸ひ卯月八日だから甘茶を汲

へながら遊びに行つて來よとの祖母樣の御言葉、早速髮を直し衣服を着更へて家を出た、途中でお妻ばあさんにあつた、矢張お寺參りらしい、一緒に行くとよいと思つたが足がおそひからついお先へ行く、小夜子樣のお家へは久しく上らないから一寸訪れた、相かはらず若くて無邪氣である私も御供するからと言はれたから、共にお寺へ行つた。

身の幸

伯耆　木下さかゑ

塒に急ぐ鳥の聲を耳にしながら、鍬を肩に、鄙歌唄ひつゝ畦途辿りて我が家へ歸れば、父君母君は笑顏を以つてむかへ給ふ、背戸の流れに足を滌ぎて、上がればはや夕餉の膳は並べあり、家には目を悦ばす品も、心を慰むる鳴物もなけれど、母君がみ心つくしの夕食の馳走や、一家五人のまとゐの談笑は終日の疲勞を醫するに足る。

あゝ、人世の幸福は必らずしも富にあらず、名譽にあらず將又地位にあらず、塵をへだてし山里に、身すこやかに、心豐に生ひゆく我はさても幸なるかな。

春雄さん

麹町　名もなき花

障子をしめ切つて一心に讀書してゐると緣側で可愛らしい聲が聞える、耳をすましてきくと、「春雄さんが僕が八百屋で花子さんと姉さんが買ひに來るのよ、このヘツメが一個之が二個れ」と言ふお飯事の最中らしい、ソツト障子のスきからのぞくと、春雄さんは姉様達の仲間に入つて人形を抱くやら大騒ぎ、日頃僕は海軍大將に成るなんて威張つて居らつしやる時の樣はどこへやら、マア之から十何年の後その可愛いお口の上に八の字髯いかめしく立て、奥樣と一緒にすまして來らした時に今日の事申して冷やかして上げやうと一人ほゝえんだ。

神輿

和歌山　中錦錢子

手楯片手に表に出づれば、隣の桐の葉がくれに月いと青う照りて書齋よりもるゝ夫が讀書の聲、小田の蛙の聲と相和していとゞ淋しう覺ゆる中にも亦何となう風雅のやうにも思はれて、

今宵し我も詩人となりすまし
歌にうつさん物しらずとも

新婚寫眞

麻布　長岡はま

今日は久しぶりでお天氣になつたから、一緒に寫眞屋へ行かうと、夫はフロツクコートに山高帽子、私は小紋の紋付に厚板の帶をしめ鶸色の小さきシヨールを掛てぶらりと家を出た道々夫は「どうもお前は其の小紋がよくうつる樣だ其れを着ると一ケ月前の今日の事を思ひ出すよ」之れは見合の時を云ふのである「一ケ月前まではお互ににらめつこをしてお前はばかにすまして居つたつけ」やがて寫眞屋へ

ついてすぐに線てもらつたが、さてどんなのが出來たであらう。

まゝごと

青山　島　保子

縁側の前にこと〳〵と足音がして誰れかゞ上る樣子、そつと障子を細目に開けてみると、清ちやんとお隣の仲ちやんが小さなお鍋や椀を出して飯事を初めてゐる、踏石には赤い木履と駒下駄がちよこんと揃へてある、涼しい風がさらさらと青葉を渡ると、仲ちやんの白いリボンがひら〳〵と蝶のやうに動く、楓の葉が一片、寢てゐる小猫の顔を撫でて縁先に落ちると猫は驚いて立上る、背中を丸めた影が黒々と障子に映る、隙間洩る風が豐の後れ髮を亂して机の上の白百合に當ると花片がはら〳〵と机掛の上に散る、「あのお刺身を一人前ください、はい只今……直ぐと仲ちやんはたすきをかけて青い葉を切り初める、思はずホヽヽと聲を洩らすと、あら姉さんと二人が振向いてにつこり笑ふ。

銀の雫

愛知　小栗幸子

しよぼ〳〵と雨が降る、障子を開けて眺めると、梅の小枝に銀の玉なす雫が四つ出來て、二つ宛一所になつては交る交る落てゐる、そして其雫が丁度其下にある可愛い小さな南天を濡して居る、浮世の様も恁うであらうか。

僞

奥　紫古女

書の上にて見たる僞、繪にて見たる僞、墨染の衣に身をつつめる僞、眩に尊くゆかし、美しき衣着たる僞、肉づきたる顋のあたりに髭剃りたる跡の青々としたる僞の足元あやしくよろめきて目のふちほんのりと赤れましたる、にくゝたのもしからず、腹立し。

千曲川の邊り

上田　道江子

弟のあと追て庭下駄の儘裏の崖に出た、私共は此屋敷に移て未だ十日に足らぬ、都の住居を慕ぐる折りには多少心の奥に煩が有たけれど、一度此自然の妙なる美にうたれて心の亂れは漸く潤ふた心地がする、眼をあぐれば氣も清々しき麥の畑、小牧山とやらこゝ信濃路には珍らしい優姿で霞の帶をほんのりと引た處は稚兒の眠りからさめたやう、千曲川は其麓を繞て夕照の名殘をとゞめ、ひばりは雲井の外に春の平和をうたふて居る、あゝ此景色、私はうつとりして眺め入つた、弟はとく去りてあらず、畔に咲く菫はあはれ心なき人にふまれて亂れ散て居る、打ち過ぐるもえたえず、集めて文机に飾り花に吾が弟の無情を謝した。

春の小川

河内　竹内敬子

暖かい小川のほとりに、二人の兒が餘念なく少さな笹舟を浮べて遊で居る、川の水が淸らかで其兒は大變可愛らしいこれさへ詩的なのに村から、櫻の花びらが一つ流れて來る二人の兒は笑ましげに其れを取つて舟へ載せんとせしが、水は滔々としてその舟をながし去つた。

友の身の上

福岡 玉池久子

思ひ出しては悲しくなつて花子樣よりの御手紙を卷き返し繰り返して拜見する、何たる御不幸な御方だろう、幾年月を運命の手に持て遊ばれて、赤木樣と云ふ立派な軍人の奥樣に成られて喜こんで居られたのもほんの束の間、御手紙の御樣子では、此の頃良人は不治の病になやまれるとかまあ思へば人生は辛ひものだ。

釋迦誕生日

土佐 松本いわを

東京とは違ひまして私の國はやはり舊暦を用ゐますから、今日が御釋迦樣の誕生日で御座います、暖い土地ですから田植もすみました、麥も黄ばんで參りました、蠶は二眠して起きたばかりですから未だ左程忙がしくも有りません、御正月以來子供の一番樂しむ日で有り、又百姓共は本年の豐作を豫想して一日休んで樂しく過します、子供は一張羅の木綿縞絣など着せて貰ひます、手に〳〵御米の入つた紙袋と御燗徳利を持つて御寺へと急ぎます。

花菖蒲

本郷 根岸梅子

起きて顔を洗ひ、例の如くに庭のお池を一周すると、昨日迄つぼみであつた菖蒲が、今朝は紫に白に咲き初めてゆかしい姿を池の中に映してゐる、朝風がそよ〳〵と小波をうたせてゐると、フツと金魚が浮び出た太陽はキラ〳〵水に輝いつてゐる。

殊愛の扇子

伊勢 佐々木らく子

御父樣が御役所から歸つて入らつしやると、君ちやんはすぐ玄關に飛び出した、「わたしこゝへ御父樣の名を書いてあげてよ」と言つて差出したのは、平常大切にして居らつしやる、金地の扇である、お父樣は眉寄せたまゝ眺めて居らつしやる、ソトのぞいて見たら、マア眞中に「オ十三」と書いてある、コレ何と聞けば、ソレはおとうさんと讀むんだわと言つてすましてゐる、わるい事をしてくれたと思ふてゐると、やがてお父樣は、オ、君ちやん、旨く書いて吳れたれと仰しやつてお頭をお撫でになつた。

小猫

土佐 やよい子

妾は内の小猫が一番好きだ、今年の六月が丁度誕生月で有る其時は何をして祝つてやろう、妾が外出の時は必ず門ま

で見送つて呉れる今朝はお花の會だつたから、目さめぬ先にソツト出た、出た事は出たものゝ一日氣に成つて會もそこ〳〵にして歸へると道のかたへの麥畑から、ニヤーアと泣いて出たので、妾はヒシト抱き〆た、聽けば妾が出た後に泣いて食事もせなんだとやら、矢張り妾をしたつてゞあらう、可愛らしい奴である。

藤の花

廣島　河原萩子

雨はいつしか晴れて今日は朝から上天氣、はり物でもしようと庭に出ると、ブチがしきりに蝶を追つて居る向ふの藤は今が眞盛り、風はなし房はゆつたりと垂れて如何にも美しい。

散る花

香川　森たか子

多くの人に枕邊を圍まれし君子は、今したゝかに吐血して息もたえ〴〵に、只折々衰へたる兩眼を見はるのみ、「モー駄目だ、醫者はまだ四五日はと云つたが、今夜の中にもどうだかわからぬ、」是には答ふる者もなく、一室は水を打ちたる如く寂とし聲なし。嵐吹き止まず、窓近き梨の花の一片、二片散るもあはれなり。

靜なる夕

神奈川　きみ子

夕霧こむる酒匂堤に佇めば、今し月は雲間を離れて、水にゆら〳〵と金光を散らしぬ、何處にて鳴くらむ、鳥の聲かすかにきこゆ、月影忽々消ゆ、我が影を地に長くうつしつ追分節を歌ふ聲が彼方に起りて彼方に消えゆく。

夕

伊勢　細野ふみ子

遠寺で撞き鳴らす鐘の音に伴れて、櫻の花がひら〳〵と散る薄暗い觀音樣のお堂の前に、紅葉の樣な手を合せて今日もまた、おていちやんは一心に拜んで居る、お母アさんが早く快くなる樣に、と願つて居るのであらう、母がいたつきの床に就かれてから、やがて三十日にもなるおていちやんは今年とつてやう〳〵八ツ、晝は一日看病して、夕暮になるといつも觀音樣へお詣りに來るのである。

僻地生活

大阪　横山しな子

私の郷里は極々の山國で、汽車へ出る迄は何うしても十五里の路は歩まなければならないので、たまには夜をこめて急ぐ人などは、車に乘る人もないではありませんが、何分山又山で右は斷崖左は千仭の谷底といふ細道を車の上に危く揺られて行くのですから、どうせ命懸の仕事ですそれで

も向ふには頭を擡げて見るやうな山のとつ先に、一軒家があります、あそこへでも住む人があるのかと思はれます、これが住めば都といふのでせう。

別れ

備後　小野吉子

兎角別れの惜まれて人の姿も目に入らず、只御きげんようとのみ、友ははや車中の人となる、あゝ是れが別れかと思ふ程もあらせず、列車は進行を始めぬ、互に打振る手帕も漸々少さくなりゆく。

蛙釣り

本郷　玉子

姉さん靜にいらつしやいよ、逃げてしまうから、と云はるるまゝについて行くと、急に左の手で私を止め、ぬき足さし足そうつと竿を出したから、其の方を見ると、青い大きな蛙が水の外に體を半分出してぴく／＼して居る、アゝかかつた／＼姉さんかゝつた、弟は大よろこび、それに驚いて側にいた五六匹の小さい蛙が一度にぴよこ／＼はれ出す向ふの畑で仕事をしていた御となりの御叔母さんが、まあ政ちやんの御上手だことゝ御ほめになる。
細い畔道に立つてる二人の姿と、苦しさうに糸のさきにすがつて居る蛙とがはつきりと水に寫つて居る。

日曜日記

青森　三浦愛子

お天氣かしらと雨の戸の隙からのぞくと、朝日が眩しく照つて居る、裏庭で妹や弟の唱歌の聲がする、朝飯がすむと羽織を縫ふ、自分のだから針の運がはかどつてお晝までに出來上る、ひる過ぎ森川さんから葉書がきたからすぐにお返事をかく、夕方お湯に這入つて鏡臺の前に坐ると、末の妹が待つて居た風で莞爾々々しながら「アラもう上つて、早かつたワ」と世辭らしく言ひながら、今日の新聞を突きつけて、「姉さん此處面白さうそれ讀んで下さいな」と小説の挿繪を示す、面倒臭いとは思つたがいゝ加減に讀んできかせると嬉しさうな顔をして居る。

うたた寢

松山　村上郁代

しめやかに降る春雨はやますして、軒をつたふ玉だれの音淋しき折柄讀書に倦みて文机に依りかゝれば、何となう睡うなりてうと／＼する程に、何やら頭に落ちたる心地して目さむれば、花瓶の椿の花一輪。

春の眺め

本郷　佐野くに子

流るゝ柴垣のもと、柳のまゆ解けそめて、桃の一片二片水面に流れ田面には少女が根芹のふさやかなるを、つみつゝあるに、いつか心まぎれて我もと柴ふみわけて行けば、やがて神社の園内に出でたり、遙か眺めば菜種の花はあでやかに、麥は遠くたなびけり。

一口噺

◎印入賞

◎

神田　加藤豊子

夫婦連にて呉服屋の前を通りながら妻「私が男だつたら嘸よからうと思ひますわ。」
夫「ナゼ、」
妻「でも新柄の帯でも買つてやつたら何んなに奥さんが悦ぶだらうと思ひまして、」

◎

横濱　秋庭俊子

甲嬢「あなたは今でも冷水浴をおやりになつて？」
乙嬢「はい毎朝やりますが此頃は顔ばかりにしてよ。」

◎

豊前　玉造吹響

下女「書生さん英語でラブと申しますのは何んと云ふ事ですか。」
書生「戀と云ふ事だ、」
下女「おやさうですか、それでは鯛は何と申ますか。」

大阪　木村布

通行人「稲を苅るのに庖丁とはチトをかしいチエ、」
農夫「でも鎌はないですよ。」

大阪　木村のぶ

妻君「昨日東京から到來の海苔は何時たべませう？」
旦那「明日の朝喰ふさ。」

北海道　杉山はぎ子

奥様「梅や、其湯呑で飲んではいけないよ、旦那様のだから。」
下女「よ御座んすよ、旦那様は職多ぢやあるまいし。」

京都　丹波すま

先生「過ぎたるは猶及ばざるが如しとの例を示して見なさい、」
生徒「お正月の様なものです過ぎたかと思ふと次のお正月には及びませぬから、」

京都　井上ます子

女學生甲「平塚さんは肺病で逗子へ轉地に行つて入らつしやるのですつてチヨイト詩的子、」
乙「ツー？　肺病も詩的だけれど二十世紀は神經衰弱の方がハイカラぢやなくつて、」

京　橋　清野あや子

弟「此度の選擧では誰れが當選したの？」
兄「中野さんと高木さんさ、」
弟「では後の人は秀逸なの？」

京都　藤田靜枝

妻君「今度松島艦で亡くなられた方らは靖國神社へ祀り込められるでしようか、」
主人「もうちやんと生きて居る内から祀つてあるす、」
妻君「なぜです、」
主人「なぜツて艦長がヤシロぢやないか、」

佐賀　宇都宮八重子

妻「此子はなぜ您んなに云ふ事を聞かないんでしよう子、」
夫「なーにお前の年になればよく聞くよ、」

伊勢　田中こまき

奥様「お鍋やなぜ結立のかみに水をたらしてるの、」
お鍋「でも奥様がいつも結ふ程なら天晴水のしたゝる様に結へとお云ひでしたから、」

駿河　鈴木さだ子

甲「東京では四月に雪が降つたさうだれ、」
乙「僕の方ではもつと遲く十二月頃に降るよ、」

兵庫　筒井みさを

花聟「ア丶阿母さんが燒いて下さつた様な麺麭が欲しいものだナ、」
花嫁「妾は其れよりも阿父さんが買つて下すつた様な着物がほしいわ、」

大阪　牧村はま子

甲「君汽車よりもつと早く旅行する法を知つてるか、」
乙「いや僕は知らん敎へて呉れたまへ、」
甲「それはチ君汽車に乘つて其の上を一生懸命に走るんだ、」

大阪　田中義子

A「君のシスターは實に絶世の美人だれ、何歳になられるかれ、」
B「イヤ、彼れはまだ兄さんと呼んで居るが實は僕の妻なんで十九歳だよ、」
オヤ〳〵、それならあんな眼付をするでは無かつたにと口の中、

上毛　原田利津子

先生生徒に向ひ「楠氏の定紋は何でありますか、」
生徒「盲目であります、」
先生「どうして、」
生徒「見ずに開(水に菊)では有ませんか、」

下野　岡　淑枝

瓜番「此中に立入るべからずつて札が見えれえのか、」
盗人(平然として)「メカラ這つて這入つたのよ、」

○當籤者の禮狀

貴館御一統樣益々御清健慶賀の至りに奉存候陳者貴館御發行の女學世界寶さがしに於て私第一等に當選仕候趣同雜誌第八卷第五號を以て御披露相成り欣喜雀躍夢の如くに感じ申候

本日小包郵便を以て三越呉服店切手金壹百圓也御惠與被下難有正さに欣戴仕候父母弟妹團欒の裡低頭謹謝偏に貴館の恩德に感泣仕候事に御座候直ちに近隣及び學友を招き頂戴の賞品を披露致し申候大勢より祝ひを受け申候時の心持は實に筆紙にも盡しがたく嬉しく存候茲に恭しく寸楮を呈して厚く御禮申上候かしく

長野　米澤立枝

柳はみどりに花はくれなゐ袖ふく風もこゝちよき折から御館のます〳〵御繁榮の事をはるかに祝し參らせ候さて過し頃御催しのたから探しにくしくも當選いたし候よし本月御發行の女學世界にてしりよろこび居りし處今朝は小包にて賞品としていと〳〵うつくしき御品御惠みたまはり誠にありがたく御禮申上候折からの御品とて一しほうれしく散ルのつど肩にして樂しみ居り候まづは御禮かた〳〵御うけ迄かしこ

高松　高島繁

前略さてとや此度私事幸にも御社御發行の女學世界の寶さがしに當選し本日はいと〳〵美事なる御品を御贈與なし下されありがたく御禮申上ら〳〵いつまでも御社の紀念として愛用致可申候

赤坂　高木すゑ

拜啓遠路の處は今を花盛りにて候記者樣方御壯健の御事と存し候珍らしき品賞品として御送り下され誠にまことに有りがたく頂戴仕置き候
先は御禮まで

越後　松永繁子

妾事貴館の公平なる御摘せんに依りて四等賞に當選致しましたが實は其賞品は後れましたのでもしや途中にても紛失せしにあらずやと獨り心配致して居りました然るに唯今小包便を以て其體裁といひ實に美事な外觀を以て三越呉服切手拾圓券頂戴致し申候家族一同額を鳩めて貴館の御高恩を謝し併せて後來益御發展を祈ると共に何品を購求せばやと協議中に有之候ならば紀念になるものと考へ中に有之候記者よ御高見あらば女學世界に於ては御教示あらん事を願ふ

札幌　小島しげよ

拜啓
肩掛　壹枚
右女學世界寶探し當選賞品として御送與被下難有正に拜領致候

筑前　山崎いと

拜啓貴館御發兌の三月號女學世界購讀仕候處面白き懸賞寶さがしにて有之解答申候處幸當籤仕り候由御通知被下如何なる品哉と日々待居申候處着仕り取手遲しと開包仕り候處御結構の賞品にて難有正に頂戴仕り候間御安心被下度候着候は十日程前にて候早速御通知申上べき處甚だ延引仕り重て御斷り申上候

伯耆　入鹿光代

拜啓益御盛榮奉大賀候扨過般御催に相成候懸賞寶探し當選候爲め規定の賞品御寄贈相成候昨夜到着正に落手致候且つ御叮寧の御通知に預り愛讀者の一員として深く感謝致居候右御厚意旁御禮の御挨拶迄如此御座候

宜蘭　井上たか子

拜啓女學世界の寶探し賞品として絹ハンケチ二枚御送附被下正に落手仕候間左樣御承知なし被下度先は右御通知まで如此御座候草々

岡山　西山まさゑ

拜呈貴館益々御多辭の段奉賀候扨て私事貴館御發行女學世界寶探し四等に當選致し賞品として御丁寧に三越呉服店拾圓の切手小包郵便にて本日御惠與確に受取申候御芳情の段厚く御禮申述度先は右樣迄御禮旁々受取御通知迄申上候匆々

高知　椎尾鹿榮

前略女學世界の寶探しに幸い當選いたし今日賞品としてまことに美しいハンカチーフがとゞきましたときは夢ではないかと思つた位でした右一寸御禮申上げます

山形　莊司榮子

拜啓貴館女學世界寶さがしに當選致し七等賞として立派なる大絹「ハンカチーフ」御送附下され誠に〳〵うれしくよろこび厚く御禮申上候

大阪　小西菊子

拜啓女學世界懸賞品御送與被成候處刻下愚妹儀子事修學旅行中に御座候歸宅次第當人へ交付可仕候得共不取敢小生より御禮旁々領收仕り候旨御回答申上候草々敬具

大和　實兄島田太郎

以下略す



小說

曉舌

紅巾女史

洩聞いたと云ふ譯でなく其時其場に居合せた一人の私が、裏ぎりして書いた罪は赦し給へと先づ以つて斷つて置きます。

親友の妙子さんが嫁ぐと云ふので、お別れに晩餐を差上げ度いからと招待かれたのは妙子さんの日頃からの仲好しばかり、小造りの小百合さんと、美しい櫻子さん、パイプルウーメンと云はれて居る近眼の杵子さんに私とも入れて都合四人は夕方から腕車を連らねて門を出た。

お揃ひにしたクリーム色の絹肩掛を風に靡びかせて一枚は妙子さんへのお祝のしるしにと奉書に包んだのを大切さうに眞先の車の杵子さんが膝に載せてゐる。

何日でも袴を脫つた事が無いと云はれて居る小百合さんも今日ばかりは厚板の帶を少さくキチンと結んで、二枚袷でチンと澄し込んで前髮と髷とに巾の廣いリボンを結んでゐる、首筋が細いから頗る格好が佳い一寸清方の繪にでも有りさうだと誰れだつたか云つて居たつけ全く然うだ、小造りで瘦せてゐるから、奈う見ても今年廿一歳の人とは思はれない、見やうによつては漸つと七八位なもの、背の高い杵子さんが年よりもずつと老けて見えるから不平いと云ふのも當然だ、女は何んでも少さいのに限る、其點に於いては慥かに小百合さんは成功してるのよと云つて羨しがつて居た。

今日は自分の思ひ〳〵の特色を發揮したと云ふやうなのが私は可笑しくつて耐らなかつた、小百合さんは何處までも少さくキチンと取り澄して、少貴婦人と云つたやうだし、杵子さんは杵子さんで裝飾けも無いくしやく〳〵な束髮で、鼠色のセルの袴金緣近眼鏡を光らして、見るからクリスチアンらしい、櫻子さんは何處か粋氣造りで、前髮なんかも餘り出してゐないし、何方かと云へばつめて櫛の齒がよく通つてゐる、櫻子さんは學校を卒業してからめつきりみがき込んで美しくなつた、お家が實業家でお母さんがそれ者の上りだとか眞實の處は知らないけれど、兎に角すつきりとしてゐて氣持が好い、着物も縱橫縞のお召縮緬の同一の下着を重ねて、淺い色の半襟で心持拔いて居る。

番町の妙子さんの家へついたのは、最う灯點頭だつた、洋風の一室に案內される、杵子さんは隅に置いて在るピアノの前に行つて、樂譜をパラ〳〵と開けて見て直ぐ戻つて來て同じやうに丸卓子を圍んで、各自に椅子に寄り掛つて待つてゐる。

暫時の間は無言でひかてゐるので、寂然としたが其れも少時で破れて仕舞つて、紅茶を持つて來た小間使が扉の蔭に消えて仕舞ふと最うお互に勝手な事をぺちやくちや喋舌り始める。

「イヤに待たせるのね」と杵子さんは反り返つて白い天井を眺めながらいふ。

「何有にお化粧最中なんでせうさ」

「だつて外交官の御令夫人が是れぢや駄目だわ」と杵子さんは袂時計を出して見る。

「ねエ妙子さんは束髮でせうか、乾度お島田だわねエ」と今迄無言つてゐた小百合さんは先刻から夫ればかり氣にして考へてゐたらしく、思ひ入つたやうに云ふ。

「無論だわ」

「乾度よく似合つてよ、可愛らしいでせうねエ櫻子さん」

「然うね、一體丸顏の方はお島田がよく似合ふものだから」と云ひかけて櫻子さんはふつと小百合さんの面長な顏を見て慌てゝ。

「細面の方も夫りや好いけれど」と云ふ。

「大丈夫よ御心配なさらないたつて、私なんか一生島田なんかに結やしませんから、厭な事つたわ、重たくつて」

「アら重たいつて、ぢやあお結げなすつたのね秘して隨分ね」

「嘘よ、島田なんか誰れが」と小百合さんはくす〱笑つてゐる。

「小百合さんだつて櫻子さんだつてお島田は屹度よくつてよ、皆さん今日はお島田にすれやア好かつたわねエ、而してお振り袖か何かでね」と杵子さんが云ふ。

「あら然うね、櫻子さんは少し潰してね、粹氣にね、まア殘念だわ」と小百合さんが口惜しさうに云ふ。

「だけれどもね、皆さんは夫れで好いとして私は如何でせう？　島田に結つてお振袖を着て眼鏡ぢやア妙ぢやア無くつて？」

「反つて好いでせうよ」と櫻子さんは眞面目に云ふ。

「隨分ねエ珍らしくつてヽせう」と杵子さんが笑ひ出す、其處へ扉を啓けて入つて來たのは妙子さんで、皆改つて聲を揃へてお祝ひをのべる、妙子さんは一寸顔を赧めながらも澄したもので、難有う御座いますとお禮を云ふ、成程奇麗にお化粧が出來てゐて見違へるやうだが、島田ではなかつた相變らず丸髷の束髪で勿忘草の造花を挿してゐる、小百合さんは落膽した様子だ。

チンと澄して氣取つて居るのも束間で、女中が運んで來る西洋料理も旣う幾皿か取りかへた頃には、妙子さんも何日もの妙子さんになつて仕舞ふし、遠慮も何も無い打ち解けた間柄だから自分の思ふ事は構はずん〱喋舌る、杵子さんはハイカラがツて居るのでビーアに頬を染めながら。

「ねエ弱き者よ汝の名は女なりなんて云はれたのからして癪に觸るわ、私思ふのに女だつて何も始めつから弱い者だとか、従はなければならない者のやうに定つてるんぢやア有るまいし」

「全くだわ皆男が自分の都合の好いやうに勝手にこしらへた習慣なんだわね」と小百合さんが相槌を打つ。

「だつてね表面はどうだか知らないけれど、弱いの何のつて云つてる女に從つてるのは男ぢやア無くつて？私は何と云つても勝利を得るのは女だと思つてるのよだから勝手に弱の何のつて位な事は云はして置くわ」と妙子さんは例の癖の片笑をする。

「ホヽヽ大分御經驗が有るんだと見えるわね」

「あら隨分、豈夫ねえ」

「だつて奈うだか知れやしないわ」

「えゝ全くよ、眼使ひの研究をしたいなんかつて」

「ですもの分らないわ」

「然うだらうつて只だ云ふのよ、那麽に冷かしてやア厭よ」と妙子さんは貌を赧くする。

「私は那麽手管で男を負かすやうな事は厭だわ」と杵子さんが云ふ。

「ぢや反對ね、私なんか「ナヽ」見度いなのが好いと思ふわ、普通の婦人ぢやア面白くないんですもの」と云ふのは櫻子さん。

「私は眞面目な貴夫人になりたいわ」と小百合さんは少さい聲で溜息のやうに云ふ。

「然う？ ぢやア小百合さんは慈善會の幹事になつたり、寄附金を集めたり、繃帶卷きをしたりね然ういふのが希望なんでせう？ 結構だわ、羨しいわ」と杵子さんは一寸言葉を切つて。

「ねえ小百合さん貴婦人も好いけれども、慈善演劇なんかで樂屋へ入つたりしちやア可厭よ」

「餘りだわ、豈夫そんな事」と恨めしさうに杵子さんの貌を見る。

「ですが全く小百合さんのは貴夫人向きに出來てるのよ、お品は好いしお優かで居らつしやるし、お茶やお挿花やお琴もお上手だしね、何一つお出來にならないものは無いんですもの、豪いわ、流暢な佛語も遊ばすし」

「もうよくつてよ、大抵になすつて頂戴よ」と小百合さんは紅珠の燦めく手で耳を押へる。

「眞實にお美しいわねえ」
「全くねえ、然う斯うしてる間には公使館附武官の彼のお方も御歸朝遊ばすしね小百合さん」
「もう澤山よ、夫れより妙子さんの仰在る女の方が勝利を得るつて云ふお話でも伺ひ度いわ、如何してなんでせう？」と小百合さんは話を反らして仕舞ふ。
「何有に詰らない事なのよ、鹿爪らしいお貌をして禮服なんか召してしやつちこ張つて威嚴を示して居被るお方の裏面へ入つて見れば分つちまうわ、華族だつて總理大臣だつて、賤しい名も無い一婦人にすら劣つてるつて云ふ事なのよ、古今の英雄だつても婦人には敵はないわ、だから弱いやうに見えてゝ强いのは倘且女よ」
「成る程夫れで日頃から眼の研究をなさる妙子さんのお心が解つたわ」と櫻子さんは頓狂な聲を出す、妙子さんは負けない氣になつて。
「貴女だつてナ、が崇拜の方ぢやア有りませんか、櫻子さんがお化粧に熱心なのと些少とも異はないわ」
「新橋迄も髮結に行らつしやるんだつてね、而してお宅にお風呂が有るのに錢湯の方がよく磨けるつて毎日行らつしやるんだつてぢやア有りませんか、だから櫻子さんはお目にかゝる度に垢拔がして奇麗におなりなさるんだわねえ」と小百合さんが云ふ。
「櫻子さんはクレオパトラだつて評判よ」と杵子さんが出拔けに大きな聲で云ふ。
「まア些少とも知らなかつたわ」と妙子さんは嬉しさうに。
「誰樣だつたかの話に、櫻子さんのお化粧函を啓けたらクリームばかりも幾品とか有つたつてね、宛然俳優見たいだつて吃驚してらつしやつたわ」
「然うだつてね白粉も數知れずだつてよ、少しお化粧の仕方を敎しへて頂戴ナ、實業界で飛ぶ鳥も落すつて勢力の有る增村さんの奥樣なんか今年五十何歳つて云ふんだけれども、漸つと四十位にしか見えないのですつてね」
「えゝ增村さんのはね襟足まで夫れは〱奇麗に塗る

のよ彼の方のは又別ね」

「だけれども餘り造り過ぎるとね、遠目は好いけれども傍だと見ざめがするものね、櫻子さんの位が丁度好いのよだけれども、迚も私なんかには櫻子さんのやうな眞似は出來ないわ、直ぐ父に贅澤だつて叱れつちまうんですもの」と小百合さんは情けなささうに云ふ。

「夫れや私だつて然うだわ」と妙子さんが傍から慰め貌に。

「櫻子さん見度いに刺繍の有る洋傘なんか欲しくつても買つて貰らへないのよ、ですもの不平だわ、だから櫻子さんのやうに香水だつてやれ散歩に行く時はリーやヴアイオレツトをつける時は他人の家へ行く時はヘリオトロツプをつけるなんて區別なんか迚も出來やしないのよ、菫花が好いからつて買つて貰つたら夫れが失なるまで使はなくつちやあとは買へないんですもの」

「家だつて那麽贅澤ばかりすれや叱れてよ、だけれどもね幸な事には母が彼麽風に華美好きなんでせう？だから割には出來るんですけれどもね、其代り私の思ふのは些少とも買つて呉れないで粋氣な物ばかり撰るんですもの皆母が見立てるのよ、ですから然ういふ裝飾をするには奈うしても粋氣に造らなければうつらないのよと櫻子さんは辯解らしく云ふ、此話を聞く度毎に櫻子さんが華美な生活に馴れ、贅澤ばかりしてゐながらも何んとなく物足らぬ淋しさが見えるやうに、自分の母の前身を思つてひけ身になるらしく想像はれて可哀想になる。

「何しろ櫻子さんはお羨しいわ、お母樣が權利が有るんですもの結構だわ、夫れでまだ不平なんか仰在りや夫れこそ罰が當つてよ」

櫻子さんは無言つて笑つてゐる。

「どんなに幸福な身分のやうに見えても夫れや誰れにだつて不平は有つてよ、人間ですものねえ」と杵子さんは悟つたらしく云ふ。

「私なんか然うは思はないわ、自分が若しも絶世の美人だつて、交際社會の女王のやうに尊ばれて、花のや

うに裝飾つてゐられるやうな身になつたら夫れこそ滿足するわ」
「そんなら小百合さんも美人の募集に應募して見りやよかつたわねえ」
「眞個だわ、而して伯爵でも侯爵でもお好きな處へ嫁らつしやりやよかつたわ、殘念な事をして仕舞つたのね那麼お心が有ると知つてたら、秘密にそつと小百合さんのお寫眞を出して上げりやアよかつたわ、貴女の事ですもの乾度一等に當選するわ」
「だけれどもそんな事つちやアねえ小百合さん婦人の誇りと云ふものがなくなるわねえ」と杵子さんは何處迄も眞面目な事ばかり云ふ。
「夫れから思ふと植谷さんは豪い處が有ると思ふわ」
「まア植谷さんの何處が豪いの？自由結婚してお實家へ入れられなくなつたと云ふのが感心だと仰在るの？杵子さんの仰有る事は私には分らないわ」
「其樣事つちやア無いわ、何しろ植谷さんのお家はあゝいふ名望家でせう？秀子さんは其家の大事の〱の御孃樣ぢやア有りませんか、ですから隨分眞のお姬樣に出來上つて好いんだわ、夫れだのに彼麼に思ひ切つて自由結婚でもしやうつて云ふ決心が既う普通ぢやア無いと思つてるのよ」
「だつて何んだつて云ふぢやア有りませんか、結婚した方つて云ふのは教會で御交際なすつたんだつてね、而して餘り何した方ぢやア無いつてぢやア有りませんか」
「然うだッてね、だから餘計植谷さんのお父樣やお母樣は御落膽なすつたんだからね、親不孝だわ、夫れにもう彼麼事が有てから以來御親友だつた方達も最う些少も御交際なさらないんだつてぢやア有りませんか」
「夫れや夫うだわ、植谷さんとお交際してれや、してる方迄其樣方と人に思はれるから厭だわ」と小百合さんが眉を顰めるのを杵子さんが笑つて。
「大丈夫よ小百合さんなんか温順しいんですもの、誰れが那麼事思ふもんですか、此間植谷さんに逢つたら何でも近々に英國とかへ行つて仕舞ふ積りだなんて云

つてらしたわ、私も其方が好いでせうつてお進めしといたわ、だから自由結婚した位で社會からのけ者にされて仕舞ふやうな處になんか居る事は無いつて私が然う云つたら笑つてらしたわ」

「何んでも倫敦に叔父樣が行つてらつしやるんだつてね、よくリボンなんか澤山送つて下さるつて云つて居らしたわ」

「私何んだかお對話してゐて植谷さんが可愛想になつて泣いちやつてよ、隨分皆さんから冷遇されたんですもの、辛らかつたらうと思ふわ、倫敦へ行つたら體の續く限り働くんだつて、而して萬一病氣に罹つても歸朝つては來ない積りだから、是れが一生の別れになるのかも知れないからせめて兩親に逢つて行きたいつて云つてらつしやるんでせう？全く其心中を察して仕舞つたわ、餘り御兩親だつて堅過るわ」

「だけれども其位の事は有つたつて好いのよ、一體植谷さんには幼少い頃からの許嫁の方が有るんですもの其れだのに彼様方と自由結婚なんかなすつたから餘計罪は重いわ、其許嫁の方のお宅へ對しても澄まないからつて云ふので御兩親が一層きびしく仰在つて出入を差止めるの、何のつて仰有るんですとさ」

「然う云つたつて夫れや無理よ、許嫁の方つて云ふのは夫れや御兩親が好い加減にお定めなすつたんでせう？ですもの植谷さんは植谷さんの自由でなすつたんだから些少とも惡いとは私は思はなくツてよ、植谷さんだつて夫れほど惡い事をしたとも何とも思つてらつしやりアしなくつてよ、全く私は植谷さんのお心の中がお氣の毒で耐らないのさ、生れた家には居られなくなるし、お友人の同情はなくなるし、仕方がなくつて國を去つてお仕舞ひなさるんでせう？」と杵子さんは自分の事のやうに悲しんで。

「私は意氣地が無いのよ、植谷さんのお顏を見ると物が云へなくなるのよ、夫れに引き換へて植谷さんは平氣なもの、新生涯に入るんだつて云つてらつしやる其勇氣には敬服して仕舞つてるのよ」と杵子さんは眼鏡を外して手帕で拭きながら眉を顰せて云ふ、妙子さん

は那麽眞面目な濕つぽい話は大嫌ひと云ふやうに。
「皆夫れや身から出た錆よ、だから仕方が無いわ、温順しくしてる者は那麽不幸なめに逢ひつこないんですもの」
「全くだわ自業自得なんだわねえ」
　逐々植谷さんが惡い事にされて仕舞つたので杵子さんは些か不愉快さうな貌をして、少さいコップのビーヤも半分も飲みきれないで、泡の消えたのが殘つたのを前を置いて、丸卓子に肱を穿いて額を押へて居る、何日の間にかピアノの前に行つて居る櫻子さんと小百合さんは何んだか狐鼠々々話し合つてほく〳〵笑つて居る。
「面白いわ、ねえ然うしませう」と櫻子さんが笑ひながら云つて。
「妙子さん鳥渡々々、秘密のお話が有るのよ」
「其處で仰在いよ」と妙さんは果物を小器用にむきながら無精を云ふ。
「まア一寸來らつしやいつてば」
「好いわ、來らつしやらなけれや大きな聲で皆さんに聞えるやうに云ふから」
「まア那麽事云はないで云つて御覧なさいよ」秘密のお話つて何有？」と一寸貌を揚げて妙子さんは眩しさうな眼付をする。
「ぢやア言つてよ、妙子さん新婚旅行には何處へ行らつしやるの？」
「まな彼麽事云つて」と睨むやうな眞似をして見せる。
「仰在いよ、今ね此處で櫻子さんと相談しちまつたのよ若しも仰有らないならね、貴女にねピアノの獨唱をして頂くのよ、よくつて？」
「小百合さんが彈いて下さりやア、而したらね皆秘藝でも出さうぢやア有りませんか」
「えゝ面白いわ第一番に櫻子さんの淸元ね、秘しても駄目よ、整然とバレてるんですからね」と小百合さんは一人ではしやいで居る。
「夫れから杵子さんの舞踏でせう」
「だつて豊夫一人ぢやア出來ないわ」

「でもまアよくつてよ好くつてよ、まア何んでも好いのよ早く。プログラムを定めちまはなくつちやア駄目よ」

「那麼無理な事云つたつて夫れや不可ないわ小百合さん」

「大丈夫よまア私にまかして置いて頂戴よ」

小百合さんは小さい姿でちよこ〳〵多忙しさうだつた。

で遂々妙子さんの御祝ひと云ふ名で皆何か藝を出す事になつた、如何せ此處に集つた五人の他に聞く人も無いからと云ふので、平常秘しきつて居た妙子さんの小鼓を聞いた、丁度行く春の生温い宵には什麼にも似合しい、夫れに鼓を持つた美しい姿が白い壁に影法師が映つて、繪が書けたらと染々思つた、櫻子さんの細いよく通つた聲での青海波が一番私には氣に入つた。

恁麼事がお友人に知れたら夫れこそ極りが惡いから誰樣にも云はない事と約束して、又揃つて妙子さんに別れて門を出たのは最う餘程遲かつた、若葉を渡る風が冷や〳〵して襟に寒い、何日又斯うやつて揃ふ事が出來るやら覺束ないものだ、で思ひ出になるやうに忘れまいと思つて歸ると直ぐ着物も着かへないで急いで認めた。

女子と健康

女子は只家を守るのみにて、穀潰しの譏りを免かれざる者なれば、せめて身體だけは健全にして、樂しく平和なる家庭を作り、健全なる子女を擧げて立派に之を養育せざるべからず、扨も虛弱なる母親より健康なる子女の生れ出る例しなければ、健康なる子女を得んには第一に母親を健全にするを要す父親は多少不健康なりとも、母親にして健康ならんには、丈夫なる子女の生れ出る例しは少なからず、現に我が知る所の家に平生病氣勝ちなる主人あり、一時は危うしと迄認められし程なりしが、其配偶者を求むるに方り、兩親は種々苦心して體格健全に意志堅固なる婦人をと心掛け、終に希望通りの嫁を得て之に配せられしかば、間もなく生れたる孫は孰れも皆健全なる子女にて、家庭はそれより喜悅と滿足とを以て滿されたり、實に身體さへ健全ならば、何事も思ふがまゝに行はれて愉快此上もなく、愉快なればこそ自然常に笑ひを湛えて、家庭は圓滿に平和に睦じく樂しく日を送るを得るなり。（井口アグリ女史談片）

▲人事活断▼

石龍子

▲兵庫の悲しき運命女へ――活断する前に、そのお手紙の全文を左に記し、天下の讀者と共に同情を表せんとす。請ふ貴女よ之を許し給へ。

其の一　通學時代

呼聲七歳の四月、文房具其の外辨當草履など、悉く調へて貰つて、今日から尋常一年生よと喜び勇んで通學してより十九の歳、高等女學校を卒業するまでは、年に一度づゝ試驗の心配はあつたとはいふものゝ、世の波風などは何處に吹いてるか知る由もなく、親にさへ强請れば何でも買つて頂けるものと思つてゐた無邪氣な昔に今一度なつて見たう御座います。

其の二　學校の先生

高等女學校を卒業してから、何となく小學校の教師になつて、愛らしい子供達の世話がして見たいと思はれてなりませぬから、其の由兩親へ話せば、それも宜からうとのこと、早速手蔓を求め、先月まで生徒の身が今日より愈々先生々々と懐かれるやうになり、足掛四年の間は授業後「女學世界」でも讀むの外、別に何の仕事もなく唯單調な月日を送りました。

其の三　緣談

或日の事、己が勤める學校の首席教員來られ「私の懇意にする森山さん(假名)の御子息は今は工科大學に學びの最中なれど、末頼もしき英才なれば、お宅の娘御を是非々々御縁約致したいと思ひます。過日も一寸此の事を先方へ話すと、先方でも熱く御存じなものですから、固より望んでゐる所、何うか〳〵とのお願です、されば此方樣さへ御承知になれば唯今でも纏まる良緣ですが……」「何れ當人の心も聞きました上で」と斯くて首席教員の歸らるゝと入り違に母の父即ち私の爲には祖父なる人遠國から態々來られ「外の事でも無いが、親戚の士官では是非とも此家の娘を貰つて來てくれとのことだが、餘年も無い我の爲に、何うかこの願を快く承知して貰ひたい。」言葉の終らぬ中に、父が極めて懇意にして居られる中山樣(假名)が案内も乞はず入り來り「お宅の娘御を是非とも伊藤法學士の許へお世話がしたい、何うか此の願を聞き届けて下さい」娘一人に婿三人、私は陰で緣遠い友垣に分けて上たら、嘸宜からうものをと思ふてゐました。

其の四　緣談纏まる

とやせんかくやせんと思ひ亂れた末、遂々熱心家の勝利に歸し、工科大學生と結納を取り替せ衣裳の中ばも出來ざる中に、早三々九度の盃を擧げたれど、良人は尚遊學の身なれば、良人の卒業まで私も矢張學校の通勤を續けてゐました。舅姑は「眼鏡に叶うた善い嫁ぢや」と實の親も及ばぬ程の可愛がりやう。嗚呼何といふ幸な身だらうか、何ぜ早く人の妻とならなかつたらうかと思ひました。されど〳〵、それは僅四ヶ月の夢。

其の五　病に罹る

結婚してから五ヶ月目に何となく氣分勝れぬ所から、醫師の診察を請へば子宮病兼歇私的里兼坐骨神經痛であるとの仰せ、尤も斯うなる一月前から多少兆してゐたのでせう。兆してゐた爲に心も自ら鬱ぎ勝でゐると舅姑達は元の優しい言葉に引換へて「斯んな嫁に酌をされては酒も旨く飮めんや」と舅が言はれるに尾いて「本當にまうで御座んす、何が氣に入らんのでせう」と姑は申さる。萬事につけて斯ういふ風であるから、さらでだに鬱々する心は尙々鬱々として、病は益々重くなるのみ、それでも忍ばれるだけは忍んで、學校へも通勤を續け、校長始め其の他の人にも可成病苦の顏を隱し、分擔の校務も濟ませて、急ぎ家に歸れば、

舅「生徒達の歸つたは二時間前のこと、今まで何をしてゐなさつた」

姑「了つてゐますわれ」

夫「其樣にこの家が厭かい」

夫の妹「姉さんは先生ですもの」

急ぎ着を脫つて「何かお手傳致しませう」と申せば、「些然と何も斯もしてあります、今頃まで待つてる者が世の中にありますか、お母樣の手の皹を御覧なさい」「何うぞお許し下さいませ」「校務分擔の爲に遲くなるのに何も謝罪ることは無いぢやないかヘア〳〵」

立つ瀨なき身の厠所に入つて泣くより致し方も無く、嗚呼々々天は何故に斯る纖弱き女を苦め給ふやらと我知らず、歎けば子宮より白き物はどツと出で腰の痛みは愈々募る。

其の六　入院

病は日増に重り、身は日増に衰へ、舅姑達は日増に憎み給ふ。されば神に祈り佛に禱り、只管病の全快を願へど、病は神佛の手で治らぬものにや。「何卒お醫者を招いて下さいませぬか」と恐る〳〵願めば、「血の道は女の常、それよりも心を確かりとしなさい」斯う一言の下に反ねつけられて了ふ。それでも尙故家へも隱してゐること殆ど一年、鏡を見れば我ながら蒼褪めた顏、愛相の盡きた顏、これだもの良人の可愛がり給はぬは無理も無い、斯うなつては已むを得ず、人知れず一通の手紙を故家へ遣つたれば實の親は有難いもので、早速入院の手續をして吳れ、治療を受けること一月、二月、三月。

其の七　離緣

絕えて舅姑や夫の便りも無かつた揚句に、二通の手紙、其の一は舅から、其の一は實の母からである。何れを先に讀まうかと思ふたが、先づ舅のより封切りました。母のを先に讀めば宜かつたものを。兎に角その文意は、「醫者にとはいひながら、他人に子宮を見せた樣な女を、我が子の妻とは致し難し、且又入嫁以來二年になれど子なし。悴も七月は立派な工學士。然るに斯る病者を妻となさんこと、親として忍びず、第一祖先に對して申譯なし。依て爰に斷然離緣す。入院は其方の兩親が勝手に取計つたことなれば、その費用までは當方に於て一厘も拂ふ義務なしとお心得られよ云々」讀み終るや正體なく泣き崩れました。七月には良人も卒業し給ふし、それまでには從來よりも健全な身體にして、元の如く

可愛がられたいものをと斷つてゐたのに、まア何たることだらう、これア事に依つたら彼家の母様が入院料を先方へ拂つて貰ひたいと被仰つたものだから、それを舅が怒られたのであらう、さうちや／＼と思ひ巡して次に母の手紙を開けば「先方より其方の離縁を申し來りました。就ては病中の其方には聞かせまいと思つたれど、鬼の如き先方は直接に其方へも申越したらうと思へば、已むを得ずお知らせ申します。（中略）入院料などは固より此方にて負擔してゐるにも拘らず、己の邪心を以て他人の心を推し、先を越して逃げんとの心、實に憎しとも憎し、何れ明日出向いて詳しく申しませう。萬事兩親がよろしき樣に取計ひますから必ず必ず心配なさるな云々」

翌日になると父母同道にて來られ「泣くな／＼學士とは何程の者ぞ、大學生とは何者ぞ、縱ひ車の後押するやうな貧窮の家でも、病氣の時は情を籠めて世話するが人間の道、然るに妻に月給取らせて悉く之を捲き上げながら、馬車馬同樣の取扱とは、嘸々殘念であらう、無念であらう。許して吳れ孃、全くこの親の眼鏡が惡かつたのだと、母は申すに及ばず、父も男泣に泣きました。

其の八　活斷を乞ふ

私は何事も諦めて、一生涯獨身生活を致さうかとも思ひ、或は今一度良人の袂に縋つて私の誠心を述べようかと考へ、或は又世の中はすべて斯の如きものならば迚も生き甲斐なきものよとも思はれ、或は又病氣全快次第に良縁を求めて、再婚すべき譯のものか、千々に思の碎がれて、心細きこと言はん方なし。

石龍子先生よ、今は萬事先生の御活斷に依るの外、如何ともし難し何卒々々來月の誌上に前述の運命をお示し給はらんことを、偏へにお願ひ申しあげまする。

〔活斷〕――千仭もわらん懸崖絕壁より過つて深淵に落ちたれども、幸に游泳法を知れるが爲が、萬死を免れて、何れへ着かんかと迷へる折しも、何處ともなく助けて遣るぞッといふ聲の聞ゆる卦なり。之に依て判斷すれば懸崖絕壁の地より落ちたるは貴女の不幸なる身に遭ひたるに譬ふべく、游泳法を知れるは御身に教職といふ結構なる獨立自衛の道あるに譬ふべし。而して「助けて遣るぞッ」の聲は尊き御兩親の事ならずや。然らば則ち再び教職に從事しながら身體を健全にするの策を講じ、一生獨立に暮さんも、或は再緣せんも、そは悉く兩親の心に任せて、貴女は何事も思ふべからず。然るに貴女にして、とやせんかくやせんと煩悶するは、恰も絕壁の頂へ攀ぢ登らんか、それとも此儘水中に沈んで死なんかと詰らぬ了簡を起すに異ならず。元來先方の舅姑や良人の殘酷なるは言ふまでも無けれど、失禮ながら貴女にも幾分の過無しとせず、即ち貴女はその心に於て疚しき所あらずと雖も、生來快活の質ならざるが一大缺點なり、快活ならざるが爲に、自然と家庭は陰鬱に傾き、遂に今日あるに至れるなり。されば今後啻に身體のみならず、精神をも爽快健全に爲すやう誘せられたきものなり。

▲廣島縣不判斷者へ――群雀の噪る中に鶴の一聲高く聞ゆるの卦なり。

此の卦によつて判斷すれば、長兄は鈍にして其の他は皆當なりと心得らるべし。御身が女子大學へ入るべかりし費用をその人の爲に犠牲に供する長兄の所爲は美にして快、これその人の爲になるのみならず、御身が一生の幸運を思へばなり。嗚呼長兄は當世に得難き大丈夫なり、君子なり。されば御身は其の人と二世も三世も夫婦ぢやと確く心に誓ひ、貞操を全うして、その人の卒業後とても長兄の爲に卒業したのだなどを鼻にかける言語擧動ゆめ〳〵あるべからず。

▲鹿兒島縣北海の春山すき女へ――旅行者が、或る場所へ行かんとする際近き海路を渉るべきか、遠き陸路を廻るべきかと迷へる卦なり。近けれども海路は危險の恐あり、遠けれども陸路は何等の危險なし、而して特務曹長の方は海路、會社員の方は陸路御身は旅行者なり。如かず會社員の方に嫁せんには。

▲小石川于欲しき女へ――日陰の梅樹、花は開けども實を結ばざるの卦なり。之に依て判斷するに、病氣といふ程にはあらざるも、御兩人共に身體の營養不足なるならん。日光に遙うて運動をなし、滋養物を食してよく消化させ、以て身體を健全になされなば、二年を出でざる中に姙娠せらるべきなり。

▲東京古池や蛙とび女へ――父上の從前の事業は恰も兵糧に乏しきを嘗みすして戰爭するが如し、勇猛邁進善く戰ふと雖も長久の策を講ずる能はざるがため、遂に敗を取らざるを得ず。故に今後は長久の策を講ずるが第一の急務なり。千圓の資金ある人が千圓を投じて事を爲し、意の如くなれば大利を得られんも意の如くならざるときは如何ともし難し、然るに千圓の資金ある人が五十圓か百圓を以て事を爲せば、失敗しても第二の策を講ずることを得、失敗せざれば言ふまでもなく一歩々々に進むべきなり。父上にして此心になられなば、數年の中に必ず挽回疑なし。御身も感情に鋭くして意志に弱き風あり、心を緻密にし熟慮以て身を處する方針を取られなば、三年の中に幸運續々たるべきなり。

▲牛込の谷實女へ――一器を買はんとする者は、その器を或は表にし、或は裏にし、横からも、竪からも打ち眺め、熟々吟味したる上にて買ふに非ずや。器物にして且つ然り、然るに一生苦樂を共にせんとする良人を富籤取る如き心得にて いつかばつか當つて碎けろ的に嫁するといふは實に不心得千萬なるものなり。されば御身が淸國旅順なる人に嫁せんこと卜はざるも凶なり。更に二年の月日を待ち悠々良緣を求めらるべし。

▲鎌倉無名草女へ――如何に婚姻は大切なりとて、徒に躊躇緩慢時を費し、遂に可惜良緣を取り逃すに至つては輕忽に結婚する者と其の失等しきなり。御身の處置は即ち躊躇に過ぎ、既に掌中の玉を失ひたり。されば內務省奉職の人を思ひ、諦め更に良緣を求めらるゝ方吉なり。

▲市內閑え子へ――空手にして虎を搏ち、游泳法を知らずして大河を渡らんとするが如し。その危きこと言はん方無し。貴女よ貴女、女學講義などに依て獨學する位は嫁したる後にても其の心だに挽ますば爲し得らるゝなり。何ぞ故らに苦境に身を擲すの必要あらんや。一刻も早く歸里

に跡りて良縁を求め、主婦となりつゝ長へに好む學問を爲さるべし。

▲青山閑樂女へ――石龍子が女學世界の人事活斷を擔任して以來、御身の質問程詰らぬ質問を見ず、御身は士族にして平民を嫌ひ、先方は平民にして士族を求むと、兩者の愚實に憐れむべし。斯の如き心を以て結婚すれば縱ひ御身は華族の家に嫁ぐも後に必ず不滿足なる心の起らんこと鏡にかけて睹るが如し。されば御身よ、新平民で、肥料屋で、容貌が惡くて、貧乏なれども、身體强健にして、その心正直且つ愛に富み、勤勉忍耐の力強く、末必ず有望の若人ありて御身と苦樂を共にしたしと望まば御身は之に應ずる覺悟あるべきなり。此の心にならざる以上は末必ず凶にして、此の心になられなば良縁思ふが如くに續々たり。

▲新潟縣藤門浪枝子へ――貴家の有樣は恰も紛々擾々亂麻の如し。而して多勢集まつて之を處置し得らるゝものに非ず、末必ず支離滅裂せずんば止まず、慨がはしき至なり。されば御身は此の間に在つて、父母祖先の名を汚さゞる樣、泥中の蓮の如く、超然として惡に染まらざるの覺悟なかるべからず。然るに御身は某士官と兄妹の約をなす、古來異性の男女が兄妹の約を爲し、終世兄妹の義を以て徹したる者一人も無し。必ず媒妁なき私通となつて終る者比々皆然り、然らば則ち此儘にしておかんか御身も遂に斯る醜態を以て終らんこと鏡にかけて見るが如し。聘すれば則ち妻となり奔れば則ち妾となる。妾とならんよりは今の中に兄妹の約を取消し更に媒妁人を介し、その士官と婚儀を堅め、後日貴家の支離滅裂せんとする秋に眞人の手を藉りて之が救助の任に當らるべし。

新刊紹介

▲歌集 玉琴（佐々木信綱撰）さきに「あけぼの」を公にしてより一年有餘、こゝに再び竹柏會同人の近作を集めて匣の如き歌集を出されたり、短歌あり、新體詩あり、歌曲あり、とり〴〵に掻き鳴らす調べの或は高く、或は低く、餘韻嫋々としてたえざるの趣あり、定價金五十五錢、日本橋區通四春陽堂發行。

▲新撰教訓百首解（三輪田眞佐子撰）本書は優美の氣風を養はしむると共に、我が國粹を自覺せしめんとの目的を以て、古來の和歌に就き最も教訓的の價値あるものを撰び、之れに何人にも了解し得るやう丁寧なる註解を施したるものにして、教育上の好資料たるは勿論、又一種の座右銘たり、定價金五十五錢、日本橋區鐵砲町榊原文盛堂發行。

▲何處に行く（後編）（松本雲舟譯）波蘭の文豪シエンキエヰツチの傑作クオヷヂスを譯したるものなり、本編に於て、基督教徒の迫害に遭ふ所、羅馬滅亡の悲慘なる光景等を叙せられたるが、其縱橫自在の筆致は、よく原著者の深遠なる構想を彷彿せしむ、定價金五十五錢、本郷區弓町服文堂發行。

▲代數學獨習書（上卷）（竹貫登代多著）數學の難きは其の因る所固より多々あらんと雖も、平易にして完全なる參考書の無き事も亦其の一因たらずんばあらず、著者は茲に見る所あり、即ち本書を出す解說丁寧、蓋し近來の好著ならん、定價金五十錢、博文館發行。

▲女性訓（村上專精著）こは博士が女生の弊風に鑑みてものせられたるものにして、言はゞ平易なる一種の倫理書なり、天職中庸、質素、謙讓、節操の諸項に分ち、良妻賢母說を根據として述べらるゝ所說穩健、女學生諸姉或は家庭の讀物として適當なり、定價金四十錢、京橋區築地鷄聲堂發行。

讀者文藝　投書歡迎（締切七月十五日）

▲和歌（一人一首）
▲短文（三百字以內）
▲小說（二十枚以內）
▲一口噺（一人一題）
▲小品文（十枚以內）

◎和歌、短文、一口噺は必ず端書を用ゆる事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

◎賞品

▲一等一圓▲二等五拾錢
▲三等參拾錢（圖書切符）
▲一口噺は入賞參拾錢
▲小說と小品文は詮考の上相當の謝禮を呈す

每月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內｛定刊數…………十二冊／增刊四回…一、五、九、十一月價格同一｝

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	五十五錢	四十七錢
半頁（卅二行）	二十三圓	十九圓五十錢	十六圓五十錢	十三圓五十錢
一頁（六十四行）	四十五圓	三十八圓	三十二圓	二十六圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

◉本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
◉御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
◉郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
◉總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治四十一年六月一日發行　第八卷第八號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　三千百三十番　三千八十八番　二千六百二十二番　三千二百二十九番

糸左近先生の著書

醫者ならぬ人でも他人及び自己の病氣を何病で有るとの診斷が出來たら如何に重寶であるかは言ふ迄もありますまいそこで又診斷が出來ても何んな藥を用ひて宜いか之が了らねば是亦齒痒い事である所が此二大事を總振假名で誰にでも了る樣丁寧に說き示して有るのが左の三大良書である

訂正三版

素人診斷學（全一冊）

四六判總クロース　紙數二百四十頁　正價六拾錢　小包料八錢

總論、望診法、問診法、檢溫法、檢脈法、檢尿法、打法、聽診法、腹部診法、小兒診斷法、骨相法、疾病顧問　卷頭には美麗なる着色診斷圖式鼇頭には專門家の參考となる有事項あり

訂正五版

素人藥物學（全一冊）

三六判總クロース　紙數二百五十五頁　正價六拾錢　郵稅六錢

總論　藥の配合、連服の事、藥と年齡、天秤と分量調理法と器　**各論**　物健胃劑十四品、皮膚病藥七品解熱劑六品防腐劑九品收斂劑十六品下劑九品雜劑二十一品非藥的の藥九品　［本書字引］藥物學專門の語を丁寧に解釋す

訂正三版

續素人藥物學（全一冊）

三六判總クロース　紙數二百五十六頁　正價六拾錢　郵稅六錢

利尿及心臟强壯藥十六品麻醉鎭痙劑十四品、結核劑八品（肺結核の施療法）生殖器劑十二品寄生物驅除劑十一品變質劑五品雜劑十九品（飲酒法）

附錄　毛生藥調合法、白髮染藥毛拔藥、化粧藥色々日に燒けぬ藥齒磨粉消毒藥、眼科藥、灌腸藥、人工溫泉、香袋屠蘇酒製法乳汁分秘藥

發兌　東京市神田區今川小路一丁目五番地（振替貯金口座八四二一四番）　**金刺芳流堂**

糸左近先生著（最新刊）

家庭衛生講話續篇

全一冊●正價八拾五錢●菊判總クロース美本●小包料八錢

本書は曩に著はされたる正篇の遺ちたるを補はん爲に物せられたのだ、內容は婦人科產科皮膚科內科雜科十二ヶ月衛生の六門に別け雜科の中には眼科外科小兒科耳科など籠つてゐる況は斬新詳密文は平易流麗衛生上の事は細大網羅して殆んど盡せり正篇と合せて紙數約七百頁恐らく通俗衛生書中我國の大王であらう

糸左近先生の著書

●家庭衛生講話＝正篇　全一册●菊判總クロース表紙　正價七拾五錢●小包料八錢

●改訂增補　生理學講義　全一册●菊判總クロース表紙●正價八拾錢●小包料八錢

●生理衛生要解　全一册●四六判美本●正價參拾錢●郵稅四錢

●男女學問病　全一册●菊判美本●正價拾八錢●郵稅四錢

圖書目錄　郵券二錢封入申込に限呈●

芳進堂●東京堂●林平●大阪吉岡他　三宅●名古屋川瀨●京都若林●其他

（後付の一）

▶弊館には高等學校入學試驗參考書甚だ多し往復葉書で發行目錄を望め◀

●官私立各種高等學校入學試驗參考書類

東京本町 博文館（振替口座二四〇番）

地理書類

文學博士 原秀四郎君著 第一、二、五學年共通用

中等國史地圖

中等國史地圖は曩きに公にせる日本國史地圖の紙數を省約し圖面の文字を節略して編成せるものにして史蹟各細圖の大多數は日本國地圖所載の者と同じく描寫極めて精細なれば山河墟落の形勢一目瞭然恰も身親ら其地を踏み其景を目擊する想あるべし

洋裝菊判特製
紙數百二十頁
正價壹圓拾錢
小包料八錢

同君著

日本國史地圖

日本國史地圖は著者が大學院在學中の研究成績を纂輯せるものにして、大學院卒業に際し卒業生論文に副へて提出し、因て以て榮譽ある學位を得られたる、三種副論文中の隨一なり國史地圖纂の諸副幅中に就きて其要を摘み粹を拔きて稍其圖面を節約し、專ら中等程度の讀史社會に參考書又は教科書に供するの目的を以て述作せるものにして其日本國史地理は之が簡易なる解說なり

洋裝菊判特製
紙數百卅八頁
正價壹圓七拾錢
郵稅拾四錢

理學士 佐藤傳藏君著

中等教育 日本地圖

本圖は著者が精細なる調査の結果編纂せられたるものにして、帝國を別ちて八圖となし豫察地質圖として日本高低及四近海洋圖、交通全圖其他陸海軍配置、日本雨雪量、雨天日數、濕度氣壓及潮流、日本火山、鑛山一覽、植物帶位置等の圖を添え何れも數度の彩色を施し其區分を明かにし其插畫の精緻巧妙なる一見能く其大勢を詳らかにする事を得加ふるに名所、舊蹟、風俗及產業の情況等は本島並に臺灣島に涉り鮮明なる寫眞銅版百二十圖三十二葉を以て描出し活ける地理的智識を得せしむ尚卷末附するに統計專門家伊東祐穀氏の手になれる各種統計表あり以て如何に本書の價値あるを知るに足るべし

洋裝菊判上製
全國風景寫眞百廿二圖
正價金四拾五錢
郵稅金八錢

理學士 佐藤傳藏君著

中等教育 萬國地圖

本圖は自ら歐羅巴諸大家編纂の地圖を參酌し著者が該博なる知識を以て編成されたる者にして正確なる事前後其比を見ず殊に本書の特色とすべきは天然地形圖及政治地理より成り天然地形圖に於ては各國天然の地貌を一目瞭然たらしめ政治地圖に於ては政治的關係等恰かも暗中に物を探ぐるが如く各地風俗風景等は鮮麗なる寫眞銅版によりて七十九圖四十葉を裝し附するに統計專門家伊東祐穀氏の編纂にかゝる各種統計表を添ゆ本書の眞價期して待つべく世の學生諸君は勿論一般經世家諸士の座右缺くべからざる良書なり

洋裝菊判上製
世界各國風景七拾九圖
正價金六拾錢
郵稅金八錢

東京府立第三中學校教諭 石渡延世君著

地理統計要覽

抑も邦人は數の觀念に乏しくして之を歐人に比すれば統計に對する興味を缺くこと多く從て思想甚だ綿密ならざるの憾あり是れ國運益發展して事物愈紛糾を極むべき戰後の國民教育上閑却すべからざる問題なり是を以て普通教育の地理科に於ては宜しく巧に生徒をして統計に對する興味を喚起せしめ綿密着實なる志想を涵養せざるべからず本書は此要求に應じて出でたるものにして小中學の教師の教授上の參考たるのみならず生徒各自も一本を供へ地理統計の智識を收得せられんことを望む

洋裝三六判特製
紙數二百四十六頁
正價金五拾八錢
郵稅金六錢

中村士德君　大久保千濤君共著

本邦地理詳說

洋裝菊判特製
紙數八百四十頁
正價金壹圓八拾錢
小包料拾貳錢

本邦地理書の上梓せらるゝの汗牛充棟も啻ならず然れども是れ多くは中等程度に用ひらるゝ教科書の類なるが偶々參考に供すべきの書あるも未だ全きものあるを聞かず實に斯界の爲め遺憾とする處也茲に本館中村士德、大久保千濤兩君に囑するに此缺陷を補はれんことを以てす兩君快諾、執筆せらるゝ年餘稿成るに及んで今や本邦地理書界の泰斗野口保興先生又此擧あるを贊し懇篤なる修正を試みらる其の責任を重ぜらるゝこと現はれて其序中にあり本書は普通教育の參考用たるは勿論中等教員の受驗適用斯學獨習の讀物として必讀の良師良友たるなり請ふ其の眞價は一讀の後に徴せられよ。

理學士　吉田弟彥君著

改訂 日本商業地圖

洋裝大判特製
縱一尺二寸
橫九寸五分
正價金壹圓
郵稅金拾五錢

商業の地圖に待つある猶航海の海圖に於ける如く作戰の戰圖に於けるが如きものあり故に歐米諸國皆商業地圖の行はれざるなし然るに我國未だ此種の好著良圖のなきは聖代の缺點と云ふべきなり本圖は素と農商務省地質調査所に在つて久しく製圖に從事せし某氏の精圖を基礎として吉田理學士新たに之に加纂せらる、運輸の交通此圖に依りて明詳、商業の形勢炳焉として掌中を見るが如し、況や最近の調査に依つて諸般重要の名數を加へ、覽者をして多大の便利を與ふるのみならず附錄の諸統計は錦上花を添ふるの概あり戰勝國の實業家須らく一冊を机上に備ふべき要圖なり。

歷史書類

法學博士文學士　有賀長雄君著

大日本歷史

上卷

洋裝菊判特製
紙數千五十頁
正價金貳圓
小包料拾六錢

博士筆を神代の太古に起して皇統連綿の國體を祖述し征露勅語の煥發に至つて擱筆す其間事實の排列正序より日本社會の文明進步に於ける原因結果の次第を懇示し正史傳來の事實を詳述し處々に博士卓越の識見を加へらる是れ本史が史界唯一の寶典として社會に濶步する所以なり殊に博士の謙讓なる更に閲を國學の諸大家に請うて根柢的の修訂を加へられたるを以て錦上花を添ふの完全を得たり故に世上幾多の國史ありと雖も之を本史に對すれば其優劣月鼈も啻ならずと謂ふも決して誣妄にあらざるなり。

帝國文科大學教授
高等師範學校教授文學博士萩野由之君著

大日本通史

上卷

洋裝菊判特製
紙數壹千頁
正價金壹圓五十錢
小包料拾六錢

世史學に關する書に乏しからずと雖も其多くは簡に流るゝにあらずんば繁に過ぎ能く中庸を得たるもの尠し本書は上は神代より德川將軍の政權返上に至るまで世の治亂人事の盛衰を繁簡宜しきに從ひ記述したるものにして座右一本を缺くべからず。

文學士　久保天隨君精解

日本外史新釋

全拾二冊

和裝菊判美本
紙數各約三百頁
正價一冊參拾錢
郵稅一冊六錢宛

頼氏の外史講義は、坊間頗る是ありと雖も、その完全なるものを求むれば、途に指を屈するに及ばず。天隨氏こゝに深く慨するところあり、乃ち平生の蘊蓄を傾けて、此書を著はさる、精該詳備毫も遺憾なしこの書一たび出でて初學幸に津梁あり、その業をなすに際して、唯だ易きを見て難きを知らず。

▶弊館には高等學校入學試驗參考書甚だ多し往復葉書て發行目錄を望め◀

文學博士 萩野由之君著 上下全二冊

中等教育 日本歷史

著者の我國史學に深きことは世皆已に之を知る、本書は筆を日本の地形建國の體裁、政治の變に起し、進みて太古史近古史に及び、遂に廿七八年戰役、臺灣鎭定に終る。而して各史編末に附するに制度風俗の沿革を以てし、卷尾に諸國封建沿革略を附載す。文辭明快、敍事富贍、中等敎育を受けつゝある者は勿論、何人と雖も一本を座右に備ふべき好書なり。

洋裝四六判特製
紙數六百七十五頁
正價各五十錢
郵稅各八錢

文學士 木寺柳次郎君著

日本歷史

本邦史の上梓する者多きも、本書は從來の編纂と大に其方法を異にし事實を採りしものは此に連絡せる諸種の關係沿革を集め未だ定說なき者は先哲の說を挿み必要なる制度は稍精細に涉る事實正確繁閑其宜しきを得たり。

洋製菊判特製
特製 正價五十五錢
郵稅十錢
並製 正價四十錢
郵稅八錢

文學士 阪本健一君著 全二冊

世界史

二十世紀の劈頭に立ち回顧すれば世界史上の幾江流は宛轉曲折茲に千載輓近に至りて悉く會滙し怒濤狂瀾今や天下を捲く亞細亞古來文明の燦たる敎學の爵だるあり漢族匈奴の强大、蒙古、土耳古の昌盛ありしも今や殆んど凋落萎靡し盡して、獨り歐米の力能く乾輿を動かし物質的文明の利便能く拒く莫し凡百の世界的統一とは西强の世界征服のみ人種宗敎の異動の前には博愛慈善枯れ武裝平和は富貴强弱の間に均衡を保せず是豈古來未曾有の大史局にあらずや此の時に方り天下の極東に國して新に振興の運に際會せる我國民は東西古今の往史に鑑みて世界潮勢の來路を研めざるを得ず此書上下二千五百頁撰んで精ならず述べて快ならずと雖も世界東西隆否の蹟を通叙して旣出の邦文世界史中に詳細を以て自許されんとす敢て大方の諸賢に益せずとも聊か讀者參考の實資學徒研鑽の指針として世に薦むる所以なり

洋裝菊判特製
上 正價壹圓六十錢
小包料拾二錢
下 正價二圓
小包料拾六錢

文學士 久保天隨君著

日本歷史寶鑑

本書は、主として日本歷史の參考に供せんが爲に綿密なる注意を以て纂述せし者にして、はじめに綱目を擧げ、次に個條的に之を細述し、鉅細悉く羅し、幽顯すべて搜り、筆を太古に起して、最近日露戰役に及び、治亂盛衰の外、人文史上の諸種現象、一として包括せざるなく、材料精確、引證該博、秩序整然として筆力犀利。加ふるに、數種の索引を附して、檢出に便にしたれば、その使用如何によりては、又完全なる一個の歷史辭書たるべし。

洋製菊判特製
紙數千五百卅餘頁
正價金三圓
小包料二十錢

文學士 吉岡藤吉君著

西洋歷史

西洋歷史の著書世に多しと雖も未だ本書の如く趣味多くして事實の正確なるものあらず蓋し從來世に行はるゝところの者と其編纂方を異にしたるものにして著者が其專攻の餘に成りたるを以て秩序整然議論確實快刀亂麻を斷つの觀あり。

洋裝菊判特製
特製 正價五十五錢
郵稅十錢
並製 正價四十錢
郵稅八錢

文學博士 萩野由之君編述

日本歷史要解

本書は中等敎育日本歷史を授くる敎師の參考に供し兼てはそを獨習する人の楷梯にも充てんが爲めに著せるものにして其の記する處は註釋に屬するものあり、評論に屬するものあり又は衍義に涉るものあり一定の則を立てざるも要するに本書を讀む人の不審すべき個條を解くを目的としたり。

洋裝四六判並製
紙數四百二十四頁
正價金五十錢
郵稅金六錢

女(後付の四)

數學書類

東京帝國大學教授高木貞治君著

新式算術講義

高木博士の數學に精通せらるゝは夙に江湖の熟知せらるゝ所なり、而して數學の書夥多ありと雖、自修上將た教授上完全なる良書なきは遺憾の事なりとす、高木博士多年此事に留意せられ、漸く本書の上梓を見るに至る、先づ算術の最も卑近なる者より始め漸次其奧義に達せしむるの方針に依り諸學者の講習に資給せり、故に本書は材料を專ら算術の範圍に採り、其中最も重大なる例題を撰み、問題の解釋は最も嶄新なる方法に依り其說明は通俗平易を旨としたれば眞に得難き良書と云ふべし

洋裝菊判特製 紙數四百七十頁 正價金壹圓 郵稅八錢

佐久間文太郎君著

中等教育 算術教程

本書特色の一端を擧ぐれば商事要項の科目と連絡に注意せられたると僅々三百頁の册子に能く其大綱を漏さず簡にして要を得たると敎師に說明の餘地を與へんが爲め其說明を單に算術教授の主腦たる事項に止めたるとの要點に存り更に本書の誇る所は啻に商業學校用に適するのみならず教師の運用如何によりては中學師範學校用として亦絶好の新教科書たるべきなり

洋裝菊判並製 紙數二百廿二頁 定價金五十錢 郵稅金八錢

竹貫登代多君著

算術手引草

題して算術手引草と言ふ則ち中學程度に據り算術の算法と應用とを以て初學者に教ふるの師友たるを期す、去れば凡そ算術上の算法は載せて漏すことなく應用の道は說て悉さゞるなし且つ其說明や所謂言文一致を以て叮嚀懇切毫も世間在來の獨修書の如く隔靴搔痒の憾みなし、寔に近來出色の算術獨修書と謂ふも敢て諛言にあらざるなり

洋裝四六判上製 紙數四百七拾三頁 定價金五十錢 郵稅金六錢

理學士 林鶴一君著

新撰幾何學

從來我國に於ける幾何學の著譯饒多なりと雖も悉く皆ユークリッドが作れるものに從ひまた一の非ユークリッド幾何學を說きたる者あらざりしは、識者の夙に遺憾としたる所なりき、是を以て本書は先づ筆をユークリッドが幾何學に起して、以て其狀貌を知らしめたる後、更にユークリッドが第三公理を否認せる非ユークリッド幾何學に入り詳述殆んど微を極む。

洋裝菊判 特製（正價五十五錢 郵稅十錢） 並製（正價四十錢 郵稅八錢）

竹貫登代多君著 出野淺治君解

算術問題解法指南

本書は竹貫先生の著『算術手引草』の解式にして一々其問題原も附しあるのみならず、最近諸官立學校試驗問題をも添付しあるを以て其貴重なること疑を容れず、乞ふ續々購讀の榮を賜へ。

洋裝四六判上製 紙數五百拾四頁 定價金五拾八錢 郵稅金八錢

理學士 松村定次郎君著

算術難問解義

本書は四則應用より分數比例開平方諸等數に至る迄の普通算術中最も難問に屬する者二百五十三題を撰拔し丁寧明瞭に解答を付したるものなれば苟も數學を研鑽する者は本書の問題のみを採りて自己の力を試驗することを得べく不能なる者に逢はゞ解義に依て發明する所あるべく實に數學の受驗者には無比の資料たるべし

洋裝四六判並製 紙數百八十二頁 定價金三拾八錢 郵稅金四錢

東京帝國大學教授 高木貞治君編

新撰算術

世に算術の書夥多ありと雖ども其多くは西洋算術書の飜譯に終り然らざるものは單に機械的に數を說明するに過ぎず本書は筆を整數に起して分數、累根、無理數、量及其測定に說き及ぼし結論として無數概數に筆を擱く其間の說明立論精緻確實而も文字は平易流暢一讀の下に「アリスメチック」の原理を了會するを得、數の性質は其册子の內に說き悉されて餘蘊なし。

洋裝菊判 特製（正價五十五錢 郵稅十錢） 並製（正價四十錢 郵稅八錢）

女（後付の五）

竹貫登代多君著

算術獨習書

敢て勵む大方の學生諸君に、此書一度自己の所有に歸す以上は、弊邑の獨學せるものと中央都會の良師に就て勉學せるものとの差異は取拂はるべし、何となれば算術獨修書は良師に超越すること數等なればなり、敢て勸む。書中の順序は決して奇拔なるものにあらず、世間一般學校に就て教授するものと毫も異なるなし、之れ等しく文部省令に準據しあればなり、只だ此獨習書の特色は說明の親切にして且つ分り易き點のみ、されば獨學者の頗る便利なるは勿論他の一般學生には良好なる復習書なり各學校入學受驗者の福音なり、敢て天下の學生に薦む。

洋裝菊判並製
上卷 三百八十八頁 正價四十五錢 郵稅八錢
下卷 二百四十二頁 正價三拾五錢 郵稅六錢

竹貫登代多君著

幾何學獨習書

數學の中にて、學生の最も困難とする處は幾何學と聞く、誠に幾何學は算術或は代數學と異なり、單に說明のみにて成り立つものなるを以て、其解釋の仕方に殊更に技倆を要すべし、されば著者竹貫君は、本書を編むに一層の苦心を費したり、學生諸君は既に算術獨習書及び代數獨習書にて君の手腕を知悉し居らるべし、爰に幾何獨習書の發行を報告す

洋裝菊判並製
上卷 約二百六十頁 正價三拾五錢 郵稅八錢
下卷 約六百七十頁 正價五十錢 郵稅拾錢

竹貫登代多君著

代數學獨習書

代數獨習書出づ、既に獨習書と云ふ文體の簡明にして分り易きは勿論、序述其法を得眞に初學者の手引書中學生師範生の良參考書たり、斯界に聲名ある竹貫登代多君の著はされたるものなるが故に、彼の汗牛も啻ならざる世間滔々たる同種の書に遙に超越せしものたることは今更贅々するを要せざるべし、乞ふ須らく一本を座右に備へて之を良師とせよ。

洋裝菊判並製
上卷 約四百頁 正價五十錢 郵稅十錢
下卷 約二百六十頁 正價卅五錢 郵稅八錢

東京帝國大學教授 理學博士 高木貞治君編

新撰代數學

代數に於ける研究の主眼たる數の値に關する者にあらずして寧ろ數の算法に在りとなす、本書は正數の觀念並に四則算法を支配する根原的法則を敍述して讀者の記憶を新にし以て新研究の地を成さんことを企圖す即ち筆を代數の原則に起して有數函數方程式の根、整函數の有理分解、多元整函數對稱式論、デ、ルシナント、二次形式論及び三次及四次方程式解方に擱筆す立論證明の精緻確實なる洵に類書中の一頭地を拔くもの實に數學家の要書なり

洋裝菊判
特製 正價金五十五錢 郵稅金十錢
並製 正價金四十錢 郵稅金八錢

理學士 松村定次郎君著

代數學難問解義

中學校及び諸高等學校入學試驗及學期試驗等の及落に最大の關係を有するは數學を以て第一とす宜なる哉數學は其解義の成否は直に解者に判然し大家の解も初學者の解も其結果は必ず同一ならざるべからず是此學科の頗ぶ困難なる所以なり
是困難を扶助せんとして理學士松村先生代數難問解義を著されたり本書は因數分解に始まり對數に終る此間四百有五十題一も平凡なるものなく現今用ゐらるゝ諸教科書中の難問と稱せらるるもの及び泰西諸國の原書の嶄新なるものゝ中より撰出されたる皆重要のもののみなり而して一々懇篤明瞭なる解を附せられたり實に本書は學生座右の寶典にして又數學教授者の空前の最良參考書と云ふも過言にあらざるなり

洋裝四六判上製
四百三十頁
定價金六十錢
郵稅金拾錢

外國語書類

(後付の六)

英語世界編輯部編

四十年度入學試驗英語問題詳解
附試驗委員之成績講評及受驗合格者之受驗談

洋裝四六判並製
紙數約二百・頁
正價金四拾錢
郵税金六錢

入學試驗中最も學生の難しとするは英語と數學なり。此難關に應ずる最も捷徑の策は果して何ぞや。所謂難句集を鵜呑にするも一策たらん。所謂受驗科に入學するも一法ならん。而も當の敵たる試驗問題其者を研鑽して問題馴れのコツを得るは更に要訣中の要訣なり。本書は昨年度廿八官立校の入學試驗英語問題に無比の詳解を施し、附するに試驗委員の成績講評と受驗合格者の受驗談とて以てし、天下幾萬の受驗者が應試準備の信頼すべき參考書たらんとす。世に類書の刊行なきにあらねど其の答解の正確精緻なると叮嚀懇切なるとは窃に編者の誇とする所なり。

文學士 畔柳都太郎君著

英文典語句慣用法

洋裝四六判特製
紙數二百六頁
正價金六十錢
郵税金六錢

英語に特殊なるイヂオマチカル、ユース即ち慣用法は從來遺憾に﹅等閑に附せられたれば所謂文典文法書の類も槪れ英語の半面を敎ふる者に過ぎず、本書の著者深く玆に感あり最近の著なる子スフイールド氏文典の一部を抄譯し我國學生に解し易からしめん爲め一々丁寧に解釋を施し、殊に前置詞の如きは數十頁の表を附して其用法を詳記したれば、英語を讀み英文を綴らんには一日も缺くべからざるの寶典なり請ふ世の學生諸君一本を座右に備へて其便益を得られよ

文學士 靑木昌吉君著

實用獨逸文典

洋裝菊判特製
紙數四百七十六頁
正價金壹圓五十錢
郵税金十二錢

學生の外國語に通ずることの遲々たる所以のものは適當なる敎科書の乏しきと良參考書の足らざること蓋し其主要なる原因たらずんばあらず著者獨逸文字の研鑽に從事する玆に二十年、獨逸語學の敎授に從ふこと將に十年、本書は其研鑽の結果經驗の餘りに成れるものにして上下二卷合せて五百有餘頁材料の選擇と編述の方法とは著者の最も意を致せる所獨逸語を學ぶ者の爲には實に無上の良師友たり斯學に志ざすの士は必右一本を缺くべからざるなり

文學士 杉谷泰山君編

獨逸前置詞使用法

洋裝菊判特製
紙數二百頁
正價金五十錢
郵税金八錢

譯讀會話作文に際して最も困難を感ずるものは實に前置詞の使用法なりとす前置詞は一字多義にし種々の意義に用ゐらるゝが故に之を知得せざれば實際に當りて非常なる誤解を招くことあり又甲の字と乙の字と形相似て而も其意義の區別を知らざる者あり、是等の辨別を忽諸に附する時は書を讀むに際しても自ら文辭を綴らんとするにも常に曖昧に終りて明晰なるを得ざるなり、是れ語學硏究者の甚だ遺憾とする所なり玆に杉谷學士が多年敎授の經驗上より諸大家の大文典を參酌綱羅し來りて前置詞の使用に關する幾多の場合を明にせり此書は敎科書として用ゐらるゝ外に日常譯讀會話作文の友たらんが爲めに一々使用の場合に際する譯語の栞を與へられたれば獨逸語硏究者の坐右に缺くべからざる羅針盤なりとす

理科書類

松村吉之助君著

受驗適用 新撰化學參考書

本書は化學事項の記臆を容易ならしめ理論、方程式、計算問題等に關する知識を確實に其應用を自在ならしめんがため最近十年間の二十餘校の高等程度入學試驗問題を巧に排列し一々之れに適切なる解答を附したるもの眞に學生及受驗者の良師者たり

洋裝四六判上製　紙數約二百八十頁　正價金四拾五錢　郵稅金八錢

海產動物學

帝國理科大學助教授理學士　飯塚啓君著

本書題して海產動物學と云ふ而して其論ずる所は地球上海洋の分布及び海洋の狀況潮の干滿並に海流等より始まり次に其海洋中に棲息する動物植物相互の關係及びプランクトン等に就て述べ更に進んで海產の動物を自然分類法の順序に從ひ漸次下等のものより高等のものに及ぼし例へば主として本邦所產のものを採り其構造習性等は勿論屢々其生殖發生等を記し以て海洋中に產する動物生活の一般を知らんと欲する人々に資せんとせるものにして添ふるに彩色圖版寫眞銅版數葉並に精巧なる木版二百個以上を以てせしもの紙數約六百餘頁なり我が海國生活の人士は須らく本書を繙讀して實驗應用の資に備へらるべし

洋裝菊判特製　紙數約六百頁　正價金二圓　小包料拾二錢

日本有用 海產植物

海藻學專攻　理學士　遠藤吉三郎君著

本書は遠藤理學士が大學院にありて海藻學研究の傍ら、本邦海產植物中殖產上有用なるもの數百種を撰み、其產地用法形態等を詳說し、一種每に精密なる木版寫眞版又は彩色圖を示したるを以て專門家ならざる者も、一目の下直ちに其種類を檢出するを得べし、加ふるに海產物の分類法大意繁殖の時期及び其結實查定法、採收法、海藻減少に關する諸般の注意、海藻貯藏法、其他苟も海產に志すものゝ知らざる可からざる事項を網羅したれば、中學、師範、水產學校等の敎員生徒は勿論、水產試驗場、漁業組合、沿海郡役所等には、是非一本を備へざるべからざる良書なり

洋裝菊判特製　紙數二百三十頁　正價金壹圓廿五錢　郵稅金八錢

第二高等學校教授　理學士　安田篤君編著

增訂 植物學汎論

方今科學の大勢は日に進み年每に改まり從來唱導せられたる學說の今日既に訂正せられ未知の中に葬られたる事項の今や明瞭となる或は是まで學者の豫想せざりし新事實の更に發見せらるゝ等蓋し將來の面目を一新したるもの二三にして止まらず而して此傾向は殊に植物學に於て甚しとなす茲を以て斯學の進步に伴はんが爲めには此種の事に絕えず幾多の補正增訂を施すの必要あり是れ本書の再版に際し內容章節の補正を試みたる所以なり揷圖の如きも其誤を正して新しきものを加へ紙數を增し校訂を密にする等大に舊面目を改めたり請ふ前版に倍し續々御購求あらんことを

洋裝菊判特製　紙數六百五十頁　正價金二圓　郵稅金拾六錢

植物學新論

帝國理科大學助教授理學士　飯塚啓君著

植物學は實驗的の學問なり故に本書は勉めて各處の例證を舉げ讀者をして直に實物を比較對照せしむるの便を得せしめ殊に一般に關する實驗の方法材料を揭げ又は前人未說の分類表を懇切に指示したるを以て斯學の眞味を了するに於て最も嶄新の智識を得らるべし、請ふ購讀あらんことを。

洋裝菊判　特製　正價五十五錢　郵稅十錢　並製　正價四十錢　郵稅八錢

植物營養論

理學博士　稻垣乙丙君著

凡そ種藝の事に達せんとするものは、必ず先づ植物生育の理法に通曉せんことを要し、就中之れが營養の法則に至りては最も研鑽する所なかるべからず、此篇先づ植物の化學的組成を明かにし次に其の解剖的構造を說き、終に營養の法に及んで之を論ずること最も詳密にし、農學の門に入るものは固より須らく之を讀むべく、植物學に志あるものも亦一讀せば大に得る處あらむ、從來此類の書にして世に行はれたるもの唯一「植物生長如何」なるのみ、而して世間此類の新刊書を望めるや久し、乃[illegible]の出づる大旱の雲霓も啻ならざるべし。

洋裝菊判　特製　正價五十五錢　郵稅十錢　並製　正價四十錢　郵稅八錢



脳病
神經病全治良劑
健脳丸
本劑の赫々たる信認は
世既に定評あり
迷ふ勿れ脳病患者
脳病薬の覇王
本舗 大阪市心齋橋
東京市箔屋町
丹平商會藥房
▲一日早く本劑を服せば。一日早く不快なる病苦を脱して。爽快なる健康を得るのである
▲常に持薬として連服せば。逆上を引下げ。恐るべき脳充血を全治し。中風卒中を未發に防ぎ。記憶力を増進する特効あるは獨り健脳丸のみである
効能
脳充血
脳膜炎
頭痛
大便秘結
逆上症
中風
卒中
五週分 金貳円 郵税十戔
三週分 壹円廿五戔 仝 十戔
二週分 八拾五戔 仝 六戔
一週分 四拾五戔 仝 四戔
三日分 貳拾戔 仝 貳戔
一日半 金拾戔 仝 貳戔

女學世界

(明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可) 第八卷第八號 (明治四十一年六月一日發行 毎月一回一日發行)

(定價金貳拾錢●郵税貳錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑥⑩
明治41年5月（第8巻第7号）、6月（第8巻第8号）

2009年7月10日　第1刷発行　　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］ 03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3618-6　C3321